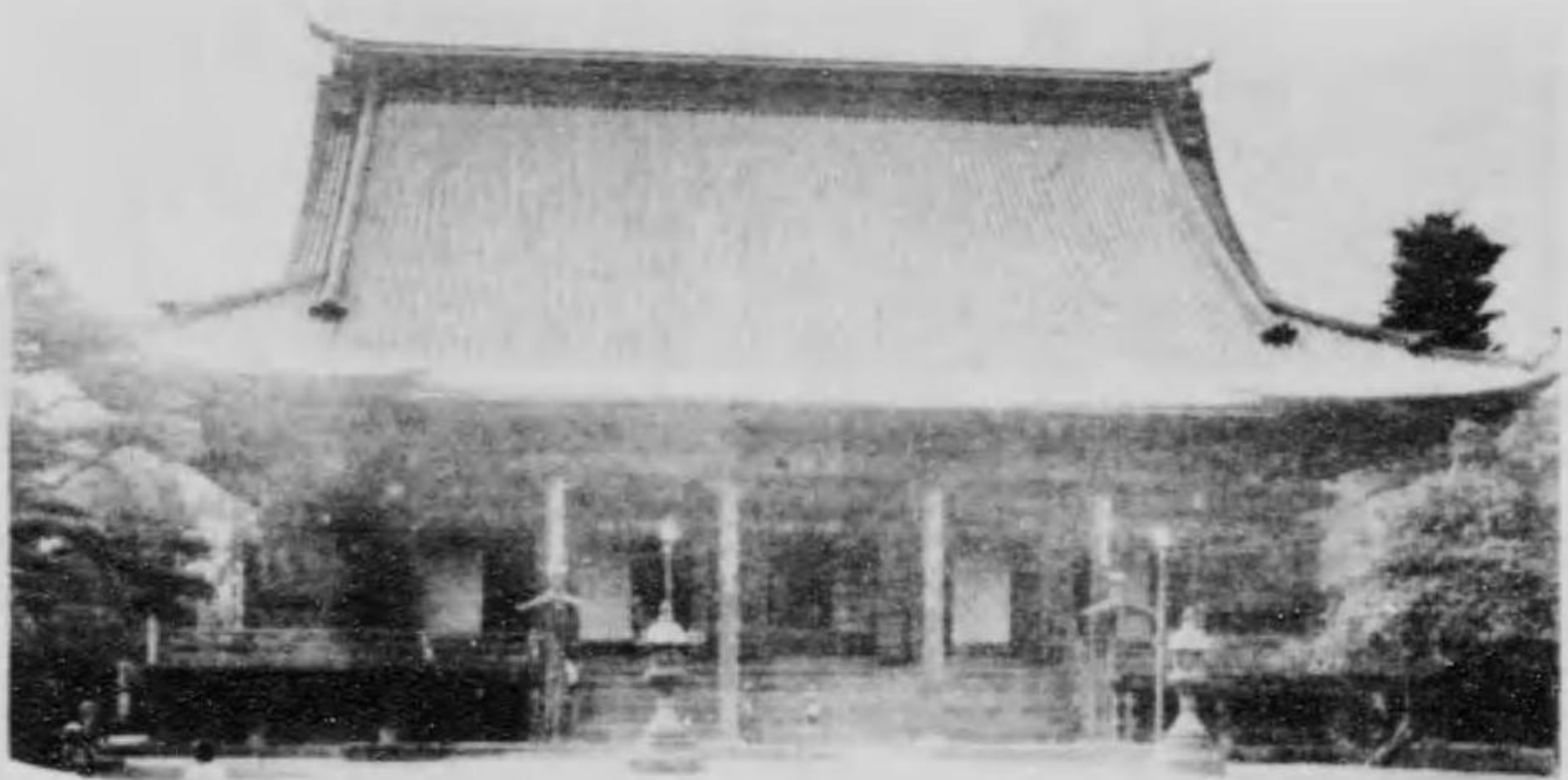
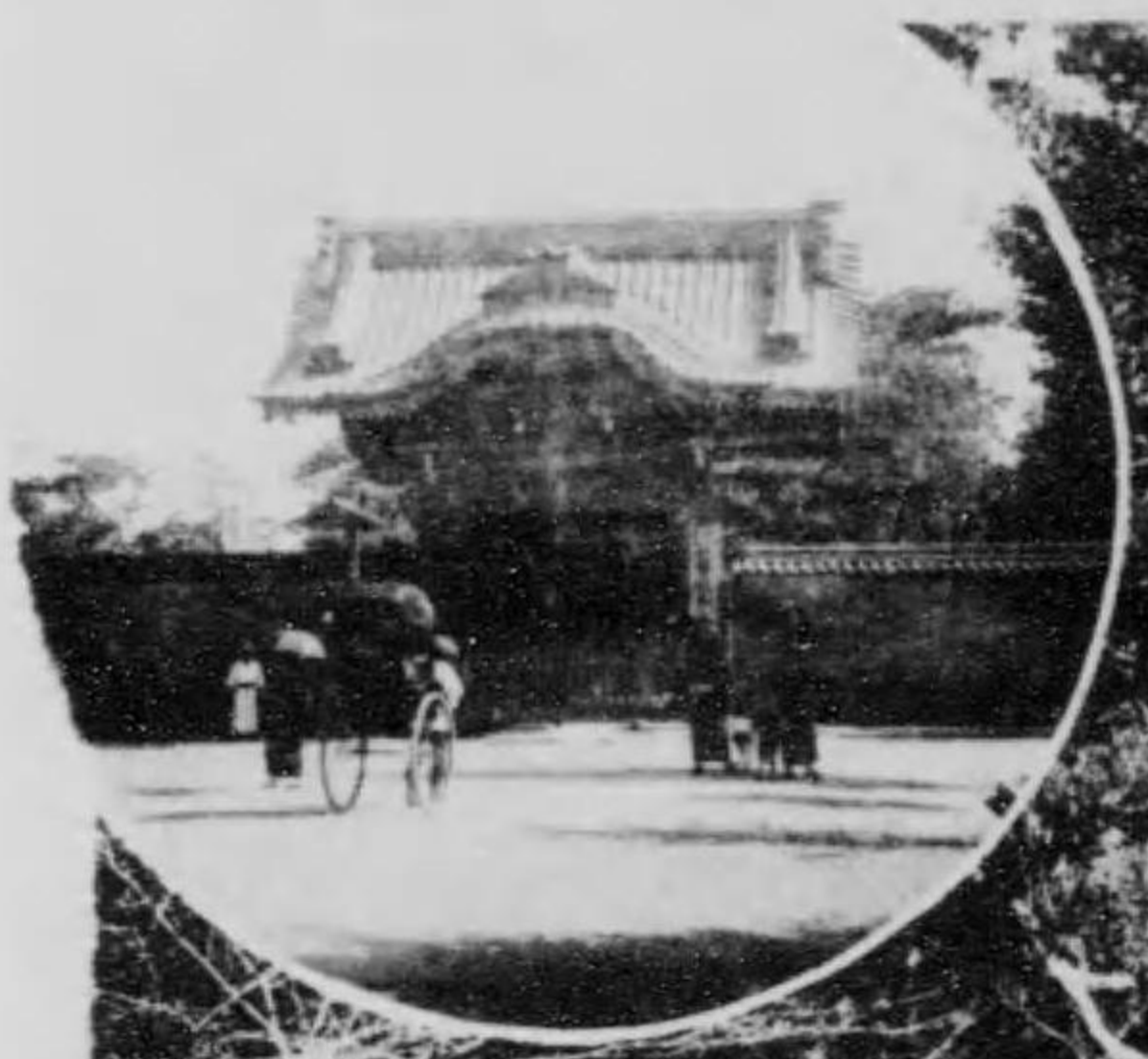


護國寺

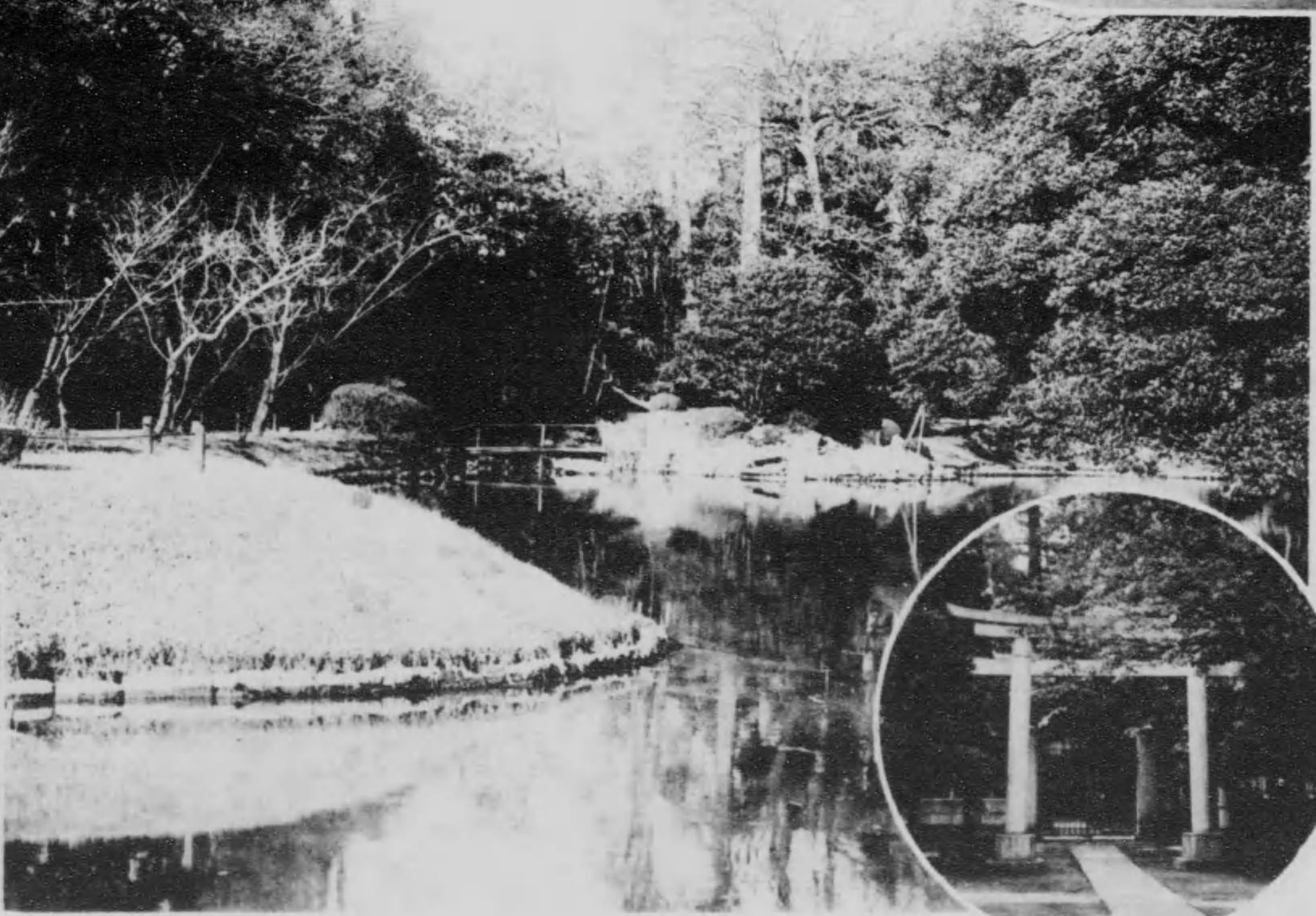


三條實美墓

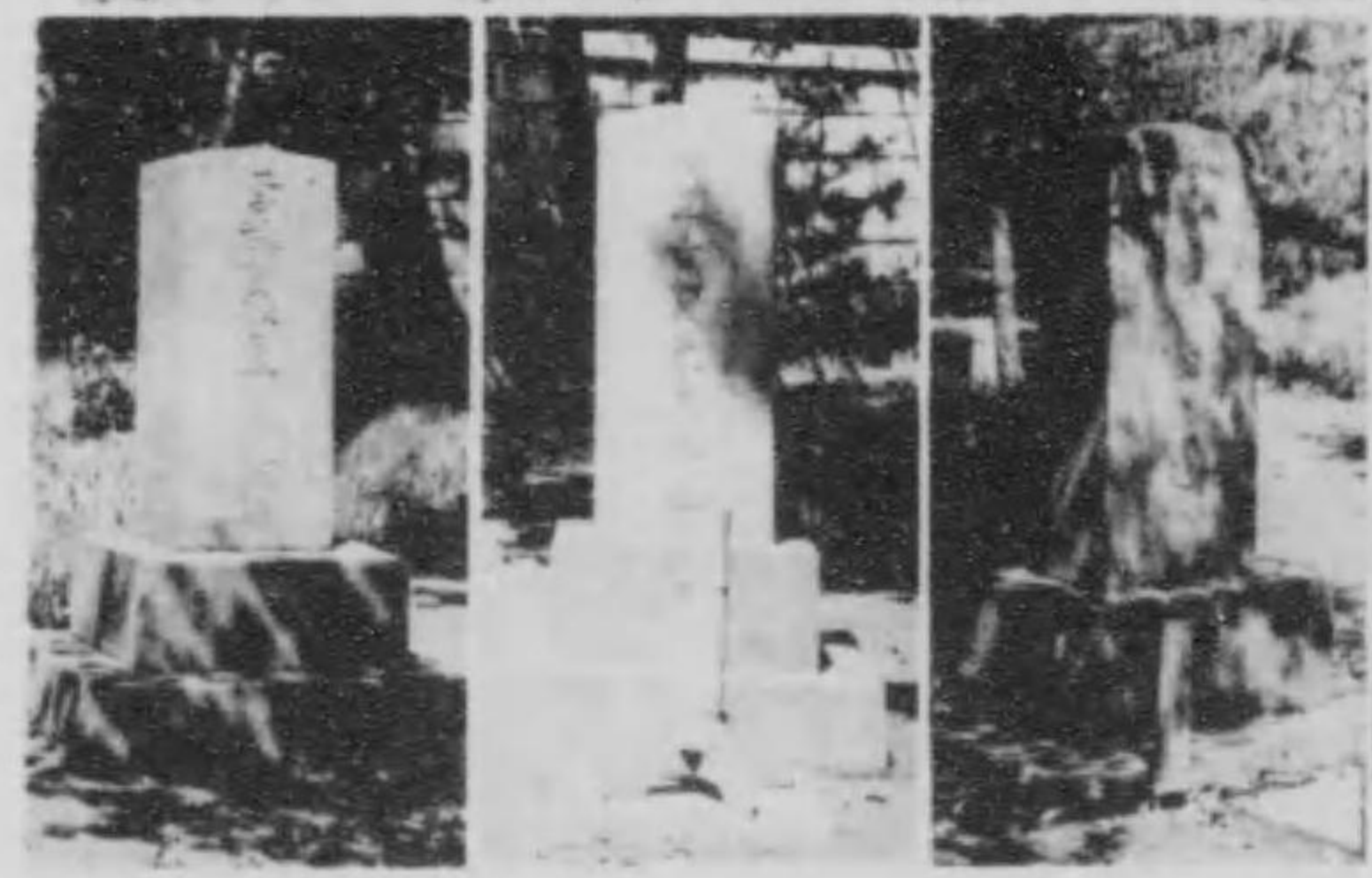
傳通院



大塚齋者繪



小石川後園



栗山墓 精里墓 二洲墓

●後樂園 (東京)

是れ舊水戸徳川家の庭園にして小石川區東京砲兵工廠の構内に在り。廣袤方六町餘に亘り、老樹蒼鬱として幽邃を極め、遠く井ノ頭池より水を引きて園中に泉池を作り、或は瀑布を設け、或は河を穿ち、船を浮べ、樹石の配置、假山の按排、名匠技巧の極を悉くし、江戸時代に於ける

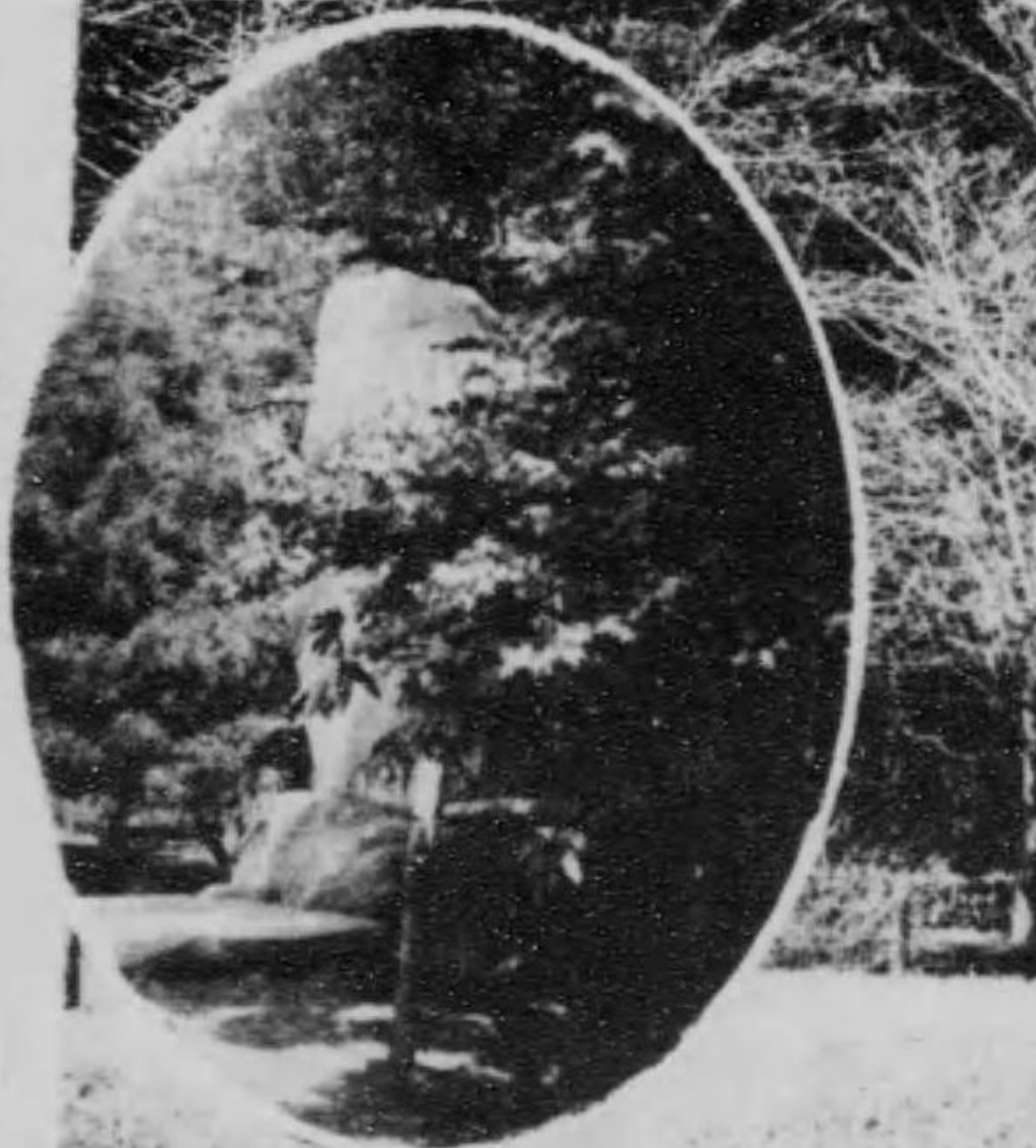
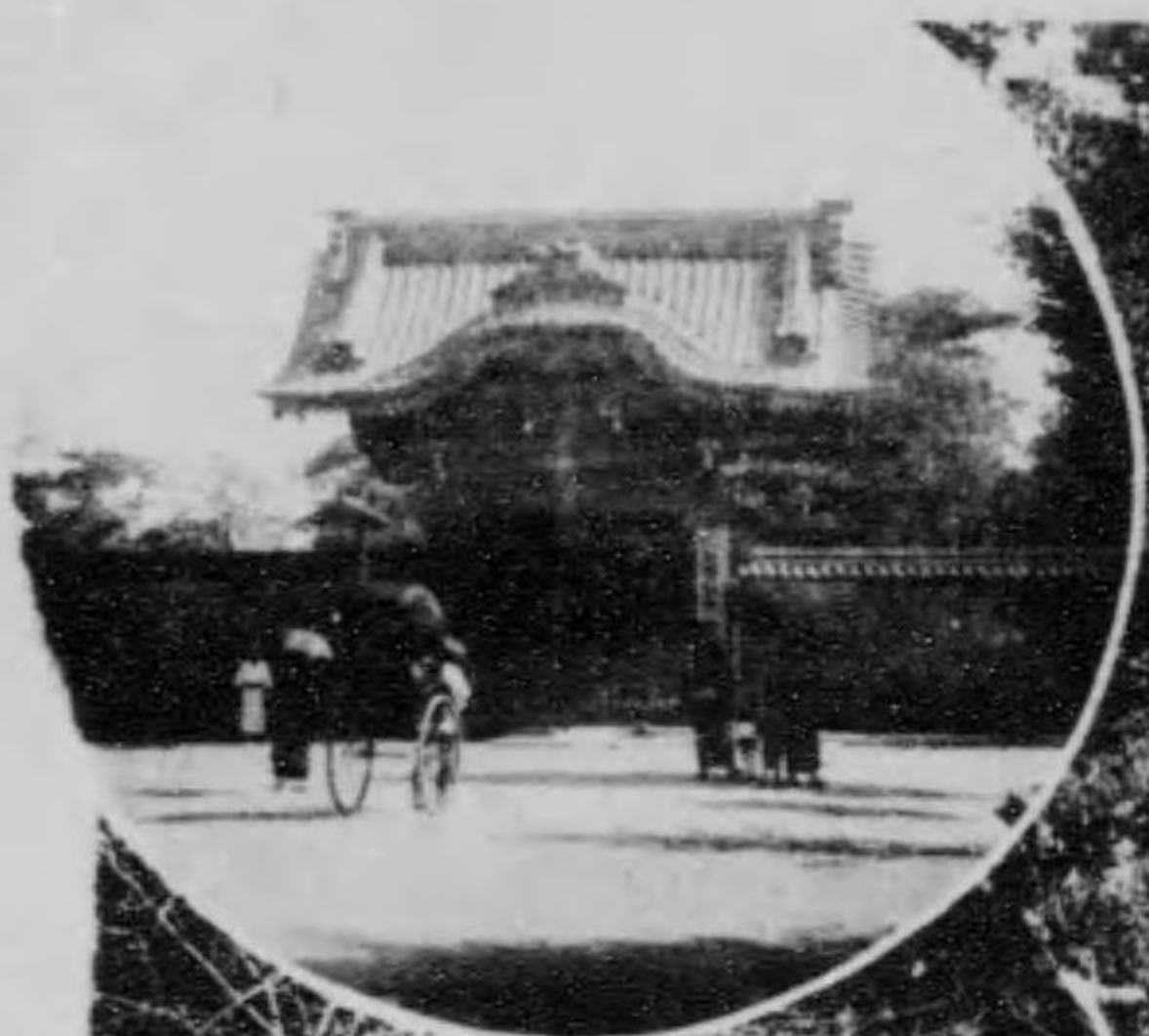
道路下を横断して小石川橋より約二十間上流神田川に通ず、其他西湖、富士山、觀音堂、小蘆山、八卦堂、小町塚、不老水、八ッ橋、田毎の月、大黒山の名勝枚舉に遑あらず、朱舜水、嘗て該園を評して曰く吾遊覽の至る所に就て斯園殆ど天下に甲たりと、如何に其名園たるを知る可し。

●傳通院 (東京)

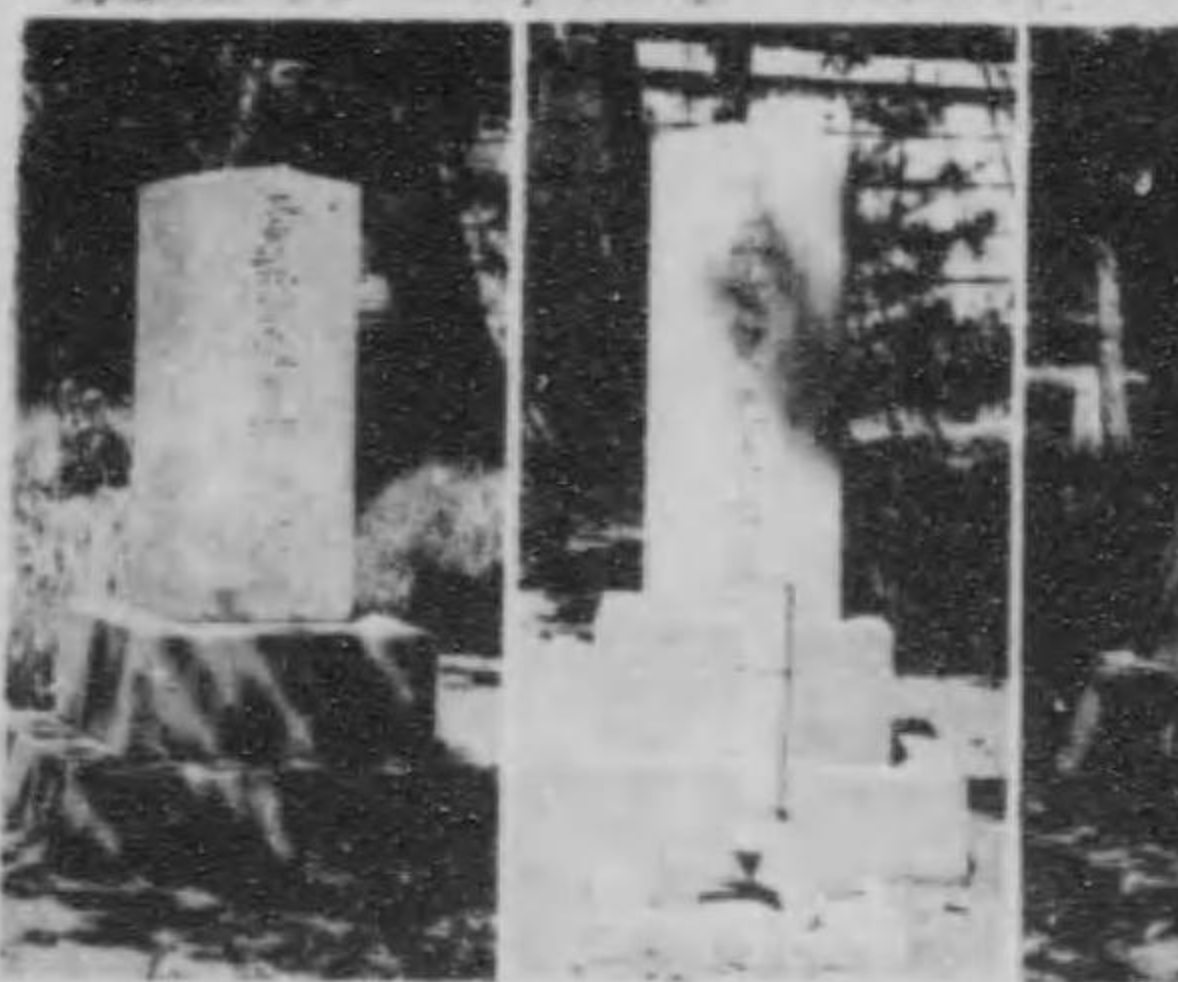
祭像あり、該幅を床に懸けんとするには足代を組み網にて引上ぐると雖も容易に軸の根本まで開き盡す能はずといふ、如何に稀世の大畫幅なるかを想像するに足る。

●三條實美墓 (東京)

小石川區音羽町護國寺の東隣、豊島岡の墓域に在り。此地昔時護持院の存した



大塚儒者捨場



墓里精 墓洲二

●後樂園 (東京)

是れ舊水戸徳川家の庭園にして小石川區東京砲兵工廠の構内に在り。廣袤方六町餘に亘り、老樹蒼鬱として幽邃を極め、遠く井ノ頭池より水を引きて園中に泉池を作り、或は瀑布を設け、或は河を穿ち、船を浮べ、樹石の配置、假山の按排、名匠技巧の極を悉くし、江戸時代に於ける名園の一と稱せらる。元來該園は三代將軍家光、寛永二年家康の遺命に依り水戸中納言頼房の爲めに地を小石川に相して起工せるものにして、地域約六萬坪を有す、園は砲兵工廠内の西北に位して小石川の丘阜に倚り自然の地を利用して造られたり、其設計は當時造庭の技匠として有名なる徳大寺佐兵衛の手に成り又當時水戸藩に儒臣として我國に歸化せる朱舜水、此園に命するに後樂の名を以てせり、蓋し范文正公が先憂後樂の語の意に基けるものなり、園内の唐門、圓月橋の如き唐風の建設は舜水が參畫に成ると云ふ。今其の園内重なる勝地の概要を記さんに唐門を入れれば左方の溪流末に寢覺の瀧懸り、右に棕栢山峙ち左に白雲嶺、蜈蚣山を望み、立田川其山麓を繞る、阪路を下れば深碧なる池水あり雅舟並に浮ぶあり池中に一小島横る之を蓬萊島と云ふ、辨財天の小祠を存す、島の前に巨巖あり徳大寺石といふ、立田川の溪流を隔て、對岸に駐歩泉の碑あり、碑文は佐藤一齋の撰に係る、

道の邊に清水流る、柳蔭

しばしとてこそ立とまりけれ
の歌碑を建つ、右方丘上に西行堂あり、丘下池水の一部西方に灣入す、灣に臨みて唐崎の松あり。園の中央には二百餘坪、二棟より成る涵徳亭あり亭前を流る、大堰川には渡月橋を架す、此流末園外に通ずる溝渠を御舟入と稱す現今は工廠前の

【武 藏】

道路下を横斷して小石川橋より約二十間上流神田川に通ず、其他西湖、富士山、觀音堂、小蘆山、八卦堂、小町塚、不老水、八ッ橋、田毎の月、大黒山の名勝枚舉に遑あらず、朱舜水、嘗て該園を評して曰く吾遊覽の至る所に就て斯園殆ど天下に甲たりと、如何に其名園たるを知る可し。

●傳通院 (東京)

淨土宗十八檀林の一にして無量山書經寺と云ふ、小石川區表町に在り、應永二十年の創建にして僧理問(了譽上人)の開基に係る、當寺は徳川家康の母、傳通院の靈廟存するを以て寺號とするに至れり三代將軍家光の室本理院の墓亦茲に在り。本尊は阿彌陀佛にして惠心僧都の作と傳ふ。境内福壽院の大黒天は三國傳來の靈像なりと云ふ、其他開山堂、多久藏主稻荷、念佛堂、新念佛堂等寺内に散在す、享保六年江戸大火の際、當寺に入りて焼死する者三百八十餘人に及べり、其遺骸を埋めて一基の塚を建て其幽魂を吊せり、現存する無縁塚即ち是なり。

●護國寺 (東京)

小石川區音羽町豊島ヶ丘に在り、眞言宗新義派にして大和國長谷の小池坊に屬す、天和元年の創建にして僧亮實の開基に係る、元祿年間桂昌院殿の本願に依り更に大に修繕を加へ江戸密乗最大の佛刹となれり、本尊は天然の瑪瑙石像なる如意輪觀世音にして天竺より渡來すと傳ふ寺域四萬七千坪餘、昔時は寺領千二百石を有し、坊舎十數宇を支配せり、本堂、藥師堂、歡喜天堂、護摩堂、觀音堂、經堂、灌頂堂、鐘樓堂、二天門、坊舎等孰れも構造善美を極む、又境内に西國三十三番の札所を模擬せる堂宇散在せり。本堂の一柱を猿柱と云ふ其木理猿猴の面に似たるが故なり、寺寶に有名なる狩野安信筆の涅槃像あり、該幅を床に懸げんとするには足代を組み綱にて引上ぐると雖も容易に軸の根本まで開き盡す能はずといふ、如何に稀世の大畫幅なるかを想像するに足る。

●三條實美墓 (東京)

小石川區音羽町護國寺の東隣、豊島岡の墓域に在り。此地昔時護持院の存したる舊址なり、近年舊墟を修理し垣牆を繞らして帝室の葬地に定められ、皇子皇女の陵あり又西方は陸軍墓地に充てらる。三條實美公は實萬卿の子にして、父卿の誠忠を繼ぎて宮中に奉仕し夙に王政復古の志を抱き、中納言に任じて國事係を命せらるゝに及び王室の衰頹を挽回せんとし寢食を忘れて同志の公卿を糾合し、事志と反して遂に離隔し、文久三年八月京師を連れて長州に落ち行き三田尻の幽居に三年の月日を送れり。

既にして公の至誠は遂に貫徹し京都に歸り來れば何ぞ圖らん孝明天皇は既に崩御せられたる後なり、公は悲痛の情禁ずる能はず直に天皇の御陵なる月之輪殿を拜して
悲しきや歸りて見れば月の輪の
御影は早く雲隠れたる

●寛政三助墓 (東京)

小石川區大塚字麻島に在り、護國寺の背後にして、此地多く儒者の墳墓存するを以て俗に儒者捨場と稱す、寛政の三助とは柴野彦助(栗山)尾藤良助(二洲)古賀彌助(精里)の三儒者を云ふ、共に寛政年間昌平校の教鞭を執り、幕府の儒官として知られたり。

●日本橋（東京）

帝都の第一橋として日本全千里程の元標たるものは日本橋なり。所謂道中双六の振出しにして昔はお江戸日本橋と諺はれ、其の渡れると否とを問はず其橋名を知らざる者なし、昔時の日本橋は其由来久しく記すべき事多きも暫く之を措き現今の本橋に就て記さんに、明治五年の架換に係る木造の日本橋は其後屢々修繕を加へ来りしが、明治四十年之を取り毀ちて架換工事に着手し、爾來三年餘の日子を費し、工事完く竣成を告げ四十四年四月三日を以て新築開橋式を舉行せり、是れ即ち今の日本橋なり、其建築材料は悉く日本の國産を以てし、是に費したる工費實に五十二萬三千餘圓と註せらる、構造の概要を記せば、橋は全部石造、二聯の缺圓拱にして橋臺は兩岸に各一個、河の中央に一個の橋脚あり、橋面高欄と高欄との間は十五間を有し橋長二十七間、橋面の坪數四百五坪なり、車道は十間にして其内中央十七尺は之を電車道とし歩道は車道の左右各二間半、橋の中央は橋脚の土臺より高さ事三十二尺五寸、満潮の水面より約十五尺五寸、橋面の兩端には橋脚上に高六尺の花崗石裝飾臺を築き橋臺の四隅にも亦同様にして稍小なる裝飾臺を築き、其間優美なる高欄を設けたり。橋の重量は四千萬貫を有し、様式はルネッサンスなり。裝飾の考案は工學博士妻木頼黄氏の苦心に成りしものにて柱臺の左右には、悪人出現の意味を寓して麒麟の蹲踞せる像を置き、裝飾臺の上には青銅の方柱を建て花電燈を點じ道路に面せる柱座には洋唐を折衷せる青銅製の獅子を配置して橋梁の威嚴を保たしめ、方柱の模様は里程の元標を示す爲め松楓を配す。

而して是れが工事は工學士米元晋一氏

主任として遂行されたるなり。舊記を按ずるに日本橋の架設は其創始年代を詳知し難きも今より三百十數年前、後陽成帝慶長八年なるが如し、慶長見聞集には日本橋を敷板の上三十七間四尺五寸廣さ四間二尺五寸と記せり。日本橋は萬治元年初めて造られたるが如くに記せる書あるは誤れるものにて。開は擬寶珠に萬治元年云々の文字あるに基ける説に過ぎず該擬寶珠は架換の際に新設せるもの、又其の名稱に就ても種々なる説あるも、要するに日本里程の元標と云へるに基けるものなり。

●お茶の水（東京）

神田、本郷兩區の境界を流る、神田川の一部、水道橋より萬世橋に至るの間を稱して俚俗お茶の水と云ふ。蓋し徳川幕府時代、神田上水を茲に通じ其れを以て將軍家御茶飲料水と爲せるにより此名稱あり。此地斷崖數十尺兩岸の碧樹蒼蒼として幽趣に富み風景太だ佳なるより、詩人墨客は之れを小赤壁若しくは茗溪と稱す、殊に駿河臺西紅梅町と湯島三丁目の間は最も勝景にして、明治二十三年新に茲に橋梁を架してお茶の水橋と稱せり、現今の橋即ち是れなり、江戸時代の舊記に據れば神田川は萬治年間仙臺侯幕命を奉じて始めて之を堀鑿したりと傳ふるは誤りにて、此地古くより細流を通じ居りたるも、仙臺侯命を受けて之を堀り擴げ以て舟楫の航路を開くに至らしめ其土を以て西岸の土境を築きたり今に至つて仙臺堀の名あるは之が爲めなりと云ふ。

●聖堂の遺址（東京）

お茶の水より萬世橋に下る沿岸昌平坂上に在り、此地本郷區湯島に屬す、其建物は今、教育博物館に供用せらる。徳川幕府時代の最高學府たりし所謂昌平學は茲に

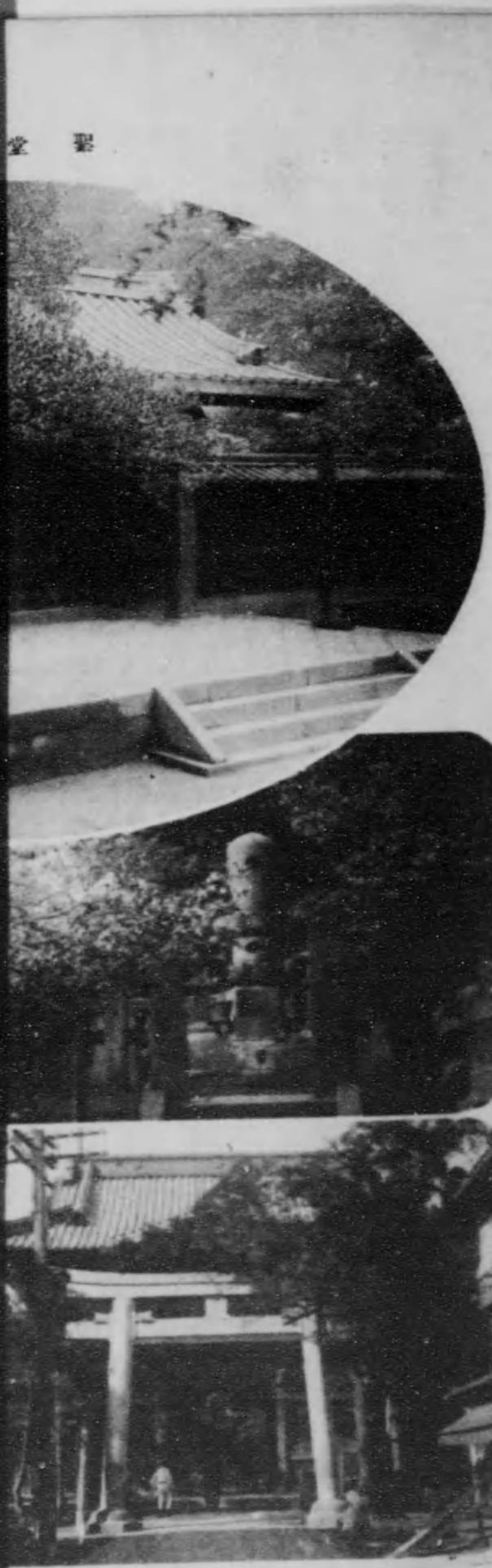
設置され孔子を祀れる聖堂即ち大成殿は茲に在りたり。其の昌平學と稱し、昌平坂と云ひ、又附近の橋を昌平橋といふ、皆是れ孔子の生れし魯の國郷里の名稱に因むものなり。聖堂は孔子を始め其高足數人の像を祀るものにして、寛永十年林道春が上野の別墅に初て建設せるを後茲に移し元祿三年新に造營し、同十六年火災に罹り再建の際、先聖殿の名を改めて大成殿と稱せり入徳、仰高、杏壇の三門扁額榜題は持明院某輔卿の筆に係り、本殿大成殿の榜題は將軍の自筆にして今猶存す

●神田明神（東京）

神田區宮本町に在り、神田神社と稱し大貴已尊を主神とし別に少彦名命を祀る神殿、樓門、清麗宏壯にして盛觀を示し、且つ境内高阜にして老樹鬱茂し、東方展開する所、市の半面を眺望し得て頗る爽快なり、當神社は天平二年の創建鎮座にして平將門を主神となせしが將門は逆臣の故を以て明治七年之を攝社とし將門神社と稱せり。往時は柴崎村の神田臺に在りしを元和二年湯島臺に移す、今の境地是なり。

●春日局墓（東京）

本郷區湯島切通なる麟祥院に在り。當寺は臨濟宗の名利にて、素と報恩山天澤寺と號せしが、寛永年間春日局の本願にて其菩提所となりし以來麟祥院と稱せり蓋し局の法號に因むものなり。本尊は釋迦如來にして滑川劉和尚の開基に係る、影堂には狩野探幽の筆に成る春日局の影像を描ぐ、局は齋藤利三の女にして稻葉氏に嫁したるが夫の歿後徳川氏に仕へ家光の傳として賢婦を以て目せらる寛永十八年九月六十五歳を以て歿し遺骸は當寺に葬り、法名を麟祥院殿從二位了麟大姉と號す。

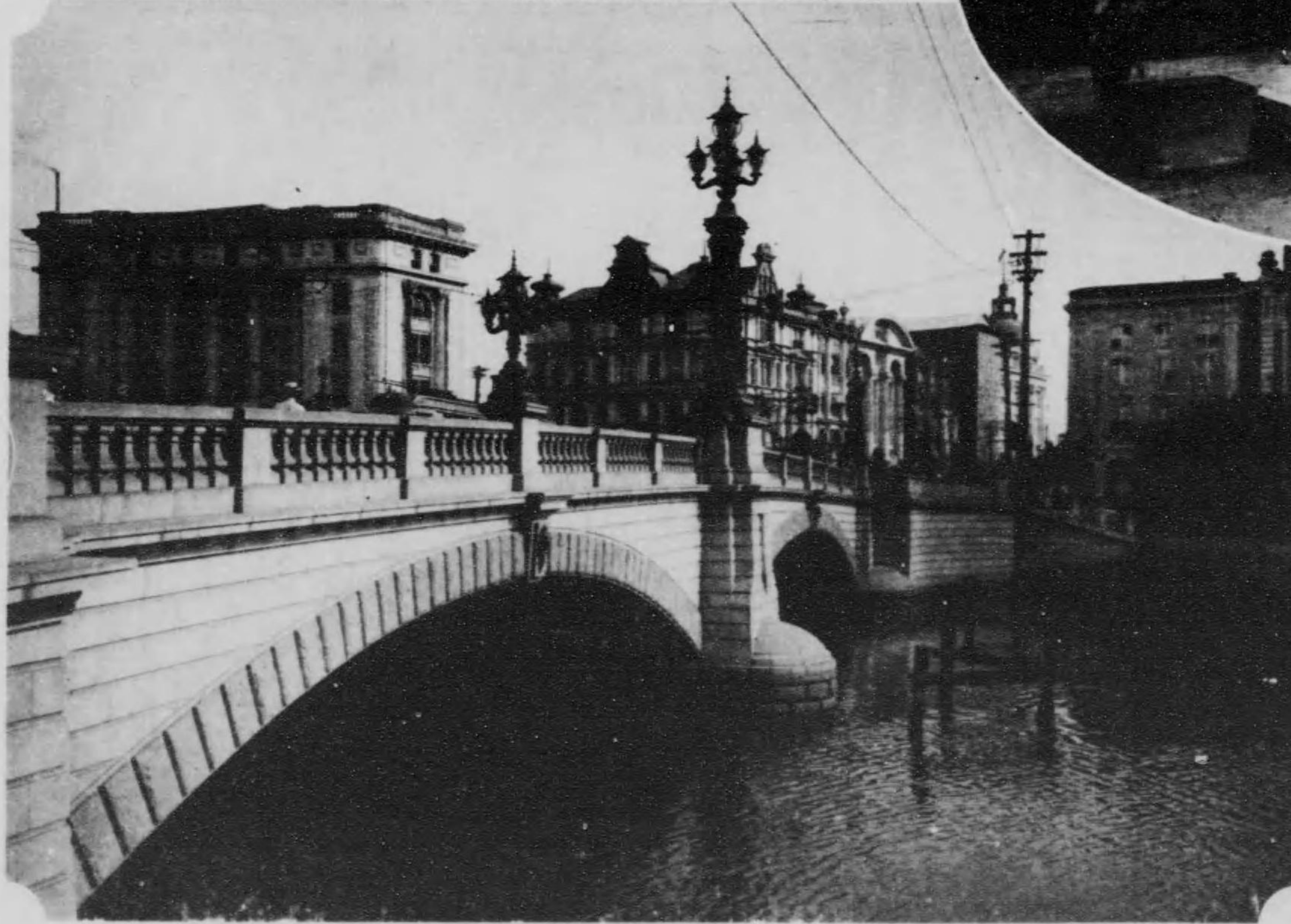


春日局墓

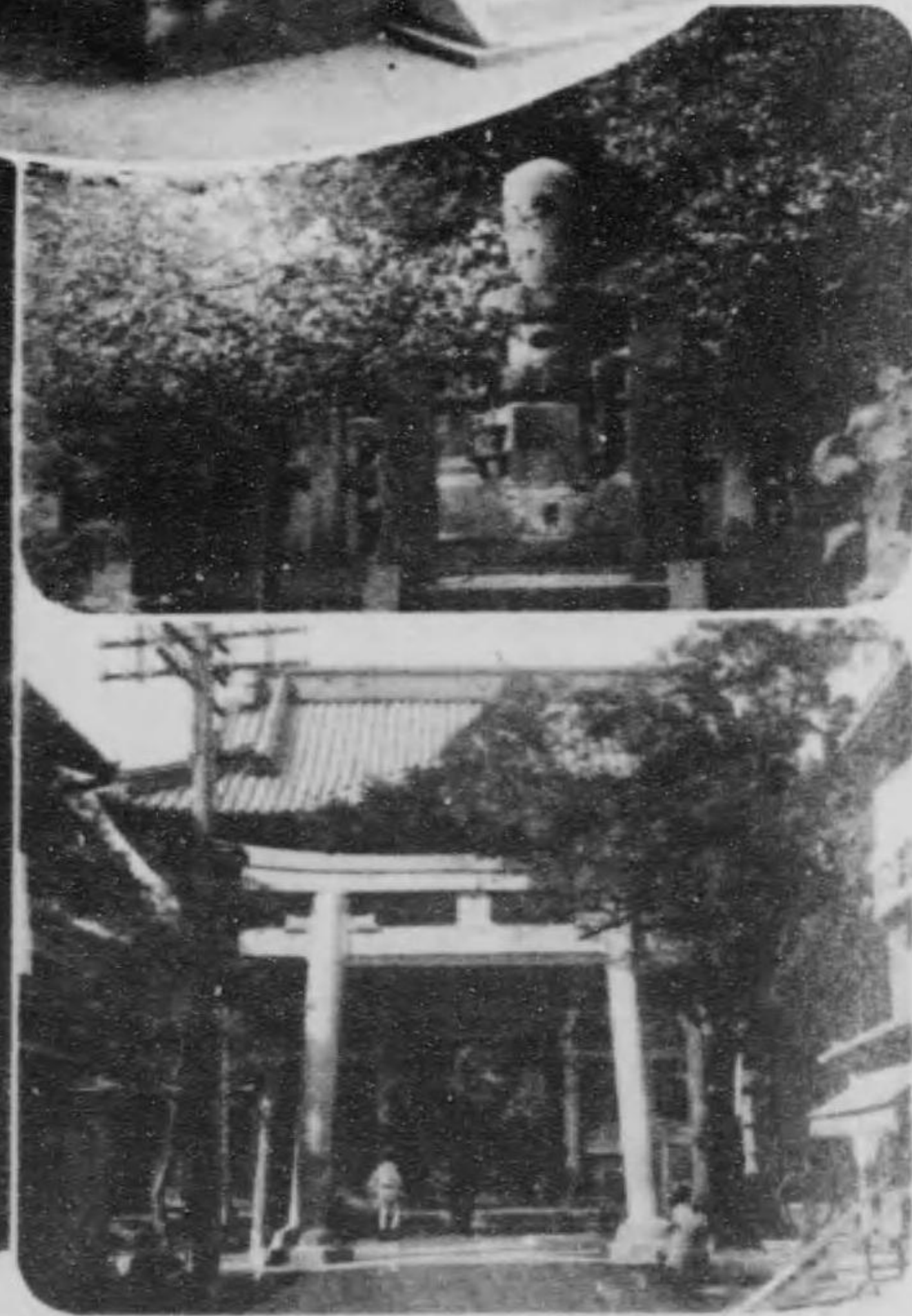
景風蹟遺水の茶御



址 舊 堂 聖



橋 本 日



神 明 田 神

ルネッサンスなり。裝飾の考案は工學博士妻木頼黄氏の苦心に成りしものにて柱座の左右には、聖人出現の意味を寓して麒麟の蹲踞せる像を置き、裝飾臺の上には青銅の方柱を建て花電燈を點じ道路に面せる柱座には洋唐を折衷せる青銅製の獅子を配置して橋梁の威嚴を保たしめ、方柱の模様は里程の元標を示す爲め松樹を配す。

而して是れが工事は工學士米元晋一氏

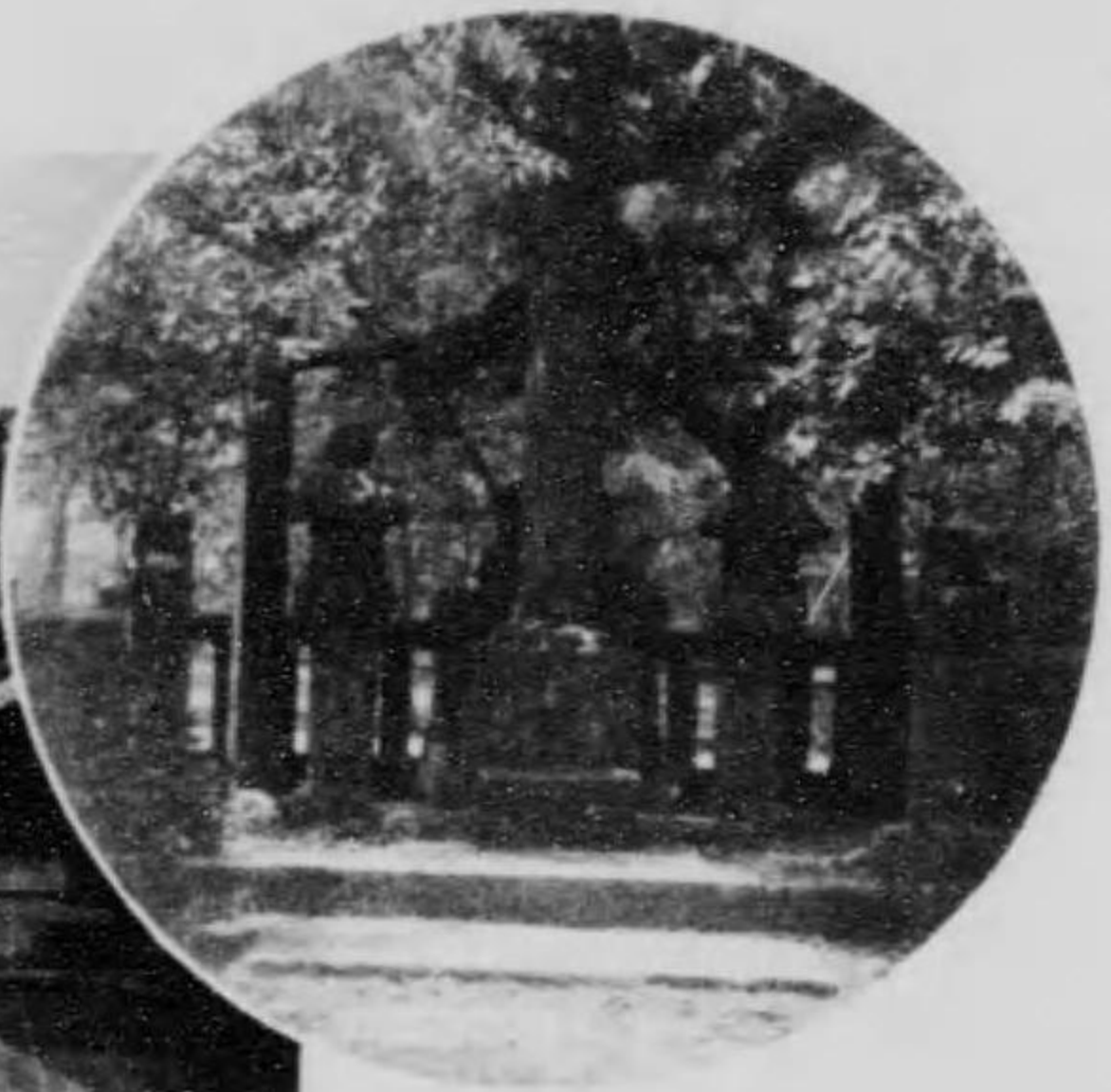
● 聖堂の遺址 (東京)

此地古くより細流を通じ居りたるも、仙臺侯命を受けて之を堀り擴げ以て舟楫の航路を開くに至らしめ其土を以て西岸の土堤を築きたり今に至つて仙臺堀の名あるは之が爲めなりと云ふ。

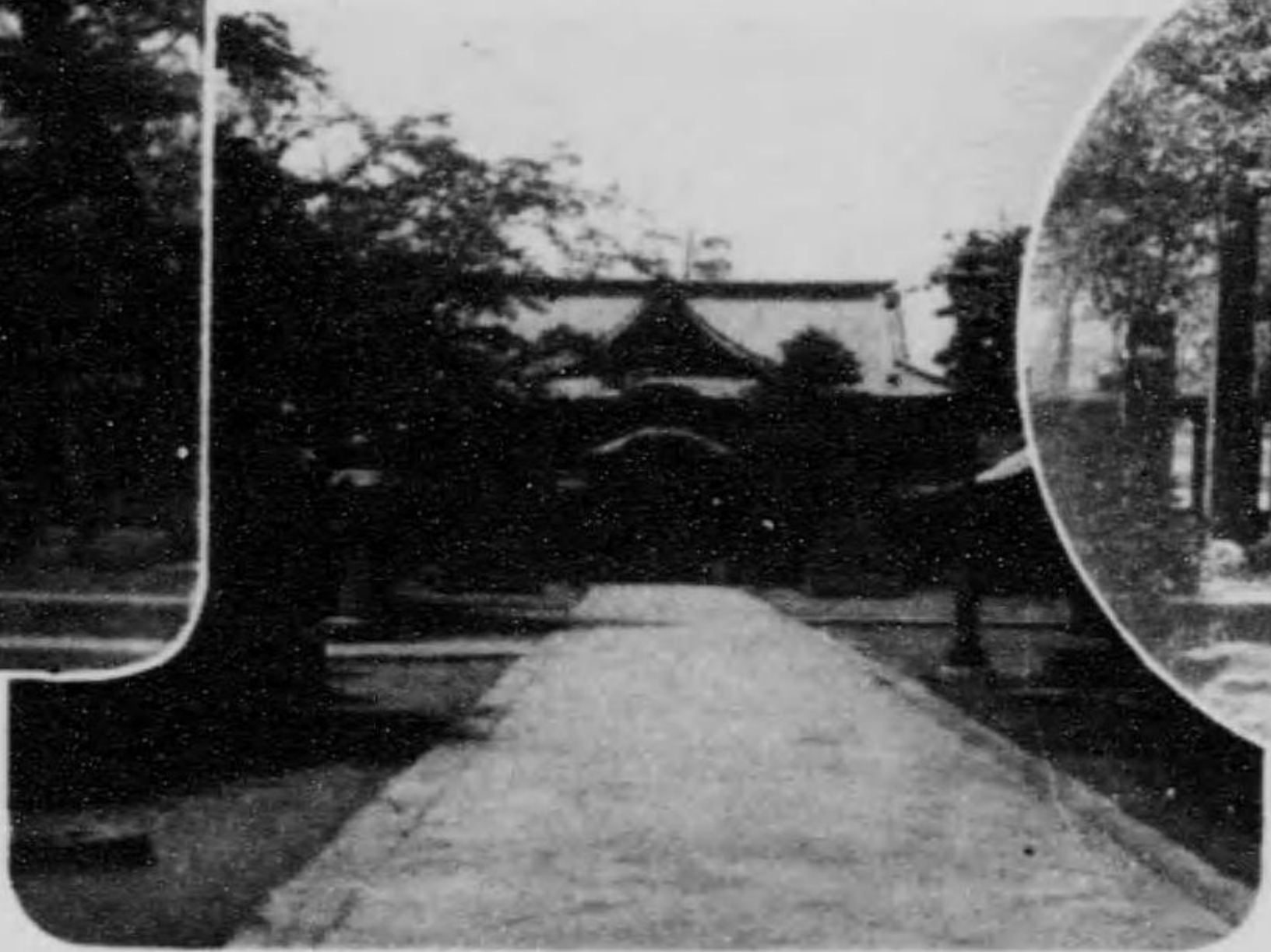
お茶の水より萬世橋に下る沿岸昌平坂上に在り、此地本郷區湯島に屬す、其建物は今、教育博物館に供用せらる。徳川幕府時代の最高學府たりし所謂昌平學は茲に

寺と號せしが、寛永年間春日局の本願にて其菩提所となりし以來麟祥院と稱せり蓋し局の法號に因むものなり。本尊は釋迦如來にして潤川劉和尚の開基に係る、影堂には狩野探幽の筆に成る春日局の影像を掲ぐ、局は齋藤利三の女にして稻葉氏に嫁したるが夫の歿後徳川氏に仕へ家光の傳として賢婦を以て目せらる寛永十八年九月六十五歳を以て歿し遺骸は當寺に葬り、法名を麟祥院殿從二位丁義大姉と號す。

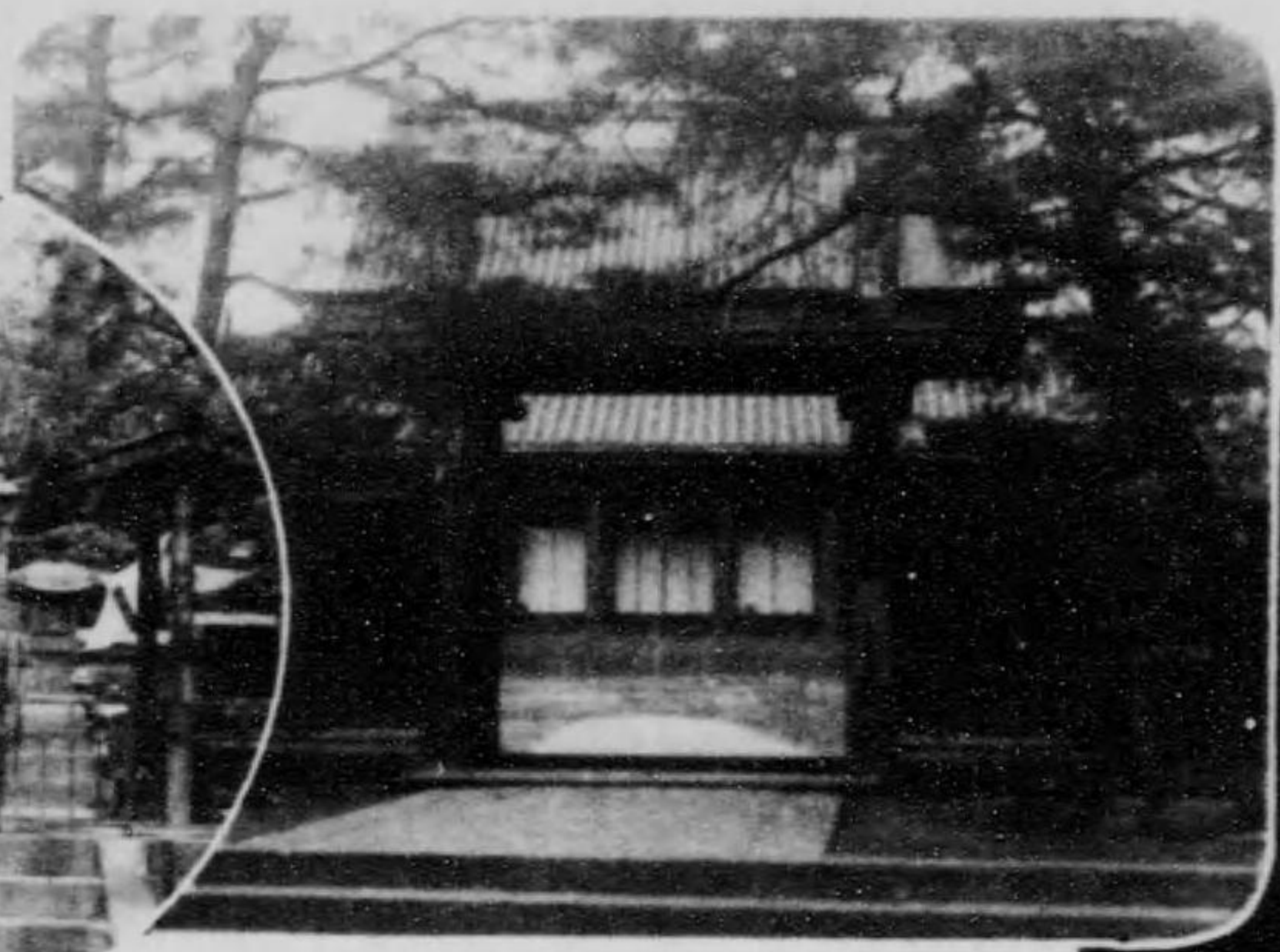
墓正信海天



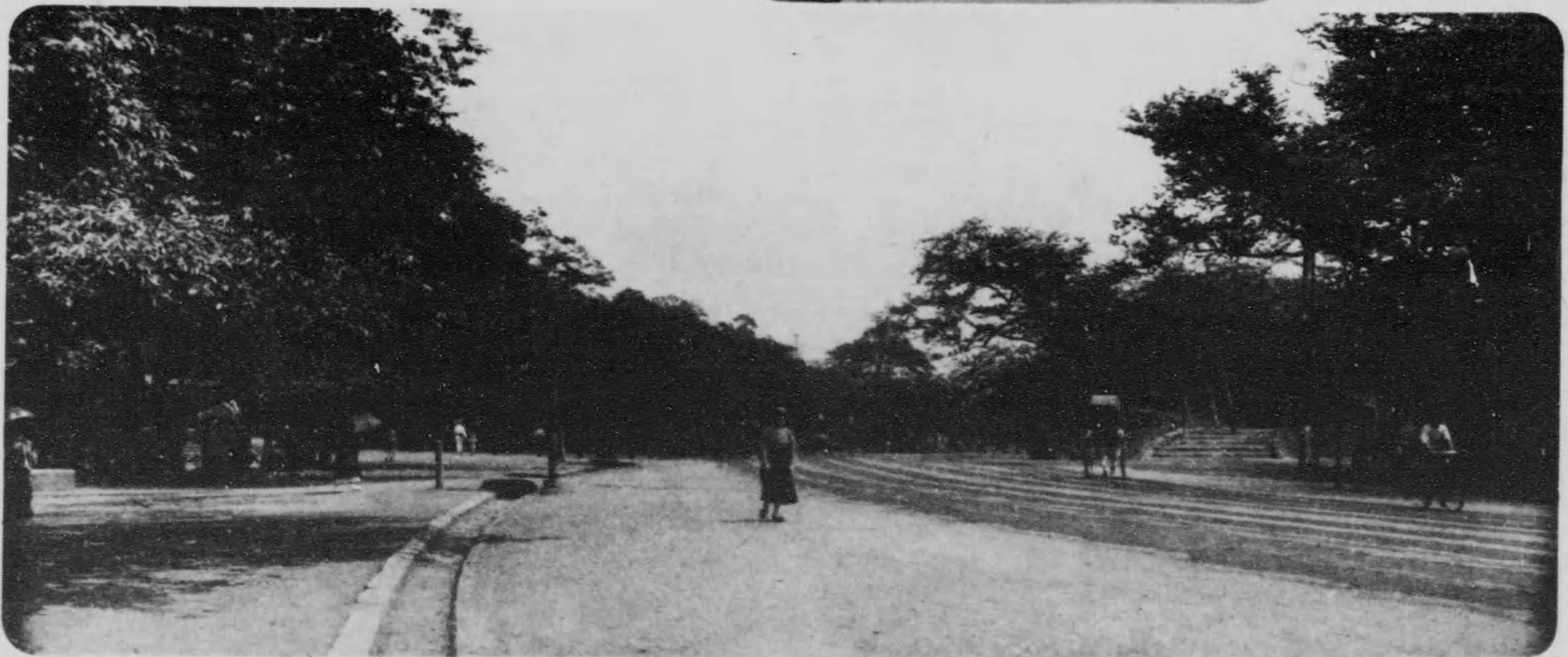
宮照東野上



寺永寛



墓除義彰



園公野上

●上野公園 (東京)

上野公園の地は古へ不忍ヶ岡の名あり
徳川氏入國の頃藤堂和泉守此地に邸第を
起し、其地形伊賀の上野に似たりとて改
めて上野と稱す、寛永年間徳川氏藤堂邸
を染井に徙さしめ其跡に東叡山寛永寺を
草創し、徳川氏代々の香華院と爲せり、舊
時は寶殿靈閣頗る華美を極めたりしも、
明治戊辰の兵燹に罹りて大半燒燼し、明

蹟亦多し、殊に花時に際しては櫻花爛熳
として、向島に次げる觀花の遊覽地たり、
園内の古蹟としては黒門口最も名あり。
上野公園に於て見通すべからざるもの
は、帝室博物館と動物園なり、博物館は
明治十一年の創立にして、石造煉瓦造の
大建築なり、今ま宮内省に屬す、園内に
は内外古今の歴史的美術品、製作品、天産
人工等の總ゆる物品を彙類して陳列し、
以て縦覽に供す、傍らに東宮御慶事記念

の松あり、華表傍の陵上に大佛あり、高
さ二丈二尺と稱し紫銅造りなり、時鐘其
背後に立てり、芭蕉の「花の雲鐘は上野
か淺草か」と言へるもの是なり。

越 鐵兜

香露無聲濕錦苔 廟門清肅曉光開
赭袍一隊排花去 知是伶官上殿來

●寛永寺 (東京)

寛永寺は上野公園内にあり、即ち音編



●上野公園 (東京)

上野公園の地は古へ不忍ヶ岡の名あり、徳川氏入國の頃藤室和泉守此地に邸第を起し、其地形伊賀の上野に似たりとて改めて上野と稱す、寛永年間徳川氏藤室邸を染井に徙さしめ其跡に東叡山寛永寺を草創し、徳川氏代々の香華院と爲せり、舊時は寶殿靈閣頗る華美を極めたりしも、明治戊辰の兵燹に罹りて大半焼燼し、明治六年開きて公園と爲し、爾後諸博覽會、共進會等時々此園に開設す、現時總坪數二十二萬二千坪を有し、都下四大公園中の最も大なるものなり。

●園内彰義隊墓 (東京)

上野廣小路より公園に入るに三橋あり、忍川に架す、北は即ち公園の入口なり、正面山王臺に上る階段を袴腰と言ふ、臺は昔、林羅山の家塾を開き、又將軍義宣の孔子廟を建てし所、「彰義隊の墓碑」あり常に香煙絶ゆる事なし又西郷隆盛の銅像も右方にあり、此附近都下十萬の瓦甍を望みて眺望最も佳し、清水臺に清水觀音堂あり、碧菟朱欄の建造物なり、臺の側らに「秋色櫻」あり、更に東に當りて日本美術協會あり、其東にバノラマ館あり、清水臺の西に當りて摺鉢山あり、山王臺下より左に折れて公園に入る黒門通は、此清水臺下を過ぎ竹の臺に出づ、帝室博物館は竹の臺の背後にありて、館前を東西に通貫する道を錦小路と云ふ。

錦小路の北に東京美術學校及音樂學校あり、相駢びて帝國圖書館あり、帝國學士院は東京美術學校内に置かる、動物園其南にあり、更に黒門口に歸る道路附近に東照宮、五重塔、大佛等あり、不忍池は東照宮所在地より黒門口に至る一帯丘陵の下に、一路を隔て、展開す。

地域深樹多く、到る處眺矚に富み、古

【武 殿】

蹟亦多し、殊に花時に際しては櫻花爛熳として、向島に次げる觀花の遊覽地たり、園内の古蹟としては黒門口最も名あり。

上野公園に於て見通すべからざるものは、帝室博物館と動物園なり、博物館は明治十一年の創立にして、石造煉瓦造の大建築なり、今ま宮内省に屬す、園内には内外古今の歴史的美術品、製作品、土産人工等の總ゆる物品を彙類して陳列し、以て縦覽に供す、傍らに東宮御慶事記念美術館あり、館の正門は即ち舊寛永寺の中門なりき、動物園は明治十五年の設置にして是又宮内省の所管なり、園内に内外の禽獸鱗介數百千種を集め、寒帯熱帯各地に亘る動物を網羅す、又明治五年の開設に係る帝國圖書館には四十萬冊の藏書あり、之は特に縦覽する値あるべし、公園内屏風坂の上にある「兩大師」は開山堂、又は慈眼堂と稱す、是れ慈眼慈惠兩大師の影堂たり、慈眼は即ち天海僧正の諡號なり。

●上野東照宮 (東京)

上野公園内吉祥閣址と中堂址の間、西方に鎮座す、社殿は東面すと雖も、恰も不忍池の北岸に當り、池畔よりも登拜すべし磴路あり、此廟宮は寛永年中天海僧正の興す所にして、八年に亘り宮殿、護摩堂、大塔等成る正保三年社領貳千壹百石を定められ、寛永寺の寒松院を以て宮別當職に補せらる、戊辰の戦亂、幸にして兵火を免れ、宮殿大塔今猶舊の如し、祭神は徳川家康なること何人も之を知る、華表より本社まで凡そ二町、其南側には諸侯より献納せし無數の石燈籠羅列し、本社には神籬門の裡にありて、規模小なるも構造善美を盡せり、又石の華表の傍らに巨大なる石燈籠あり、高さ二丈を超ゆ、黒門通に出づる磴路の北側に寛永寺鐘樓址あり、其背後に米國グラウンド將軍手植

の松あり、華表傍の陵上に大佛あり、高さ二丈二尺と稱し紫銅造りなり、時鐘其背後に立てり、芭蕉の「花の雲鐘は上野か淺草か」と言へるもの是なり。

香露無聲濕錦苔 廟門清肅曉光開
緒袍一隊排花去 知是俗官上殿來

●寛永寺 (東京)

寛永寺は上野公園内にあり、即ち音辯學校の背後に當る、東叡山圓頓院寛永寺と號し、天台宗にして寛永四年の建立なり、往時は坊舎三十六宇を有し、世々一品親王を庵主に戴き、今の公園は悉く其境内に屬して江戸第一の大伽藍なりしが戊辰の兵燹に罹りて中堂、吉祥閣其他の堂宇大半焼燼せり、殊に上野公園開かれてより其轉驚くべきものあり、本堂には傳教大師作藥師如來を安置す、寺に近接せる處に徳川家廟あり、是徳川家代々の靈屋なり、一の廟には三代將軍家光、四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家齊の墓所あり、此靈屋の位置は博物館の背後、根岸の高崖に臨めり、一の御玉屋、二の御玉屋の二屋に分ち、其建築裝飾の美麗は芝公園の靈廟に劣らず。

●天海僧正墓 (東京)

寛永寺の草創者なる天海僧正は、徳川家康の帷幕として内外の樞機に當れる高僧なりき、寛永二十一年百三十歳を以て入寂すと傳へらる、或は夫れ以上の高僧なりしとも言ふ、慈眼大師として御影堂に安置せられ、墓は彰義隊墓の後方にあり。

因に天海僧正は其草創せる川越喜多庵に隱栖して晩を送りけるが、遂に同庵に於て入寂せり、而して上野公園内に於ける僧正の墓は寛永寺歴代住僧の墓地なれば僧正の墓のみならず。

● 不忍池 (東京)

不忍池は上野臺の西南に展げ、同臺と向ヶ岡の間に湛ふ、面積十三町歩餘、其池縁を競馬競争の埒場とし。長七百四十間、藍染川北より來りて之に注ぎ、池心の小島に辨財天祠あり、又池水の盈縮を節制するが爲めに、周縁の外に一溝を通じ、是等の諸水皆な東南に匯合し、一道となりて廣小路を横ぎり、三味線堀へ赴く、之を忍川と言ふ、池の東西二方を池之端と稱し、仲町、數寄屋町、茅町、七軒町の四町に分つ、地域は本郷區内に跨れども下谷區の管内に屬す。

溝池邊を植え毎年七八月の交に至れば、紅白の花池水に映じて清香人の袂を襲ふ、近年勸業博覽會を上野に開催せし際、辨財天祠の背後に半永久的の新橋を架し、觀月橋と名く、上野の山色は此池の清澗によりて更に一段の好風趣を添ふ

● 谷中天王寺 (東京)

天王寺は谷中天王寺町にあり、天台宗にして、初めの名を長耀山尊重院威應寺と號し、日長僧正の開基に係る、往昔は僧坊十字を支配し、堂宇頗る壯嚴を極めしが、戊辰の兵燹に罹りて復た往年の盛を留めず、而して其境内を谷中墓地と稱し、名士名媛の墳墓到る處に累々たり、廣袤三萬二千六百餘坪、都下に於て青山に次ぐの大墓地と稱せらる、墓地の中央に五重塔あり、構造堅牢にして且つ趣味に富めり、寺内より東根岸に下る坂を芋坂と言ふ、小野湖山の詩あり。

北邙山上暮鴉啼 早晚誰能免寄栖
一笑名心終未止 墓碑猶競石高低

天王寺の東、上野の山陰に當る根岸は、昔、吳竹の根岸の里として著れ、能く歌人に謳はれたる所にして、數寄を凝らせる別墅多く、門戸相接し、細徑相通じ、

亦一個の別天地を成す、曾て東叡山座主の宮此地に京洛の鶯を放たせ給ひしに、皆な上方の種なれば東國の訛なしなど古書に誌せり、大沼枕山の詩に曰く

柴扉向背水東西 富豪翁々好隱栖
十有七言吟末隱 杜鶯聽了又田鷄

抱 一

山茶花やなぎしは同じ離つゞき

● 飛鳥山公園 (東京)

王子神社と川を隔て、其東南にあり、川は石神井川と言ふ、山の麓を繞りて眺望開豁なり、園は東京市の經營に屬し、明治六年の開園に係る、境域壹萬三千餘坪、數千株の櫻樹は花時芳雲を鑿鑿たらしめ、山下には王子の諸會社工場を下瞰し、萬頃の田野眼下にあり、更に遠くは筑波山の翠巒と相對し、眺矚快調、風景最も勝れたり、園内に飛鳥山碑及櫻賦の碑あり、飛鳥山碑は元文中成島鳳脚の撰する所にして大要如左

飛鳥山碑

維南國之鎮、曰熊野之山、有神、曰熊野之神、實伊弉册尊也、配祀伊弉諾尊、事解王子、或稱之三神、事解別、爲飛鳥之祠、三狐神副焉、語有神史中、別錄藏焉、誌曰、在昔文章中、武之豊島郡豊島氏、稱此豊島岡、爲熊野神坐地、之曰飛鳥、蓋自此始也、熊野之川曰音無、川流象焉、爾來四百有歲、土人以時祀之、如一日矣、祀典曰、熊野之神、春以花祀、鼓之吹之、旗之歌之舞之、今之王子祀日、鼓吹旗歌舞者、其來也尙矣、而世之遷、祠宇荒壤、風日不蔽、越暨寬永中、有司奉命、祇飾祠事、乃因故兆新之、遂遷飛鳥祠於本祀、飛鳥之山、有名無祠者由焉、三狐神、僻在北麓云、今茲丁巳春三月巳亥、我后省耕之次、親土封飛鳥之山(中略)冥契會之、奇非邪、抑亦國家之符也、遂鐫于

石、以爲表經、銘曰、

縣邇洪荒、有神開國、唯歸南紀、京土是祀、明々我后、未封其域、神之眷祐、豐穰薦至、本支繁衍、其麗豈億、八極懷仁、神祇鑒應、千載懿範、之石是勒、

● 瀧野川 (東京)

瀧の川は紅葉を以て名あり、其楓樹の多き處は王子村の西、瀧の川村なり、而して瀧の川は石神井川の downstream にして東流荒川に入る、川の兩岸悉く楓樹、晚秋霜深き時は宛かも蜀錦を晒すが如く、亦一美觀たり、瀧あり、辨天瀧と稱す。

● 王子稻荷 (東京)

辨天瀧と共に開ゆる王子稻荷神社前の瀧は、夏季納涼の別天地なり、殊に稻荷社の境内は松杉鬱茂して眺矚に富む、王子神社は飛鳥山碑に見ゆる神社にして、元享年間草創に係り、其社殿は紀州熊野權現に模して造營せられたるものなりと言ふ。

王子稻荷神社に關して權現緣起の記する所を見れば「末社多かる中に、何れの世にかありけん、此社の傍らに稻荷明神を遷し祝ひければ、毎年臘晦の夜、諸方の命婦此社へ參り來る、其ともせる火の山中に連り續けること、許多の松明を並べるが如く、數萬の螢を放ち、飛ばしむるに似たり、其道の山を通ひ河邊を通へる不同を見て、明年の豊凶を知ると稱せり」云々、此王子稻荷社は元、岸稻荷と稱せりと。

此方面に關係ある豊島權頭清光の館址は清光寺の傍らにあり、廣さ九十坪餘、清光は江戸太郎重長と相駢んで當時武藏國に於ける重鎮たりしが如し、治承四年九月源賴朝より清光に書を與へし其東鑑に見ゆ。

飛鳥山



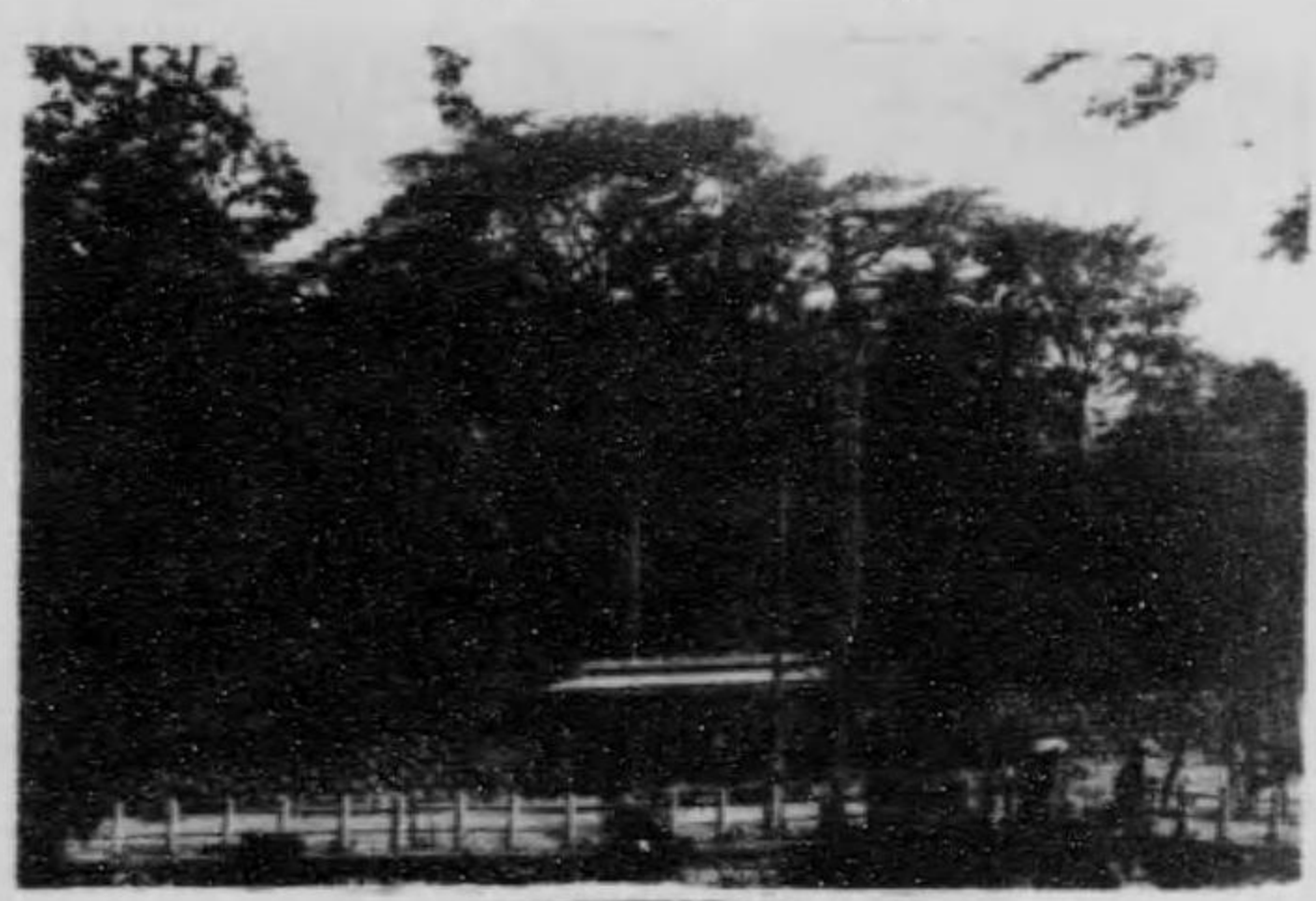
瀧の川

に次ぐの大墓地と稱せらる、墓地の中央に五重塔あり、構造堅牢にして且つ趣味に富めり、寺内より東根岸に下る坂を芋坂と言ふ、小野湖山の詩あり。

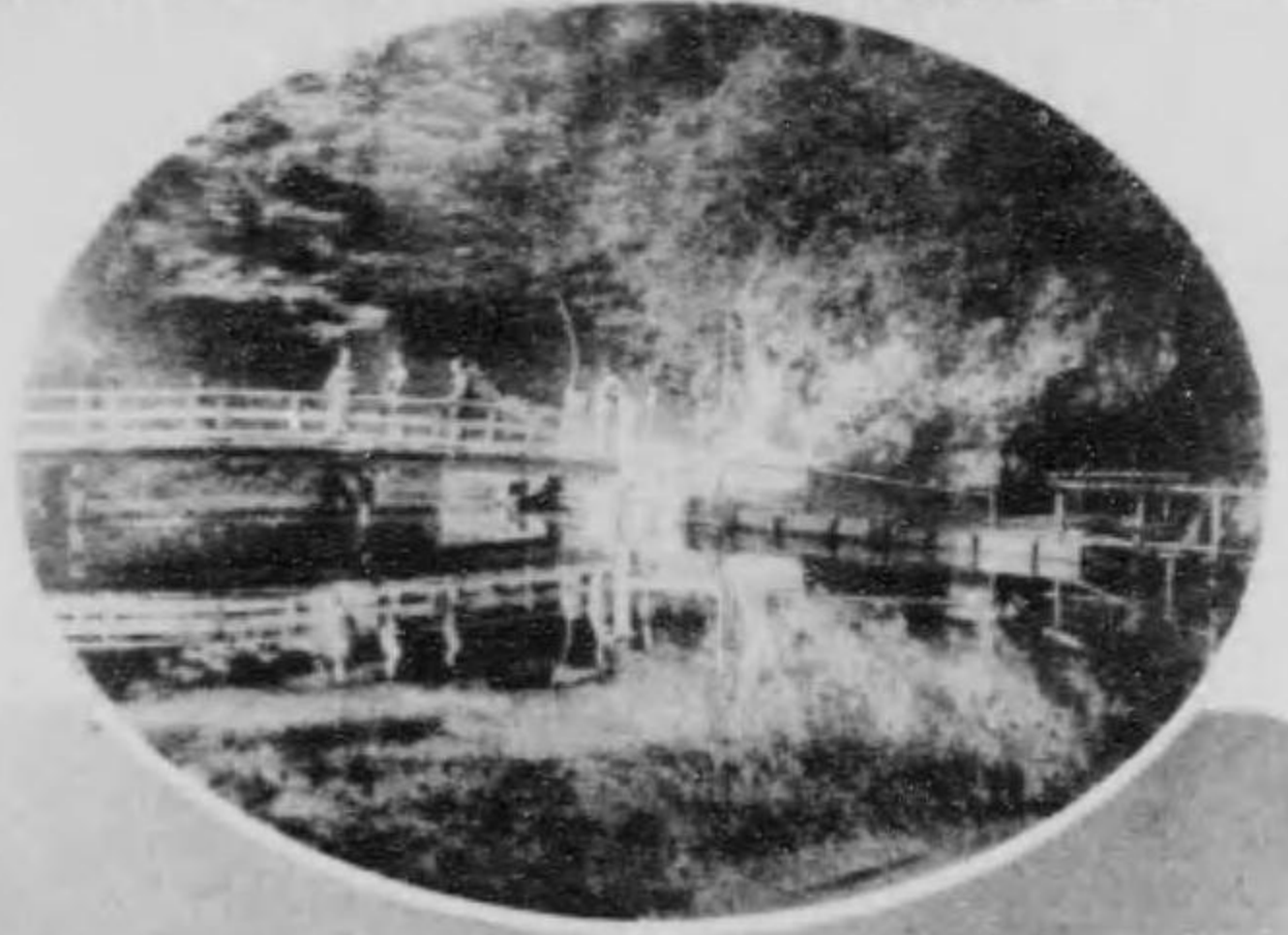
北邨山上墓窮啼 早晚誰能免寄栖
一笑名心終未止 墓碑猶競石高低

天王寺の東、上野の山陰に當る根岸は、昔、奥竹の根岸の里として著れ、能く歌人に謳はれたる所にして、數寄を凝らせる別墅多く、門戸相接し、細徑相通じ、

飛鳥山



瀧の川

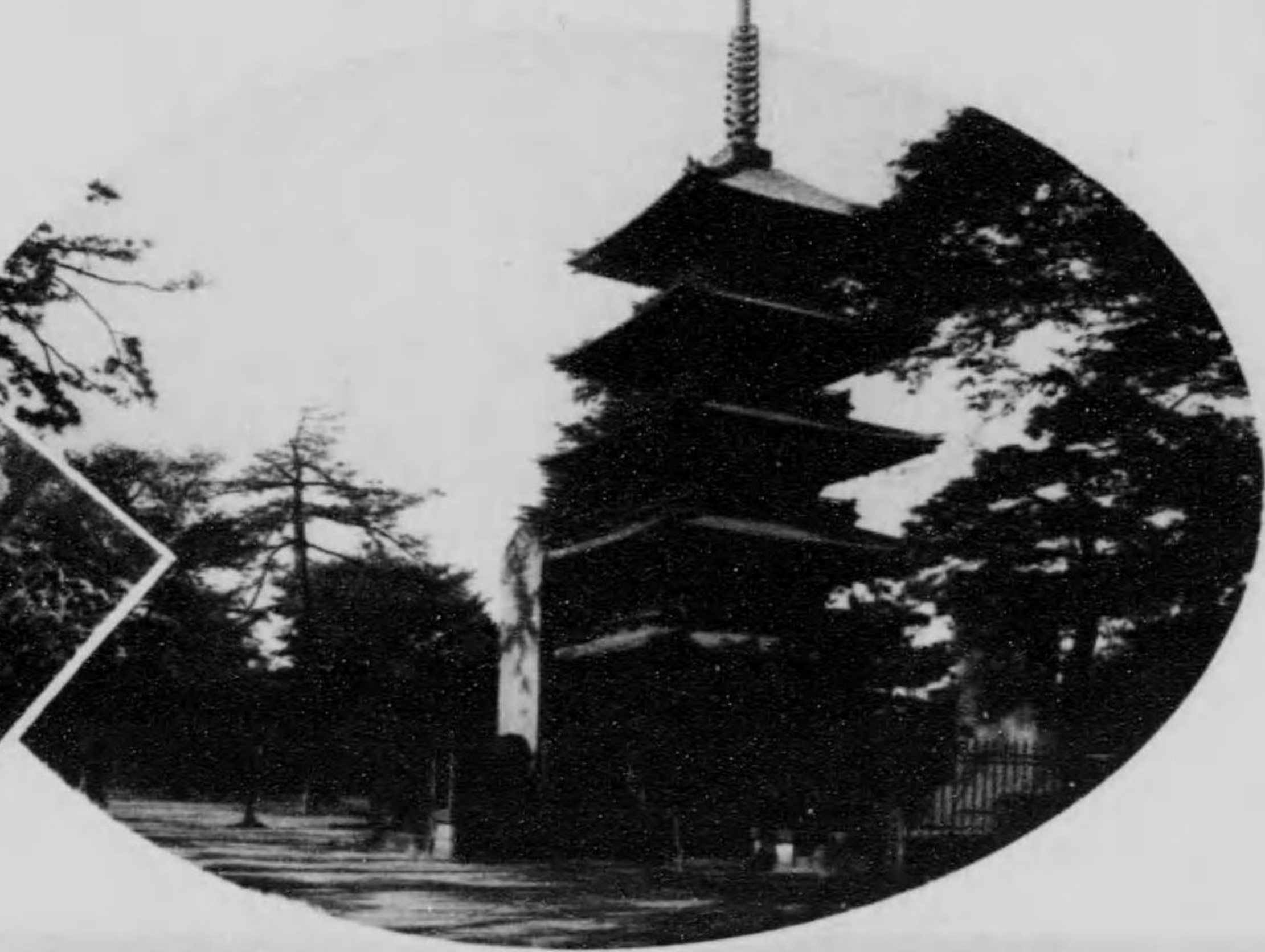


時祀之、如一日矣、祀典曰、熊野之神、春以花祀、鼓之吹之、旗之歌之舞之、今之王子祀日、鼓吹旗歌舞者、其來也尙矣、而世之遷、祠宇荒壞、風日不蔽、越暨寬永中、有司奉命、祇飾祠事、乃因故兆新之、遂遷飛鳥祠於本祀、飛鳥之山、有名無祠者由焉、三狐神、僻在北麓云、今茲丁巳春三月巳亥、我后省耕之次、親土封飛鳥之山(中略)冥契會之、奇非邪、抑亦國家之符也、遂鑄于

に似たり、其道の山を通ひ河邊を通へる不同を見て、明年の豊凶を知ると稱せり云々、此土子稻荷社は元、岸稻荷と稱せりと。

此方面に關係ある豊島權頭清光の館址は清光寺の傍らにあり、廣さ九十坪餘、清光は江戸太郎重長と相駢んで當時武藏國に於ける重鎮たりしが如し、治承四年九月源賴朝より清光に書を與へしに東鑑に見ゆ。

谷中天王寺

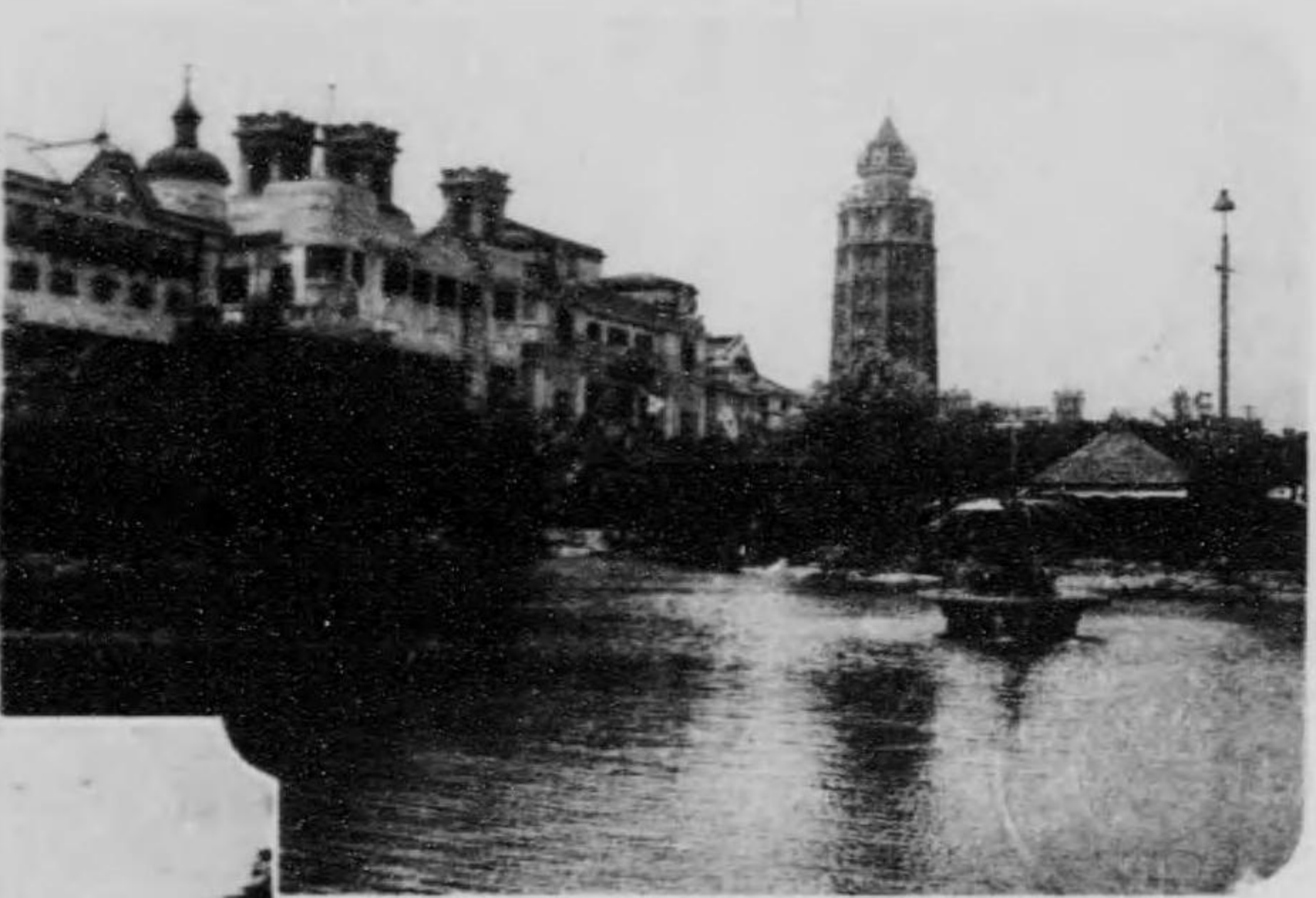


王子稻荷神社



不恩池

公園



待乳山聖天堂



吾妻橋



●浅草寺 (東京)

俗に浅草観音と云ふ、天台宗にして本尊は一尺八分の観世普菩薩なり、寺傳に據れば推古天皇の御宇檜熊濱成、武成兄弟、宮戸川より網にて得たる像なりといふ。秘佛にして古來開扉する事なし、其の前立は慈覺大師作の一尺八寸の観音像なり、本堂は大化年中、僧勝海の造營す

平賀源内墓



浅茅ヶ原ノ墓



浅草観世音

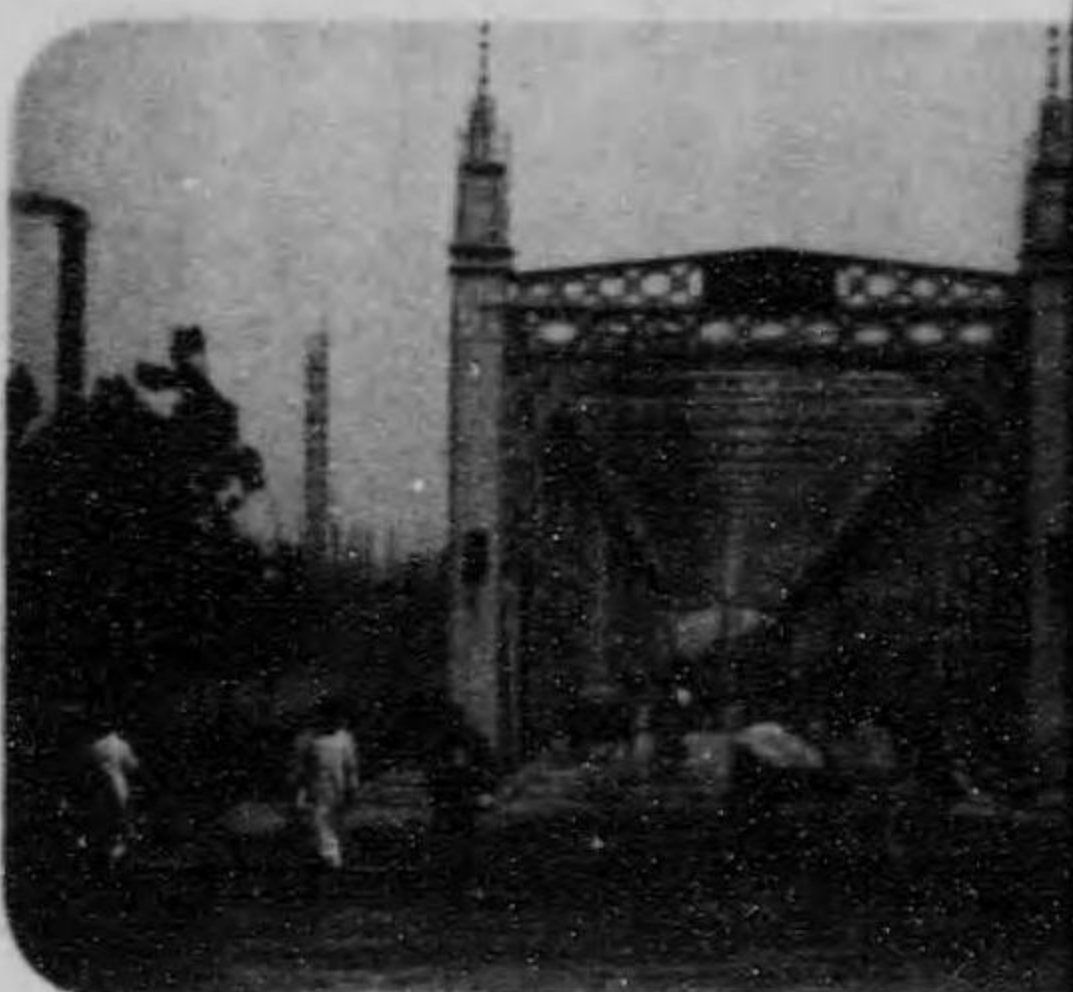
●浅茅ヶ原 (東京)

浅草區橋場町總泉寺と門前に在り。蒼然たる一塚あり、妙龜塚と云ふ、是れ梅若丸の母の塚なりと傳ふ、一書に妙龜尼は貞元二年梅若の跡を追ふて茲に來り、隣近にある鏡ヶ池を覗き見しに梅若の姿影の如くに見へしより池水に身を投じて死せりと云ふ。慶長見聞集に依れば往時此

●吾妻橋 (東京)

仲店と稱し是亦公園の一部となれり仲店は素二十軒茶屋と稱し昔時は僧坊の賣茶店たりしが今は數十戸の商店兩側に櫛比し店頭常に顧客充滿して雑沓群集を極め居れり。

一に東橋と書す、浅草區花川戸の河岸



●浅草寺 (東京)

俗に浅草観音と云ふ、天台宗にして本尊は一尺八分の観世音菩薩なり、寺傳に據れば推古天皇の御宇檜熊濱成、武成兄弟、宮戸川より網にて得たる像なりといふ。秘佛にして古來開扉する事なし、其の前立は慈覺大師作の一尺八寸の観音像なり、本堂は大化年中、僧勝海の浩營する所、現今の堂は寛永十九年焼失後、慶安年間徳川家綱の再營にして其後屢々修繕を加へたり。堂は南面にして十八間四面、瓦葺朱塗にして輪堂椽四方七間、椽側一間、柱は總て合抱に餘り床の高七尺餘、階段を踏て四面より登る可し山門の樓上には文殊菩薩を安置し、樓下に金剛力士の像を置く、東方に五重塔あり塔上五智如来を安置す。其他輪藏、二天門、三社念佛堂あり。有名なる雷門は焼失後再建の運びに至らず空しく其名のみを存せり又雷門上に在りし風神雷神の二像は境内の一靈舎に移置せり、江戸開府以來遠近老若男女常に來賽群集し今尙益々繁盛を極めつゝあり。

●浅草公園 (東京)

浅草區廣小路の北、浅草観音の境内に在り、此地素と浅草寺の境域なりしが明治六年公園とし同九年奥山を第六區とし同十五年千束村の一隅を埋立て公園に加へたり、園は観音堂を中心として方五町許に亘り面積約十萬坪を有す、園内には劇場、活動寫眞、花屋敷、十二階其他諸種の興行物観覽物、娯樂場、飲食店等、軒を並べて二六時中雜沓繁昌せり。昔時有名なりし奥山見世物の名稱は今尙残れるも明治十七年公園改正の際悉く六區へ移轉し今は唯花屋敷のみを残す、摺鉢山は第五區に在り、附近に錢塚辨天久米平内祠、彌佛あり、雷門址より仁王門に至る間を

【武 藏】

仲店と稱し是亦公園の一部となれり仲店は素二十軒茶屋と稱し昔時は僧坊の賣茶店たりしが今は數十戸の商店兩側に櫛比し店頭常に顧客充滿して雜沓群集を極め居れり。

●吾妻橋 (東京)

一に東橋と書す、浅草區花川戸の河岸より本所區中之郷に架す、安永三年の創架にして當初は大川橋と稱せり、後ち吾妻橋と改めたり、爾來屢々修繕せしが明治二十一年鐵橋に改造せり、即ち今の吾妻橋是なり、橋側北方に渡し場ありて本所向島の枕橋に渡船す、俗語に曰く吾妻橋とは吾がつま橋よそばにわたしが附て居る

是れ此の渡船を云ふものなり、橋西より隅田の流れを隔て、向島の長堤を望む管に艶陽四月の櫻花期のみに限らず、瀟洒淡彩、四時を通じて風趣掬すべきものあり、又帝都の一勝區なるを失はず。

●待乳山聖天 (東京)

浅草區聖天町に在り、一に眞土山と書す、本稱は金龍山なり、今戸橋の南方にして山谷川の隅田川に會する邊なり、一座の小丘陵にして、山上に聖天宮を祀り、別當を本龍院と稱す、聖天は大同年中の勸進にして江戸に於ける聖天中第一の靈區と稱せらる境内に歌人戸田茂睡の歌碑あり、左の歌を刻す。

あはれとは夕越へて行く人も

見よ待乳の山に残す言の葉

山上隅田の流れを望み、時に帆船の往來、都鳥の飛交ふを見る、淡景楚々として宛然一幅の水彩畫たり、若夫れ月夜の觀に至つては言ふべからざる詩趣あり、「月に風情は待乳山」の俗曲は實に這般の實景を唱破したるものと謂ふ可し。

●浅茅ヶ原 (東京)

浅草區橋場町總泉寺と門前に在り、蕭然たる一塚あり、妙龜塚と云ふ、是れ梅若丸の母の塚なりと傳ふ、一書に妙龜尼は貞元二年梅若の跡を追ふて茲に來り、附近にある鏡ヶ池を覗き見しに梅若の姿影の如くに見へしより池水に身を投じて死せりと云ふ。慶長見聞集に依れば往時此地の森に古寺有り梅若の母茲に入りて靈を剃り名を妙喜と改め常に念佛を唱へ、遂に此寺にて終れり、古寺は今の總泉寺是れなり、妙喜尼は平素所持せし鏡を此池中に捨てしより、鏡が池と稱するに至れりと云ふ。謠曲「班女」は此傳説を作しものなり。

●平賀源内墓 (東京)

浅草區橋場町總泉寺境内に在り、墓は寶篋塔の形にて上部の石に平賀源内墓と刻し次の石に智見靈雄居士と中央に記し左右に安永八巳亥年十二月十八日と二行に刻せり。

平賀源内、名は國倫、字は士葵、鳩溪と號す。源内は其通稱なり、又小説、戯曲、編筆を草して風來山人、福内鬼外、紙齋堂、天笠浪人と號せり、識岐國志度浦の人、雄豪放英敏にして博識活達壯時高松侯に仕へたりしが志す所あり去つて長崎に遊び蘭學を究め後ち江戸に來り、科學を應用して種々なる發明を試み、又小説、戯曲を創作し著述家として盛名を傳へらる、其著す所の戯曲にして有名なるは「神靈矢口渡」隨筆としては「風來六部集」等最も著はる、太田蜀山常に源内の狂才を愛して是と交り、又森島中良、源内の學才を慕ふて其門となれり、源内嘗て誤て人を損ひ、其罪に座して下獄し、安永八年十二月十八日病で遂に獄裡に歿す。辭世に曰く「乾坤に身を縮めたる氷柱かな」

●乃木將軍邸址 (武藏)

征清の役、討露の師は偉勳を奏し、其人格の崇高、日本武士の精華として景仰せられ、明治聖代の瑞祥として追慕せらるゝ乃木將軍邸址は赤坂區新坂町にあり東京市之が保管の任に當り、時間を定めて一般に縦覽せしむ、地は赤坂離宮と相距る數百歩、市街電車は邸址の前に停留所を置き、名けて「乃木阪前」と稱す。

嗚呼回顧すれば明治四十五年七月下旬先皇 明治天皇陛下大故の報突如として中外を驚かせる際、普天の下、率土の濱、一人として心を傷めざるはなく、七千萬の同胞悲嘆の涙を瀉ぎ、舉國一致、昊天の無情を怨まざる者なからしめしが、就中御生前大なる殊遇を蒙れる乃木將軍の慇懃は實に限りなきものありき。

抑も 先皇御不豫の報を傳へられたる七月二十日より、遂に崩御遊ばされし三十日の曉に至るまで、將軍の愁ひ氣なる姿は、日夜大内山に見えざることなく、日に三回乃至四五回大奥に伺候して、御病氣の御経過を承り、家にありては一室を閉ぢ、堅く家人の出入を禁じ、齋戒沐浴して只管御腦の一日も早く御平癒あらせ給はんことを祈れり、斯くて三十日拂曉に及び遂に崩御あらせらるゝや、將軍の悲痛愁嘆すること限りなく、心腸も方さに斷つが如く覺え、戰場に臨んでは百萬の難敵も恐れざる猛將も、涕泣慟哭して暫しも已まざりしと言ふ。

先皇 御登遐後將軍は一切の訪客を辭し、食膳に向ふも僅かに箸を取るに過ぎず、夜も殆んど眠ることなく、日々二回宛參内して殯宮を拜する外、唯だ一室に籠りて黯然として黙禱するのみ、將軍の至誠謹嚴にして御登遐を悲嘆するの深き此一事にても推知するを得べきなり。

壯烈を極めたる將軍夫妻の最期

各國の元首は皆な先皇の崩御を悲まられ、特に親王若くは重臣を遣して弔辭を述べしめ、且亦靈柩奉送の列に加へしむ、英國皇帝の御名代としてはコンノート殿下の來朝を見たり、乃ち將軍は殿下接待の大任を拜し、愈々御大葬の當日たる九月三十日に至るや、將軍は其時刻迫れるも出でざりければ、吉田式部官將軍邸を訪へるに、將軍は深く其勞を謝し自ら玄關に見送り「余は病氣なるを以て參列叶はざるべし、宜しく傳へられたし」と告ぐ、之れ將軍邸最後の訪客にして、此時將軍の胸には雄大なる武士道の實現を期せんとするものありしなり、將軍は客を送りて後齋戒沐浴を了し、一室に入るや先づ 先皇陛下の御尊影を机上に奉安し其前に將軍夫妻の辭世を置き、又最も長文なる遺言狀と渡邊宮内大臣に宛たる遺書及五六通の遺言狀を列し、室の側壁には戦死せる二愛子の寫眞を懸け、將軍先づ直立不動の態度を以て 御尊影を拜すること數刻、更に宮城に向ひ恭しく遙拜し、而る後座に着く、時に 御轎車宮城を發し給ふべき號砲響き來る、將軍靜かに軍服の胸を開き、二尺三寸の軍刀を以て下腹部を真一文字に掻き切りし上、咽喉を刎ね軍刀を前に置きて瞑す、靜子夫人は第一期御大葬服即ち鈍色の襦に柑子色の袴を穿ち、月山貞一の銘ある懷劍を以て美事に自及し合掌の儘永眠せり、嗚呼何ぞ夫れ悲壯凄慘の最期ぞや。

將軍の辭世に曰く

うつし世を神去りませし大君のみあとしたひて我はゆくなり

神あかりあかりましぬる大君のみあとはるかにをろかみまつる

又靜子夫人の辭世は

出てまして歸ります日なしと聞く

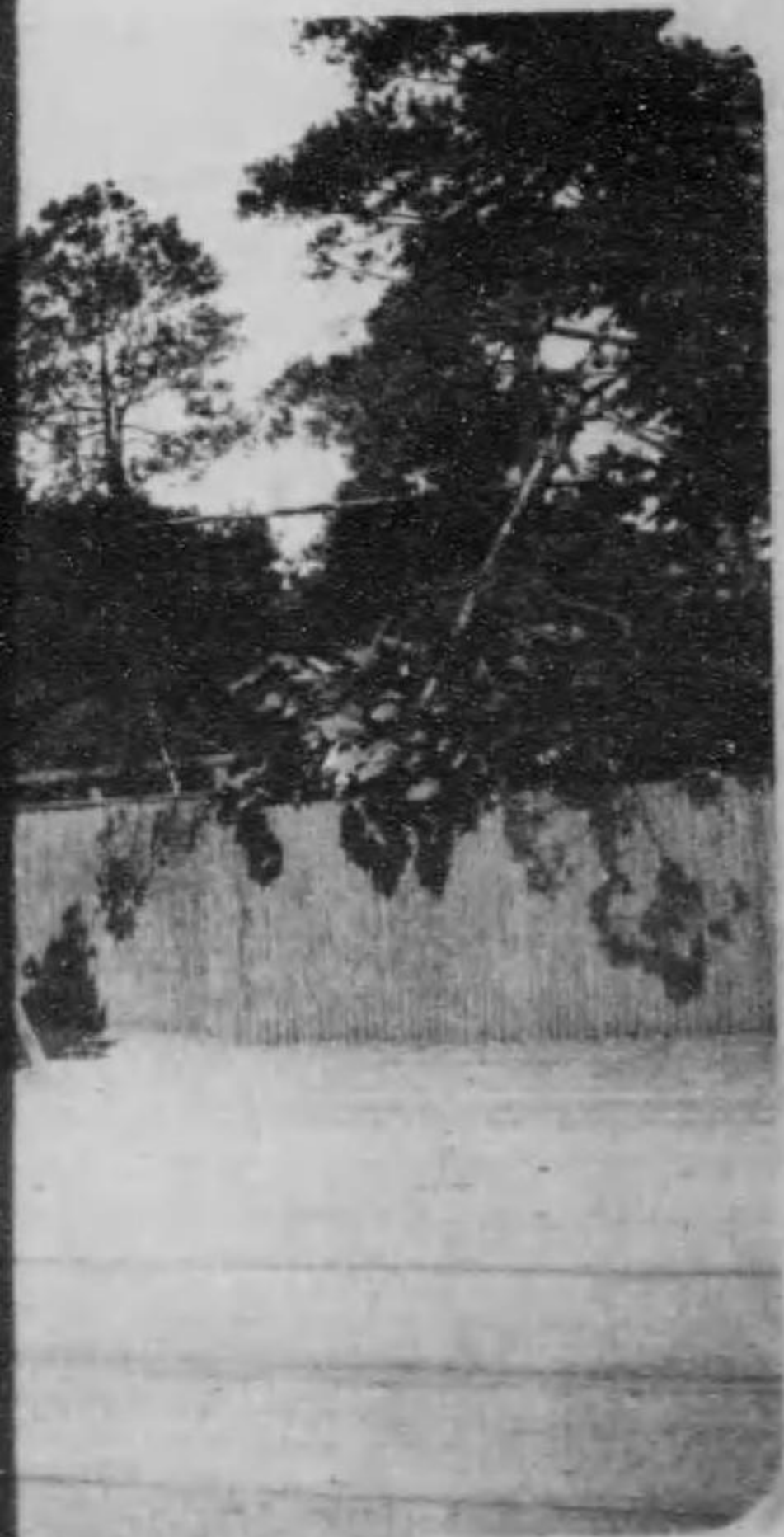
ひよの御幸に逢ふぞ悲しき

●乃木將軍夫妻墓 (武藏)

乃木將軍の死一たび 天國に達するや 聖上陛下は深く宸襟を惱まさせ給ひ、又親しく將軍の御教養申上げたる東宮殿下には、畏くも玉の御涙を浮べさせられ「爺も死せるか」と宣ひて嘆かせ給へり、而して國民は上下の區別なく擧つて其忠烈義勇を稱し、其死を悲嘆して已まざりき、將軍夫妻の遺骸を青山墓地に葬るの日は、貴顯大官にして其靈柩を送る者甚だ多く、又此偉人の爲めに涕泣しつゝ、別れを惜めるもの、沿道塔を爲し其數優に二十萬を超えたり、常日は 畏くも陛下は勅使を遣されて幣帛を捧げさせ給ひ、皇后陛下及東宮殿下よりも御使の御差遣あり、コンノート殿下亦親しく臨ませられて弔し給ふ、忠臣烈婦の英魂は斯して上下哀惜の中に長へに青山墓畔に眠れり 往昔南風號はざる時に當りてや、楠公父子崛起して力戦苦闘、孤軍を以て朝敵に衝り遂に戦死せりと雖も、其忠勇義烈永く範を後世に垂れ、我國體を泰山の安きに置けり、乃木將軍墓きに二子を旅順攻圍の激戦に失ひ、自己亦一死以て奉公盡忠の實を傲し、一般國民の士氣を振奮す、其忠勇義烈曷んぞ楠氏に譲らんや、將軍曾て一身の福利のみを思ふて、君國を忘るゝ輩あるを惡めり、其遺言狀に於て、乃木家に養嗣子を迎ふべからず、新坂邸は區又は市に寄附せられたしと言へるは勳功に依る授爵は其人一代に限り、何等功なき相續者を作るべからずと言ふに在りしなり、乃木將軍邸址を拜觀する者故將軍の上を追懷し、最敬の禮を表すると共に士氣の興奮を喚ぶべし、人心腐敗の今日特に之を勵む。

將軍夫妻殉死の室は今猶邸址に存す、就て拜觀するを得、掲ぐる所の故將軍筆蹟は山根正次氏所藏に係る。

乃木將軍



の顔も恐れざる猛將も、涕泣慟哭して暫しも已まざりしと言ふ。

先皇 御登退後將軍は一切の訪客を辭し、食膳に向ふも僅かに箸を取るに過ぎず、夜も殆んど眠ることなく、日々二回宛參内して殯宮を拜する外、唯だ一室に籠りて黯然として黙禱するのみ、將軍の至誠謹嚴にして御登退を悲嘆するの深き此一事にても推知するを得べきなり。

呼何ぞ夫れ悲壯凄慘の最期ぞや。將軍の辭世に曰く
うつし世を神去りませし大君の
みあとしたひて我はゆくなり
神あかりあかりましぬる大君の
みあととはるかにをろかみまつる
又靜子夫人の辭世は
出てまして歸ります日となしと聞く
ひよの御幸に逢ふぞ悲しき

は區又は市に寄附せられたしと言へるは動功に依る授爵は其人一代に限り、何等功なき相續者を作るべからずと言ふに在りしなり、乃木將軍邸址を拜觀する者故將軍の上を追懷し、最敬の禮を表すると共に士氣の興奮を喚ぶべし、人心腐敗の今日特に之を勵む。
將軍夫妻殉死の室は今將邸址に存す、就て拜觀するを得、掲ぐる所の故將軍筆蹟は山根正次氏所藏に係る。

軍將木乃

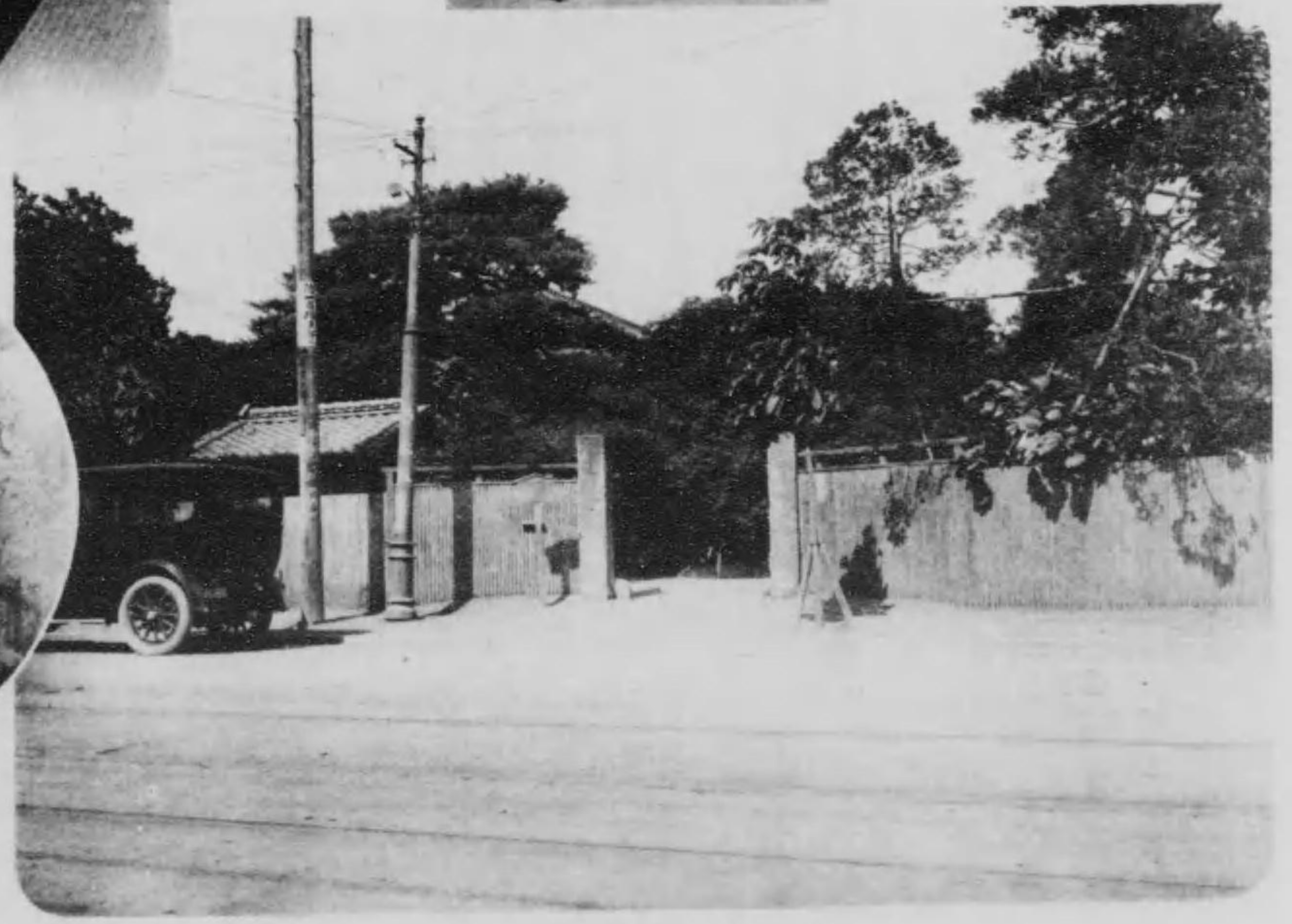
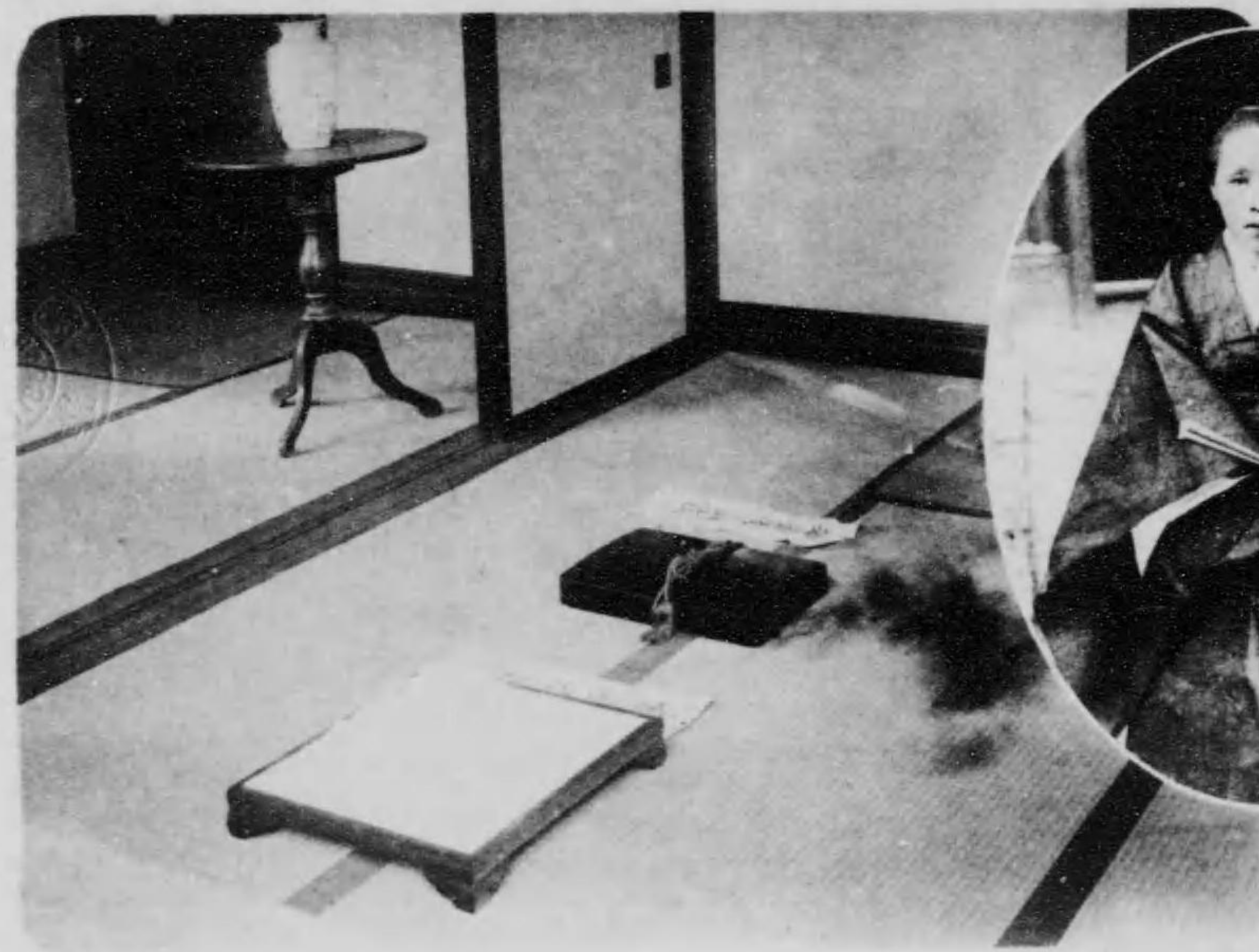


神州在大地之東居其陽位而面
天日所獲光皆受陽氣陽剛之德人
勇而兵強是天地之所生水土之所宜
固無待於矯揉飾飾也
瓊牙神劍部靈細戈莫非尚武之
義矣
後學派古典種也

人夫木乃



室乃白軍將木乃



邸舊軍將木乃



墓妻夫軍將木乃

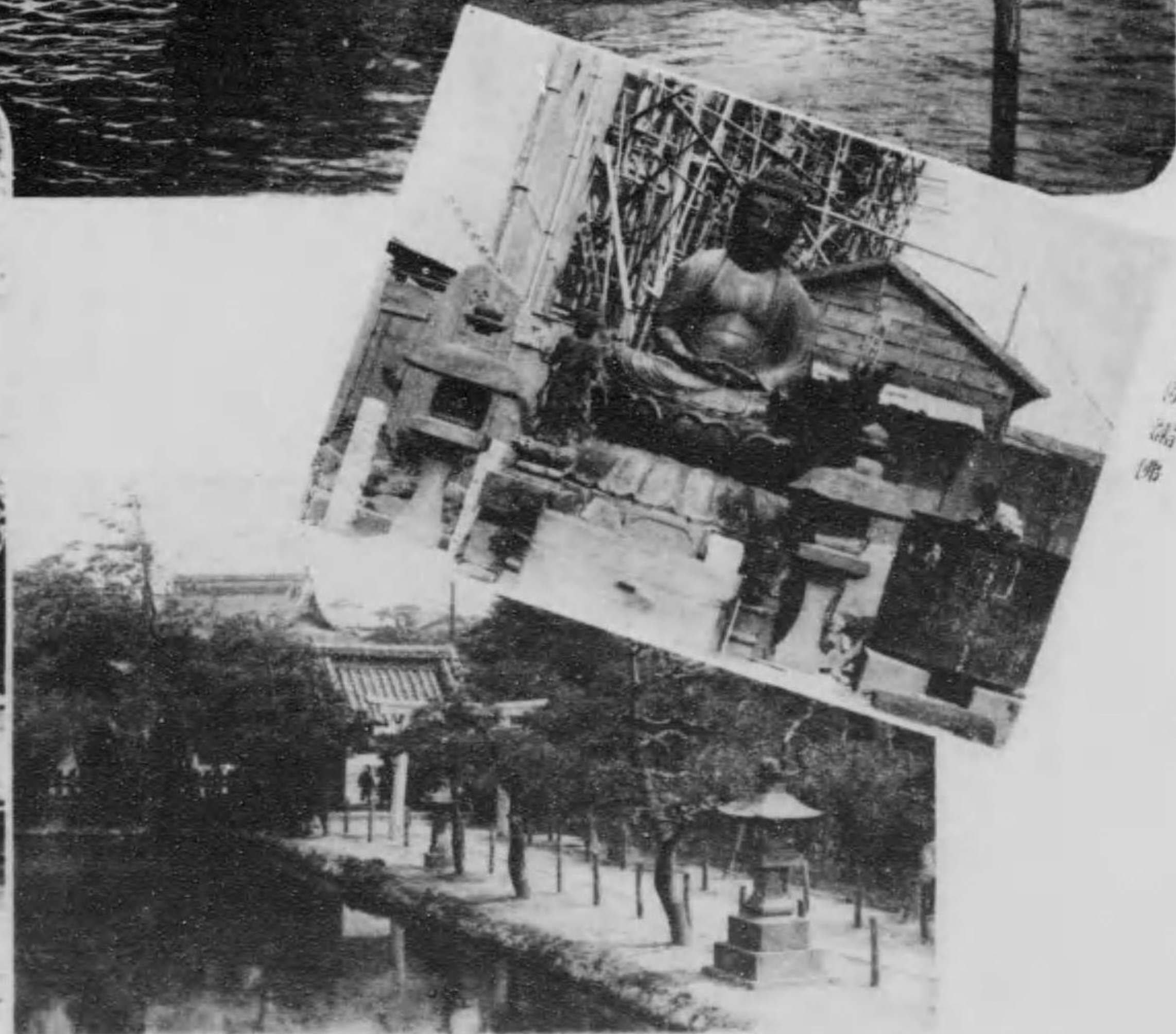
橋 國 兩



松平築翁墓



寺 岸 靈



回向院臨佛

社 神 園 三



川 田 隅 と 島 向

● 兩國橋 (東京)

東京六大橋の一にして日本橋區より本所區に架す、即ち武藏、下總を界流する隅田川に架したれば此名稱あり、又二州橋とも云ふ、「江戸砂子」の記す所に據れば、萬治三年始めて架設し當時大橋と稱したるを以りしが、次の橋を新大橋と稱したるを以て後に兩國橋と改稱せり、此川元武藏下總の堺と云ふに依つて號くと云へり。又

る十萬八千人塚は、即ち當時の慘死者を葬れるものなり。當寺は當時幕命によりて建立せる所にして増上寺貴屋上人を以て開山とし、信譽上人を二世とす、又境内の三佛堂は萬治年間、町奉行所より牢死の刑死者の爲め建立せし堂宇にして、昔時は江戸市中を毎日佛餉乞ひ巡る托鉢僧十六口住したり。諸國より江戸に來る靈佛は多く此寺に於て開帳せり。江戸時代の小説家として山東京傳及同京山、義賊鼠小曾治郎吉の實像亦當寺の墓地に在り。

守たり。元祿年間俳人寶井其角、早魃に際し當社に祈禱の句を詠進して雨降りし事ありとて境内に雨乞の句碑を建て其角の吟を刻せり、即ち左の如し
「夕だちや田を三圍の神ならば」
浮世繪畫家歌川國芳の碑亦此境内に在り

● 靈巖寺 (東京)

深川區靈巖町に在り、道本山と號す、淨土宗の大伽藍にして十八檀林の一なり。寛永元年、僧靈巖の開基に係り、當初靈巖



寺



●兩國橋 (東京)

東京六六橋の一にして日本橋區より本所區に架す、即ち武藏、下總を界流する隅田川に架したれば此名稱あり、又二州橋とも云ふ、「江戸砂子」の記す所に據れば、萬治三年始めて架設し當時大橋と稱したりしが、次の橋を新大橋と稱したるを以て後に兩國橋と改稱せり、此川元武藏下總の堺と云ふに依つて號くと云へり。又「江戸名所圖會」には此地の納涼五月廿八日に始り八月二十八日に終る就中夏月の間最も盛なり見世物所狭き計にして其招牌の幟は風に飄り兩岸の厦樓高閣は大江に臨み茶亭の床几は水邊に立て連ね燈の光は耿々として水に映す、樓船扁舟所狭く最合ひ連れ一時に水面を覆ひ隠して恰も陸地に至らず紗歌鼓吹は耳聾しく實に大江戸の盛事なり、俗に川開と云ふは即是なり云々、又以て當時の狀景を想像すべし。今や此光景一變して、橋東橋西の店舗は多く洋風の建築となり、廣小路には兩國小公園を設けし、橋東には國技館建設せられ、橋北の横網河岸、百本杭、橋南の矢の倉河岸濱町川岸等頗る面目を革新め、之を維新前に比すれば殆んど隔世の感あり。因に現今の橋梁は明治三十八年の新築に成れるものなり。

●回向院十萬八千人塚 (東京)

江戸時代より本場所相撲の興行地として有名なる寺院なり、本所區本所元町に在り、國豊山回向院と稱す、近來常設の國技館設置されて其境内に相撲の興行を見ざるに至りしも尚回向院本場所の稱を絶滅せず。當寺は元來明暦三年に於る江戸大火の際、慘死せる多數の無縁亡魂の冥福を吊ふ爲め、其回向場として建立せるものにして、境内の廣場に建てられた

【武藏】

る十萬八千人塚は、即ち當時の慘死者を葬れるものなり。當寺は當時幕命によりて建立せる所にして増上寺貴屋上人を以て開山とし、信譽上人を二世とす、又境内の三佛堂は萬治年間、町奉行所より牢死刑死者の爲め建立せし堂宇にして、昔時は江戸市中を毎日佛餉乞ひ巡る托鉢僧十六口住したり。諸國より江戸に來る靈佛は多く此寺に於て開帳せり。江戸時代の小説家として山東京傳及同京山、義賊鼠小僧治郎吉の墳墓亦當寺の墓地に在り。

●向島と隅田川 (東京)

本所區小梅町より隅田村に至る隅田川の沿岸一帯を總稱して向島と云ふ、而して其沿岸の土堤を隅田堤又は雅稱して墨堤と云へり。郊外の野趣頗る風致に富み春夏秋冬四時を通じて勝景都下に冠絶す武總兩國を界流する隅田川は主として荒川の下流、千住の大橋以下の稱にして、其最も景趣に富めるは、南葛飾郡隅田村附近の綾瀬川を合せ鐘ヶ淵以下、兩國附近に至る間に在り。此川古くは宮戸川とも稱し又淺草川とも云へり。往時在原業平が東に下りて都鳥を詠せしは此川にて名にし負はゞいざ言問はん都鳥

わが思ふ人ありやなしやとの詠は伊勢物語に記されて何人も知る所なり、此歌に因みて向島堤に言問團子店あり此地の名物として有名なり。

●三圍神社 (東京)

本所區向島小梅町に在り。即ち隅田川の東岸、墨堤下なる田圃に所在す。其鳥居は堤防に沿ふて建てられ、隅田の流を隔て遙かに對岸の待乳山に對す、風景頗る詩味あり。神社は倉稻魂命を祀る、俗に三圍稻荷と稱し帝都の一名勝とす、素と延命寺に屬し文和年間僧源慶の再興に係る明治五年改めて村社に列し、今此地の鎮

●靈巖寺 (東京)

深川區靈巖町に在り、道本山と號す、淨土宗の大伽藍にして十八檀林の一なり。寛永元年、僧靈巖の開基に係り、當初靈巖島を埋修して當寺を創建し萬治年間此地に移りたりと云ふ、境内堂塔數あり結構壯麗なり、又敎院を有す、昔時は寺領五十石を有したり。一説には、寛永年間薩摩上人(靈巖)大伽藍を江都に建立せんとし普く四衆を勸進して土一簣を運び來る者には悉く十念を授け又血脈を傳へて結縁せしめたるを以て不日にして廣汀一變して陸地となりたりと、今の靈巖島是れなりといふ。

●松平樂翁墓 (東京)

深川區靈巖町なる道本山靈巖寺境内に在り。樂翁は名を定信と稱す、樂翁は致仕後隱居しての號なり、寛政年間、八代將軍徳川吉宗を輔佐して政を執り、文武を奨勵し、行政を整理し、風紀を振肅し、又兼て外船の邊海を窺ふを警戒して沿岸防備を修め、自ら實地を踏査視察し、房總の沿岸に砲臺を築設せり。世に寛政の賢相として名聲噴々たり、樂翁又文藝を嗜み、和歌は最も長所にして、嘗て詠じたる心あてに見し夕顔の花散りて

尋ねぞ迷ふたそかれの宿
の一首最も世に喧傳されたるが、當時樂翁近衛權少將の位に在りしを以て、渾名を「たそかれの少將」と呼ばるゝに至れり。文政十二年五月十三日七十二歳を以て歿す。

●龜戸天神、太鼓橋 (東京)

南葛飾郡天神川の東、龜戸町に鎮座す。此地往時は海中の一堆洲にして其形龜に似たるより龜島と呼びたりしが、後、龜ヶ井と稱し、轉じて龜井戸と云ひ、次で井の字を除きて龜戸と稱するに至れり、神社は龜戸神社と稱し、又龜井戸天神とも云ひ、菅原道真を祀る、寛永年間筑紫太宰府天満宮の別當大島居信祐東下し幕府に請ひ、且つ自ら寂閑を経て神社を茲に造立せり、其社頭は太宰府の様式を模し飛梅の若木を境内に栽ゆ社殿の前に池あり藤棚を設け太鼓橋を架す、花期紫白妍を競ひ、池畔の亭上欄に倚て鯉魚の喰偶を數ふ、景致頗る佳趣あり。境内に頓宮明神の祠あり、老人夫婦の像を置き背後に青赤鬼此の老夫を縛して立てり、神社の東三町にして梅屋敷に至る有名なる臥龍梅あり、享保五年徳川吉宗社内連歌屋の附近に御茶屋を建て又臥龍梅を見て代繼梅と命名せり、神社の寶庫には後水尾天皇の御衣冠一箱を藏す、神祕にして他見を許さず、蓋し元祖の別當信祐に下賜されたるものなりと云ふ。

●堀切の菖蒲 (東京市外)

帝都郊外に於ける花菖蒲の勝地として知らる、南足立郡綾瀬村に在り、今東武鐵道の停車場を置く、園は小高、武藏の兩園あり共に多數の花菖蒲を栽培し、開花の期には紫白清麗、妍を競ひて美觀言ふべからず。同園の創始は審かならざれど近く七八十年以來に屬す、而も天保の末年頃には多數の高蒲、園内に咲き誇れりと傳へ、又安政三年の出版繪圖に「堀切村百姓伊左衛門(小高園)花菖蒲の名所なり」と記載せるを見たり明治維新の際松平家の花菖蒲を全部同園に譲り受け珍花異種益々多きを加へたりと云ふ。

●松陰神社 (東京市外)

荏原郡世田ヶ谷村大字若林に在り、即ち玉川電車の三軒茶屋停留場より西北約十五六町にして達す安政年間の志士吉田松陰を始め頼三樹三郎、小林民部少輔、綿貫次郎助、東原良藏等、國事に斃れたる志士の靈を祀る。此地徳川幕府時代には毛利家の抱地に屬せしを以て同藩志士の茲に葬らるゝも故なきにあらず。

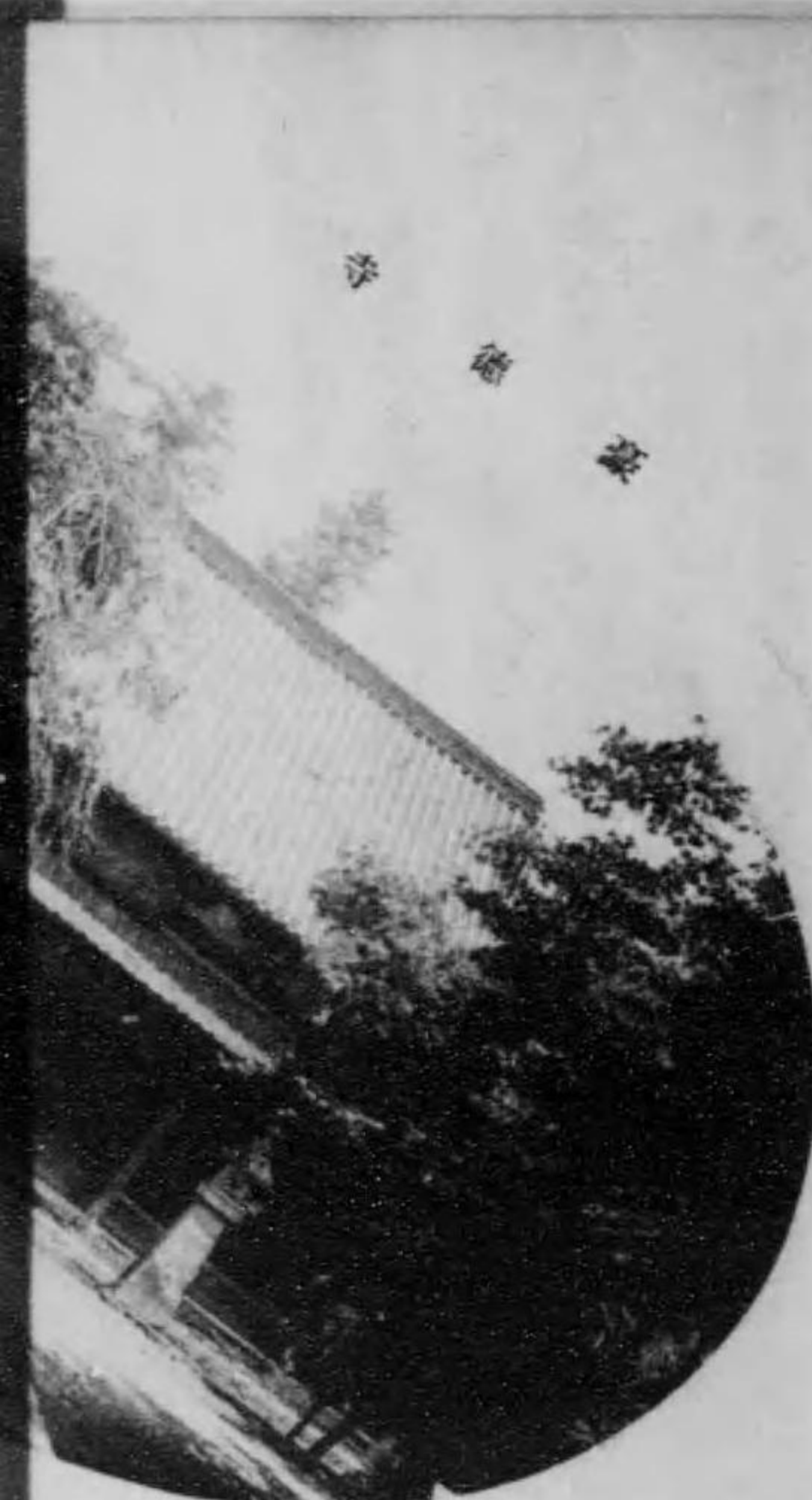
●豪徳寺 (東京市外)

吉田松陰、名は矩方、字は義卿、通稱は寅次郎、松陰と號す、又二十一回猛士の別號あり、長州萩の藩士なり、幼より英俊長するに及んで深沈大度あり、且つ古今の史書に通曉し最も兵法に精し、嘉永年間國家漸次多事を極め外船頻に我が邊疆を窺ふに及び、松陰深く時事に感ずるありて、九州に遊び還つて江戸に赴き更に總房の海岸を視察し、又奥羽北越を跋渉す、後、攘夷私議、急務條議等の書を著して攘夷の策を論ずる所あり、既にして佐久間象山の傑物たるを聞くに及んで往て意氣相投し肝膽相照す象山告ぐるに須らく海外に航して世界の狀勢を究めん事を以てす、偶米艦來て下田港に泊するあり松陰直に往て同乘渡米せんとす米艦拒みて容さず、而して松陰遂に幕吏の爲めに捕へられて獄に下る、幾もなく出獄を赦されて自家に禁錮せらる、是より先、藩士等松陰の學識氣節に服する者多く、其英風を欣慕して門に入るもの甚だ多し安政五年梅田雲濱頼三樹等諸國志士の攘夷を主張し往々激越の餘、幕府の方針に反し、倒幕の策顯れ、捕られて獄に下るもの多し、所謂これ安政の大獄なるものなり、松陰亦座せられて下獄せり、而も糾問の結果、雲濱等に共謀にあらざる事判明したるも松陰は、曩に幕府の専横を惡み、著はす所の時勢論を參議大原重徳に呈し又問部詮勝の暗殺を謀りし事

を堂々として自白し之が爲めに遂に安政六年十月廿七日死刑に處せらる享年廿九

荏原郡世田ヶ谷村大字世田ヶ谷に在り二子街道の北に方り、駒場を距る西方約一里なり。文明十二年世田ヶ谷の領主吉良政忠の開基に係り、昌譽禪師を以て開山とす、當寺は始め弘徳庵と稱したりしを、萬治年間、江州杵根の藩主伊井直孝之を中興して豪徳寺と改稱せり。禪宗にて本堂には釋迦三尊を安置し、其左方に遺佛場あり、堂後には客殿を設く、客殿の左方、鬱蒼たる松林中に吉良氏の古塋あり又寺門の傍に一丘陵存す、是れ即ち世田ヶ谷城にして吉良氏の古城址なりとす。寺傳に依れば當寺は吉良左京大夫政忠の伯母、頼高の女なる弘徳院久榮理椿大姉の爲めに、文明十二年創建する所にしり以來、總て殿宇堂閣の修繕を加へ、結構莊麗頗る盛觀を示すに至りたり。此の故に井伊掃部頭直孝を以て開基とすと云ふ。因に、直孝は萬治二年六月を以て卒す法名を久昌院殿豪徳天英居士と云ふ。

世田ヶ谷城は豪徳寺の傍なる小丘字竹の上に在り、一町許の地にして二重堀の形狀今尙殘れり、其内稍高き二ヶ所は構の跡なり、傍に一株の古櫻あり、御所櫻と云ふ、舊記を按ずるに、治部大輔治家始めて武州世田ヶ谷に居城し、後上州飽間に移住せり、治家は應永二十四年歿し、夫より六世を経て、左京亮成高尙茲に居城し、其子左兵衛佐頼康、頼康の子氏朝に至る迄此城に居りたるが如し、元來吉良家は足利家の嫡流にて、荏原郡菅刈庄世田ヶ谷郷を領したるが、其貫高は詳ならず。北條氏綱の時世田ヶ谷頼康を掣とし大に勢威を關東に振ひたるが、遂に滅びて、世田ヶ谷氏朝は上總國生實に遁れたりと云ふ

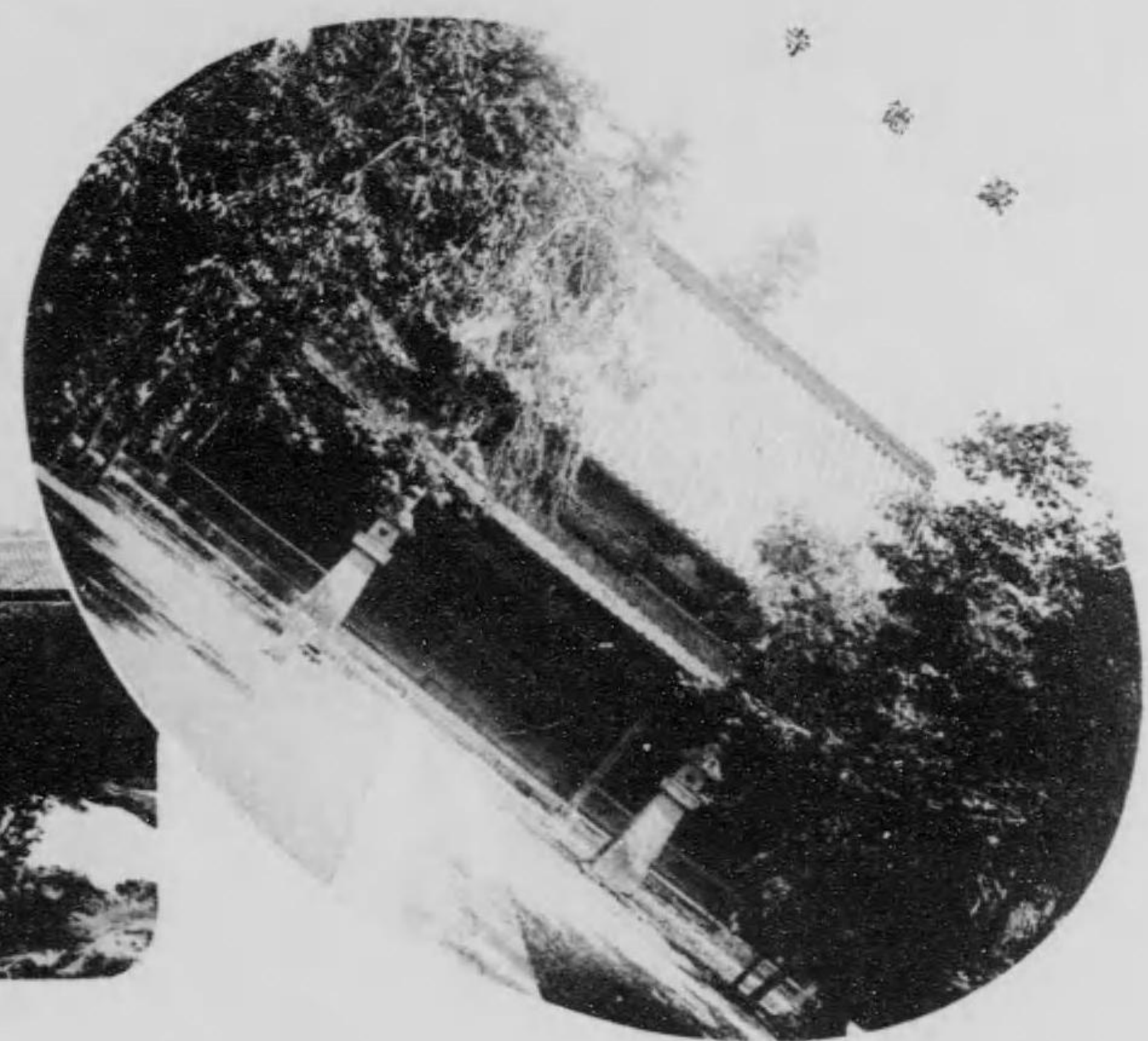


繪圖太田天戸井

園あり共に多数の花菖蒲を栽培し、開花の期には紫白清麗、妍を競ひて美観言ふべからず。同園の創始は審かならざれど近く七八十年以來に屬す、而も天保の末年頃には多数の菖蒲、園内に咲き誇れりと傳へ、又安政三年の出版繪圖に「堀切村百姓伊左衛門(小高園)花菖蒲の名所なり」と記載せるを見たり明治維新の際松平家の花菖蒲を全部同園に譲り受け珍花異種益々多きを加へたりと云ふ。

其英風を欣慕して門に入るもの甚だ多し安政五年梅田雲濱頼三樹等諸國志士の攘夷を主張し往々激越の餘、幕府の方針に反し、倒幕の策願れ、捕られて獄に下さるもの多し、所謂これ安政の大獄なるものなり、松陰亦座せられて下獄せり、而も糾問の結果、雲濱等に共謀にあらざる事判明したるも松陰は、曩に幕府の専横を惡み、著はす所の時勢論を參議大原重徳に呈し又間部詮勝の暗殺を謀りし事

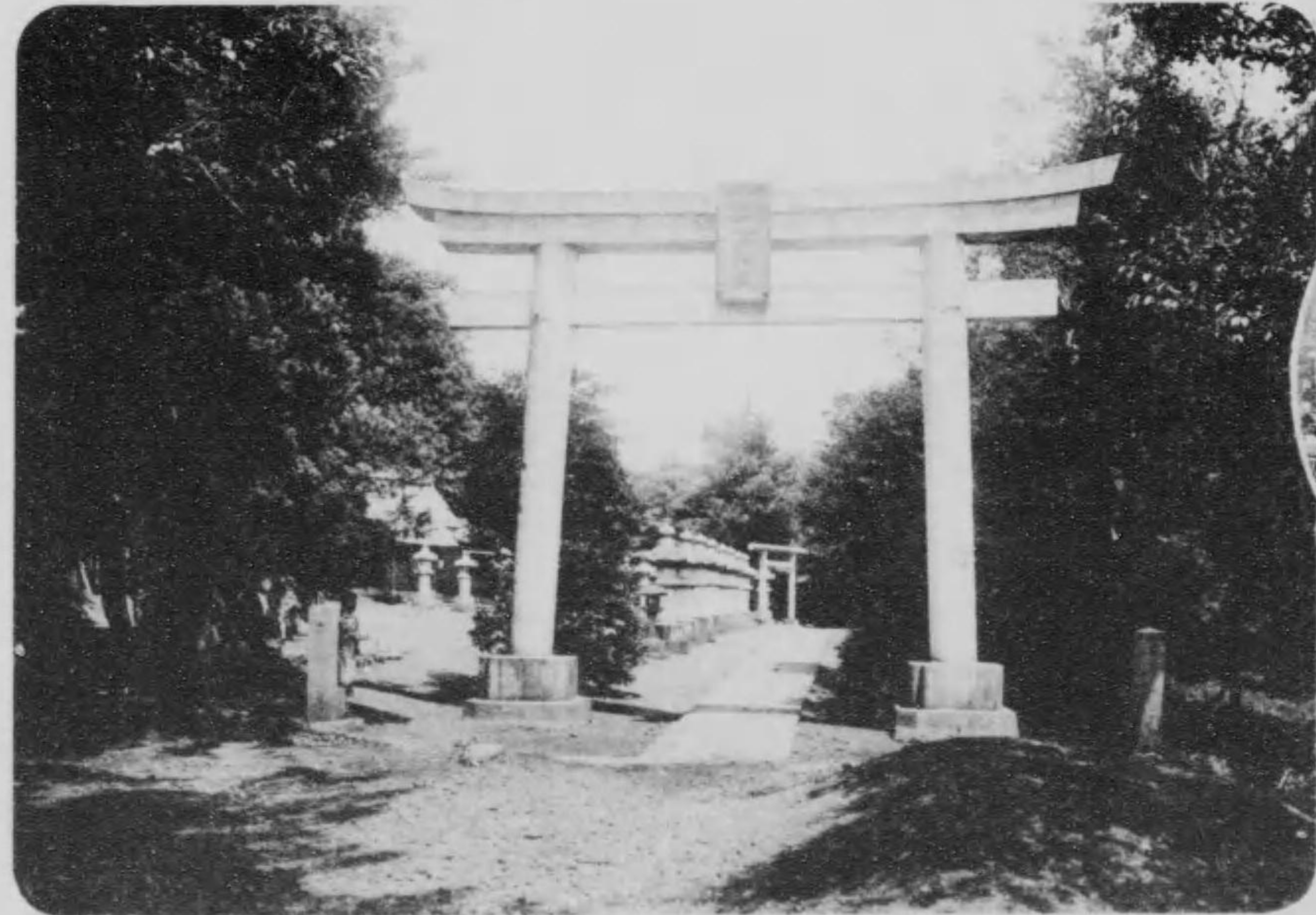
云ふ傳記を按ずるに、治部大輔治家始めて武州世ヶ谷に居城し、後上州鉦間に移住せり、治家は應永二十四年歿し、夫より六世を経て、左京氏成高尙茲に居城し、其子左兵衛佐頼康、頼康の子氏朝に至る迄此城に居りたるが如し、元來吉良家は足利家の嫡流にて、荏原郡菅刈庄世田ヶ郷を領したるが、其貫高は詳ならず。北條氏綱の時世田ヶ谷頼康を尊とし大に勢威を關東に振ひたるが、遂に滅びて、世田ヶ谷氏朝は上總國生實に遁れたり云ふ



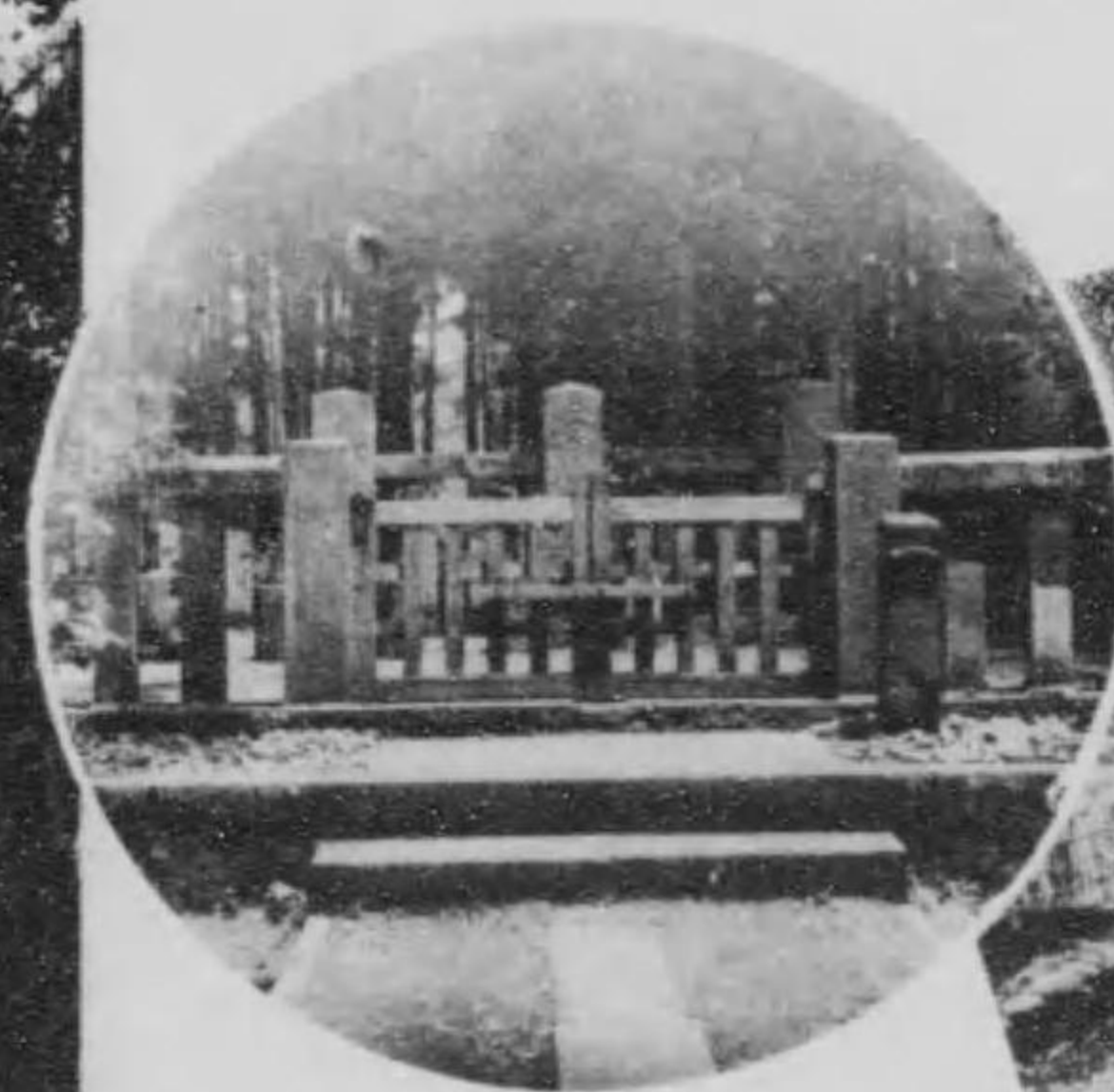
神天戸井龜



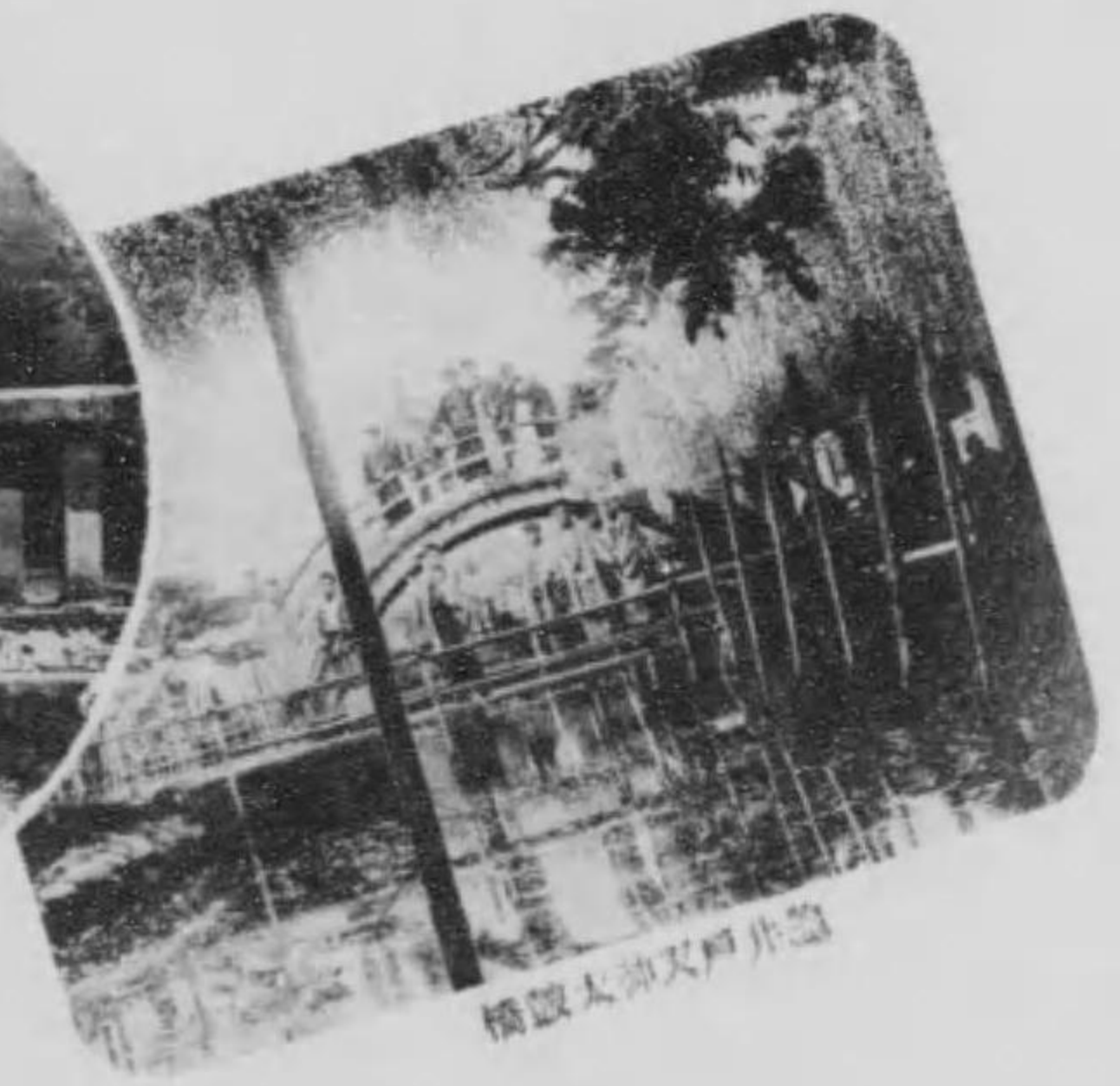
園菖蒲切堀



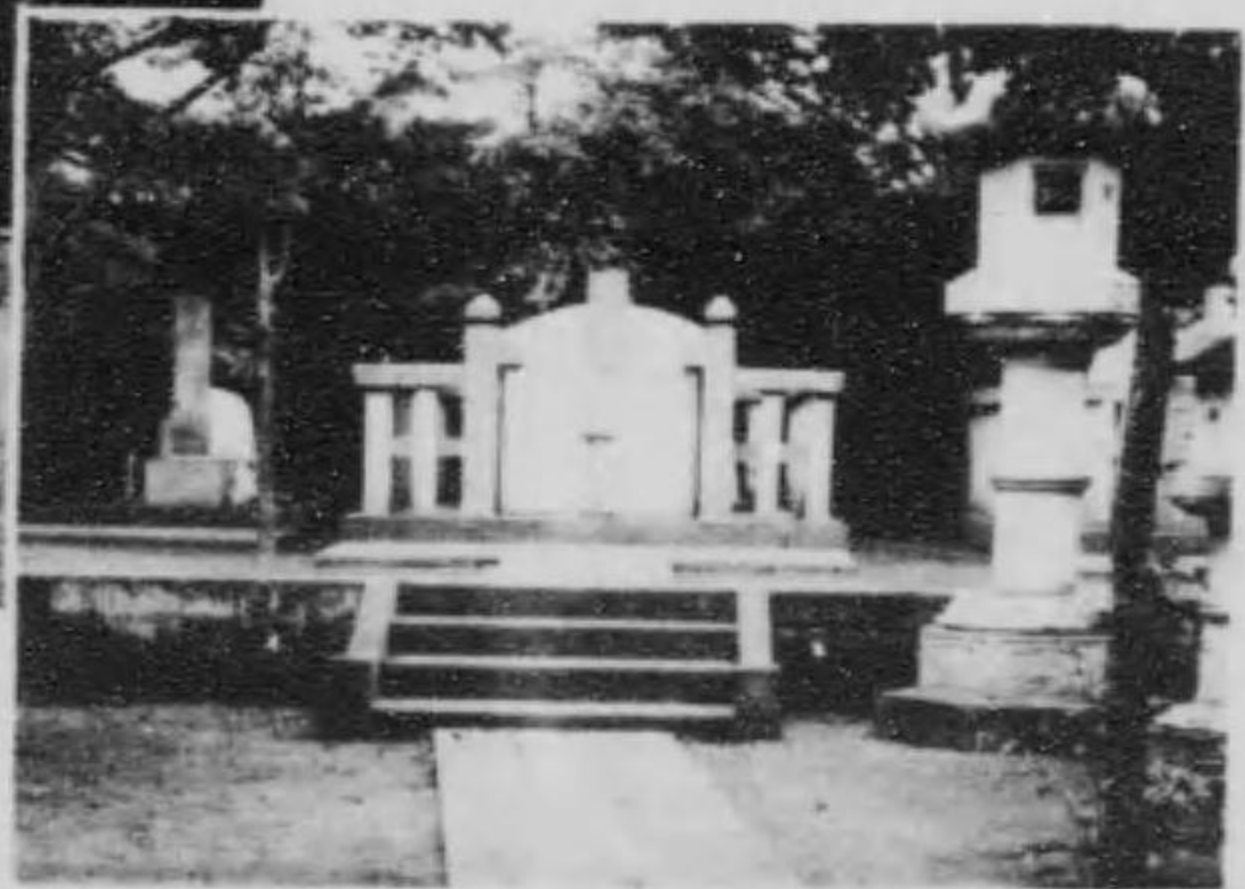
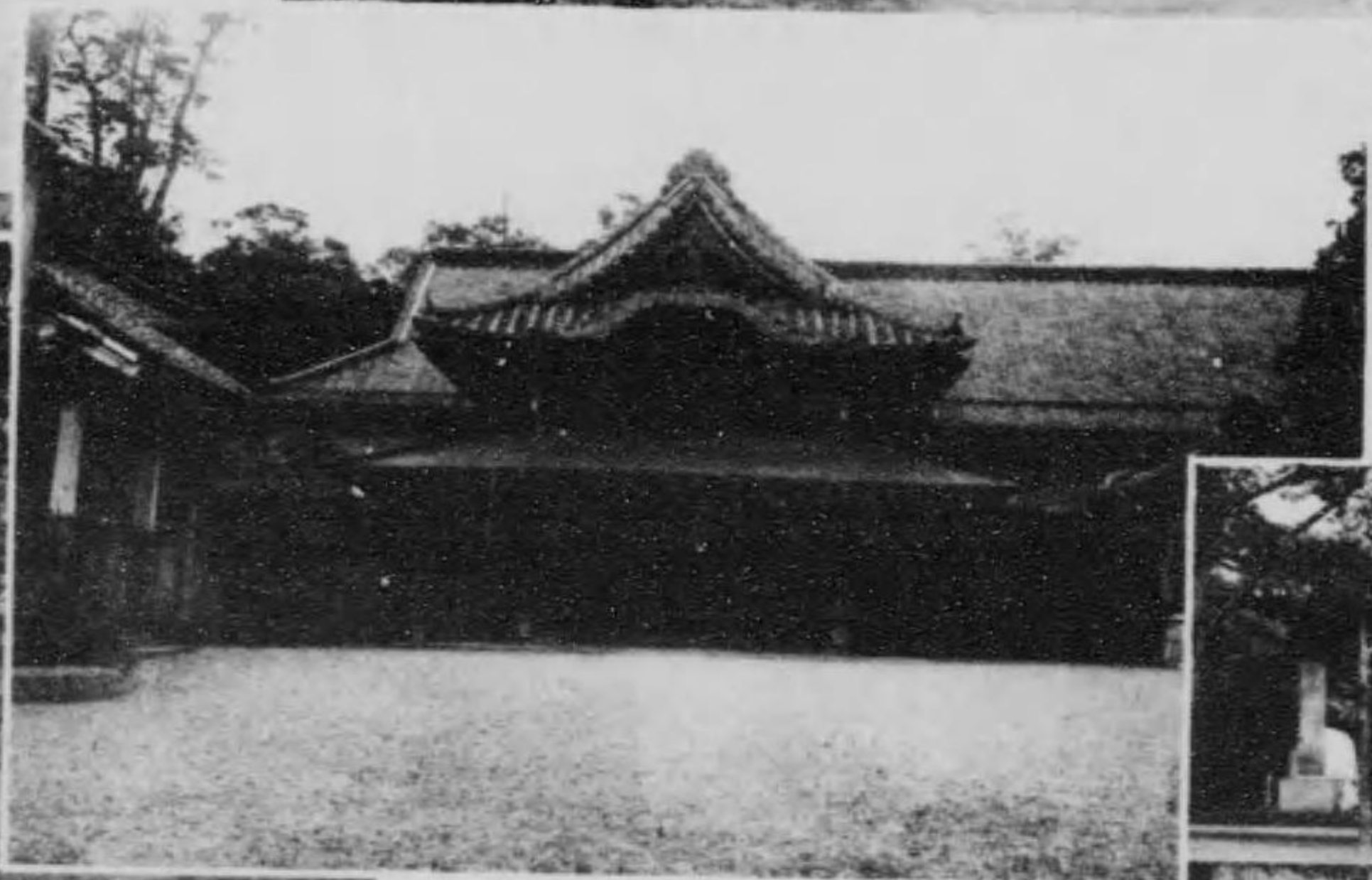
社神菴松



墓蔭松田吉



橋渡太田又戸井龜



墓 視 具 合 岩



山 殿 御 (下) 寺 禪 東 (中)

墓 師 禪 庵 澤



墓 翁 淵 眞 茂 加



寺 海 東

● 海晏寺 (東京)

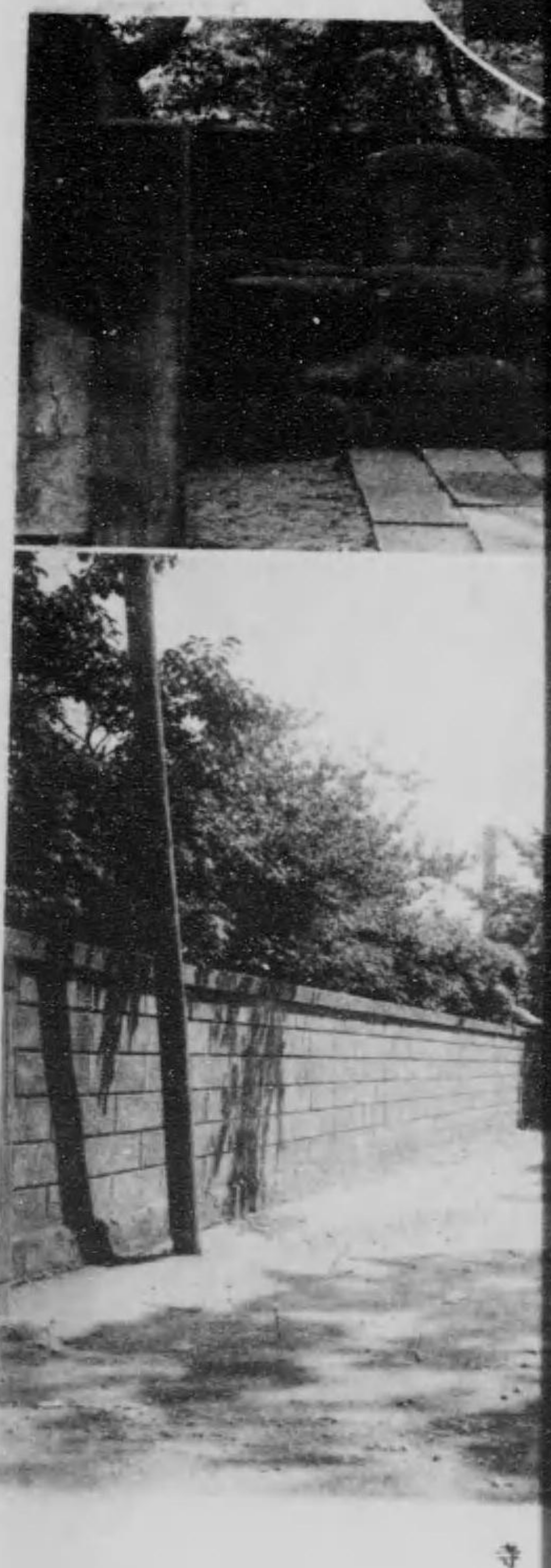
古來紅葉の名所たる海晏寺は、歐洲傳留所の西に在り、寺後の山に楓樹多く、其數五百株を超ゆ、元祿以後時の詩人墨客等紅葉期には、此寺に集まりて雅筵を開き、又遊散の者も秋毎に簇りしが、維新の後其樹漸く枯れ朽ちたるを、松平春岳岩倉具視と相謀りて新たに楓樹を栽え

靈塔を有し墳域亦頗る廣潤なりしも、今は漸く衰頽し、小堀遠州の工計に成りしと傳へられたる庭園の竹木も、尋常一様の民家に入り、唯だ不斷の梵唄と鳴る松籟の昔を偲ぶあるのみ、今ま存する本堂は元の春雨庵にして、曾て紫野大徳寺に在りし紀州根來寺の釋尊及文珠普賢の像を安置し、後尾天皇宸筆「寂然」の額を掲

を造るべからずと、即ち遺命によりて諸夕師の屍を此處に瘞めて上に圓石を載置たるなり、和尚自ら作り創めたる澤庵園の重石に因みしなりと言ふ、和尚の遷化したるは十二月十一日なれば、毎年此日を以て澤庵忌を修すと、珍なる哉黒衣僧相の墳墓、彼れは斯くして此地下に眠る。

● 加茂眞淵墓 (東京)

岳岩倉具視と相謀りて新たに楓樹を栽え



●海晏寺 (東京)

古來紅葉の名所たる海晏寺は、畿洲傳留所の西に在り、寺後の山に楓樹多く、其數五百株を超ゆ、元祿以後時の詩人墨客等紅葉期には、此寺に集まりて雅筵を開き、又遊散の者も秋毎に簇りしが、維新の後其樹漸く枯れ朽ちたるを、松平春岳岩倉具視と相謀りて新たに楓樹を栽え挿へたれば、旋で昔時の觀を爲すに至れり、此寺の本尊正觀音像に就て傳説あり、後深草天皇の御宇建長三年五月七日夜、一尾の大鮫漁夫の網に罹りて濱邊に揚りたるを、其腹を割きて圖らずも正觀音像を得たり、此事鎌倉幕府に聞へ時の執權北條時頼、稀代の瑞祥として此に精舎を建立し、正觀音を木尊と爲さしめ、四海平安の義に採りて「海晏寺」と名け、大覺禪師を以て開山と爲し、地名も鮫洲とせるなりと、門前にある「最明寺殿覺了房遺崇」の石塔は則ち時頼の供養塔なり、徳川氏の時は寺領豊かに境域亦廣かりしも、數回の炎上に逢ひて堂宇太く廢頽し、明治九年の炎上後は僅かに今の假本堂のみとなれり、然れ共今猶紅葉の名所として現はれ、前面に海光一碧瑠璃を展べて層を照すの勝景を控へ、百五十年來の老舖たる川崎屋と共に其名高し。

●岩倉具視墓 (東京)

贈太政大臣從一位岩倉具視の墓は、海晏寺境内紅葉山の丘上に在り、墓門深く鎖して、中に恩賜の青銅燈籠二基立つ、是れ鎔金の巨匠岡崎雪聲の謹製に係る。

●東海禪寺 (東京)

黒衣宰相と稱されたる澤庵和尚を開創とする東海禪寺は、北品川にあり即ち北馬場停留場より約五町を隔つ。

昔は江戸觸頭の禪林にして、十七字の

【武 慶】

堂塔を有し墳域亦頗る廣濶なりしも、今は漸く衰頽し、小堀遠州の工計に成りしと傳へられたる庭園の竹木も、尋常一様の民家に入り、唯だ不斷の梵唄と鳴る松籟の昔を偲ぶのみ、今も存する本堂は元の春雨庵にして、曾て紫野大徳寺に在りし紀州根來寺の釋尊及文珠普賢の像を安置し、後尾天皇宸筆「寂然」の額を掲げ、又開祖澤庵和尚の畫工に命じて一圓相を繪かしめ、親ら筆を執りて一點を其中に加へ上に梵語を記し「是れ吾が壽像なり」と言へる一幅を掲ぐ、元山門に掲げたる公辯法親王の親筆「潮音閣」三大字の額は、今も方丈の廂間に掲げらる、經堂には運慶作と傳へし十六羅漢を藏す金粉剝落せるも尙舊時の莊嚴を保つ、紫龍井は方丈前に存して水潤ることなし、加藤清正の朝鮮より齎らし歸れる鼓の石も亦庭園に保存せらる。

●澤庵和尚墓 (東京)

墓は東海禪寺境内の山上に在り。此墓は一般のものとは異り、二間四方の石垣を結び繞らし、中に墓標として唯だ大なる圓石を置きたるのみ、石には一個の文字さへ彫らず、苔の蒸すに隠せ、落葉の埋むに任す、澤庵和尚病みて死期漸く近づきし時、衆僧枕邊に集まり辭世の偈を乞ふ、和尚頷として應せず、其再三乞はるゝに及んで、筆を採りて「夢」の一

字を大書し、筆を擲げて悠揚として遷化せりと傳ふ、和尚又遺言して、吾れ死せば亡骸を山に瘞めて唯だ土を掩けてのみ置け、經を讀むな、石塔を建つるな、木牌

を造るべからずと、即ち遺命によりて墓夕師の屍を此處に瘞めて上に圓石を載せたるなり、和尚自ら作り創めたる澤庵墓の重石に因みしなりと言ふ、和尚の遷化したるは十二月十一日なれば、毎年此日を以て澤庵忌を修すと、珍なる哉黒衣宰相の墳墓、彼れは斯くして此地下に眠る。

●加茂眞淵墓 (東京)

國學の大家加茂眞淵墓は亦是れ東海禪寺の境内に在り、墓前に石の華表ありて、八角形の石を以て墓標とす、眞淵生前頗る澤庵和尚の徳を慕ひ、遺言して此處に葬らしむ、眞淵は通稱岡部衛士、縣井と號す、遠州加茂神社の祠官定信の子なり、其著數十種悉く後進を益す明治三十八年正三位を贈らる、本居宣長は實に眞淵の門より出づ。

●御殿山 (東京)

御殿山は品川歩行新宿の西に在り。昔時は櫻樹此丘阜に満ちて、飛鳥山と南北其勝を齊うしたれ共、鐵道線路敷設以來大に其舊容を變じ、櫻樹の大なるものは大抵伐採せらる、或は傳ふ此地は本田道灌の館址なりと、今は個人の私有地に歸し、其名高くして、其實之れに伴はざるなり。

●東禪寺 (東京)

東禪寺は下高輪町にあり、佛日山と號す、地は泉岳寺の南に當る、妙心寺派の禪刹にして、曾ては江戸四箇寺の一なりき開山は領南和尚なり、慶長の初め赤坂靈南坂に創建し、寛永年中此地に移る、境内に伊達家の墳墓及び原田甲斐の墓あり、幕末時代外人互宿寺の一に充てられ、文久元年浪士亂入して外人の膽を驚かしむ、今猶鴨居に刀痕の跡を残す。因に高輪の地は中古高輪原と稱す。

●伊藤公爵墓 (東京市外)

伊藤公爵墓は市外荏原郡六本町大字谷... 是れ明治の元勳、國家の柱石たる伊藤公爵を葬れる所なり。伊藤公遺體當時を追憶すれば明治四十二年十月廿六日、公は哈爾濱に於て露國大藏大臣コ、ウヅフと會見すべく長春を發せり、此日雲低く四野に垂れ、朔風寒く雪を吹く、其哈爾濱驛に着せるは午前十時、盛んなる歡迎裡に、公はコ大藏大臣と相携へて兵を閲したる時、韓人安某の狙撃する所となり、身に三丸を受けたれど、顔の色さへ變へず、徐かに葉巻を棄て、自ら歩みて車内に入り榻上に横へて、刺客は韓人なりしと從官の告ぐるを聞き「おろかなる男よ」と唯だ一語を發して、終焉として薨去せり、遺骸は軍艦秋津洲に載せられて十一月一日朝横須賀に著し、柩車新橋より靈南坂の官邸に入る、先是 靈上には哈爾濱の兇報を聴し召され、大に宸悼させ給ふ、而して公の功績に對して特に國葬すべき事を仰せ出さる、是に於てか十一月四日を期し莊嚴なる國葬の式は日比谷公園に執行せられたり、秋雨人の袂を濡して滿都聲を呑み、各國元首の贈りたる花環の飾りし靈柩は、徐かに谷垂の此壁域に移されて、公の毅魄は永へに留まれば、嗚呼伊藤博文公の死は寔に國家的大意味を含めるものと謂ふべし之を他の政權爭奪を急ぐ者、若くは私慾を逞ふする者が、私憤或は公憤よりして狙撃せらるゝものと同視すべからず、公は上、誠忠を盡し、下に誠意を致すの外、何等野心なく、陰謀なく、譎詐なく、唯だ夫れ自己の本分を盡せる大政治家たりしなり、墓前に禮するもの、少なくも公の大人格を知らざるべからず公は寔に大政治家たる野典型にして、而かも亦として崇敬すべき値ある事は何人も同する所ならん。

●大森の風景 (東京市外)

草かけの荒蕪の崎の笠島を 見つゝや君が山路こゆらむ 是れ萬葉集に見ゆる古歌なるが、此荒蕪の崎の笠島とは、今の鈴が森の邊を眺めるならん、往昔にありては八景坂の下まで海にして、鈴が森一帯の地は洲渚なりしなるべし、長汀曲浦、蟹莊蟹舍の風光は此古歌に溢れたり、桑田碧海の譬に洩れず、潮退き砂乾きて、田となり島となり今は其田も埋められて、稻紳の別業年毎に數を増し、官吏會社員等部の風塵を厭ひ郊外生活を愛するもの、亦四邊に家をトして、品川以南唯一の別天地となれり、海に臨める地なれば風光亦洵すべし、品川鮫洲濱川鈴が森より大森羽田一帯の海濱は、水、清澄ならざるも、海面の眺麗に至りては誇るに足るべきもの多し、四時其景を異にし就中夏季に入れば納涼臺は海岸に設備せられ、夜の海面漁火點綴する所、小舟徐かに徂徠し、遠く款乃の聲聞え、近く靜波の岸を打つを聴く、斜めに右方を眺むれば穴守羽田の榿々に點する電燈幾百千の光景は、宛然層樓の浮べるが如き觀あり、若夫れ中秋の明月海波を照す時の如きは、鎌倉江之島の夜景も及ばず、此地に於て眺望に富める名所は、入景園「なりしも、今は服部某の別業となり嚴重なる橋を爲すに至り、名所園八景は自然的に消滅せるは、大森の爲め又公衆の爲めに惜むべき事なり。

●川崎大師 (東京市外)

川崎大師を以て名ある平間寺は川崎町の東端にあり、電車六舞河畔の分岐點より分れ、川に沿ひて東の走り車の停まる所乃ち平間寺なり、電車路の兩側約一里の間は、幾千の櫻樹枝を交へて春は正しく花の隧道、樹々の間に六舞の川を眺め

て一帯の櫻雲碧流と相映じ、江甯隨一の名勝なり、沿道の村々は又桃の名所と稱せらる、東風江を渡りてより、梅に櫻に又桃に春往く頃の梨花まで、二十四番の春色は盡くる事なし。

平間寺の縁起に依れば、昔、八幡太郎義家の麾下平間兼豐同兼乘と言ふ父子の武士あり、前九年後三年の役に従ひ、功ありて尾張の邑を賜ひたれど、讒言されて知行を召上げられ、關東に流浪して六舞川の邊に隠れ日頃信する弘法大師を信念し復歸の恩命を待つ中に父兼豐は歿し、兼乘獨り残りて四十二の厄年を迎へ、或日舟を海に浮べて網を卸せるに、長らく潮に浸りし大師の木像を得たり、後、大治三年高野山の大德尊賢和尚此地に遊化して兼乘の家に宿り、遂に力を合せて天承元年一寺を建つ、是れ今の平間寺の前身なりと、其殿堂の莊麗なる庭園の瀟灑なる到底筆すべからず、賽者亦頗る多し。

●總持寺 (東京市外)

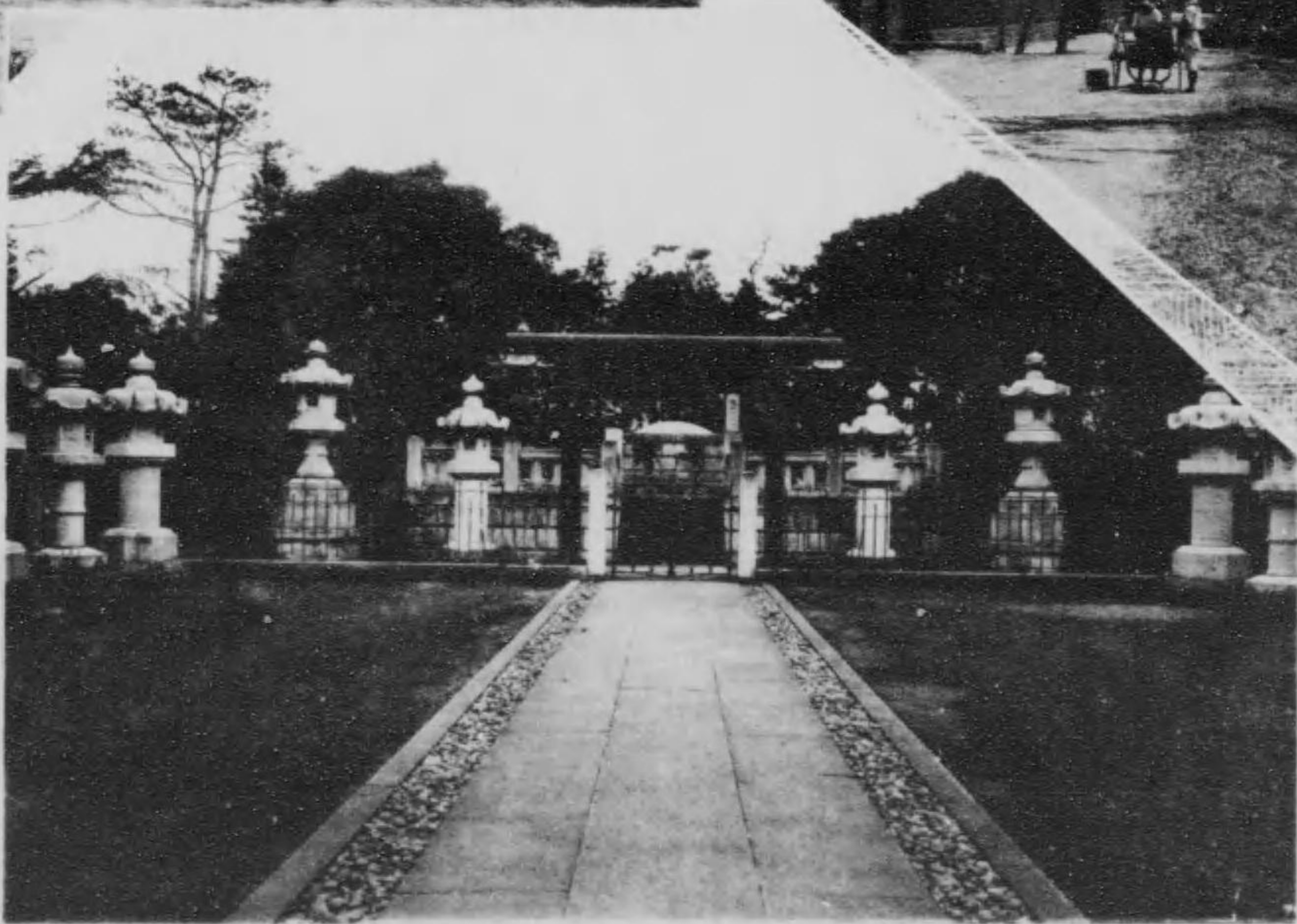
鶴見の地は京濱間に於ける勝區なり、其西方の高丘二見臺より右顧左眄すれば北に遙かに烟霞の中に帝都を望み、東京灣は脚下に一大淨玻璃の鏡を開いて、翠黛之を繞りて環の合はざるが如し、右には富嶽の晴雪亦遙かに眉を照し、左には筑波の峭峰袖にありて風光寔に佳絶なり此山近くに曹洞宗大本山總持寺あり。總持寺は能登國鳳至郡楯比村にありて諸嶽山諸嶽寺と稱し行基僧正の開基に傳る古刹なり、寺記を按ずるまでもなく、醍醐天皇の御宇元亨元年。時の住持定賢律師深く靈山紹運禪師の徳に服し、寺を擧げて禪師に譲りたれば、名を諸嶽山總持寺と改む明治三十一年四月法堂より火を失して、一山の堂塔炎上し海内無雙と聞えたる大伽藍は燒燼せしも今や此に繼りて大建築成り亦舊觀を凌ぐの概あり。



總 持 寺



川 崎 大 師



伊 藤 博 文 墓

「る」と同一視すべからず、公は上、
「賊忠を盡し、下に誠意を致すの外、何等野
心なく、陰謀なく、譎詐なく、唯だ夫れ自
己の本分を盡せる大政治家たりしなり、
墓前に禮するもの、少なくも公の大人格
を知らざるべからず公は寔に大政治家な
る好典型にして、而かも亦として崇敬す
べき値ある事は何人も同する所ならん。

●川崎大師（東京市外）

川崎大師を以て名ある平間寺は川崎町
の東端にあり、電車六郷河畔の分岐點よ
り分れ、川に沿ひて東の走り車の停まる
所乃ち平間寺なり、電車路の兩側約一里
の間は、幾千の櫻樹枝を交へて春は正し
く花の隧道、樹々の間に六郷の川を眺め

諸嶽山諸嶽寺と稱し行基僧正の開基に傳
る古刹なり、寺記を按ずるまでもなく、
醍醐天皇の御宇元亨元年。時の住持定賢
律師深く盛山紹瑾禪師の徳に服し、寺を
擧げて禪師に譲りたれば、名を諸嶽山總
持寺と改む明治三十一年四月法堂より火
を失して、一山の堂塔炎上し海内無雙と
聞えたる大伽藍は燒燼せしも今や此に屬
りて大建築成り亦舊觀を凌ぐの概あり。

日蓮上人廟

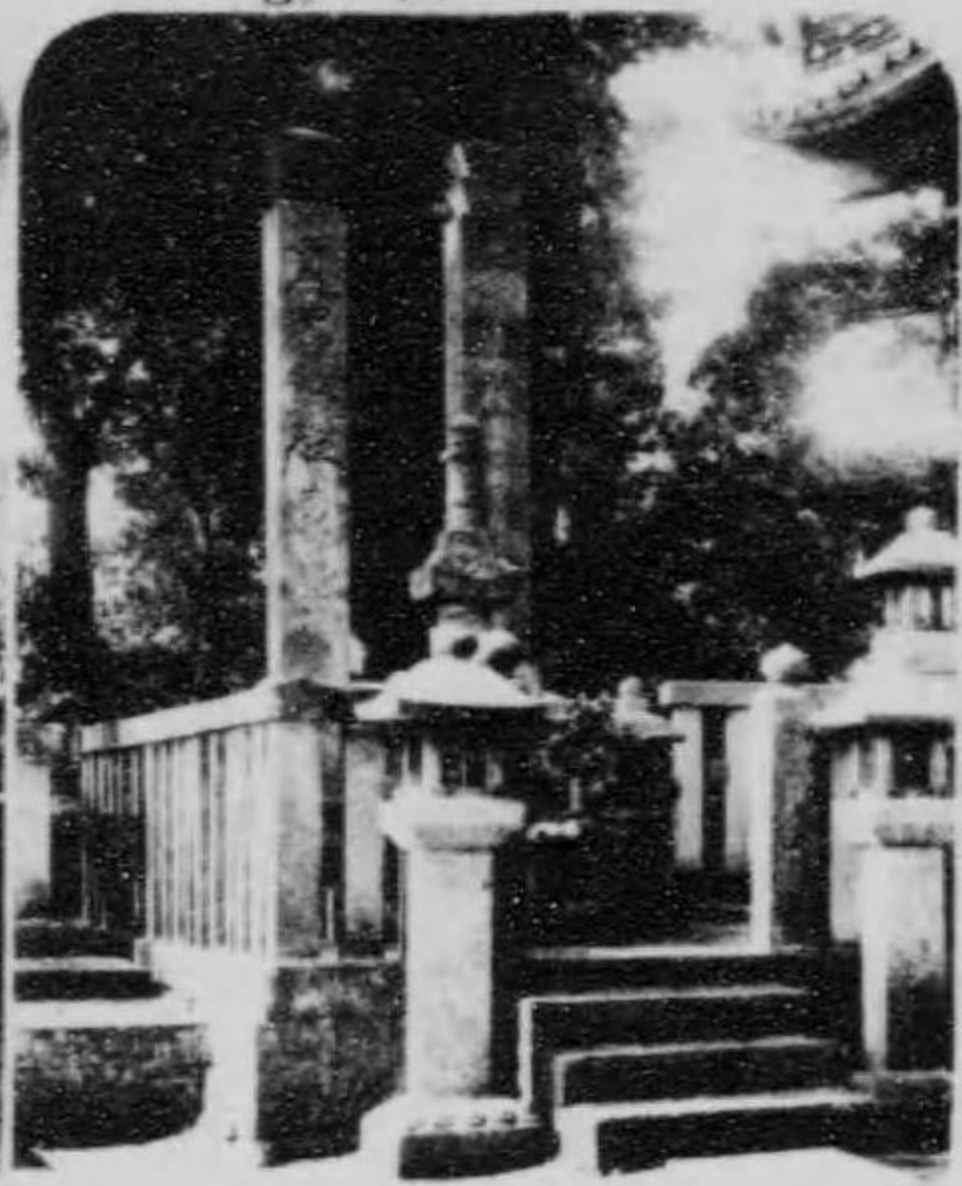


星亭墓

日野元信及探幽墓



日朗上人墓



日輪上人墓



●池上本門寺 (東京市外)

日蓮終焉の靈蹟として將又日蓮宗一本山としての本門寺は、荏原郡池上村大字下池上に在り、東京を距る二里、大森驛より徒歩すること二十町弱にして本山の總門に達す文永年間鎌倉將軍惟康親王の臣池上右衛門宗仲深く日蓮の高徳に歸依

氣に打たる。總ての建造物は勿論日蓮靈蹟として存するもの、悉く是れ當年の舊を語るものなり。

●本門寺の靈蹟 (東京市外)

靈蹟と共に特に記すべき二三の建物は祖師堂、釋迦堂、輪藏、清正堂、鐘樓等なり、祖師堂は樓門を入りて正面にあり、

鐘樓は清正堂の左方にあり、徑五尺、寸二分厚七寸八分の古鐘を懸ぐ。鐘銘は「鴻鐘清韻、聲遍大千、六時覺、覺長夜眠、集僧羯磨、念誦安禪、彌俗生信、觀無常緣、百八徹耳、轉識顯然、說聽靈意、但開心蓮、上降天魔。下救懸倒、銅鐘盛德、不變蒼天」とあり。此他五重塔、鼓樓等の堂宇多し、松化

池上本門寺



●池上本門寺 (東京市外)

日蓮終焉の靈蹟として將又日蓮宗一本山としての本門寺は、荏原郡池上村大字下池上に在り、東京を距る二里、大森驛より徒歩すること二十町弱にして本山の總門に達す文永年間鎌倉將軍惟康親王の臣池上右衛門宗仲深く日蓮の高徳に歸依し、此に巨刹を建つ、工成るや日蓮之に長桑山本門寺と命名し、特に大曼荼羅を圖す即ち現今の境域六萬九千三百八十餘坪も宗仲の寄附に係る。

後、關白二條昭實の猶子入りて十二世の住職となり名を日幢と言ふ、天正年間參内を命せられ紫衣の勅許あり、徳川家康亦日蓮宗に歸依し、慶長三年二に寺領として百石の朱印を附す、爾後代々の將軍之を例とせり、又特旨を以て府内に末寺六ヶ寺の新設を許さる、二代將軍秀忠の如きは其乳母の爲めに山門及五重塔を建設したり、今猶現存す、而して肥後國主加藤清正篤く本化の教義を信じて、是又慶長年間自ら木材及費用を寄附して四十四間四面の祖師堂を再建し、以て大堂と稱せしむ、廿四世日等廿五世日頗の二世に亘りて八代將軍吉宗の寄附を得、現今の釋迦堂祖師堂等を再建す、日等は伏見親王の猶子にして特に參内を命せられ是より永代紫衣の勅を受け、爾來幕府登城の節は、乘輿獨々禮白書院關内二疊目の禮席に列れり、是より本門寺住職、更代の節は代々伏見親王の猶子となり、幕府白書院老中列席の前に於て往職拜命の式を行へりと、是れ本門寺沿革の一端なりと雖も、以て當年の寺格待遇の一斑を知るに足るべし。

本門寺境内は荏原郡内丘陵の最南端に位し高さ直立五丈餘周圍數十町、森林蒼鬱として風致秀拔なり、一世の高僧日蓮躬焉の靈蹟と思へば、言ふべからざる靈

【武藏】

氣に打たる。總ての建造物は勿論日蓮靈蹟として存するもの、悉く是れ當年の舊を語るものなり。

●本門寺の靈蹟 (東京市外)

靈蹟と共に特に記すべき二三の建物は祖師堂、釋迦堂、輪藏、清正堂、鐘樓等なり、祖師堂は樓門を入りて正面にあり、間口十三間、奥行十三間、地百六十九坪、正面宮殿の中には高祖日蓮上人の像東西の脇壇に日明日輪兩師の像を安置す、此堂は文永十一年池上宗仲の草創に係り、後、加藤清正再建を爲せること上記の如し、寶永七年十月火を失して焼燼し、享保八年に及んで八代將軍吉宗の喜捨により現在の堂を建立せり、更に明治二十年を以て大修繕を加へ堂宇益々莊嚴を極め其額聯「日耀東方風長佛九界光雲」「天晴南海禪月恒涵三觀光水」は筆力雄健、字々躍如たり、是れ當山第六十日運和尚の筆なり堂内安置の高祖像は一木三體の傑作と稱さる弘安五年十月日法和尙竊かに障子を隔て、此像を刻みつゝありしに、高祖曰く、我像を刻むは好し、我目前に於てすべしと、乃ち其命の如すく高祖見て實に驚毫も違はざる生身の形也と激賞す後、高祖入寂の時頭骨を二つに分ち、一分を此像の中に藏め一分を身延山へ送れりと言ふ、故に此像は骨に傑作のみにあらずして由緒ある靈像と稱す。

釋迦堂は祖師堂の左側にあり、運慶作に係る一尊四菩薩四天王像を安置す、正面に伏見親王筆「釋王殿」の額を掲げ、六牙潮師筆「一聖四賢法恩儼然虛空會道場」安國論師雙樹地千枝萬葉永流芳の聯額を左右に掲ぐ、又狩野隆信の揮毫に係る雲龍は天井に雄飛して、風雨を呼ぶに似たり、一切經及傳大士普成普建の像を藏する輪藏、清正像を安置する清正堂は釋迦堂の前後に相分れて建つ。

鐘樓は清正堂の左方にあり、徑五尺、高寸二分厚七寸八分の古鐘を懸ぐ。

鐘銘は「鴻鐘清韻、聲遍大千、六時警告、覺長夜眠、集僧羯磨、念誦安禪、勸俗生信、觀無常緣、百八徹耳、轉識顯然、說聽熏意、但開心蓮、上降天魔。下救懸倒、銅鐘盛德、不變蒼天」とあり。

此他五重塔、鼓樓等の堂宇多し、松化石は祖師堂前の老松下にあり、下乘楓は經藏の前にありて、高祖日蓮の眞骨は眞骨堂に安置せられ、御視井は祖師堂の左方に柵を設けて保存す、是れ高祖大曼荼羅を圖する時に用ゐたる淨水なりと、會式櫻は高祖入寂の弘安五年十月十三日櫻花爛熳として咲き亂る、爾後毎年の會式に於て時を違はず花咲くが故に會式櫻と名くと、他に靈蹟少なからず。

●狩野一門の墓 (東京市外)

本門寺は狩野家代々の菩提所にして其墓地を存す、墓碑亦相並んで立てる中に元信及探幽の墓碑最も人目を惹く、即ち古法眼元信は永祿二年二月六日此に葬られ、探幽齋守信は延寶二年十月七日を以て葬らる、老杉蔭暗き處、碑面蒼然して、刻せる文字容易に讀むを得ず。

●星亨の墓 (東京市外)

政界の明星として其名を天下に轟きたる星亨も、會ま伊庭某の刺す所となり、幽明境を異にし、本門寺境域に埋葬せれてより既に十有餘年、政變ある毎に彼れの剛腹果斷は一般の追憶を新たにす、然り彼れの剛腹果斷は他の企及し得ざる所而して彼れは立憲政治の大基礎を固ふすべく、自己を去つて公に貢獻せる大人物たりき、是に於てか彼れの墓には詣者多く、常に香煙絶へず。

墓は祖師堂を相去る數歩の左方小丘にあり。

●横濱本牧岬 (武蔵)

横濱は舊本牧領の一部にして、正保年
に於て石川村と稱せるが今は本牧村を市
に編入して、本郷北方の二大字に分つ、本
牧の地は山手の南に接して丘岡に倚り、
地勢東方の海中に突出し三海面を以て限
る、北は横濱港にして、南は屏風浦根岸海
峯、其岬角を十二天鼻と言ふ、又南方へ
突出せる断崖を八王子鼻と呼び、總稱し
て本牧岬の名あり、嘉永七年此海上成術
の任に當れる小原鐵心の時に「孤客鞍頭
感慨催。海門落日晚潮回。誰知一片武夫
骨。成寒秋寒本牧岬」と見ゆ。

水路志に曰く

本牧鼻は横濱港の南角を成し、觀音崎
の約北微四十海里半にありて、東京灣
奥に向つて蜿蜒せる低小山脈の端界な
り、此鼻は著名なる黄色の諸崖長く相
連る、而して其北峻壁を十二天鼻と稱
し、南峻壁を八王子鼻と言ふ、此鼻の前
面一海里乃至六鐘間に、伸出する所の
堆あり、荒洲と言ふ、頗る陡界にして、
大浪を横濱に吹き送るべき偏南東の勢
力を殺ぎ、港内の錨泊を安全にす。

是によりて觀るも本牧岬は横濱港の唯
一屏障たることを知るべし、其十二天鼻
八王子鼻の名は共に神祠の名に出づ、乃
ち本牧の總鎮守社として古來名あるもの
に十二天社あり、八王子祠あるなり、殊に
十二天社の南北崖岸は、水路志の記する
如く黄色峻壁なれば、社頭より之を望む
時は、實に言ふべからざる奇觀たり、峻壁
黄色にして既に奇觀たるに加へて、渺茫
たる海面大船小舟を迎送する其光景亦畫
も及ばざるなり、本牧の絶勝は此處の如
にあらざして、之に至らんとするまで亦
名所と言ひ勝景と稱すべきもの甚だ多し

園は横濱市の郊外本牧字三溪にあり。
其地積六萬坪餘、天然の風光地に富豪の
力を以て總ゆる設備を施したれば、一大
公園を凌ぐの概あり、是れ紳商原富太郎
の別業にして、而も亦一般の爲めに公開
する横濱市唯一の大遊園地たり。

園には密林あり清流あり、殿舎あり、堂
塔あり茶亭あれば又神祠あり殿舎として
は豊太閤の聚樂邸一部を移せる古建造物
あり、是れ千利休の意匠に成りしもの、文
祿四年桃山城中に移され、後、聚樂邸取毀
ちの際二代將軍徳川秀忠之を紀州侯に賜
ひ、侯より更に泉州堺の長者飯野左太夫
に與へ、大阪春日出新田なる同人別業に
建てられ、百五十年を経て清海某の有に
歸し、明治三十九年に原家の有に移れる
なり、而して古式莊嚴なる太神宮神殿は
元江戸十人衆たりし河本近更が其所有の
製絲場内に奉祀し、自己の崇敬を亦多數
勞働者にも移し敬神愛國の大思想を涵養
せんとせるもの、該製絲場の原家に移る
や、之を此園に移し前奉祀者の意を繼ぎ
崇敬すると共に一般に奉祀者の素志を傳
ふべく計れるなり、他に河本家の有たり
し「三百有餘年の古建造物」寒月庵なる茶
亭あり曾てブランド將軍日光遊覽の途次
河本家の有せる朽木縣大晴製絲場を訪ね
此茶亭寒月庵に於て晝餐せり、神殿は他
に楠公社あり、此社は建武元年楠木正成
の建立に係り河内國觀心寺境内に在りし
午頭明王祠を移し、之に楠公像を合せて
祀り楠公社とせるもの、社殿の棟に掲ぐ
る「建武元年十一月、楠左」の額は正成筆
なり、是等の外に三重寶塔を始め由緒あ
るもの少なからず、就て縦覽すべし。

富豪の邸宅別業は敢て珍らしからずと
雖も、一般公衆の爲に其別業の庭園を開
き俱に樂まんとすることは頗るに値す

横濱市街の南方に當る元町、北方村、岬
村等山丘に倚れる方面を總稱して山手
言ひ、又山の手とも呼び來れり、其大半は
外國人の邸宅にして、本郷根岸の地にま
で相連る、明治三十二年七月居留地制廢
停の後は、山手町、上野町、四方町、山元町
の名あるに至れり。

明治維新の前後に當り、英佛米等の軍
隊、横濱港に來屯して警戒する所ありき、
其屯營は即ち山手にありて、谷戸坂の嶺
に「トワンテン山」の字あるは米國第二十
聯隊の駐所跡なり、當時の俚語に曰

野毛の山からノーニー、野毛のナイ
ナイ山から、異人館を見れば、お鐵砲
かついでノーニー、鐵砲ナイナイお
ついで、小隊進めッ。

●波止場と野毛山 (武蔵)

安政六年開港互市の始め、波止場の設
備を爲し、元治元年に至り、居留地海岸
に波止場を築く、東波止場是れなり、此よ
り前而を西波止場と名く、慶應二年西波
止の西に、内海航走者の爲に波止を造り
之を本波止と言ふ、明治廿三年築港造橋
の事に着手し、二十九年に至り大防波橋
成り内外の二港を分てり。

野毛山は横濱驛の右方に當る丘陵なり
丘上太神宮前より眺むれば、一陣の都市
にの光景を指點すべし、百萬瓦葺は此丘
陵と南山手の丘陵間に相列り、弓弦の如
き港灣は前面に横はる、是れ横濱第一の
眺望地たり。

●金澤八景 (武蔵)

支那の西湖に似たりと稱されたる金澤
は、杉田より二里の地なり、洲崎晴嵐、
瀬戸秋月、小泉夜雨、乙船歸帆、稱名寺
晚鐘、平瀨落雁、野島夕照、内川暮靄、
之を金澤八景と稱す。

●三溪園 (武蔵)

●山の手 (武蔵)



十二天社の南北崖岸は、水路志の記する如く黄色峻壁なれば、社頭より之を望む時は、實に言ふべからざる奇觀たり、峻壁黄色にして既に奇觀たるに加へて、渺茫たる海面大船小舟を迎送する其光景亦畫も及ばざるなり、本牧の絶勝は此處のみにあらずして、之に至らんとするまで亦名所と言ひ勝景と稱すべきもの甚だ多し

の建立に係り河内國觀心寺境内に在りし午頭明王祠を移し、之に楠公像を合せて祀り楠公社とせるもの、社殿の棟に掲ぐる「建武元年十一月、楠左」の額は正成筆なり、是等の外に三重寶塔を始め由緒あるもの少なからず、就て縦覽すべし。富豪の邸宅別業は敢て珍らしからずと雖も、一般公衆の爲に其別業の庭園を開き俱に樂まんとすることは願するに値す

支那の西湖に似たりと稱されたる金澤は、杉田より二里の地なり、洲崎晴嵐、瀬戸秋月、小泉夜雨、乙船歸帆、稱名寺晚鐘、平瀉落雁、野島夕照、内川暮靄、之を金澤八景と稱す。

●三溪園 (武藏)

●山の手 (武藏)

●金澤八景 (武藏)

三 溪 園



横 濱 波 止 場



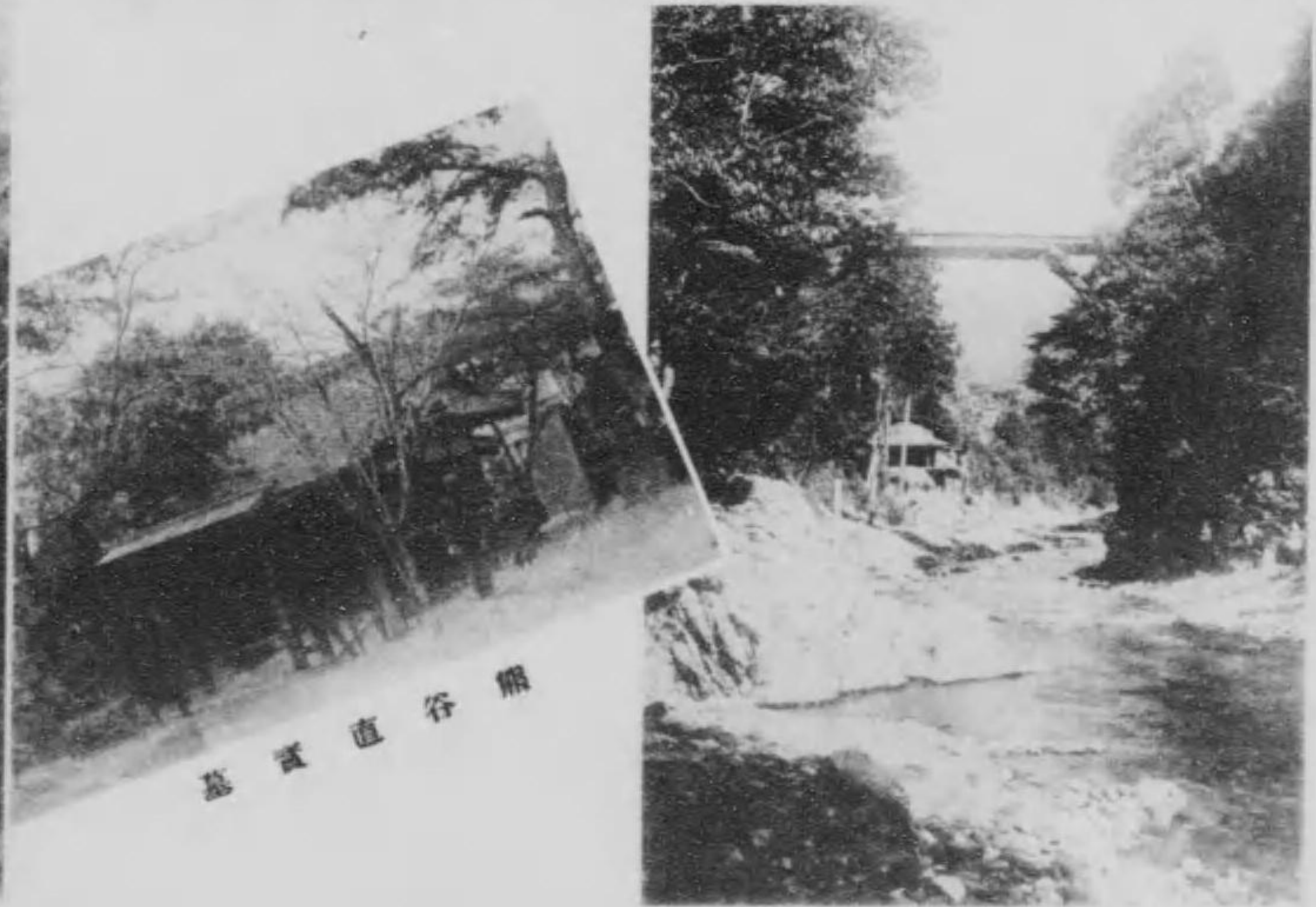
野 毛 山 遠 望



金 澤 風 景



横 濱 本 牧 岬



●小金井 (東京市外)

北多摩郡小金井村と云ふ、中央鐵道國分寺驛を距る約十五町に在り。古來櫻花の勝地として知らる、清麗玉の如き一條の玉川上水は村の北を流れ、沿岸の兩堤櫻樹を並栽して、延長二里餘に亘る、艶陽四月、花季の美觀は到底筆舌の及ぶ所にあらず、途中一橋を碧流に架す之を小金井橋と云ふ。傳へ曰ふ、此櫻樹は八代將軍徳川吉宗の頃、新田掛大岡越前守幕命を

あらんもの幾萬々年もつき／＼に植つきて此ぬしのいさほしの櫻木と共に栲さらんことを冀ふになん
嘉永四年辛亥春三月

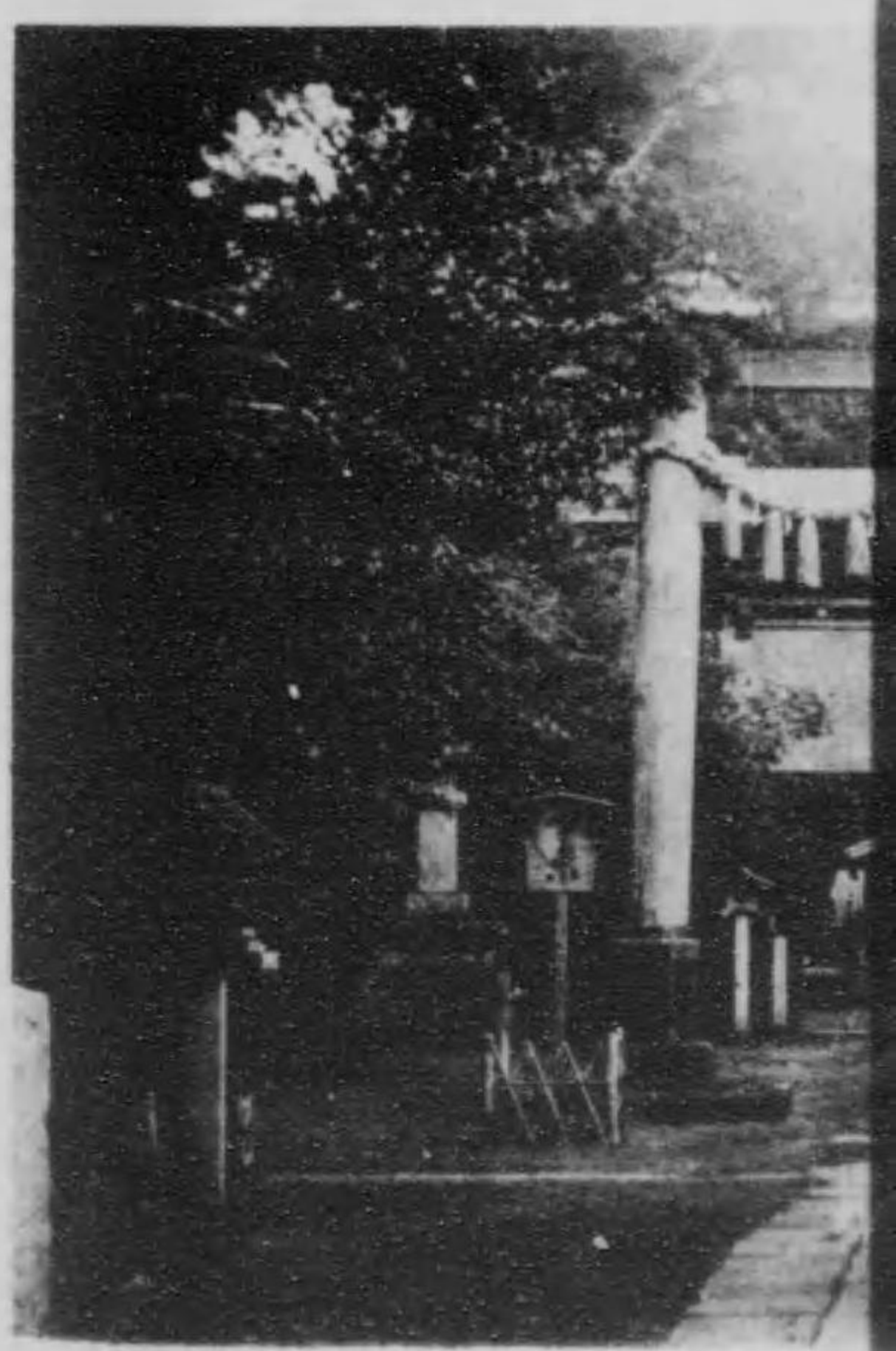
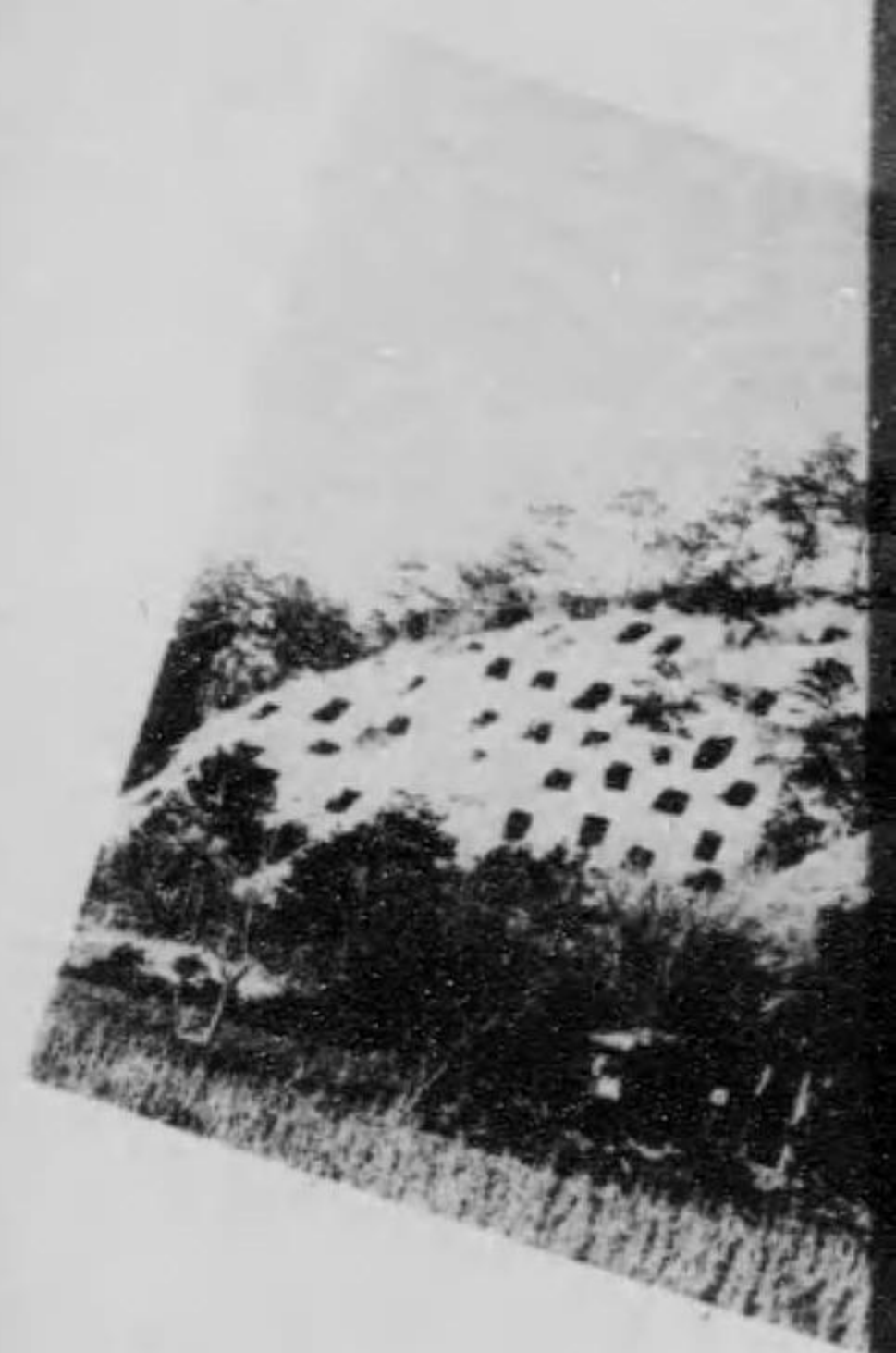
●玉川上流 (武蔵)

所謂是れ六玉川の一にして調布の玉川と稱す、北多摩郡を中心として流程三十八里餘に達し、末流六郷川となりて海に入る、其流域は景致多く古來勝地を以て知られ、詞藻の題材となりて詠せられた

●大宮氷川神社 (武蔵)

中仙道大宮町に在り、即ち大宮停車場の東北十町なり官幣大社にして昔時武蔵の一ノ宮と稱せられ素盞鳴尊、大己貴命、奇稻田姫命の三座を祀る、社記に據れば

當神社は武運の守護神にして草創以來二千有餘年を経、武蔵國第一の古祠なり、景行天皇の御宇日本武尊東征の際當社に戦捷を祈りて利あり、降りて天慶年間平貞盛等將門を征伐の時、願書を捧げて祈り



●小金井 (東京市外)

北多摩郡小金井村と云ふ、中央鐵道國分寺驛を距る約十五町に在り。古來櫻花の勝地として知らる、清麗玉の如き一條の玉川上水は村の北を流れ、沿岸の兩堤櫻樹を並栽して、延長二里餘に亘る、艶陽四月、花季の美觀は到底筆舌の及ぶ所にあらず、途中一橋を碧流に架す之を小金井橋と云ふ。傳へ曰ふ、此櫻樹は八代將軍鶴川吉宗の頃、新田掛大岡越前守幕命を受けて川崎定孝を大和の吉野、常陸の櫻川、兩地に派遣し櫻苗を齎さしめて茲に移植したりと云ふ。堤上に碑を建て左の文を刻す。

あらんもの幾萬々年もつきくりに植つきて此ぬしのいさほしの櫻木と共に朽さらんことを冀ふになん
嘉永四年辛亥春三月

●玉川上流 (武蔵)

所謂是れ六玉川の一にして調布の玉川と稱す、北多摩郡を中心として流程三十八里餘に達し、末流六郷川となりて海に入る、其流域は景致多く古來勝地を以て知られ、詞藻の題材となりて詠せられたる歌甚だ多し、源を甲州斑鳩嶽に發し同國にては丹波川と名乗り、武州に入りて始めて多摩川と稱す。其上流は殊に山水の美を極む。青梅町を距る約二里、御嶽より更に一里を過れる澤井村附近は路傍に奇岩怪石多く、龜石、虎石、錫杖岩等あり、水景次第に奇趣を呈し、山迫り水激して一步一景奇絶快絶を叫ばしむ。

●高尾山 (武蔵)

南多摩郡淺川村に在り、八王子より約二里なり、中央線淺川驛より約十數丁にして山麓に達す、直立二百丈、山脈は遠く雲取山に接続し所謂多摩の横山の一なり登攀すること三十町、山上には古刹藥王院あり、眞言宗にして有喜寺と稱す、聖武天皇の天平十六年僧行基の開基に係る。本尊は藥師如來なり、後衰頽したるを千餘年の後、後圓融天皇の永和年間僧俊源古跡を復興し、飯繩權現の像を刻して其山上の神殿に安置す。社殿の輪奐頗る美を極む其他護摩堂、藥師堂、大日堂等孰れも莊麗なり又右に藥王院あり、山上老杉鬱蒼として茂り幽邃漫ろに俗塵を絶つ、空氣清冷にして山氣肌に通る避暑清遊に好適なり、山中に數瀑あり蛇瀧、琵琶瀧最も大なり、又全山到る處に楓樹甚だ多く郊外に於ける紅葉の一勝地として稱せらる。

●熊谷眞實墓 (武蔵)

大里郡熊谷町字本町一丁目熊谷寺に在り、當寺は淨土宗にして京都の智恩院に屬す、本尊の阿彌陀佛は惠心僧都の作にして多田滿仲の子美丈丸の念持佛なりと傳ふ當寺の創建は詳ならざるも熊谷眞實嘗て此土を領し本尊を信仰し後佛門に歸し名を蓮生坊と改め黒谷に赴きたるが後玆地に歸り建永二年當寺に入寂すと云ふ天正年間幡隨上人中興の開基となり熊谷寺と改めたり、熊谷の墓は境内の一隅に在り又本堂に其木像を安置し、熊谷の具足、槍、刀、馬具及び自筆の書翰等を藏す。

●松山百穴 (武蔵)

横見郡松山字西吉見に在り、我邦に於る最も有名なる横穴にして曩年坪井博士の發掘に係る、穴の總數は二百三十七にして丘腹に整然として並列し遠く望めば恰も洋風建築の窓と疑ふ、又發掘當時には此附近より埴輪、祝部、金環、銀環等を發見したり。是れ或は大古の穴居の跡なりと云ひ又葬穴の址ならんとも云ふ。

【武蔵】

●川越城址 (武藏)

是れ關東七名城の一と稱せられたるものにして入間郡川越町に在り、此地昔時は一帯關東の平野に屬し、西南は入間に連接し、東方は荒川沿岸の低地に連り、城は市街の東方丘陵に倚つて構へられたり本丸、二ノ丸、三ノ丸、外曲輪、新曲輪等今尙存せり。當城は素と上杉氏の命を受けて太田持資築きて之に據りたるが、大永四年上杉朝興其居城たりし江戸城を北條氏の爲に攻落されたるより退いて川越城に據守せり、後徳川氏天下を統一するに及んで酒井重忠を茲に封じたり、慶長十四年重忠他に轉じ其弟忠利是に代りたるが寛永十三年酒井氏去つて堀田正盛入城し大に外廓を修す、元祿以降松平吉保、秋元の二氏相次ぎ、明和以降秋元去つて後、松平直恒入城し子孫相繼ぎ慶應三年上州廢城に移りたるを以て松平康英之に代り以て明治維新に至れり。

一書に曰ふ河越城は其さま西を首とし東を尾とす、本丸、二丸、三丸、外曲輪、田曲輪、新曲輪と分れ、三の樓臺、十二の城門備はりて、本丸は岡に倚り、外廓は池水を背にし、西南の二面のみ平地にして兵家の所謂平山城の構也、小田原記に據るに當城は長祿元年四月、太田備中守入道道真、上杉修理大夫持朝の命を受けて、仙波に在りし城を引移して、要害の細張ありし處なり、或は云ふ、此城を取立しは文明元年六月にて且之を營みし者は太田道真にはあらで其子道灌なりと、文明九年、太田圖書助資忠、松山衆を率ゐて河越城に籠りし事、鎌倉大草紙に見えたり(資忠と云ふは扇谷の家老の一人なるべし)同十八年、太田道灌は其主扇谷殿上杉定正の不興を破り相州精谷の館に於て討果さる因りて當城へは定正の子、朝良の執事、曾我兵庫頭を籠め置かる。云々。

●喜多院 (武藏)

川越町大字小仙波に在り、天台宗にして星野山無量壽寺喜多院と稱し、東京上野寛永寺に屬す。天長十七年慈覺大師の創建に係る本尊は阿彌陀佛なり元久元年兵燹に罹りて一山鳥有に歸したるを以て永仁四年僧尊海之を再興せり。天文七年上杉北條二氏の川越争奪戦行はる、や再び兵火に罹りて堂宇悉く焼失せり、慶長四年天台僧正當寺に主となるに及び、僧正家康の値遇厚く特に地を劃して堂坊舎を建立し宏壯峨々たる一大精舎たるを示すに至れり、更に後陽成天皇東叡山の號を賜ひ、改めて喜多院の門室號を賜ふ、寛永十五年正月三たび火災に遇ひしを以て三代將軍家光其居室を移して庫裏に代へ之を天海僧正の淨席に充て、更に堂塔を新築せり、現存するもの即ち是れなり、境内に天海大僧正廟あり、同僧正の木像を安置す、又徳川家康の靈を祀れる東照宮あり、寺域は四萬四千餘坪を有し、堂塔殿宇悉く莊嚴優麗を極め、境内樹木鬱蒼として幽邃閑雅、俗塵を拂ふて頗る詩趣に富む、寺寶として傳ふる岩佐又兵衛筆三十六歌仙は稀世の逸品と稱せらる。

●家光手植櫻 (武藏)

川越町喜多院境内に在り、是れ三代將軍徳川家光天海僧正の爲に堂塔方丈等を建築寄進なせし際、記念として同境内に手植せるものなり、以來二百数十年、毎年花期爛熳の際は綸綱目を奪ふて美觀言ふべからず、川越喜多院の櫻花とて東都の一勝區と稱せらる。

●天海僧正筆蹟

是れ天海僧正が最も値遇を得たる徳川家康と對談せる畫像に題したる賛なり。其語は左の如し

陰陽不測、造作無爲、弘誓亞佛、護國爲心 三國傳灯 大僧正天海

原本は東京青龍院の所藏に係る。

天海僧正は俗姓を三浦と云ふ、蘆名氏の一支部なり、初名を隨風と云ひ、後ち天海と改む、又南海坊とも稱せり、會津の人十一歳の時出家し十四歳にして叡山に登り一流の奥秘を究め永祿元年歸京し元龜二年織田信長叡山を燒くに及んで山徒を率ゐて甲斐に入り武田信玄に依る、信玄大に歡迎し盛に講席を開く天海講師となる、其辭氣勇壯にして義旨深玄、是より名聲漸次振ふ。天正五年甲斐を辭して再び歸郷の途次上州長樂寺に灌頂を受け、同十八年蘆名氏伊達政宗と戦ふて敗れ豊臣秀吉に依りて常陸の信太庄に移れるに方り蘆名氏古利不動院を再興し天海を迎ふ、次で下野宗光寺に住したり慶長十年徳川家康天海の名聲噴々たるを聞き招きて山門の探題奉行と爲す、茲に於て天海東間南光坊に住す、十三年家康の命に依りて駿府に赴く明年後陽成上皇に召されて宮中に法を講ず、次で權僧正を授けらる、十六年血脈を家康に傳へ功によりて條正となる、翌年命によりて川越の喜多院を修す、元和六年家康の薨するや遺命に依りて天海導師となりて久能山に葬儀の式を擧ぐ、七月大僧正に昇格す、七年家康の廟を日光に移すや天海其法事一切を總理す、寛永二年徳川秀忠寛永寺を上野に創建するに及んで天海之を領し東叡山と稱す、爾來日光、東叡の兩山を山門に准擬す、九年秀忠薨じて家光將軍たるに及び天海を崇敬する事益々厚く、時に治政の議に參する事少からず、所謂黒衣の宰相として隱然たる大勢力を有したり、二十年十月二日病を以て示寂す享年百二十六歳、遺骸は下野日光山に葬る慶安元年四月勅して慈眼大師の證を贈賜せらる。



し處なり、或は云ふ、此城を取立しは文明元年六月にて且之を營みし者は太田道真にはあらで其子道灌なりと、文明九年、太田圖書助資忠、松山衆を率ゐて河越城に籠りし事、鎌倉大草紙に見えたり(資忠と云ふは扇谷の家老の一人なるべし)同十八年、太田道灌は其主扇谷殿上杉定正の不興を被り相州精谷の館に於て討果さる因りて當城へは定正の子、朝良の執事、曾我兵衛頭を籠め置かる。云々。

建築寄進なせし際、記念として同境内に手植せるものなり、以來二百數十年、毎年花期爛漫の際は絢爛目を奪ふて美觀言ふべからず、川越喜多院の櫻花とて東都の一勝區と稱せらる。

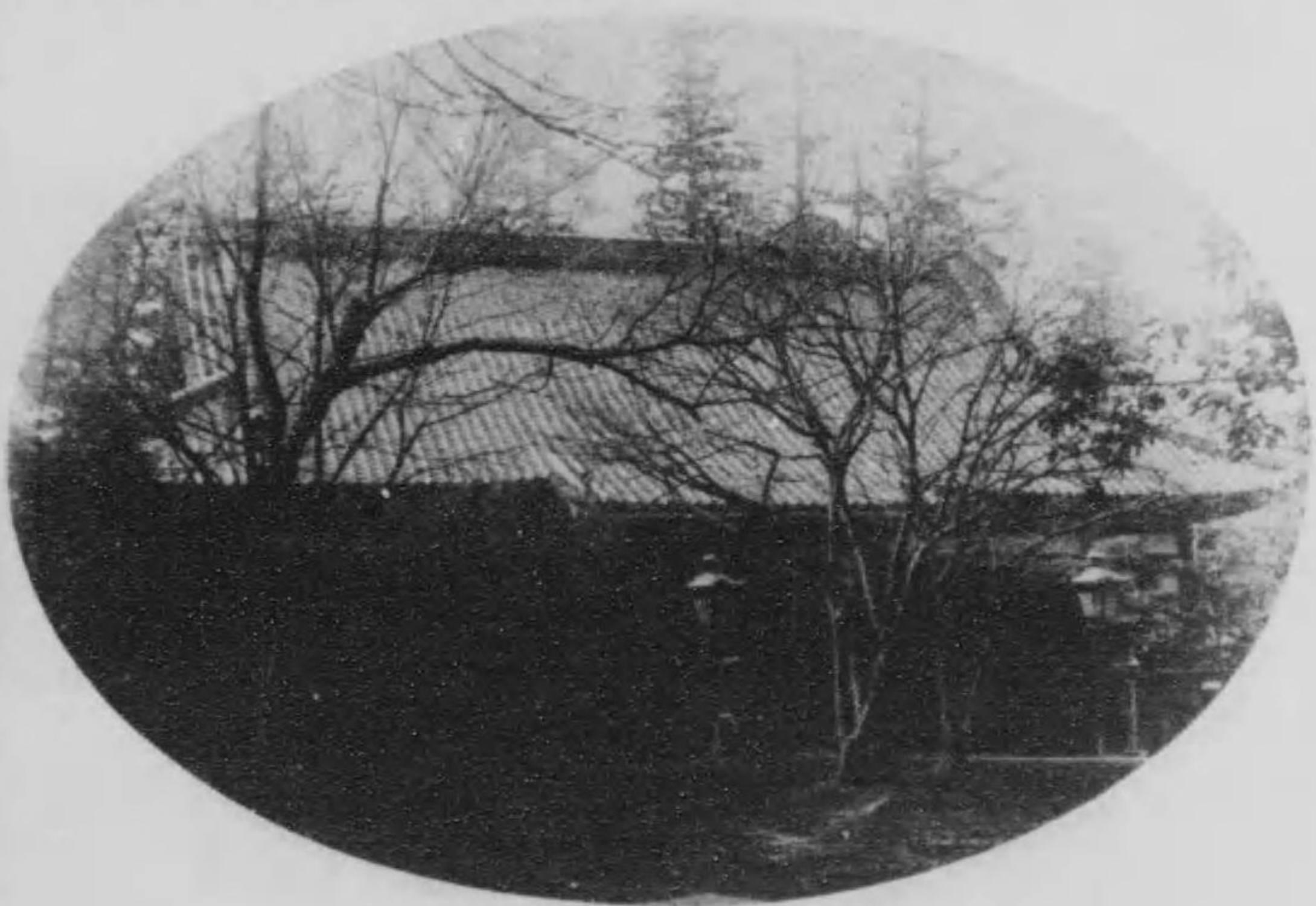
●天海僧正筆蹟

是れ天海僧正が最も値遇を得たる徳川家康と對談せる畫像に題したる贊なり。

其語は左の如し

上野に創建するに及んで天海之を領し東叡山と稱す、爾來日光、東叡の兩山を山門に准擬す、九年秀忠薨じて家光將軍たるに及び天海を崇敬する事益々厚く、時に治政の議に參する事少からず、所謂黒衣の宰相として隱然たる大勢力を有したり、二十年十月二日病を以て示寂享年百二十六歳、遺骸は下野日光山に葬る慶安元年四月勅して慈眼大師の證を贈賜せらる。

川越城址



喜多院

家光手植櫻



深田神社



高嶺山樂王院

清澄山清澄寺



富山



北條鏡浦

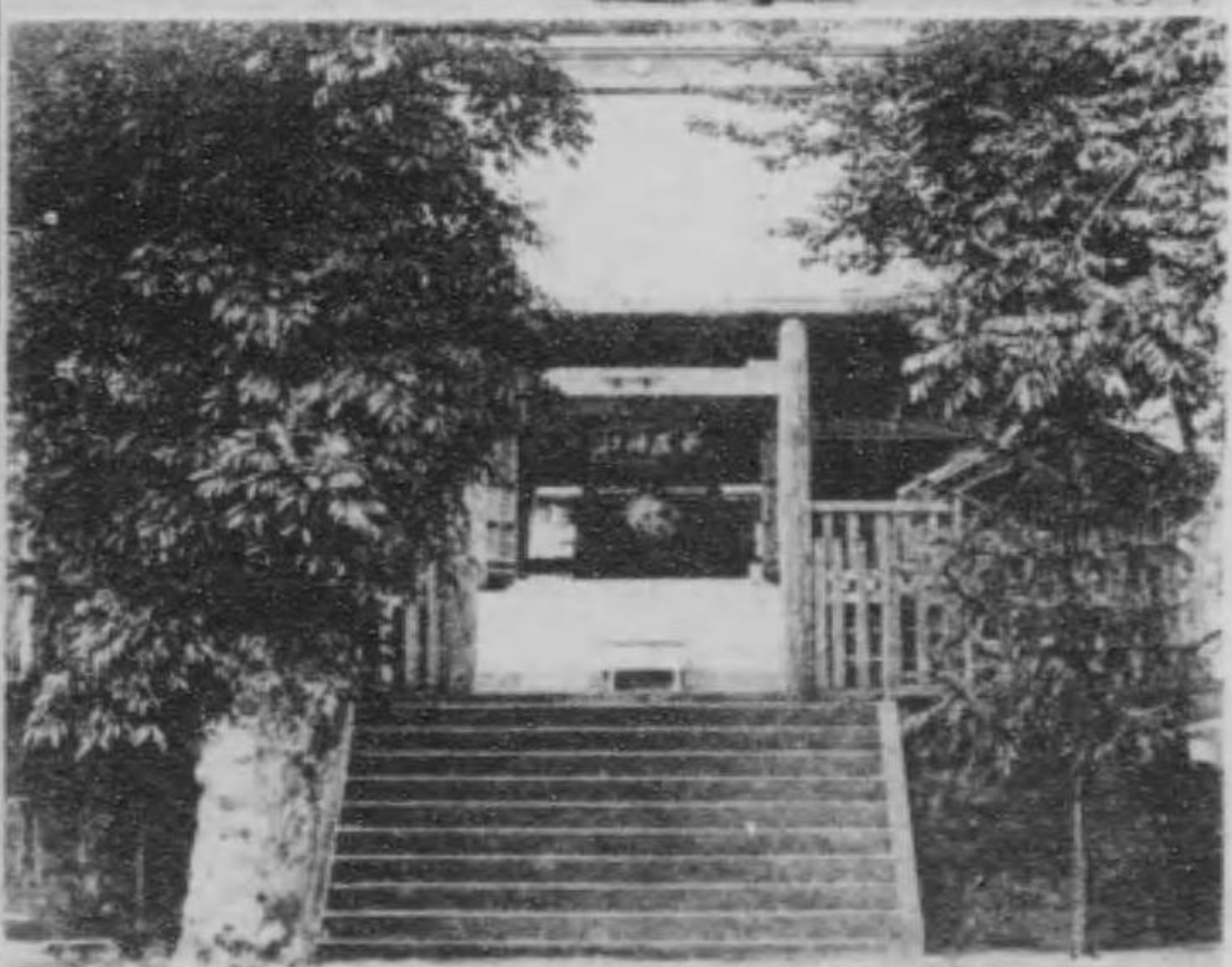


●清澄山清澄寺 (安房)

長狹郡天津町の北方一里二十四町清澄山の頂上に在り。本堂は十五間四面に亘り、銅瓦を以て屋根を葺く、本堂に接し

観音堂、鐘樓、青銅寶篋塔、方丈等あり、山の西方岩石の上に朝日堂あり、是れ日蓮上人が旭に向ひて始めて南無妙法蓮華經の名號を唱へたる處なりと傳ふ、寺傳を按ずるに、此山は太古天宮命鎮座の靈地にして山上に碧池あり、霖雨に遇ふも決

日蓮上人筆蹟



安房神社



小淡誕生寺

尺、悉く眺望に富み、風景奇絶、快晴の日は伊豆諸島を水煙縹緲の間に望み富士箱根の秀嶺亦模糊の裡に指呼するを得べし。

●北條鏡ヶ浦 (安房)

館山海の一稱にして東西約七里、南北約五里楕圓形を爲す風靜に浪平かにして宛も鏡面の如くなるより名く、灣口に雀島あり、灣内の南方に鷹の島、沖の島の二島あり、共に周圍十町、二島とも樹木鬱蒼

と稱す、該像は法弟寂日坊日家の刻む所にして其の安置する堂を建立せんとするに方り、佐久間兵庫頭重貞自ら大檀越となりて之を補助し竟に本寺を建立し、而して日家を以て第二世の祖となしたり。其他龍王堂、妙見堂、太田堂、朝師堂、清正堂、鐘樓、方丈、庫裡等斷續して境内に建たり。又境内に誕生水湧出す、傳ふる所に據れば是れ日蓮上人降誕の時、忽如として其父貫名重忠邸の門前より噴出せし靈水にして今尚滾々として止むなく、清



●清澄山清澄寺 (安房)

長狹郡天津町の北方一里二十四町清澄山の頂上に在り。本堂は十五間四面に亘り、銅瓦を以て屋根を葺く、本堂に接し観音堂、鐘樓、青銅寶篋塔、方丈等あり、山の西方岩石の上に朝日堂あり、是れ日蓮上人が旭に向ひて始めて南無妙法蓮華經の名號を唱へたる處なりと傳ふ、寺傳を按するに、此山は太古天宮命鎮座の靈地にして山上に碧池あり、霖雨に遇ふも決して涸渇する事なきを以て清澄と名け、又池邊の大栢夜々光芒を放ちたるより千光と稱せり、爾來幾百年を経て、孝仁天皇の御宇寶龜二年、一旅僧宿願を以て茲に登山し一老翁の示現に依りて山上の栢樹を伐り之を以て虚空藏菩薩の像を刻み且つ伽藍を建立して該像を安置し、名けて千光山金剛寶院清澄寺と稱せり、旅僧は又精舎の傍に在りて加持する事數日、忽ち湧出する清泉を發見して之を關伽水とし、又、自ら秘藏する三顆の珠を三ヶ所に埋藏す、寶珠山、摩尼山、如意山の三峰即ち是れなり、斯くて旅僧は忽然去つて其行く處を知らず、後、仁明帝の承和三年慈覺大師當山を中興したるが堀川院の御宇嘉保三年、雷火の爲め伽藍僧坊悉く灰燼に歸したりしを國主源親元之を再建し承久年間北條政子、寶塔及び輪藏を建立せり。斯て後、日蓮上人十二歳の時當山に登り諸佛坊道禪を師とし十六歳にして剃髮し初め是性房達長と稱し深く當寺の虚空藏菩薩に祈誓せり、上總眞如寺の寄山禪師及び武藏増上寺の貞譽、衍譽の二僧亦當寺の本尊に歸依したりき。當山は房州第二位を占むる高峻にて、本峰は海拔千二百七十三尺、而して支峰の寶珠山は千二百二十五尺、如意山は千百七十七尺、金剛山は千百十尺、露池山は千百十二尺、獨鈷山は八百四十尺、鷄羴山は五百二十

【安房】

尺、悉く眺望に富み、風景奇絶、快晴の日は伊豆諸島を水煙縹緲の間に望み富士箱根の秀嶺亦稜糊の裡に指呼するを得べし。

●北條鏡ヶ浦 (安房)

館山海の一稱にして東西約七里、南北約五里楕圓形を爲す風靜に浪平かにして宛も鏡面の如くなるより名く、灣口に雀島あり、灣内の南方に鷹の島、沖の島の二島あり、共に周圍十町、二島とも樹木鬱蒼として茂生す、前者には辨天祠を置き、又舊館山藩の砲臺址存す、後者亦一祠あり。海岸は一帶漁村連續し、數百の漁船、漁業に従業せり。北條町は此浦に臨みて旗亭商賈軒を並べて殷賑を極む、且つ潮水極めて清潔なるを以て海水浴に適し、婦女子の好浴場として都人士を始め遠近來り遊ぶ者甚だ多く、東京航行の汽船絶へず發着し、房州第一の港灣と稱せらる。史を按するに弘治年間里見氏の兵船八十里の海上を押渡り、相州三崎へ着船して城が島にて戦ひ里見勢大勝し全船勇み誇り翌朝又戦はんとせしに其夜猛雨の爲め兵船は激浪に妨げられ沖中に吹戻されしかば已むを得ず安房上總の濱に引上げ歸還したりと云ふ。

●小湊誕生寺 (安房)

日蓮上人の誕生地として有名なる寺刹にして長狹郡湊村大字小湊の山麓に在り。小湊山と號す翠巒を負ひ碧海に臨み、境内瀟灑として風景佳勝なり、寺域は五千百十四坪を有す、山門を入れば石壘の上に誕生堂あり、本堂、祖師堂は中央に構へらる、本尊は運慶の作に成る十界の木像にて本堂に安置す、是れ水戸黃門光圀の寄進に係ると云ふ、祖師堂には宗祖日蓮上人の像を置き、名けて祈蘇生の宗祖

と稱す、該像は法弟寂日坊日家の刻む所にして其の安置する堂を建立せんとするに方り、佐久間兵庫頭重貞自ら大檀越となりて之を補助し竟に本寺を建立し、而して日家を以て二世の祖となしたり。其他龍王堂、妙見堂、太田堂、朝師堂、清正堂、鐘樓、方丈、庫裡等斷續して境内に建てり。又境内に誕生水湧出す、傳ふる所に據れば是れ日蓮上人降誕の時、忽如として其父實名重忠郎の門前より噴出せし靈水にして今尚滾々として止むなく、清澄玉の如く之を汲んで符水となせり。會式は毎年陰曆十月十二、十三兩日行ひ遠近賽者群集す。

●安房神社 (安房)

房州唯一の官幣大社にして安房郡富崎村大字大神宮に在り。神武天皇元年辛酉の創建にして天太玉命を祀れり、社域老樹鬱生し、森然として高潔を極む、神殿拜殿等甚だ壯麗なるにあらざるも、儼として神威の犯すべからざるものあり。由來安房には當神社を始め洲崎神社、洲宮社等神武紀元の初年を以て創建せられたるもの甚だ多し。舊記を按するに辛酉の年天宮命沃壤を求めて東土に移住し麻穀を播種す故に其地を總の國と稱せり即今の二總及安房の地是なりと。

●富山 (安房)

馬琴の小説「南總里見八犬傳」を讀みし者は必ず其名を記せざるなき富山は其稱呼をトミサンと云ふ、安房郡岩井村大字合戸の東方に聳ゆ、海拔一千百三十一尺、山上二峰となりて四字形を成す、北峰には金刀毘羅祠あり眺望極めて濶く展望爽快なり、南方には仁王門、觀音堂あり、頂上數歩の平地に少彦名命を祀れる小祠あり、合戸村より登る事二十三町にして山頂に達す、山勢頗る崎嶇を極む。

● 鋸山日本寺

石像羅漢 (安房)

房總の國境、保田村元名に居然として蟠踞し、山勢轟々として天を衝く峻嶺あり海拔一千百八十尺、山頂鋸齒を連ねたるが如し、之を鋸山と云ふ、山骨露出し懸崖に逼り、幾多の危道、棧橋を有し、風景頗る怪奇を極む、山の半腹に蒼然たる古刹あり日本寺即ち是なり。山麓保田村より登攀すること二十町餘にして寺門に達す、二王門を入れば右側に有名なる海中出現の古鐘あり、右すれば藥師如來を安置せる本堂及び閻魔堂あり、左すれば日本寺の僧坊あり、並びて大黒堂、開山堂あり達磨石あり、崖下には吞海樓あり其庭前龜石を置く、樓の南方は展開して房州の海面を望み幾多の岬島嶼指呼に應せんとす快言ふべからず。是より開山堂の上方、若しくは本堂の背後より漸次坂路を辿りて山上に躋れば、蛙石、鰲岩、獅岩、白骨堂、口碑堂、本尊無漏窟、藤羅洞、弘法大師護摩窟、白布泉、通天關、三峰門、鷲翼山、日輪山、月輪山、瑠璃山等枚擧に遑あらず。而して山腹露出せる巖石自から佛形を成すものあり、且つ是に加ふるに自然に成る石像羅漢、累々として岨崖を榮曲して存す、其數無慮一千二百體と稱せらる、又當寺の一奇勝たり。

寺傳に據れば當寺は聖武天皇の勅を奉じ行基僧正の創建する所にして僧正手づから刀を執つて彫刻せし一刀三禮の藥師佛前に日光月光の兩尊十二神等の像を刻みて安置し七堂伽藍を營み、神龜二年六月を以て供養の式を舉行したり、後、良辨僧正茲に來つて藥師救生の關伽泉を穿ち以て加持水となせり、弘法大師亦當山に登つて護摩を修する事一百日に及べり、天安元年慈覺大師茲に留歸して阿彌陀、

觀音の二像を刻し之を大慈堂に安置せり源頼朝當國に流寓の際、本寺に祈誓する所あり、後、志を得て鎌倉に覇たるに及び頽廢せる諸伽藍を再建せり。安永三年當寺第九世愚傳和尚四衆を勸化し山腰の崖岨を平かにして伽藍を建立し以て今に至りたりと云ふ。

● 十州一覽臺 (安房)

鋸山の頂上、日輪山、月輪山の中央、瑠璃山の絶頂に在り、山嶺展開して絶好の眺望地たり、近くは安房、上總、相模、伊豆等の海嶽を始め、遠くは駿河の富士、甲斐、信濃の峻山高峰、下野の日光山、常陸の筑波山、武蔵の秩父山等、翕然として双眸に集り來る、實に十州一覽の名に背かざるなり。

● 勝浦海岸 (安房)

夷隅郡勝浦町の海岸にして、千葉縣廳を距る十五里二十五町、木更津港を距る十六里九町に在り、其東南海中に斗出する岬角を勝浦崎と稱す、岨崖磊砢の間に古城址あり、是れ天正年間正木左近太夫の據守せる所なり、海濱一帶を通稱櫛濱と云ふ、蓋し申濱村に屬するを以てなり、海濱の盡くる所、岡阜起伏し翠巒蒼波に相映じて風光甚だ瀟灑、海風徐ろに面を吹て爽快言ふべからざる趣きあり、殊に沿海、瀾の漁獲最も盛んにして、夜に入れば漁火遠近を彩り天に連りて星光と相接する美觀は、到底畫圖の及ぶ所にあらず。且つ市街は商家漁戶櫛比し海産營業盛んにして郡内隨一の良港と稱せらる。

● 保田海岸 (安房)

行き盡す沙灣三百曲、天に倚る峭壁是れ房州とは詩人梁川星巖が保田海岸を吟せるもの、此地鋸山日本寺の南麓にして前面は懸崖を噴んで水天遙く劈裂す、

風光頗る爽快なり、其首邑を本郷と稱し西方東京灣の一港を擁し、東京館山間の汽船茲に寄航し房州地方の物産亦此地を経て運搬せられ、且鋸山登攀の發程地として知らる。

● 延命寺 (安房)

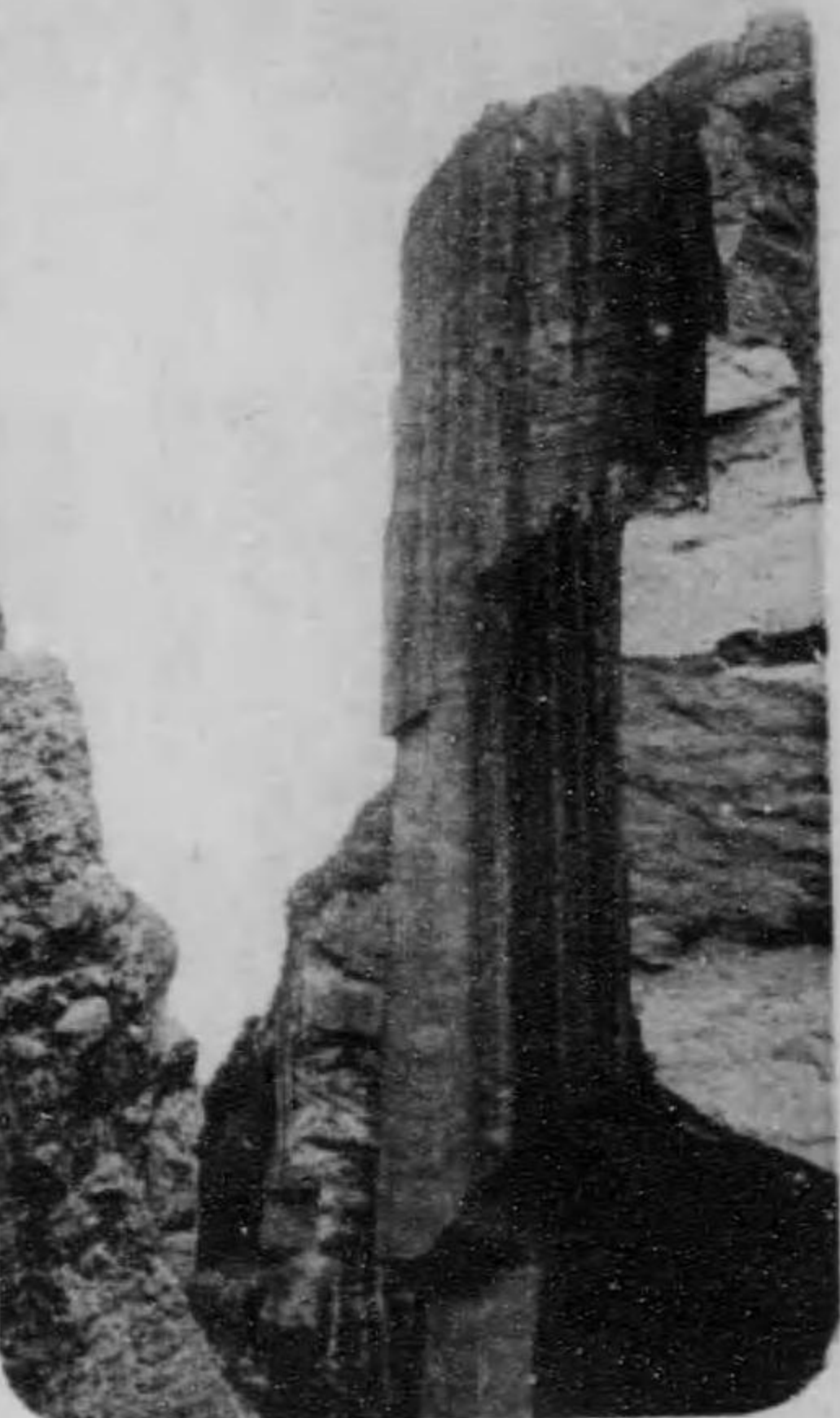
北條町の東北一里半許、國分村大字本織字稻荷森に在り、長谷山と號し、禪宗曹洞派に屬す、永正十七年里見實堯の祈願に依り僧梵眞の開基に係る、即ち里見氏歴代の菩提寺にして本堂には里見義通以下九代の像を安置す寺域千二百餘坪、境内廣潤にして堂宇の結構頗る宏壯なり。里見實堯の嫡子義堯禪宗を崇信し當寺に領地二百五十石を寄附せり、里見氏の滅後徳川氏朱印三百石を賜ひ房州五大寺の一と稱せらる。

● 船形觀音 (安房)

安房郡船形村大字船形に在り。船形山普門院大福寺と稱す、岨嶽たる斷崖に倚て構へらる、寺域一千坪、本堂、本坊、客殿、庫裡等あり、仁明帝の朝、慈覺大師の草創にして眞言新義派に屬す、本尊は行基僧正作の十一面觀音なり、堂上頗る眺望に富み、鏡浦を圍繞する翠巒蜿蜒として秀姿を水面に映じ其間白帆の點綴する光景筆舌の及ぶ所にあらず。

● 那古寺 (安房)

那古町字寺町に在り、眞言宗にして補陀洛山普門坊手院那古寺と稱す、房州五大寺の一なり、寺域三千七百坪、本堂、多寶塔、大日堂、阿彌陀堂、閻魔堂、鐘樓、二王門等連立す本堂は八間四面にして、構造技巧を極め、古雅精緻、建築美術を發揮す。養老元年行基僧正の開基に係り爾後荒廢せしを承和十四年之を再興す後幾多の變遷を経て今日に至り。



日本寺

十洲一覽



から刀を執つて彫刻せし一刀三禮の薬師
佛前に日光月光の兩尊十二神等の像を刻
みて安置し七堂伽藍を營み、神龜二年六
月を以て供養の式を舉行したり、後、良辨
僧正茲に來つて薬師救生の關伽泉を穿ち
以て加持水となせり、弘法大師亦當山に
登つて護摩を修する事一百日に及べり、
天安元年慈覺大師茲に留錫して阿彌陀、

●保田海岸 (安房)

す。且つ市街は商家漁戸櫛比し海産營業
盛んにして郡内隨一の良港と稱せらる。
行き盡す沙灣三百曲、天に倚る峭壁是
れ房州とは詩人梁川星巖が保田海岸を吟
せるもの、此地鋸山日本寺の南麓にして
前面は怒濤岩を嘯んで水天遠く粍脍す、

那古町寺町に在り、眞言宗にして補
陀洛山普門坊千手院那古寺と稱す、房州
五大寺の一なり、寺域三千七百坪、本堂、
多寶塔、大日堂、阿彌陀堂、閻魔堂、鐘樓、
二王門等連立す本堂は八間四面にして、
構造技巧を極め、古雅精緻、建築美術を
發揮す。養老元年行基僧正の開基に係り
爾後荒廢せしを承和十四年之を再興す後
幾多の變遷を経て今日に至れり。

上(那古寺) 中(保田海岸)



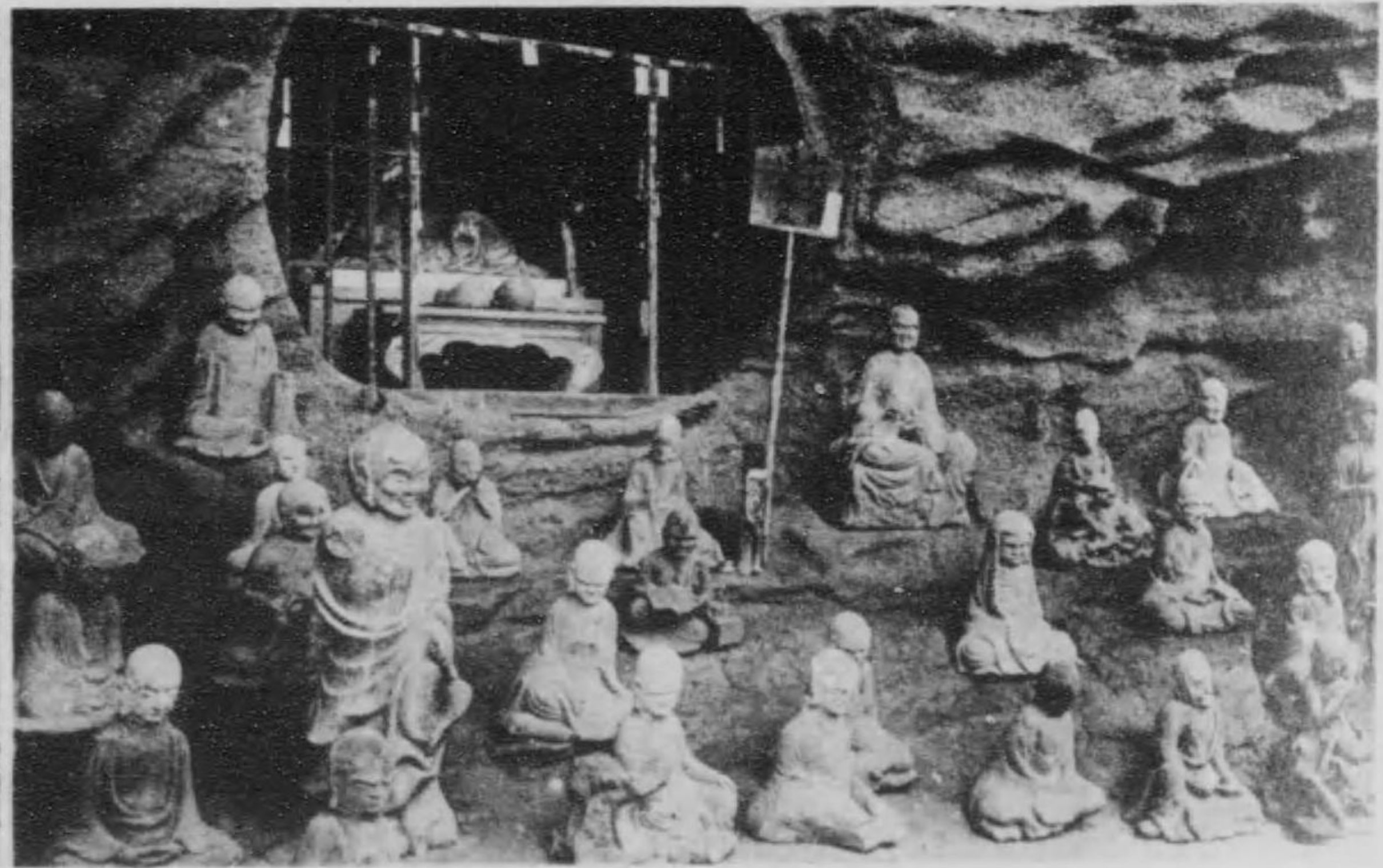
上(浦邊海岸) 中(延命寺)



船形觀音



同日 (二)



日本寺五百羅漢 (一)

神島白



飯香八幡宮神木



神野寺本堂

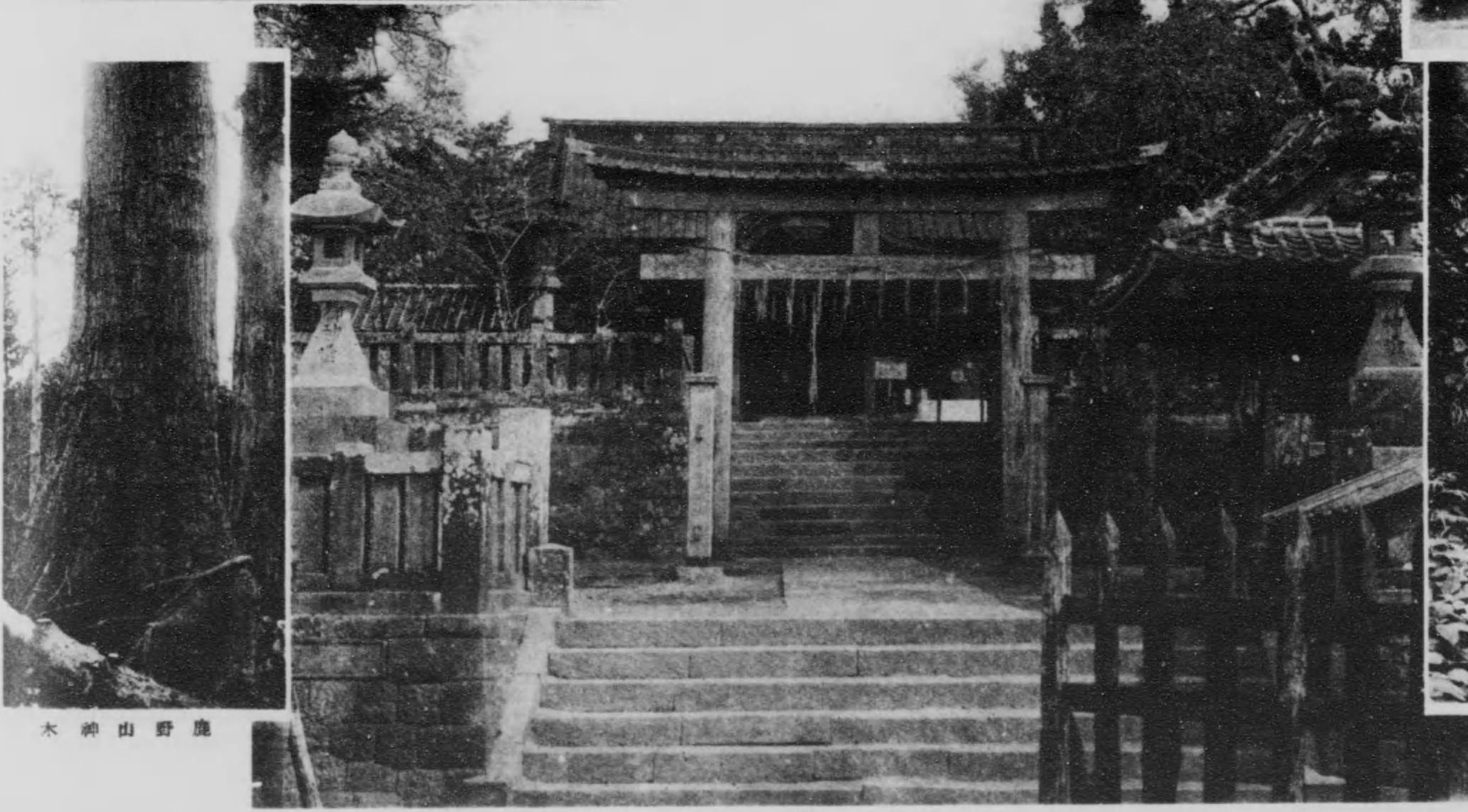


●鹿野山神野寺 (上總)

君津郡の中央に位し周准、天羽二郡の界に蟠踞する高峰を鹿野山と云ふ、海拔一千百七十一尺、頂上景勝に富み、關東の神澤悉く目睫に集る、山中蒼重なる一古刹あり神野寺と稱す、承和五年聖德太子の草創にして境内廣潤、本堂、經堂、護摩堂、十二社堂、大杉明神祠、飯綱權現祠、阿彌陀堂、觀音堂、鐘樓、辨天堂、客殿、庫裏、

の背後、山頂に鎮座す、日本武尊を祀る、附近に尊に關する古蹟尠からず存す、傳へ云ふ往時兇夷阿久留王なるもの此山に居りて犂猛暴惡を擅まゝにす、日本武尊乃ち伐つて之を誅滅す、是れ尊の神祠を茲に鎮する所以なりと、或は曰ふ神野寺に安置する軍荼利は賊魁阿久留王を祀れるなりと、阿久留王は一名六手と云ふ、此王の出生地を六手村と名く、六手とは六臂の謂なり。

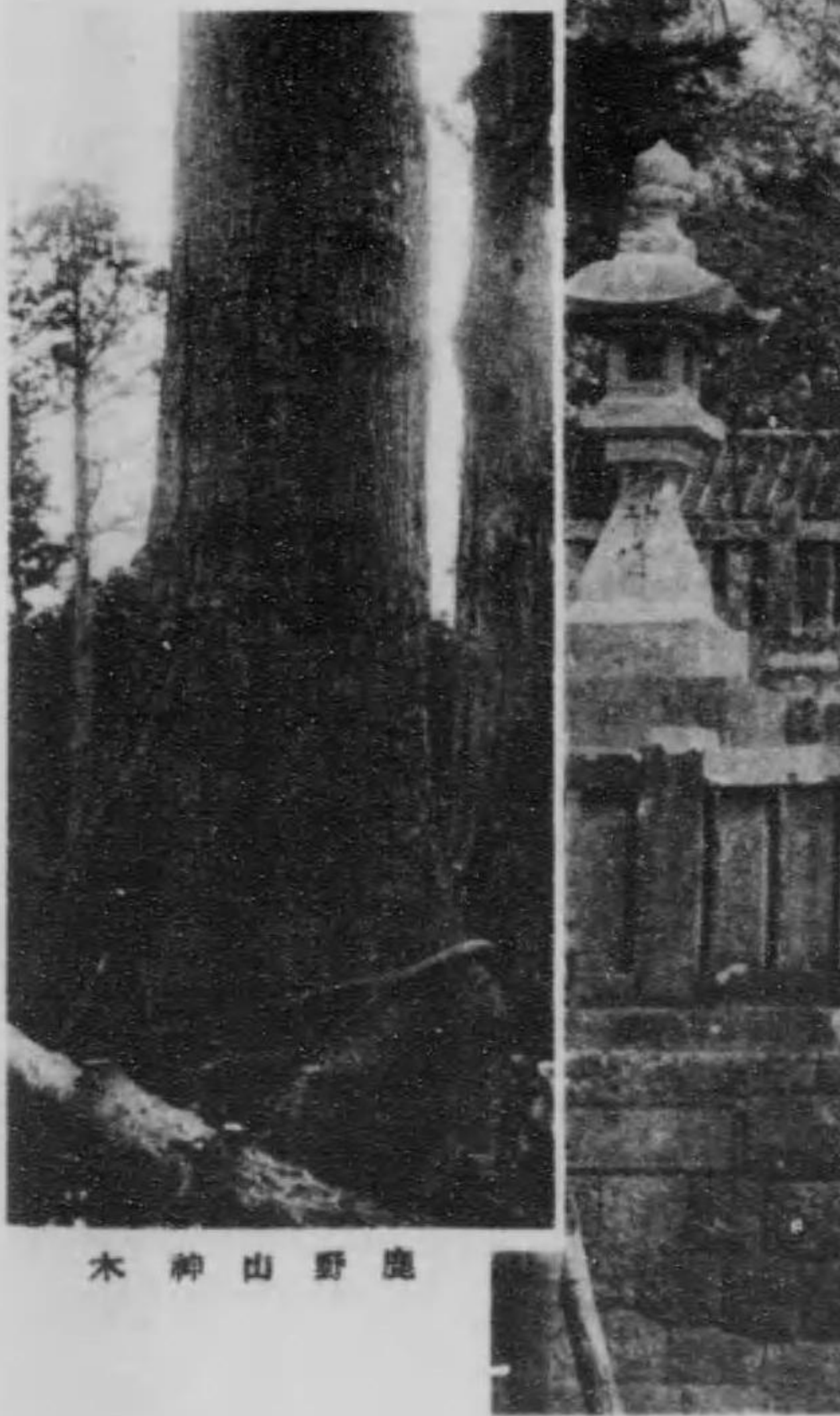
の謂にして當國の大東嶺を稱す、釣崎は即ち其舊蹟なりと云ふ。社内は老樹鬱蒼として森嚴の氣漲り、社殿石壘の上に鎮座し高潔にして壯麗、自ら敬畏の念を湧起せしむ、毎年三月十三日祈年祭を執行し、八月十三日を以て例祭を行ひ、神輿釣崎の地に渡御す、當日は必ず東風吹き起るを常とし土人之を迎神風と稱し居れり、此日遠近より賽者群集し非常なる雜沓を極むと云ふ。



玉前神社

鹿野山神木

鹿野山の瀧



鹿 野 山 神 木

●鹿野山神野寺 (上總)

君津郡の中央に位し周准、天羽二郡の界に蟠踞する高峰を鹿野山と云ふ、海拔一千百七十一尺、頂上景勝に富み、關東の神澤悉く目睫に集る、山中蒼重なる一古刹あり神野寺と稱す、承和五年聖德太子の草創にして境内廣潤、本堂、經堂、護摩堂、十二社堂、大杉明神祠、飯綱權現祠、阿彌陀堂、觀音堂、鐘樓、辨天堂、客殿、庫裏、方丈、寶庫等、櫛比す、就中本堂は十間四面にして結構頗る宏壯本尊として醫王善遊尊及び軍荼利夜乃明王を安置す、其長各々一丈二尺今を距る實に一千二百有餘年の製作に係る、堂内別に聖德太子十六歲當時の肖像を安置す。客殿、庫裏等の舉行は二十二間に及び其構造又大いに見るべし。後堀河天皇の元仁年間親鸞上人嘗て茲に錫を留め四衆を教化したるを以て自作の肖像を當寺に残存せりと云ふ。當寺は當初鹿野山琳聖院神應寺と號せしが元保元年當山十四世の僧梭堯阿闍梨の時に及んで怒怒院神野寺と改稱せり。當寺の表門は有名なる左甚五郎の製作に係ると云ふ、門を出で、東南六七町にして鹿野山公園あり園内、九千餘坪瀟灑にして纒塵を留めず、俯瞰すれば幾多の溪谿脚下に通り蜿蜒逶迤として數里に連互するを見る、所謂鹿野山の九十九谷なり、道與僧正鹿野山に登りて詠せる歌あり。

鳴く鹿の野にも山にも聞きぬなり
妻戀ひわぶる秋の夕暮

山中勝區渺からず、其尤なるものを天神堀の瀑布とし八尾、八峽、八塚の勝枚舉に違わらず。又周圍三十八尺に達する大杉あり、蒼枝鬱然、森として太古の遺木たるを感せしむ。

●白鳥神社 (上總)

鹿野山神野寺の東北、即ち鹿野山公園

【上 總】

の背後、山頂に鎮座す、日本武尊を祀る、附近に尊に關する古蹟渺からず存す、傳へ云ふ往時兇夷阿久留王なるもの此山に居りて猝猛暴惡を擅ま、にす、日本武尊乃ち伐つて之を誅滅す、是れ尊の神祠を茲に鎮する所以なりと、或は曰ふ神野寺に安置する軍荼利は賊魁阿久留王を祀れるなりと、阿久留王は一名六手と云ふ、此王の出生地を六手村と名く、六手とは六臂の謂なり。

安房國志に曰く「鹿野山、房總中最も高きに居る、陸南坂は華表あるの地にして其傍に一碑あり、文に曰く、當山神野寺は日本武尊、橘姫尊兩神の鎮座にして軍、利明王、藥師二尊の垂跡を以て長く東海の鎮護となす云々、或は是れ一の傳説ならんか。

●玉前神社 (上總)

長生郡一宮本郷に鎮座す、即ち是れ一宮明神にして玉依比賣命を祀り、國幣中社に列す、當神社は其勸請の年代審に知るを得ざるも、古く景行天皇東巡の際の御親祭に係ると云ふ。一宮記には、玉前神社、高皇產靈尊の弟、生靈靈の一男前、玉命と記せり、史を按ずるに彦火々出見尊、皇兄火闍降命の鈎を借り日向の海濱に釣る既にして其用ふるどころの鈎を失ひ尋ね求むれども得ず、乃ち新鈎を作て之を皇兄に返附す皇兄尙舊鈎を賣めて受けず、尊大に憂慮す、偶ま海畔を歩いて鹽土の老翁に逢ひ、其教に従ふて海神の宮に至る海神妻はすに長女豊玉媛を以て、居る三年曩に失ひし鈎及び潮満潮干の二珠を得て還る、別に臨で媛語て曰く妾既に妊娠す風濤怒吼の日を以て必ず岸に到らん願はくば爲めに産舎を設けて待つ所あれと、後豊玉媛約を履み女弟玉依媛を伴ふて着岸し産舎に入る云々、文中日向とあるは日向國にあらず日に面す所の謂にして當國の大東嶺を稱す、鈎は即ち其舊蹟なりと云ふ。

●飯香岡八幡宮 (上總)

一に六所御影八幡と稱し市原郡八幡町に鎮座す、祭神は譽田別尊、息長足姫尊、玉依比賣尊の三座にして、相殿として足仲彦尊、日本武尊、經津主命、住吉大神、天穗日命、事代主命の六座を祀れり。孝謙天皇の御宇天平寶字三年六月勅使從三位季滿、奉幣使從四位時春等勅を奉じて東下し勸請する所にして今縣社に列せらる、社域壹萬二千餘坪、本殿、拜殿等連立し屋根は悉く銅板を以て葺けり攝社五社末社廿九あり。社殿の左右に一大公孫樹あり、其左傍にあるは周圍五間餘名けて神木と稱す、是れ往時勅使季滿の手から植ゆるものなりと云ふ、樹下に一碑を建て、季滿の詠を録す。

君が爲め今日植え添へし銀杏樹に
幾世經とも神宿るらん

其他、境内の兩邊に巨大なる眞碎葛の松樹に纏へるものあり、世人稱して蔓正木と呼べり、又境内幽邃を極めたる裡に一簾の神瀑懸れり、清見の瀧と云ふ、夏季涼を逞ふて之を浴するもの多し、神社の表華表は東京灣に臨み、右に筑波、左に富士を望み且つ海上の觀望極めて佳絶なり裏華表は八幡の市街に接して賽者の往來常に織るが如く股脈繁盛、郡内屈指の名祠として知らる、例祭は毎年三月十五日、八月十五日の兩度なり。

●香取神宮、樓門（下總）

香取郡香取町に鎮座す。常陸の鹿島神宮と共に本邦最古の神社として知らる、其創建は古く神武天皇の御宇十八年にし、て祭神は經津主神を主神とし武甕槌神、天兒屋根命、姫神を合祀し官幣大社に列す。香取町の盡頭より一條の登石を辿り正面の大華表を入りて石階を登れば築垣長く續けり、境内には老樹巨杉森然として鬱茂し、築垣を左折すれば巖然として樓門の聳ゆるを見る、門を入れば正面に正殿、拜殿あり、神樂殿、神饌所其他攝社末社等斷續して丘陵の上に連立す。龜甲山、木母杉、弓掛杉、斥候杉、三本杉、牧野、笠塚、笠塚、鹿塚、星塚等あり、皆是れ境内の名蹟たり、又神井として御手洗井、水室井、龜井、大阪井、琵琶井、下の井、眞彌井、西隠井、東隠井、奴久井、石井、太刀洗井あり是を十二井と云ふ、其他七橋、八阪の名勝あり。神苑は本社背後に在りて櫻の馬場と稱す、一面の芝生にて數百株の櫻樹、林を爲し花季の風色甚だ美觀を呈す。苑内眺望に富み、香取ヶ浦の秀色、潮來十六島の諸景は淡靄疎彩の間に望むべく風光頗る幽艶なり。

當神宮は古より軍神として帝室の崇敬獲からず、遠近の賽人常に踵を接す、又毎年執行する軍神祭、御田植祭、大饗祭等の際は非常なる殷賑雜沓を極むると云ふ。一書に曰ふ、香取神宮を齋主神と申すは天降りして中國を平定し給ふ首途に諸神を祀り即其大功を成終へ給ひしに因て齋主命と稱へ奉りしなるべし、其は神武天皇の賊を伐給ふ時、其將帥なる道臣命を齋主として天神を祀らしめ給ひしは即ち此故事の吉例に准りしものならんと云ふ又香取、鹿島は上古の鎮守府にて、大江を挾みて兩岸に置かれ、東國を押へられしなり、大宮司家の康永三年の文書には

「當社大明神者、日本開關靈應、異國征伐軍神也」と載せ、肥前風土記にも來目王子新羅征伐の時、經津主神を祀られし由早く既に見えたり。

●銚子犬吠岬（下總）

本邦本州の東海岸最も著名なる岬角にして銚子町より東南約一里を隔つ、此地海上郡高神村に屬す、岩壁の頂上に旋廻白色の燈臺を設置す、燈臺の高き海面を抜く百六十八呎、晴夜は光力十九海里に達すと云ふ、犬吠の前方半里の海中に一島あり海獅島と云ふ、海獅嘗て來り遊びしより此名あり、此島より岬角までの海濱は巨浪岸を蹴つて飛沫霧散、壯觀快絶形容し得べからず、此地を霧ヶ濱と稱するもの蓋し之が爲めなり、即ち又銚子廻りの一勝區たり。岬邊水際に通ずる岩窟を胎内潜りと云ふ、夏季銚子に來遊するもの必ず犬吠岬を訪はざるものなし、海水浴場にして旅館を兼ねたる晚鷗館は此の燈臺際にあり、「水路志」に記して曰く「犬吠岬は其頂に一裸山を有する多岩の陸頭にして高二百四十呎、而て其北方及南西方の低海岸より、俄然突起するを以て甚だ著名なり、其位置は大東崎の北方三十三海里に在り、此陸頭は三個に分る、其南東角を長崎鼻、中部の角を犬吠岬、北東角を目戸鼻と稱す、該陸頭の南濱は恰も高堤の如き岩崖直立し。長崎鼻は低く且多岩にして夫より險惡地、海に鋪及する四鎚又該陸頭外面の海濱は北方に向走し三海里にして帆掛石に至り是より北面に轉向して利根川口に至る云々。

- | | |
|---------|---------|
| 大槻 | 磐溪 |
| 貪看潮勢立巖尖 | 飛沫瀟人衣袂密 |
| 暮地奔濤衝絕壁 | 幾條亂下水晶簾 |
| 遙天霞紫夕陽低 | 海角蒼茫望轉迷 |
| 九十九灣何處是 | 水禽啼過赤崖西 |

●印旛沼（下總）

印旛郡の中央に居然として位置を占むるもの之を印旛沼と云ふ、東西約二里、南北約七里、周圍十二里を有す、而して之を圍繞する村落は五十有餘に及ぶ、如何に其巨沼たるかを知るべし、沿岸の風景亦佳なるも往々蘆荻の叢生せる爲め觀望を遮り、平地の眺望遺憾少なからず、然かも高丘に登りて下瞰すれば、白帆湖上に逍遙して風色秀麗、畫圖も及ばざるものあり、就中登臨眺望の最適地は印旛の飯野を以て第一とす。沼中吉高の東二里許に二穴あり、南北相距る四五十歩、穴の直徑各五十丈あり、水色青藍にして旋渦甚だ急なり、土人呼んで佐久知穴と云ふ、佐久知は鱈の小なるを謂ふものにして、此魚常に茲に集る漁夫機を見て網を投すれば其の獲る所無數なりと云ふ、又北須賀北方の沼上には、夏秋の夜、水中より蹴鞠大の螢飛び出づ、里俗之れを川螢と呼び居れり、亦此の沼の一奇觀たり。

沼の沿岸低地は住民概ね墾土耕作に従事す、其水面は二方里に滿たす、而して其沼澤は平常に於て水深三尺を踰ゆる所なく全沼の面積凡三千八百町、海面より高さ事約一丈五尺なりと云ふ。

（古今六帖）
しもふさの伊婆の浦波たつらしも
舟人さわざからる押すなり
又文明年間の回國雜記に印旛沼を詠せし左の文字あり
九月二十八日稻穂の別當が坊にて湖水を詠めて
山色湖光秋又窮 鄉書曾不託飛鴻
砧聲近報孤村晚 旅懷何堪憂患躬
今日是小春のしるしにや聊長閑に侍りければ皆々稻穂の湖水に浮て舟の中に酒など興行し侍りき云々
みづうみの波間に影をやごしきて
又たぐひある富士を見るかな

沼 幡 印



吠 犬

沼 橋 印



天降りして中國を平定し給ふ首途に諸神を祀り即其大功を成終へ給ひしに因て齋主命と稱へ奉りしなるべし、其は神武天皇の賊を伐給ふ時、其將帥なる道臣命を齋主として天神を祀らしめ給ひしは即ち此故事の吉例に准りしものならんと云ふ又香取、鹿島は上古の鎮守府にて、大江を挟みて兩岸に置かれ、東國を押へられしなり、大宮司家の康永三年の文書には

する四鐘又該陸頭外面の海濱は北方に向走し三海里にして帆掛石に至り是より北西に轉向して利根川口に至る云々。

大槻 磐溪

貪看湖勢立巖尖 飛沫瀧人衣袂密
暮地奔濤衝絕壁 幾條亂下水晶簾
遙天霞紫夕陽低 海角蒼茫望轉迷
九十九灣何處是 水禽啼過赤崖西

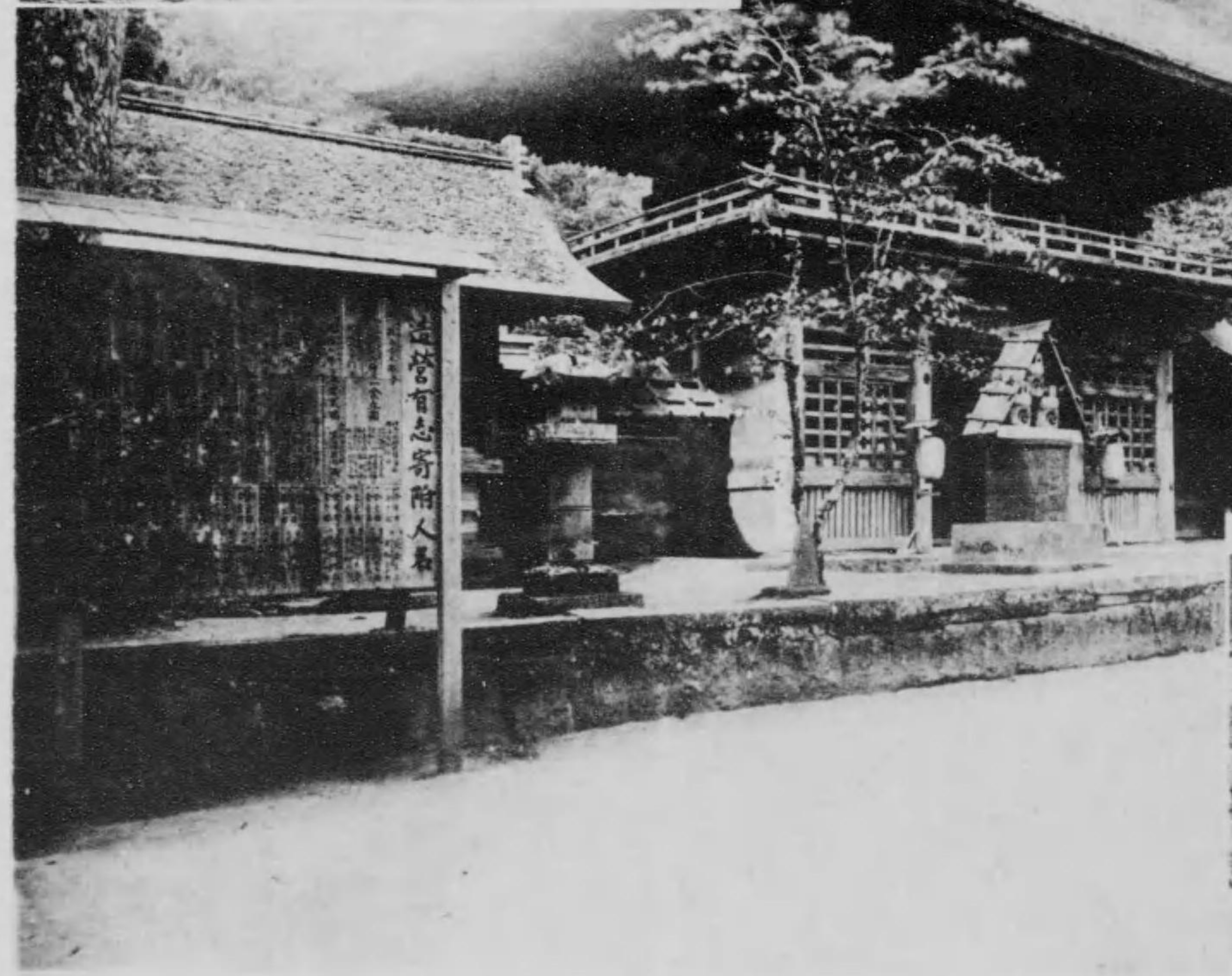
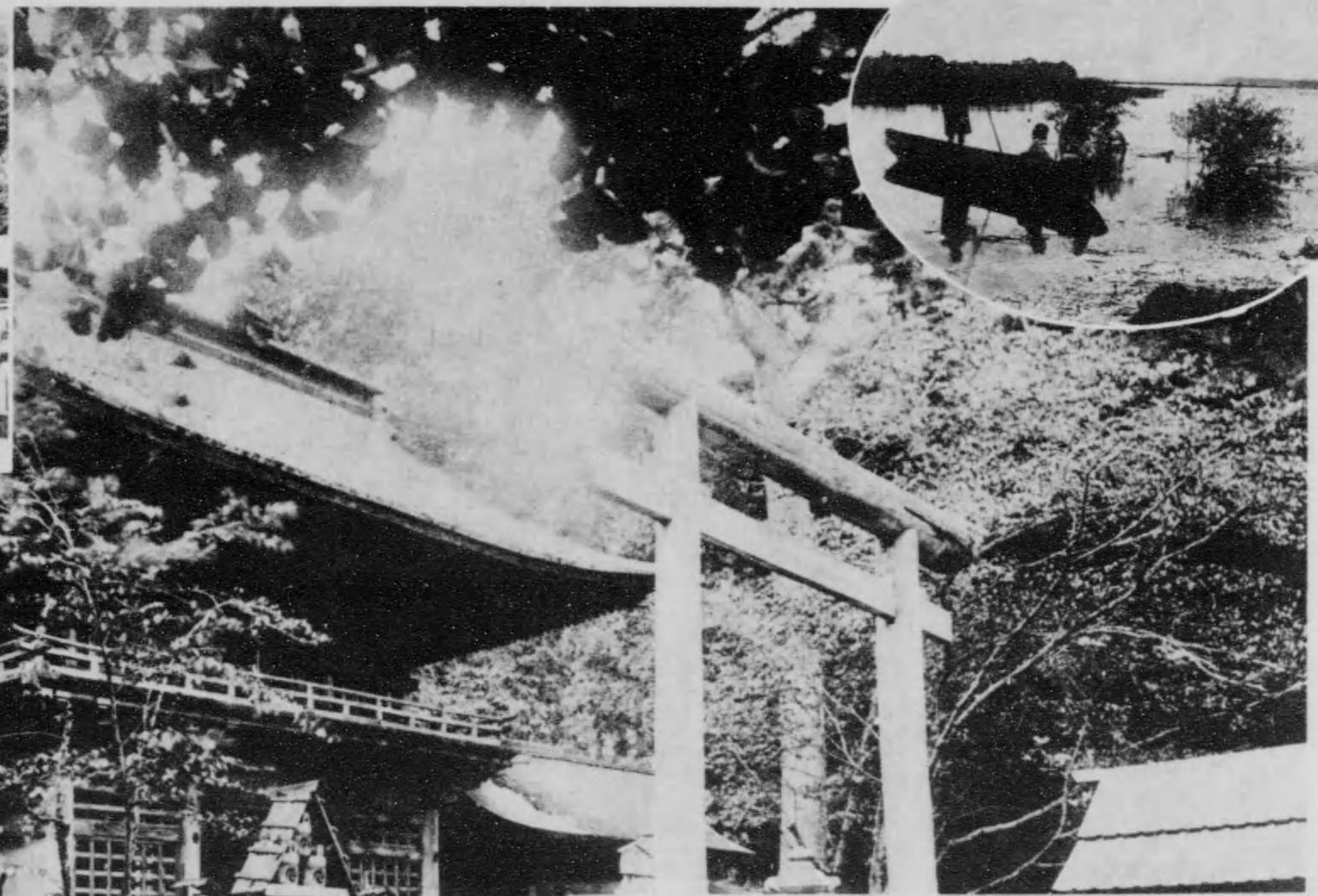
●印 旛 沼 (下總)

し左の文字あり

九月二十八日稻穂の別當が坊にて湖水を詠めて

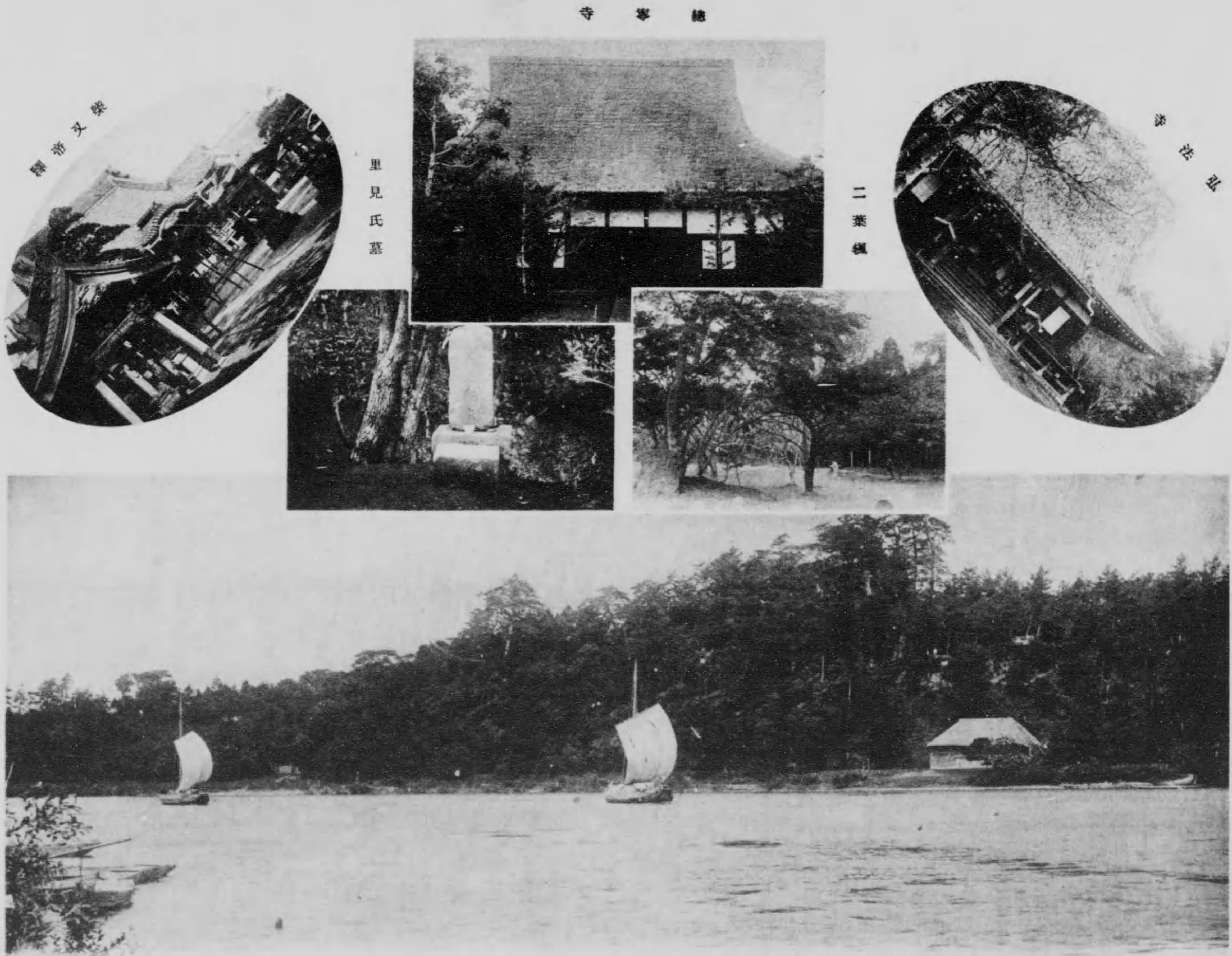
山色湖光秋又窮 鄉書曾不託飛鴻
砧聲近報孤村晚 旅懷何堪憂患躬
今日是小春のしるしにや聊長閑に侍りければ皆々稻穂の湖水に浮て舟の中に酒など興行し侍りき云々
みづうみの波間に影をやどしきて
又たぐひある富士を見るかな

官 神 取 香



神 吠 犬

門 樓 宮 神 取 香



總峯寺

柴又帝釋

弘法法

里見氏墓

二葉楓

江戸川及鴻の臺

●江戸川風景 (下總)

利根川の支流にして千葉縣市川町の西邊に沿ふて流るゝもの之を江戸川となす即ち武蔵下總兩國の境を劃し關宿に於て本流の利根川と分れ權現堂川の水を承けて南走し遂に東京灣に注ぐ、流程約十三里、川幅弘く水深く舟楫甚だ便なるを以て常陸、下總、下野、上野等に往來する運

●法寺、二葉楓 (下總)

市川町大字真間に在り、真間山と號す寺は南面して真間川、市川町を下瞰す、昔時弘法大師の遺跡なりしが、日蓮上人亦茲に來つて教法を弘通し六門家の一と稱せらる、一名を真間寺と稱し、又真間法華堂とも云ふ、今世日蓮宗池上本門寺の屬末となれり、本尊は釋迦如來にして富

●柴又帝釋天 (下總)

南葛飾郡金町村大字柴又に在り。寺を經榮山題經寺と云ふ、然も世人多く寺名を言はず、唯だ柴又帝釋天の語を以て著しく知らる。寛永六年(或は三年と云ふ本山十九世禪那院日忠の草創にして、此僧を以て開山とす、後、延寶年間に至り、本山の塔頭後院正善坊日達當寺を兼帶して



●江戸川風景 (下總)

利根川の支流にして千葉縣市川町の西邊に沿ふて流るゝものを江戸川となす即ち武藏下總兩國の境を劃し關宿に於て本流の利根川と分れ權現堂川の水を承けて南走し遂に東京灣に注ぐ、流程約十三里、川幅弘く水深く舟楫甚だ便なるを以て常陸、下總、下野、上野等に往來する運輸の利極めて大なるものあり其沿岸には流山、行徳、市川等ありて風趣佳なる勝景尠からず、殊に國府臺附近の景致極めて清秀、宛然一幅の水彩畫に接するの感あり、此川は寛永年間修浚せる所にして昔時は之を利根川と呼び、江戸川の稱は寛文年間關宿城主板倉氏が逆川を修築して赤堀川の水を引き、常陸の利根川より舟棹を通じたる以來に屬すと云ふ。夏季此川に涼を追ふ者多く、近來水泳場を設く

●鴻の臺總寧寺 (下總)

鴻之臺一に國府臺と書す、市川町の北方に聳ゆる一帯の高丘にして斷崖水面を抜く數十丈、江戸川の碧流に臨んで鬱蒼たる幽姿を映す、而して野戰砲兵第二旅團は茲に其兵營を置けり、兵營の北方、蒼然たる一古刹あり、即ち是れ總寧寺なり山號を安國山と云ひ曹洞宗に屬す、徳川幕府時代に在りては關東僧祿三寺の一として曹洞宗僧侶の任免を掌りたり。佛殿、方丈、庫裡其他の建築具備し結構又莊麗なり。境内に里見弘次の墓、小笠原貞頼の墓、太田道灌手植の榎梅等あり。當時は永徳三年佐々木氏頼近江に建立せしを天文三年關宿に移し、後寛文三年に至り徳川家綱の命に依て此地に移利せるものなりと云ふ。

●法寺、一葉楓 (下總)

市川町大字真間に在り、真間山と號す寺は南面して真間川、市川町を下瞰す、昔時弘法大師の遺跡なりしが、日蓮上人亦茲に來つて教法を弘通し六門家の一と稱せらる、一名を真間寺と稱し、又真間法華堂とも云ふ、今世日蓮宗池上本門寺の屬末となれり、本尊は釋迦如來にして富城常忍の作と傳ふ。又樓門の金剛力士は運慶の作なり。開基は富城常忍にして開山は日頂上人なり、寺は真間山の半腹に建立せられ、寺域鬱蒼として幽邃を極び、麓より六十餘級の石磴を昇りて本堂に達す、二王門、中門、本堂、常唱堂、祖師堂等あり。又境内楓樹甚だ多く、晩秋紅葉の季節は満山錦繡を結びて美觀言ふべからず、都人士を始め遠近訪を曳く觀楓客頗る多し、蓋し東京近郊に於ける一勝區たるを失はず。又境内に二葉楓と稱する有名なる楓樹あり、同寺に賽する者は必ず一觀するを忘れざるなり。

●里見氏墓 (下總)

市川町鴻の臺なる斷崖上、天主臺の舊址に在り。史を按ずるに鴻の臺は永祿七年里見義弘此地に屯し北條氏の敵を邀へて激戰を演じたるが終に敗れて安房に退きたり。是れ即ち鴻の臺の役にして、斷崖絶壁の上、樹木鬱然たる裡、里見氏の墳墓、北條氏の床几塚、抜け穴、夜泣石、羅漢井等あり。又斷崖の下に鐘ヶ淵と稱する地は當時里見氏船橋慈雲寺の鐘を奪ひ來つて軍鐘に用ひ居りしに、誤つて其鐘を此淵に沈没せしめたるより名くと云ふ。總て此邊文明以降永祿に至る年間は戰鬪相繼げる史蹟にして、其颯々たる松籟を聴き、自然の幽趣を掬すると共に英雄興亡の跡を追想して轉た感慨に堪へざるものあるなり。

●柴又帝釋天 (下總)

南葛飾郡金町村大字柴又在り。寺を經榮山題經寺と云ふ、然も世人多く寺名を言はず、唯だ柴又帝釋天の語を以て著しく知らる。寛永六年(或は三年と云)本山十九世禪那院日忠の草創にして、此僧を以て開山とす、後、延寶年間に至り、本山の塔頭後院正善坊日遠當寺を兼帯して功ありしを以て中興と稱せり。寺傳に據れば當寺は素と一草庵に過ぎざりしが日蓮上人の彫刻せしと傳ふる祈禱本尊なるもの寺寶として存する事を古くより言ひ傳へしも其本尊の所在を知らざりき、然るに安永八年本堂再建の際、棟上より長二尺五寸、幅一尺五寸、厚五分許の板現はれたるを以て水にて其煤塵を清め見たるに、片面は病即消滅の本尊を彫刻し、他面には帝釋天の像を刻せり、而して該板材は其小口、松に似て或は檜に類し、堅くして重き事尋常にあらざるより、是れ即ち言傳ふる所の日蓮自刻の寺寶なりと、直に此旨本山に告げ、其屋根裏より出現の日は恰も帝釋天に因みある庚申の日に當りしを以て、以來其日を縁日と爲せるが近郷の人之を信する者漸次増加し、帝釋天の像を懇請する者あれば、該板の兩面を摺寫して與へたりと云ふ。又一説に曰く、該板は梨板にして片面は中央に首題及左右に兩尊四菩薩、又病即消滅等の數字を刻し、其下に五月日とありて大士の號及び花押を印せり。又片面は帝釋天王の影像なり、右手に劍を持し、左手は開きて忿怒の相を顯はせり、是れ除病延壽の本尊惡魔降伏の尊容にて信敬の輩には是を印して與ふ、點畫鮮明にして稀代の本尊なりと。文化年代の書「四方の道草」には當寺は堂の大き六間許り西向なり側にも堂あり日蓮を置にや、帝釋天本尊は厨子の戸建たれば見へす云々と記せり。

【下總】

松柏庵森佛寺開 悵然憶古上荒臺
千秋誰弔英雄恨 澹々長空一雁來

齋藤 拙堂

●成田新勝寺 (下總)

印旛郡成田町に在り、寺は神護新勝寺と稱し、成田山明玉院と號す、有名なる成田不動尊是れなり、堂は成田山の山腹に所在す、本尊不動尊の像は長六尺弘法大師の作にして素と山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の本尊たりしが朱雀帝の御宇天慶二年平將門當國に借都を構へ亂を起せし時、天皇廣澤遍照寺の寛朝僧正に勅して調伏の法を修せしめらるゝに際し、寛朝僧正此像を奉じて當國に來り護摩を焚て修法せり後幾くもなく將門は平貞盛、藤原秀郷等の爲めに誅せらるゝに及び、寛朝再び不動の像を奉じて京師に歸らんとせしに像動かす、且つ靈夢の感に依て永く此地に留る事とし、新に伽藍を建立して高雄山の寺號に因み神護新勝寺と稱せりと云ふ。寺域三千六百六十五坪老杉巨松鬱然たる裡に莊麗なる本堂あり麓より石甃を疊重して仁王門に至る、左側に辨天堂、通眼院、本坊、祖師堂、大師堂あり、右側に彌陀堂、正福院あり、正面本堂の右方には接待處、鐘樓、寶塔、經藏、額堂等あり、光明堂、奥の院は本堂背後の高處に在り。遠近の道俗、信者日々群集し、境内常に雜沓を極む。境内に延元年間の板碑あり、俗に傳へて補正成の追福碑と云ふ、寺傳に其證據の據るべきものなきも、其碑面に延元元年丙子八月二十六日生靈百ヶ日忌辰の爲めに建つる旨を記したれば、此年代より推究して正しく兵庫合戰當時に死せる人の爲めなる事を知るに足るべし。

●中山法華經寺 (下總)

日蓮宗大本山の一にして正中山と號す、東葛飾郡中山村大字中山に在り、寺域一萬四千七百七十四坪、本堂を中央とし、經藏、骨堂、五重塔、鼓樓、常唱堂等相連

り、背後の小丘上には鬼子母神堂、祖師說法堂、祈禱堂あり、客殿、方丈は牆壁中に建てり而して奥の院は構外右方の東北三町を隔ちたる地に在り。寺傳に據れば建長六年日蓮上人下總より鎌倉に歸らんとするに際し中山村の住人富木播磨守常忍亦鎌倉に赴かんとして日蓮と船を同うし日蓮の所説を聞いて大に敬服し、文應元年遂に宅地を捨て、一字を建立し日蓮を聘して之に居らしむ、日蓮茲に於て百日間の説法を試み又自ら一尊四菩薩の像を彫刻して其堂に安んじ之を法華堂と名けたり、是れ即ち今の奥の院にして實に當寺の草創なりとす。境内常唱堂の背後に齋舎たる一株の公孫樹あり、稱して泣銀杏と云ふ、傳へ曰ふ、真開弘法寺の開山日頂上人其父常忍の怒に觸るゝ事ありて對顔するを許されざる事數年、日頂屢々當寺に來り此公孫樹下に泣き居りたりと、是れ其名稱ある所以なりと云ふ。泣銀杏の東方に鏡が池あり、傍らに題目碑を建つ、是れ宗祖日蓮上人の姿見の池なりと云ふ。

●宗吾靈堂 (下總)

演劇、戯曲、小説、講談等に於て有名なる佐倉の義民木内宗吾の靈を祀れるもの。印旛郡公津村大字臺子に在り。此地は即ち其の遺骸を埋葬せる所なりと云ふ。境域約二千餘坪、供養堂、念佛堂、五靈堂、大師堂、額堂等連立す、墓碑は奥の院に在り舊佐倉の領主堀田氏の建設に係る。前面に宗吾の法名「德滿院涼風道閑居士」の九字を鐫し、左右兩側に、宗吾の四子、彦七、徳治、乙治、徳松の法號を刻す。本堂創立時代は詳に知るを得ざるも、念佛堂の如きは古くより存したるもの、如し、始めて供養堂を建立せしは文政十三年に在り。毎年八月三日大法會を執行す、是れ宗吾一族が礎殺せられたる忌日

にして、其前夜は遠夜と稱して遠近より來賓するもの夥しく、社域群集雜沓を極む、因に云ふ、佐倉停車場より二十町を隔てたる地に一丘阜あり茨良臺と稱す、是れ昔時堀田氏の刑場にして、宗吾は實に茲地に於て磔刑に處せられたるなりと云ふ。

●猪鼻臺舊城址 (下總)

千葉町の東南に横はれる一小丘にして昔時千葉氏の歴世據守したる舊城址なり巖崖數百尺、丘上古松老樹多くして鬱然として茂生す、此地海中に差し出で眺望快豁にして袖ヶ浦の風光を一眸に收め、總房の翠巒指呼に應せんとす、絶勝蓋し千葉隨一と稱せらる、一書に云ふ、猪は水の涪れる狀、鼻は物のさし出でたる態にて、此地に相應せるより名くと、昔時は此地に大なる池ありしと、今尚池田郷の名の存するは之が爲めなりとぞ。按ずるに千葉氏は其先高望王に出で、數世の後、平忠常下總介となり、其子小次郎常將に至り始めて此地に居り、千葉を以て氏とす、爾來子孫其任を襲ぎ千葉城に據り千葉介と稱す、玄孫常胤、結城朝光と共に源頼朝に従ひ、當國の守護と爲り以て子孫に傳へ、後、上總の北境を併有す、建武中興の際、足利尊氏を守護とす、次で尊氏の反するや、千葉貞胤、結城直朝等之に屬す、而して千葉氏此地を守護する故の如し、其後管領足利持氏亡び其子成氏管領となり結城氏に擁せられ兩上杉を伐つて破れ古河に退くや胤直上杉氏に黨したるが其叔父馬加康胤の爲めに襲殺さる康胤乃ち千葉城に據り印旛以東の地を領し結城氏と共に成氏を戴き、關東八館皆古河に觀す、天文中里見氏下總を侵略す、千葉、結城漸次衰へて遂に北條氏に屬す。長祿中馬加康胤の子輔胤佐倉城に移りてより千葉城全く廢滅す。

新 山 田 成



寺 經 華 法 山 中

身命を尊貴時に死せる人の爲めなる事を知るに足るべし。

●中山法華經寺（下總）

日蓮宗四大本山の一にして正中山と號す、東葛飾郡中山村大字中山に在り、寺域一萬四千七百七十四坪、本堂を中央とし、經藏、骨堂、五重塔、鼓樓、常唱堂等相連

に係る。前面に宗吾の法名「德滿院涼風道閑居士」の九字を鐫し、左右兩側に、宗吾の四子、彦七、徳治、乙治、徳松の法號を刻す。本堂創立時代は詳に知るを得ざるも、念佛堂の如きは古くより存したるもの、如し、始めて供養堂を建立せしは文政十三年に在り。毎年八月三日大法會を執行す、是れ宗吾一族が礎殺さられたる忌日

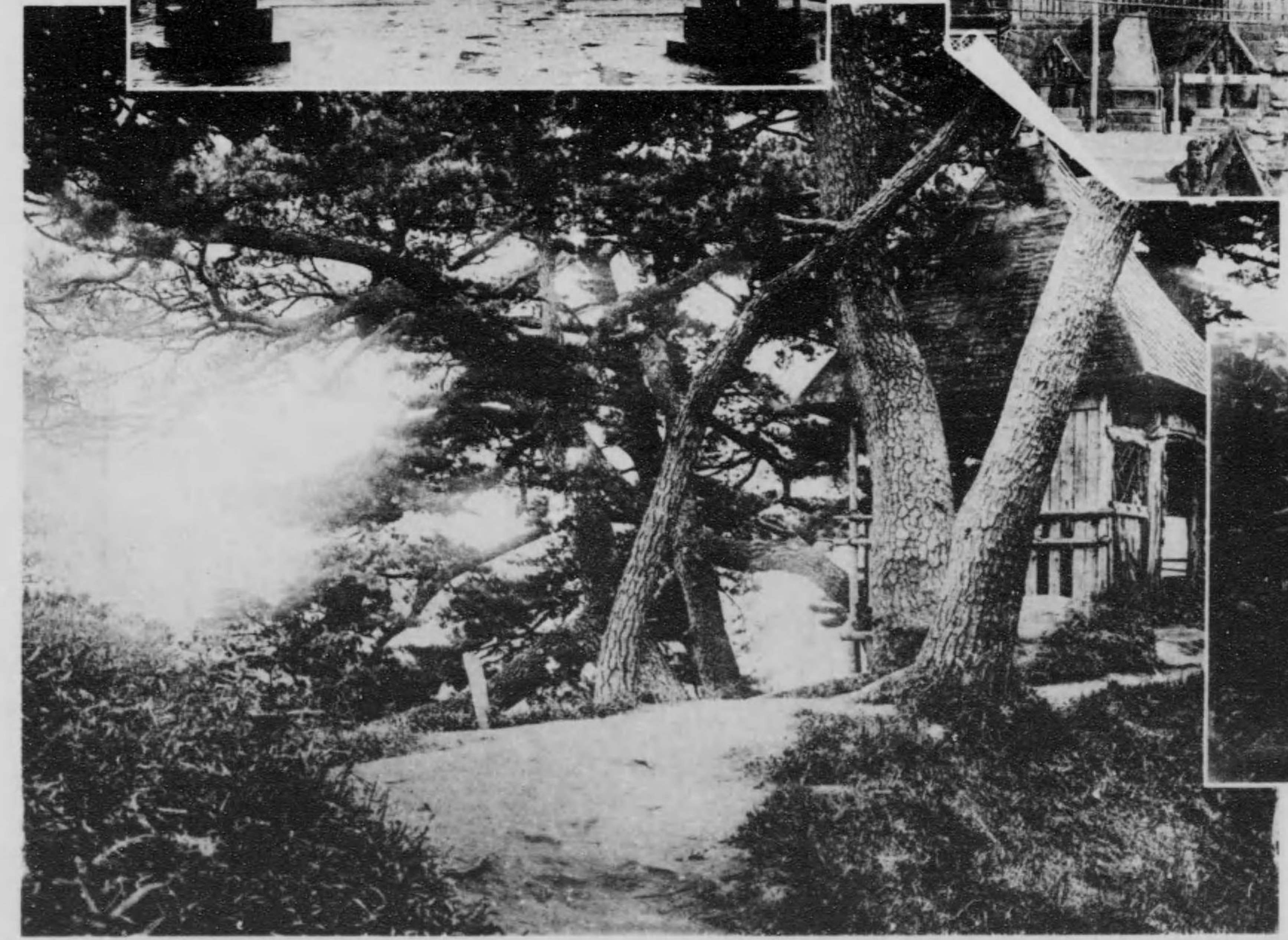
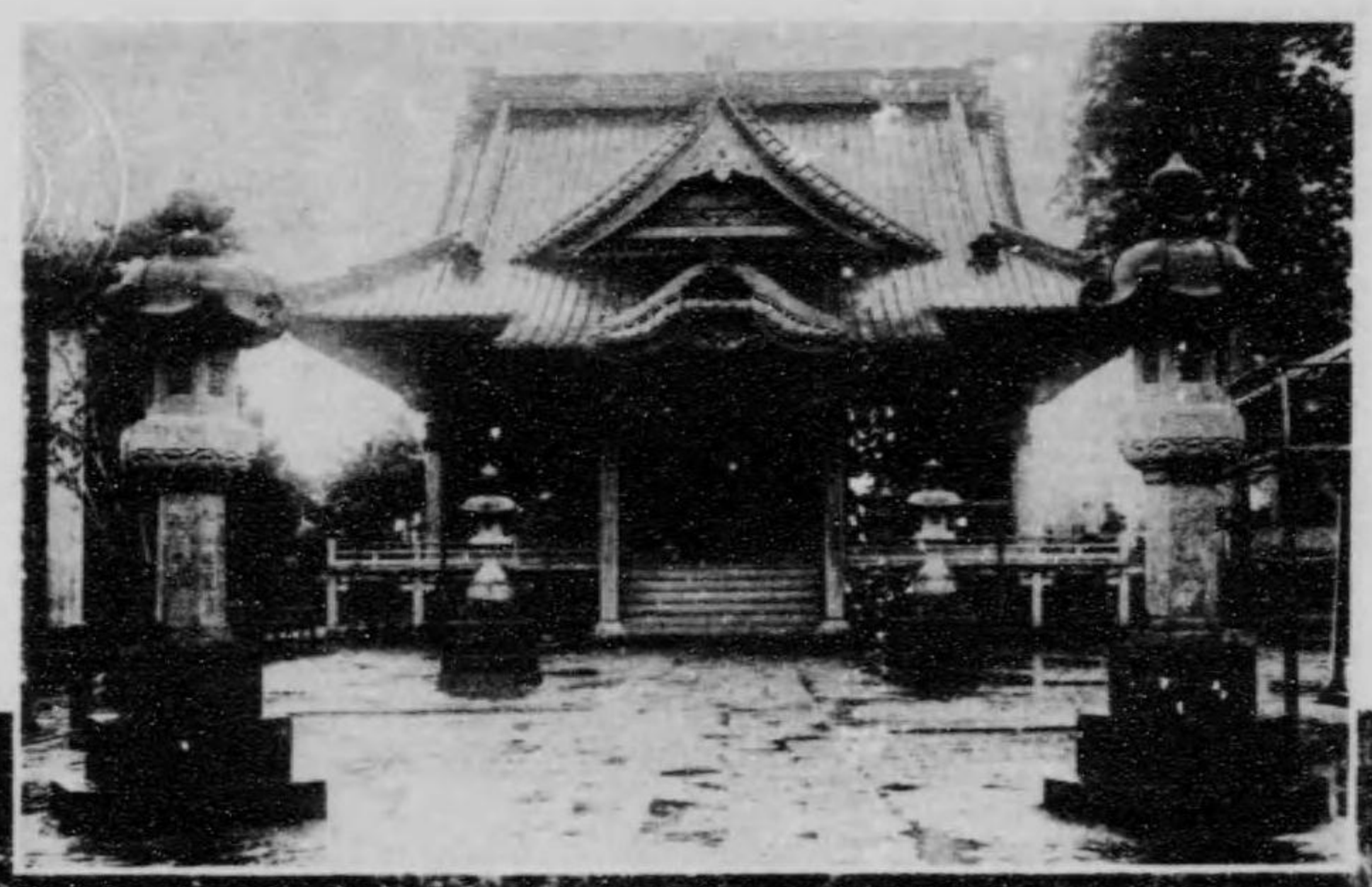
つて破れ古河に退くや胤直上杉氏に黨したるが其叔父馬加康胤の爲めに襲殺さる康胤乃ち千葉城に據り印旛以東の地を領し結城氏と共に成氏を戴き、關東八館皆古河に覲す、天文中里見氏下總を侵略す、千葉、結城漸次衰へて遂に北條氏に屬す。長祿中馬加康胤の子輔胤佐倉城に移りてより千葉城全く廢滅す。

寺勝新山田成



寺經華法山中

堂靈吾宗

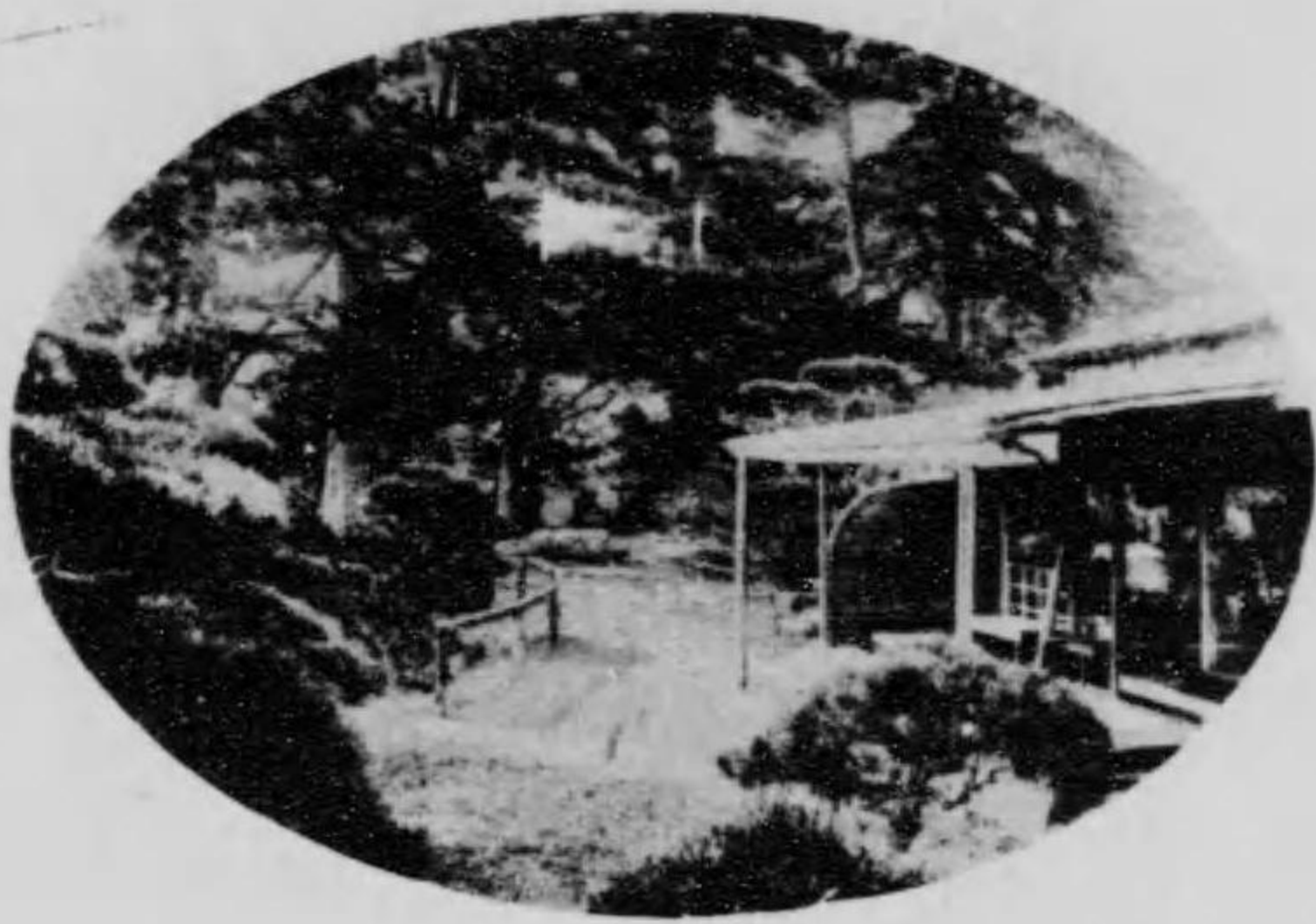


址城古臺鼻結

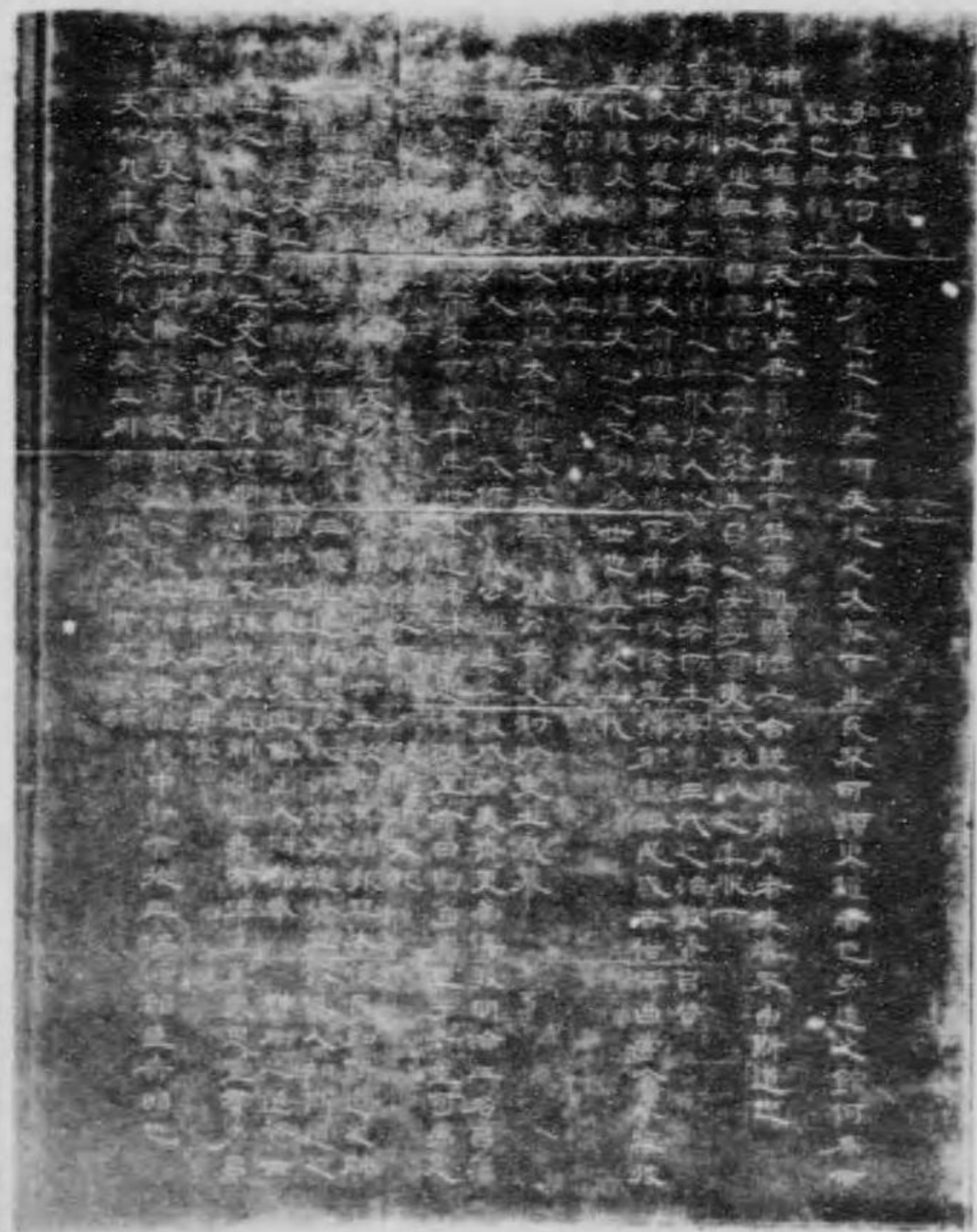
林梅園公盤常



園公戶水



碑館道弘



●水戸常盤公園 (常陸)

水戸市上市の西南端に在り、地域三萬五千坪東北は繞らずに土壘を以てし西南は岨地にして西方稍々高く、田圃を隔てて縁岡櫻山の高丘に對し、遙かに筑波の秀峰を望む、又近く仙波沼を下瞰し、風光頗る明媚なり。而して園内東北の方面は總て梅林にして、巨幹老枝、横斜各其姿趣を異にす、若し夫れ三月蕾を破るの候



亭文軒及園公盤常

る者麤集し頗る雜沓を極む。當神社の神樂殿には有名なる大鼓を備ふ、是れ天保中景山公退鳥狩の際用ひたるものにして烈公の撰に係る左の銘を記せり。

震天動地 起雲發風 三軍踴躍
進思盡忠

天保十二年辛丑冬十一月

●烈公肖像、筆蹟 (常陸)

烈公、名は齊昭、字は子信、景山と號

梅山年八十五
回身何力連理
如夢如雲以爲
夫也世蓋亦久矣、我東照宮撥亂反正、
尊王攘夷、允武允文、以開太平之基、
我祖威公實受封於東土、夙慕日本武尊
之爲人、尊神道繕武備、義公繼述、嘗
發感於夷齊、更尊儒教、明倫正名、以藩
屏於國家、爾來百數十年、世承遺緒、沐
浴恩澤以至今日、則苟爲臣子者、豈可
弗思所以推弘斯道、發揚先德乎、此則

設筆昭齊川鏡



●水戸常盤公園 (常陸)

水戸市上市の西南端に在り、地域三萬五千坪東北は繞らずに土壘を以てし西南は岨地にして西方稍々高く、田圃を隔てて緑岡櫻山の高丘に對し、遙かに筑波の秀峰を望む、又近く仙波沼を下瞰し、風光頗る明媚なり。而して園内東北の方面は總て梅林にして、巨幹老枝、横斜各其姿趣を異にす、若し夫れ三月雷を破るの候に至れば、全林、恰も雪と怪み雲と疑ひ満園清香化せずんばならず、且つ園中樹石の布置人工を用ゐずして自然の風趣を備ふ、園の南方には宮城野の萩數百株ありて、秋季は一層の美觀を呈す、傳へ曰ふ是れ萬治年間、藩祖威公の息女喜久姫、重臣松平兼康に嫁し、兼康歿後此地を賜はり芳園尼と號し草庵を結びたりと。當公園は素と七福神を勧請せる七面社存在地なりしが天保年間烈公此地の風光を愛して神祠を見川村妙雲寺内に移し、此地を開きて遊息地とし借樂園と名け、同時に多數の梅樹を植え、亭を設けて好文と稱し樓を建てて樂壽と命せり、臺榭の構造、庭苑の意匠頗る技巧を極む、廢藩後水戸家より之を官に納め縣廳之を管理したりしが、明治六年公園地とし維持費として金五百圓を賜ひ常盤公園と稱す、後又水戸市の有に歸したり。岡山の後樂園、金澤の兼六公園と共に日本三公園と稱せらる。

●常盤神社 (常陸)

水戸市常盤公園借樂園の東隣に在り、水戸光園、及び水戸齊昭兩脚の靈を祀る、明治五年の創建にして、翌六年縣社に列し、十五年別格官幣社と爲る、社域一千坪、本社、拜殿、神樂殿、御供神庫、神井、神門、神馬舎、華表、其他諸種の設備あり、毎年五月十二日祭典を執行す遠近來賽す

【常 陸】

る者瞻集し頗る雜沓を極む。當神社の神樂殿には有名なる大鼓を備ふ、是れ天保中景山公退鳥狩の際用ひたるものにして烈公の撰に係る左の銘を記せり。

震天動地 起雲發風 三軍踴躍
進思盡忠
天保十二年辛丑冬十一月

●烈公肖像、筆蹟 (常陸)

烈公、名は齊昭、字は子信、景山と號す、烈公は歿後の私諡なり、父治紀の後を承けて水戸藩主となり、藩政に傾注し又深く王事に盡瘁す、嘉永六年米艦の來航して通商を乞ふに當り、全國騷然として紛糾を極むるや尊王攘夷黨の盟主を以て目され、爲めに幕府の忌む所となりて其封土に幽閉せらる、萬延元年八月十五日水戸城中に於て薨す、享年六十一、明治元年從一位を贈らる。

●弘道館碑 (常陸)

水戸市第二公園内の中央、八角堂内に在り。寒水石にして高さ一丈二尺、幅五尺八寸、厚さ二尺、烈公の遺文に係り、書も亦公の筆なり、碑を容れたる堂は八角寶形造りにして屋根は銅板を以て葺き、八方承座の間に八封を刻す、人呼で八封堂と云ふ、有名なる碑石にして、水戸に遊ぶ者は必ず此碑を見るを常とす、碑文は左の如し。

弘道館記

弘道者何、人能弘道也、道者何、天地之大經、而民生不可須臾離者也、弘道之館、何爲而設也、恭惟、上古神聖立極垂統、天地位焉、萬物育焉、其所以昭六合統御宇內者、未嘗不由斯道也、實祚以之無究、國體以之尊嚴、蒼生以之安寧、蠻夷戎狄以之卒服、而聖子神孫、尙不肯自足、樂取於人以爲善乃若西土唐虞三代之治教資以贊皇猷、於是斯道愈大愈明、而無復尙焉、中世以降

異端邪說、誣民惑世、信佛曲學、舍此從彼、皇化陵夷、禍亂相踵、大道之不明於世也蓋亦久矣、我東照宮撥亂反正、尊王攘夷、允武允文、以開太平之基、我祖威公實受封於東土、夙慕日本武尊之爲人、尊神道繕武備、義公繼述、嘗發威於夷齊、更尊儒教、明倫正名、以藩屏於國家、爾來百數十年、世承遺緒、沐浴恩澤以至今日、則苟爲臣子者、豈可弗思所以推弘斯道、發揚先德乎、此則館之所以爲設也、抑夫祀建御雷神者何、以其亮天功於蒙昧留威靈於茲土、欲原其始報其本使民知斯道之所繇來也、其營孔子廟者何、以唐虞三代道、折衷於此欲欽其德資其教、使人知斯道之所以益大且明不偶然也、嗚呼我國中士民、夙夜匪解、出入斯館奉神州之道、資西土之教、忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其効、敬神崇儒、無有偏黨、集衆思、宣群力、以報國家無究之恩、則豈徒祖宗之志弗墜、神皇在天之靈亦將降鑒焉、設此館以統其治教者誰、權中納言從三位源朝臣齊昭也

●水戸公園 (常陸)

舊水戸城址の西方、字三の丸に在り、素弘道館の所在地にして坪數一萬七千六百五十坪を有す、東方に門あり、門を入れば正面に舊弘道館の講堂あり、園の中央八角堂には有名なる弘道館の碑を藏む其他鹿島神社、要石歌の碑、種梅の碑、警鐘等皆園内に散在す、又北方通用門の右側に孔子廟あり、正門戟門を設けて大成殿に擬す、園内梅樹多く花季は清香飄郁として袂袖を襲ひ節を曳く文人騷客甚だ多し。此地明治八年の開園にして常盤公園に對して第二公園と稱し、又水戸公園とも云ふ。

霞ヶ浦 (常陸)

常陸の南部に位置し、行方、東茨城、稲敷、新治の四郡及び下總の香取郡に圍繞せられ、北西及び南西に彎入す、而して餘水は南東偏なる行方香取兩郡の界に至り、牽りて北利根川となり浪逆浦に通じ、次に利根川に注ぎ末流遂に銚子に至りて海に入る、東西七里三十五町、南北三里六町、周圍三十四里十七町、面積三萬一千〇〇七町を有し日本第二の大湖と稱せらる。

順徳院

ほのかにも知らせてしかなあづまなる霞の浦のあまのいざり火

土浦海岸 (常陸)

新治郡の南端に在り、其霞ヶ浦に濱する一帯は即ち土浦海岸なり市街は濱街道の要衝にて繁盛を極め、常陸第二の都會と稱せらる、土浦停車場附近は背後に丘陵を負ひ、前面霞ヶ浦に臨み風光甚だ明媚、古人此地の勝を賞して土浦八景なるものあり、曰く霞ヶ浦の歸帆、田面の落雁、小松の秋月、照井の晚鐘、錢龜の夕照、田村の夜雨、高津の晴嵐、筑波の暮雪なり、市街の内字西町には土浦城址あり、相傳ふ是れ平親王將門の築く所なりと、永享中若泉氏之に據り爾後幾多の變遷を経て天正十八年城主菅谷範政、豊臣氏の爲めに滅され後豊臣氏之を結城秀康に與ふ徳川氏の覇たるに及び、藤井、西尾、松木、土屋、大河内の諸氏交々封を茲に受けしが最後に土屋氏居城して以て明治維新に至れり。常陸大塚平國香の墓は同町字明神に在り土人五總社明神と稱す。土浦八景詠歌中の一に曰く

吹く風もなきし霞ヶ浦近く

連れてみなどへ歸る友船

關城址 (常陸)

是れ南朝の忠臣關宗祐父子、北畠親房

公を奉じて孤軍奮闘せる地にして眞壁郡大寶沼の西に在り。城址は沼の北岸より突出せる丘陵の端に在りて、東西南の三面は水を繞らし、遠く筑波の秀峰を望みて風光甚だ佳なり。史を按ずるに延元年間北畠親房結城宗朝等と義良親王を奉じて陸奥に赴かんとし海路暴風に逢ふて、船海上に漂ふ事數日一行離散して親房の船獨り常陸國に着し直に小田城に入り附近の諸城主之を迎へたるが、興國二年親房小田城を去つて關城に遷るや賊軍の將高師冬來つて之を攻圍す、次で僧圓琳を城中に遣はし和を勸む、親房答へず、此時に當り關東の諸官軍僅に六城に過ぎず四年賊は野草を運搬し來つて關城の塹を埋め又地道を穿ち且つ柵を城外に設けて官軍の出路を塞ぐ、官軍亦城中より地道を穿ち草を奪ひ柵を抜く、偶々地道崩壊して賊の鑛夫壓死す、茲に於て賊將師冬其益なきを知り之を罷む、八月賊軍大船を大寶沼に泛べ營を連ねて水陸の往返を斷ち一齊に關、大寶の二城を攻む、二城連絡を斷たれて兩城遂に陥る此時關宗祐及其子宗政、下妻政泰等之に戦死す親房逃れて吉野に歸る、親房關城の孤壘を守りし事、實に五年なりき。

千波沼 (常陸)

水戸市上市の南、下市の西方に在る一池塘にして、周圍約一里二十六町、櫻川、逆川の二水茲に注瀉す、其水甚だ清澄ならざるも然も四時の眺望又捨て難き風趣あり水戸光園嘗て千波沼の八景を撰みたり、曰く七面山秋月、神崎寺晚鐘、梅戸夕照、子谷歸帆、柳堤夜雨、藤柳晴嵐、封田落雁、綠岡暮雪是れなり、是れ蓋し湖岸眺望の勝を選べるものなるべし。

磯前神社 (常陸)

東茨城郡大洗海水浴場の後丘に鎮座

す、國幣中社にして大己貴命、少彥名命を合祀す、草創は古く齊衡年間に在り、現今の社殿は水戸義公の造營に係ると云ふ、結構太だ清雅にして老松社域に繁茂し、樹間太平洋の海波を望みて風趣頗る佳絶なり人口に膾炙する俗歌「磯で名所」の磯節は實に此地を詠ひたるものなり、社背に平地あり、子の日原といふ。天保年間に建てたる烈公の歌碑あり左の歌を刻す。

萬代を松に契りて今日までに

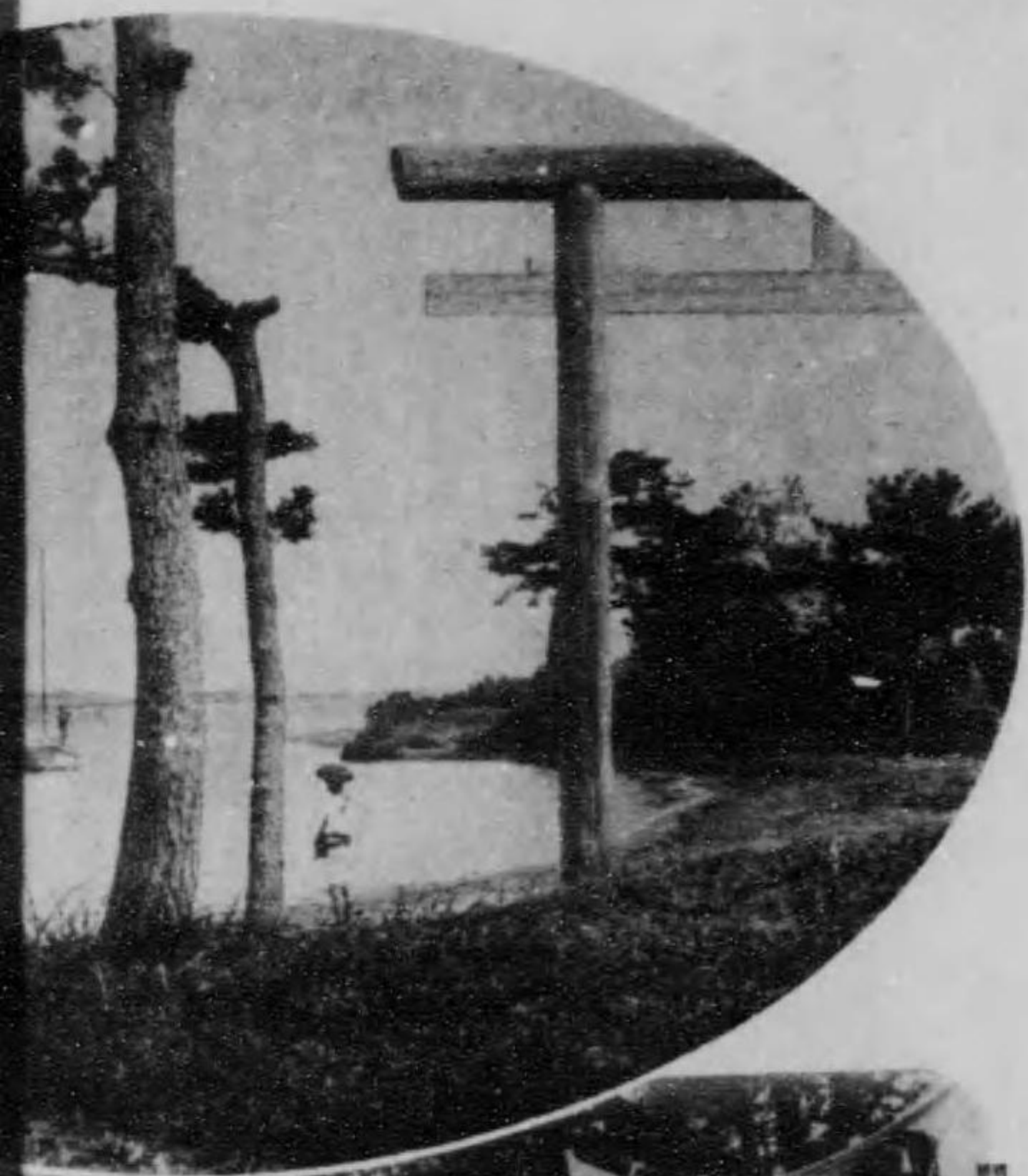
子の日の松にひかれ來にけり

因に曰ふ、當神社は那珂郡の酒列磯前神社と相對比する明神にて、俗に鬼洗明神とも稱するは蓋し訛傳なりと云ふ、又延喜式には鹿島郡大洗磯前藥師菩薩神社と載せ大神と注せらる。

北畠親房遺蹟 (常陸)

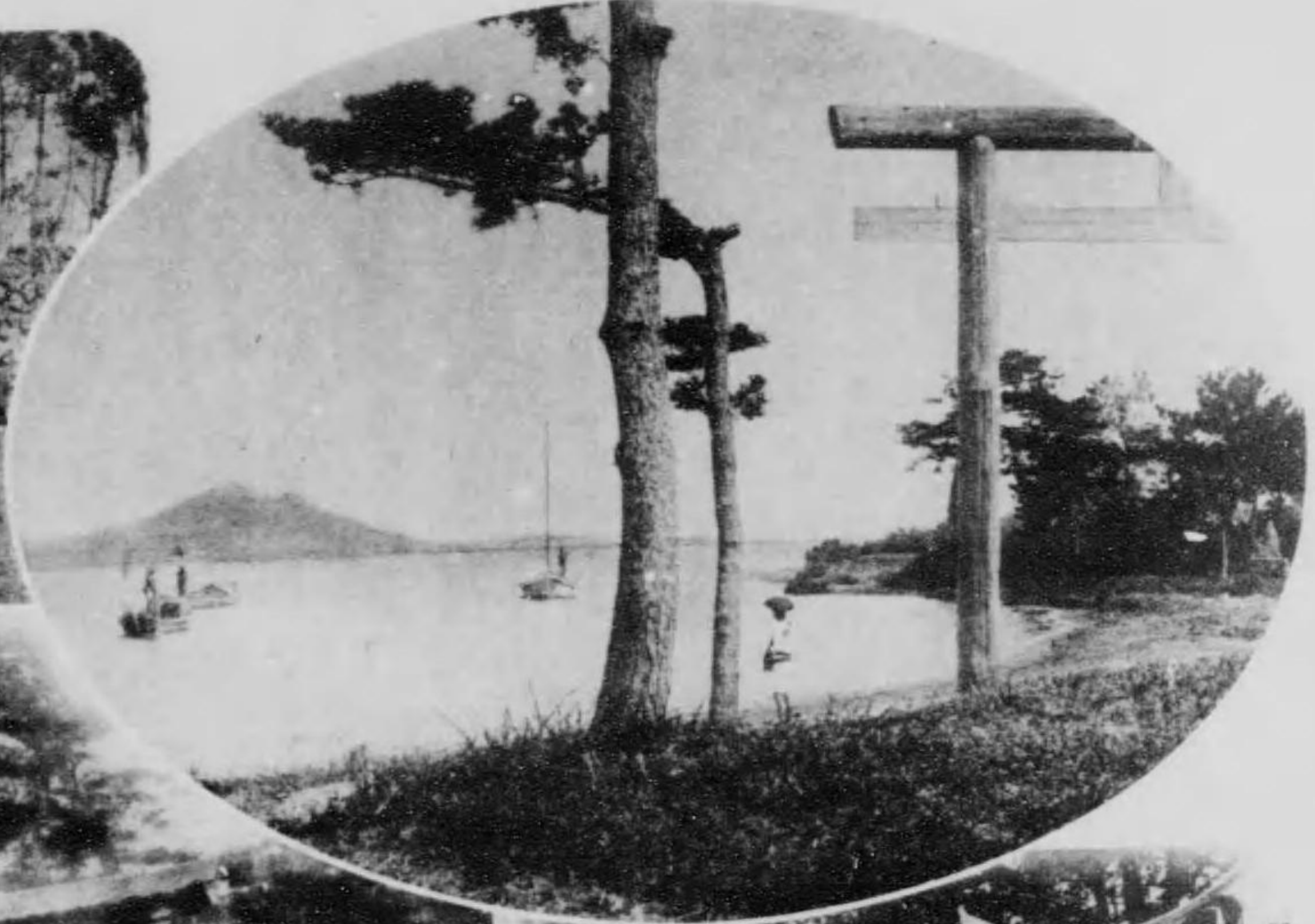
筑波郡小田村大字南部字本城に在り、此地小田山の麓にして方五町許の地に塹壕壘壁の現存するもの、是れ小田城址にして即ち南朝の忠臣北畠親房の孤軍に據りて雲霞の如き賊軍に當り死力を竭して防守したる遺蹟なり。小田城は文治年間八田知家の創築に係り、歴世茲に據りたるが元弘の始め藤原藤房の當國に配せらるゝに方り知家六世の孫高知之を監守し、後足利尊氏の叛するや其子治久足利氏に屬し北畠顯家と陸奥に戦て敗れ、次で親房義良親王を奉じて陸奥に赴く途中海上颶風に逢ふて此地に漂着す治久乃ち附近の諸城主と共に迎へて官軍に應じ親房を奉じて屢々城と戦ひしが賊軍の猖獗なるを見て終に再び賊軍に降り、爾後歴世足利氏に屬したるが、末世に至り北條氏に歸し、上杉氏の臣太田氏に攻められ城遂に陥る、後太田氏茲に居城したるも慶長年間に至つて廢城に歸せり。

王天浦・霞



土浦海岸

碑王大浦ノ霞



嶽道房秋島北



沼波ナ



土屋、大河内の諸氏交々封を茲に受けしが最後に土屋氏居城して以て明治維新に至れり。常陸大塚平國香の墓は同町字明神に在り土人五總社明神と稱す。土浦八景詠歌中の一に曰く
吹く風もなきし霞ヶ浦近く
連れてみたとへ歸る友船

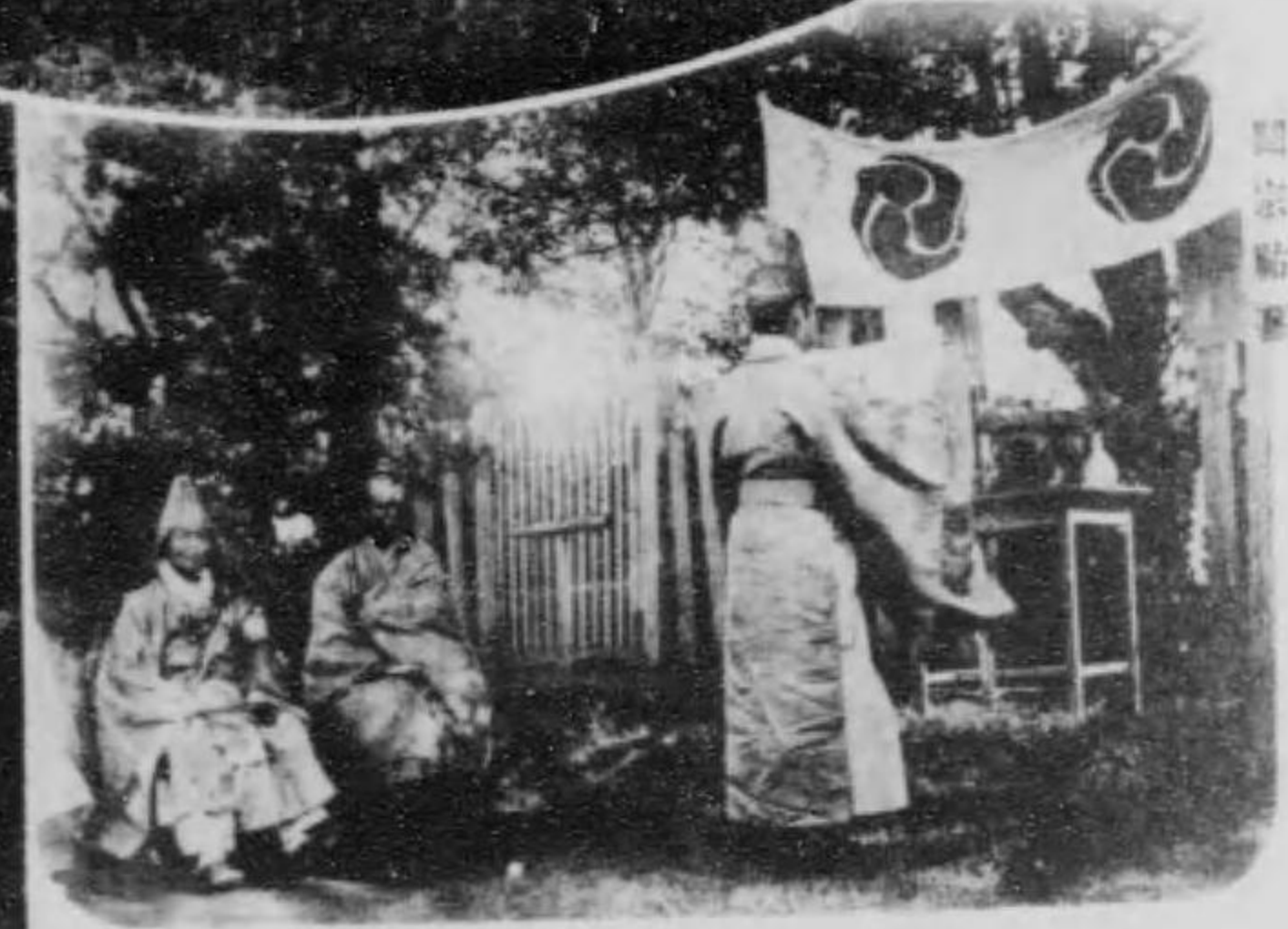
●關城址 (常陸)

是れ南朝の忠臣關宗祐父子、北畠親房

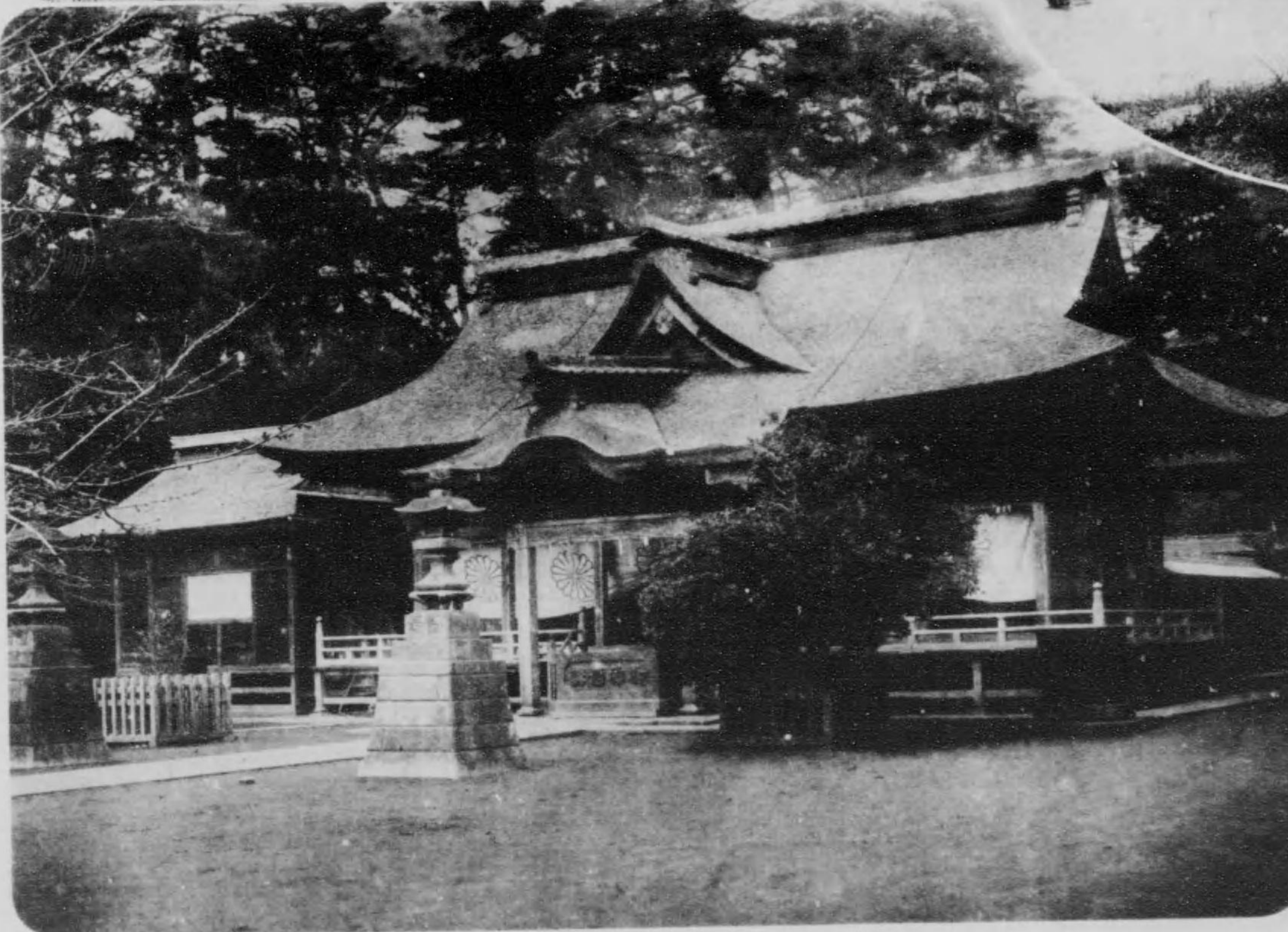
逆川の二水茲に注瀉す、其水甚だ清澄ならざるも然も四時の眺望又捨て難き風趣あり水戸光園嘗て千波沼の八景を撰みたり、曰く七面山秋月、神崎寺晚鐘、梅戸夕照、子谷歸帆、柳堤夜雨、藤柄晴嵐、封田落雁、緑岡暮雪是れなり、是れ蓋し湖岸眺望の勝を選べるものなるべし。

●磯前神社 (常陸)

東茨城郡大洗海水浴場の後丘に鎮座



で親房義良親王を奉じて陸奥に赴く途中海上颶風に逢ふて此地に漂着す治久乃も附近の諸城主と共に迎へて官軍に應じ親房を奉じて屢々賊と戦ひしが賊軍の猖獗なるを見て終に再び賊軍に降り、爾後歴世足利氏に屬したるが、末世に至り北條氏に歸し、上杉氏の臣太田氏に攻められ城遂に陥る、後太田氏茲に居城したるも慶長年間に至つて廢城に歸せり。

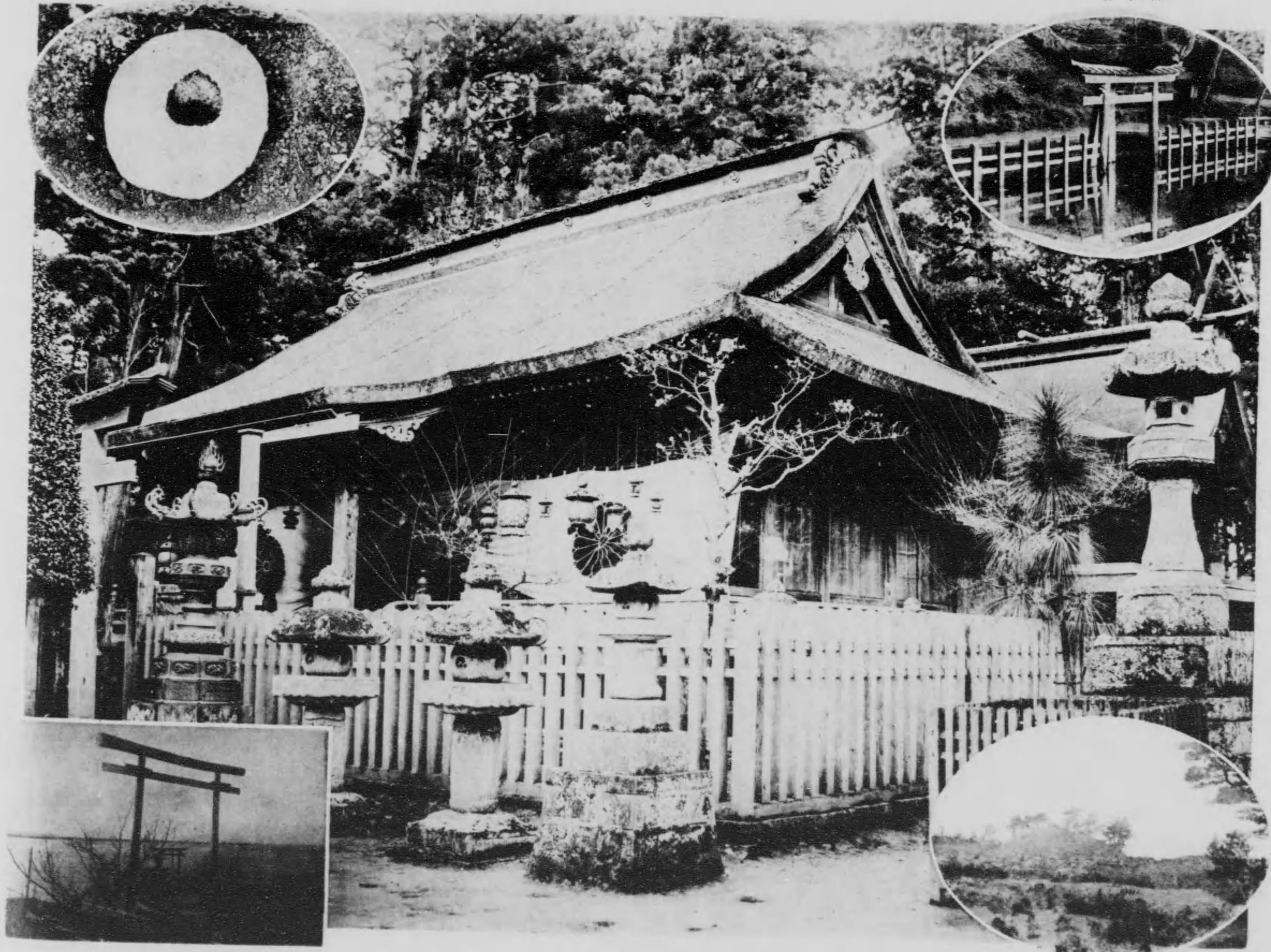


社 神 前 磯

岸 浦 土

石 委

洗 手 御



社 鐘 栖 息

宮 神 島 鹿

原 々 天 高

● 鹿島神宮 (常陸)

鹿島郡の中央に鎮座す、官幣大社にして祭神は武甕槌大神を主神とし、経津主神及び天兒屋命を配祀す、創營は古く神武天皇元年辛酉にして、其後二十年に一回造替を行ふと云ふ。現存の神宮は元和四年の構造にして、宮殿の金碧に彩は寶曆二年の修理に係るものなり。境内樹木

藤原 定家

鹿島野や檜原杉原ときはなる

君が榮は神のまに〜

顯 雅

常陸なる鹿島の宮の宮柱

猶よろづ代も君がためとか

西行 法師

あら日さす鹿島の杉の夕かげで

曇らす照せよをうみの宮

赤原と云ふと、俗説念よ出で、愈よ紛々たり。

たり。

公 實

春霞高間の浦をこめぬれば

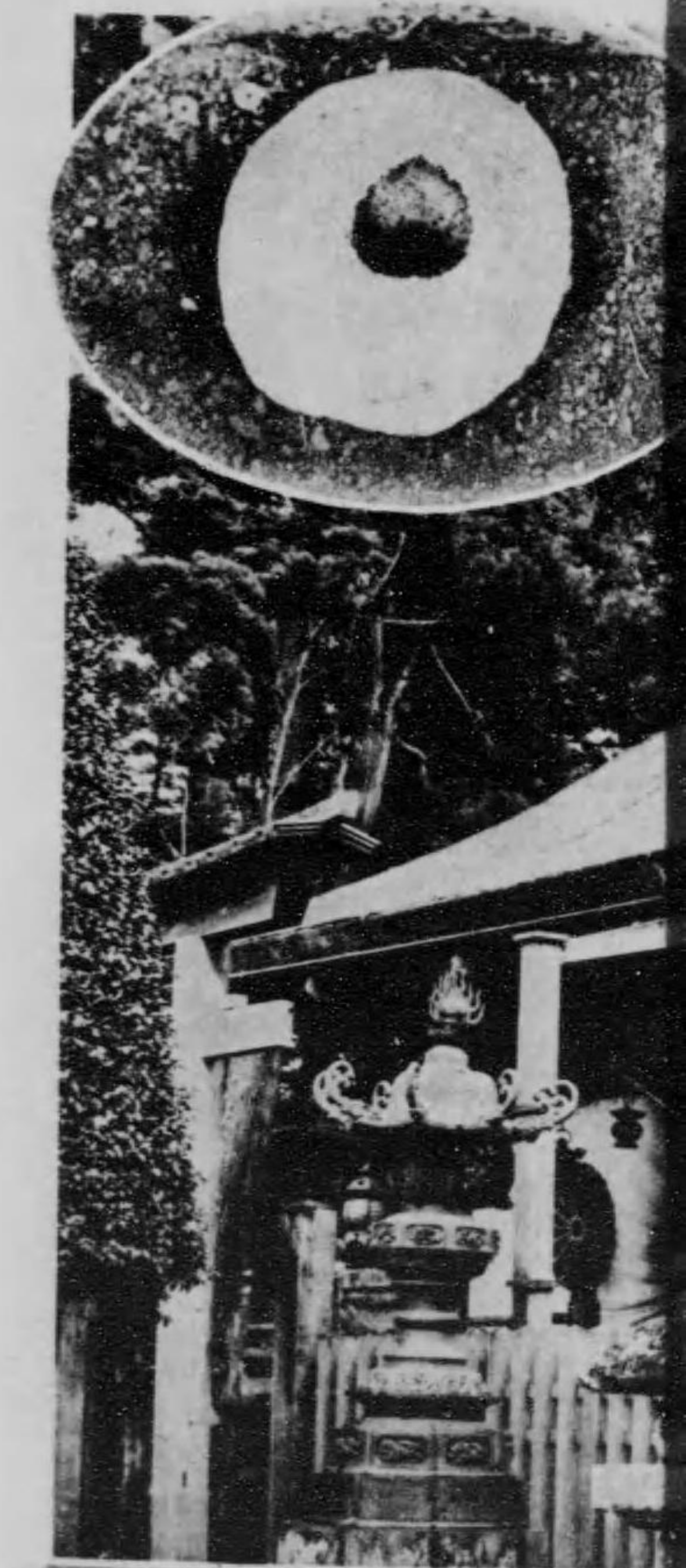
覺東なしやあまの友舟

光 圀

浪の音の高間の浦に来て見れば

友呼びかはし千鳥暗くなり

柳 堂



社神祠息

●鹿島神宮 (常陸)

鹿島郡の中央に鎮座す、官幣大社にして祭神は武甕槌大神を主神とし、經津主神及び天兒屋命を配祀す、創營は古く神武天皇元年辛酉にして、其後二十年に一回造替を行ふと云ふ。現存の神宮は元和四年の構造にして、宮殿の金碧巴彩は寶曆二年の修理に係るものなり。境内樹木鬱蒼として、足一とたび神域を踏めば森嚴の氣油然として漲るを覺ゆ、而して幾多の社殿は其間に點綴して建つ、本殿は二重の神籬を遶し、前に拜殿、鳥居あり、北に神樂殿、奏者社建ち並び、西に御供所連る、山神社、素盞鳴社は樓門の外に構へられ、龍神の二祠は門内の左右にあり、其他寶庫、社務所を始め攝社末社は廣潤なる境内に散在して其數幾何なるを知らず。境内名勝古蹟亦頗る多くして一々枚舉に遑あらず、今其重なる名稱のみを擧げんに有名なる要石、御手洗水、末無川、御藤、海の音、根上り松、松の箸、之を七不思議と稱す、染井、成井、莘柄井、清水井、保太井、寸府井、波左間井の七井戸、御笠山、靈杉木、經石、鹿島文庫、鬼塚、鹿園、矢の根石、鹿島八景鹿島岡、名越松、神の池等あり。祭典は毎年三月九日の春季祭、九月一日より三日に至る神幸祭、十月廿九日夜の相撲祭五月三十日の御田植祭其他青馬祭、宮贊祭、日月祭、歳山祭、踏歌祭、常陸常祭等數種執行す。寶物には光仁天皇寶龜九年奉納神靈を始め、十二神の楯板、白玉二十四個、柿本人麿像、驛路鈴、古鏡、古軍配、金駒、銀駒、古行器、雪村百馬紫色石の硯等無數にして一々掲記の煩に堪へず。

藤原 定家 鹿島野や檜原杉原ときはなる

君が榮は神のまに〜

顯 雅

常陸なる鹿島の宮の宮柱

猶よろづ代も君がためとか

西行 法師

あら日さす鹿島の杉の夕かげで

曇らす照せよをうみの宮

橘 千蔭

鹿島ねに神さびだてる杉の枝の

日蔭のかつらかけて幾世ぞ

小野 湖山

維昔天兵征八蠻

遂將蠱羯變衣冠

神祠禮肅千秋古

老樹蕭森萬籟寒

威靈長爲東海鎮

蒼黎久受泰山安

野巫諜々足荒誕

聖德因何窺一端

金井 金洞

掃蕩妖氛去

千秋寰宇清

古宮薦蘋藻

肅々仰神明

●高天原 (常陸)

一に高間浦と云ふ、鹿島神宮の東方二十餘町に在り、一望廣漠なる砂原にして矮松其間に點在す、砂原中に末無川、鬼塚と稱する地あり、鬼塚は一に鬼ヶ城と云ひ、高三丈周圍一町餘の高丘にて丘上に尺餘の松樹數十本生ひ處々に發掘せる如き穴あり、傳へて鹿島の大神が東征の際、王化に従はざる鬼賊を誅して埋めたる所と云ふ。末無川は清水涓々たる泉にして泉流、鬱樹に掩はれて流域一二町を認むるも、其末流の注ぐ所を知らず、蓋し末無川の名稱茲に基く。高天原は東方海に臨みて風光頗る佳なり、或は曰ふ此地古の高松濱なりと、一書に戸ふ、鹿島明神、常に此地に出で、群鹿を以て辛伍と爲して外國の鬼と闘ひ給ひしと荒誕信ずるに足らず、又曰ふ、太古神戰の行はれし地にて其血土に染みたりとて地名を高

赤原と云ふと、俗説愈よ出で、愈よ紛々たり。

公 實

春霞高間の浦をこめぬれば

覺東なしやあまの友舟

光 園

溟の音の高間の浦に来て見れば

友呼びかはし千鳥啼くなり

柳 堂

風獵々吹星氣森 山河二百古仍今

神時明月依然在 想見天孫橫劍吟

●御手洗 (常陸)

鹿島神宮、奥の宮の前面坂下に在る小池なり、東南北の三面は幽閑なる深山屏を爲し、唯だ西方の一面を開くのみ、池の長さ、八間、幅七間許、四面切石を以て壘み、北方の一隅より一條の細流を通ず中央に一の鳥居あり、池水は清冽にして鯉魚唼鳴す、盛夏季と雖も一たび茲に遺逸すれば苦熱頓に忘れ去つて神氣爽然たるを覺ゆ。傳ふる所に依れば太古武甕槌大神天曲と稱する弓を以て穿ち給ひし池なりと、又神宮宮造の際、一夜の中に自ら桶出したりとの説あり。鹿島七不思議の一と稱せらる。

●藤原鎌足邸址 (常陸)

鹿島町大字宮中下生に在り、鹿島神宮を距る西方八町なり。此地小字を藤原と云ふ、一小祠あり鎌足神社と稱す、傳へ曰ふ是れ藤原鎌足生誕の地なりと。神社は鎌足の靈を祀る、又大職冠藤原公古宅址神なるものあり、是れ明治三十五年有志者の建設に係る。鎌足が此地に生れしと云へる事は「大鏡」その他の書にも散見せり。「大鏡」に曰く「孝徳天皇の御代よりこそは、さまざまの大臣定め給ふなれただし此御時、大内臣の鎌足の連と申し内大臣になりはじめ給ふ、其おとやは常陸の國にて生れ給へりければ云々。

大舍人千丈

あられふり鹿島の神を祈りつゝ、

皇軍に我は來にしを

●筑波山（常陸）

筑波郡の北境に位し、眞壁、新治の兩郡に跨れる名山なり、山上は分れて二峰となり、西に在るを男體山と云ひ、東に在るを女體山と云ふ、兩峰相對して常陸

上野、下野、武藏、相模、安房、上總、下總の八州に秀出し、仰視すれば一峰の如し、海拔三千百八十尺、山上に筑波神社鎮座す、又故山階宮殿下の建設せられたる測候所あり、山腹筑波町より登ると一里三十二町にして頂上に達すべし。

筑波神社は東西二峰に分祠し、男體には伊佐諾尊を祭り、女體には伊佐冊尊を祭れり、神社創建の年代は詳悉する能はざるも、延暦元年僧德澄、錫を當山に止めて神社を再建し、筑波爾大權現と稱し、更に堂宇を建立して千手觀音を安置し之を中禪寺と稱したり、降つて鎌倉時代に至り八田知家の男千手丸當山の別當となり其子孫永く小田氏と俱に社務を掌り應永元年社堂を再興し、後、別當を知足院と稱す、徳川時代に至り五百石を賜はり幕府の祈願所と定められ、三代將軍家光深く筑波神社を崇敬し、山上兩本社攝社四社を造營し、新に靈舎、五重塔鐘樓山門等を建立し、結構頗る善美を盡せり

以來山上兩社は二十五年毎に改築の制を設け幾たびか再築を経て以て今日に至れり、社格初め郷社たりしが明治六年十月縣社に列したり。

男體山は所謂筑波神社男神の鎮座せる山にして、其社殿は桁行六尺、梁間四尺八寸、向拜二尺二寸巍然として構へられ犯すべからざる神威を備ふ、男體山の南岸に百間澤の清流あり、中途瀑布となりて落下す、之を布引瀧と云ふ、瀧の兩岸絶壁削るが如く危険言ふべからざる間、瀧頭頗る多くして、花季には紅白研を競ひて其美觀を呈す。

女體山の絶頂に鎮座せる所謂女神の神社は其社殿の男體社に比して總ての結構毫も差異あるなし、山上歩を移して巨巖の上に立ちて望めば雄峯兀として目睫の間に接して相呼應す。以下登山の順程並に途次の名勝を紹介す。

山麓より峰影を仰ぎつゝ、磴道數百歩を辿れば丈餘の華表あり、即ち一の鳥居にして、嵯峨大覺寺宮の染筆に係る天地開關筑波神社の扁額を掲ぐ、鳥居を入れば商家、青樓、旅館等軒を並べて一市街を成す、是れを筑波町とす、町の東が廣原あり、方五六尺の奇石男女の形を成して立つ名づけて女夫の原と云ふ、其東に龜之丘あり、町の盡頭、涓々たる清流、架するに長四間、幅一間四尺朱塗の木橋を以てす、之を御橋と名く、毎年陰曆四月及十一月の祭典には神輿先づ此橋を渡御す。之を過ぎて隨神門あり、文化元年權僧正賢慶の再建に係る桁行五間、梁間一間なり。拜殿は明治八年の再建にして桁行十二間梁間八間八分、構造堅牢毅然たる壯觀を示す、是れ山上兩社の拜殿にして、正面には筑波神社の額を掲ぐ、故小松宮彰仁親王の染筆に係る、是より社務所、日枝神社、春日神社、古通寺を過ぐれば一條の銀河落下するを見る、之を古通寺瀧と云ふ、茲を経て男體山登り口に向ふ、登山口に華表を建つ、銘して豎形天、横鎮地、若有人物容豊無神最負、八島九州此肇基、一日衆星長保賜と曰ふ。是より碌々たる石塊を踏み、起伏せる巖角を攀ぢ二十餘町を辿れば老櫻樹の下に出づ

處を櫻塚と云ふ、艶陽の四月の候美觀言ふべからず「筑波嶺の若木の櫻いつまでも年は経れども色はかはらじ」是れ其光景を詠せるものなり、之より數町にして女男川の流に達す、之より連歌の嶺に至る是れ日本武尊東征の歸途茲に憩はれて「新治筑波の詠ありし有名なる遺蹟なり

此山一名を小男體の嶺と云ふ、是より巖程もなくして五亭に至る、是れ俗に五軒茶屋と云ふ、男體、女體兩峰の間なる回地を爲せる處に在り、茶屋には名物夫婦餅を賣る、之より西すれば男體山に抵るべく、東すれば女體山に登るを得べし、所謂分水嶺なり、五亭より男體山に至る中道に一石標の建つあり刻して立身石標と云ふ、昔時親鸞上人嘗て茲に錫を留めて餓鬼を濟度せる所なりと傳ふ。是より東して女體山に至る、其山嶺に達する間には、天浮橋、大佛石、大黒石、砂喰ひ、盤龍神社、高天原、體田潜り、辨慶七尻り、白瀧、等の名勝あり。

筑波山は秀麗の勝區として古來詞藻の傳へられたるもの多し、左に一二を掲ぐ

筑波根のこのめも春の影見えて
とはのあはちのうち煙るらん
橋 千 藤

筑波山端山茂山しげ、れど
思ひ入るにはさはらざりけり
宗 祇 法師

筑波山此面彼面の紅葉ばに
時雨もしげき程も知らるゝ、
大 窪 詩 佛

不是尋常香花客 山靈相見勿相猜
天開地闊幾千歲 曾有詩人一個來
三 島 中 洲
來上筑波千仞巖 皇京南指渺茫間
他年兩國橋頭望 一片遙青是此山

●水無川（常陸）

筑波山男體山の絶頂より稍々下なる地を流る、平素は些々なる細流たるも一朝風雨に會すれば水勢俄然激甚を極め、岩を衝き石を噛んで百雷の如き響を爲し、他の溪流之に合し猛然として流下し遂に筑波川に會す。此川山中を屈曲迂廻して處々に奇勝を彩るもの多し。

筑波山女體山



筑波山體女山



同男體山本宮



筑波神社拜殿

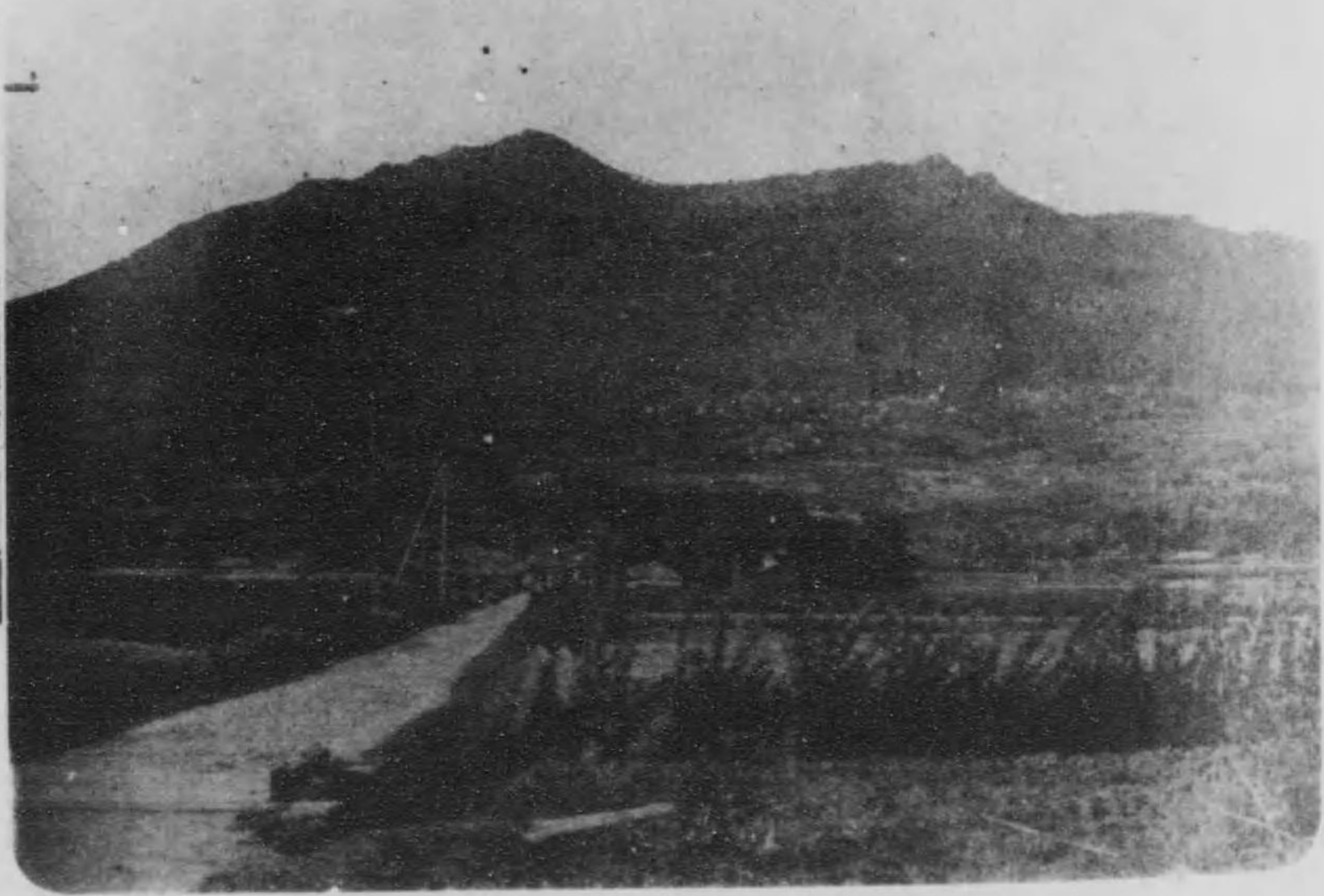


●水無川 (常陸)

男體山は所謂筑波神社男神の鎮座せる山にして、其社殿は桁行六尺、梁間四尺八寸、向拜二尺二寸巍然として構へられ、犯すべからざる神威を備ふ、男體山の南崖に百間澤の清流あり、中途瀑布となりて落下す、之を布引瀧と云ふ、瀧の兩岸絶壁削るが如く危険言ふべからざる間、躑躅頗る多くして、花季には紅白研を競ひて其に美觀を呈す。

筑波山男體山の絶頂より稍々下なる地を流る、平素は些々なる細流たるも一朝風雨に會すれば水勢俄然激甚を極め、岩を衝き石を嘯んで百雷の如き響を爲し、他の溪流之に合し猛然として流下し遂に筑波川に會す。此川山中を屈曲迂廻して處々に奇勝を彩るもの多し。

筑波山會景



男女川



神橋

西山西公隱棲菴



● 稲田御坊本堂 (常陸)

西茨城郡笠間町大字稲田に在り、西念寺又稻養院とも稱し一に稲田御坊と云ふ蓋し稲田に所在するを以てなり。眞宗にして、建保五年親鸞上人の草創に係る、東本願寺の懸所なり、寺域千百九十九坪を有す、本堂には阿彌陀佛及び宗祖親鸞上人の像を安置す、中世兵燹に罹りて堂宇悉く焼失したるも、後ち二百餘年前再

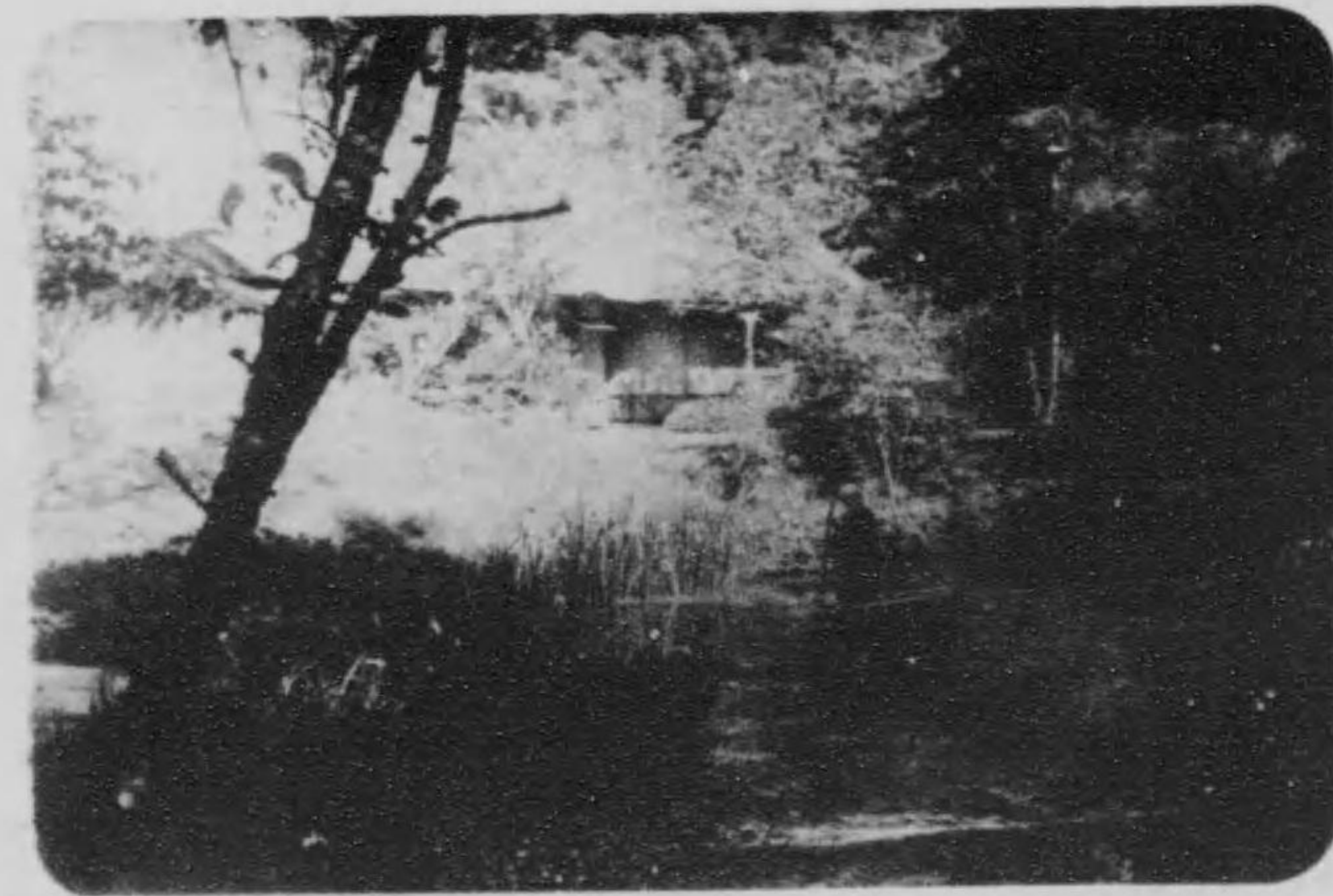
朱舜水像



稲田御坊



五日宮墓



西山西公山莊庭園

に至り病を得て歿すとも云ひ、其終焉の地に就ては諸説紛々として一定せず、而も此地の字を玉日と稱すに徴するも茲に死せるは異なるが如し。

● 笠間稻荷本殿 (常陸)

西茨城郡笠間町に鎮座す、笠間停車場より十三町を隔つ、一名胡桃下稻荷と云ひ、又俗に紋三郎稻荷と稱す、本殿、大鳥居、其他社宇頗る宏壯にして、境内又幽趣にして風致に富む、毎年二月十一月



笠間稻荷神社

栖の地を太田の西山に卜し「位山昇るも苦し老の身は麓の里を住よかりける」の一首を詠じ、自ら西山隱士と號し、以來客を謝し閑雲野鶴を伴として元祿十三年十二月六日を以て西山の隱邸に薨す享年七十、遺骸は瑞龍山に葬り、私諡して義公と云ふ、明治三十三年朝廷光園の功を追賞せられて正一位を贈られたり。光園の隱栖せし西山の邸は岩谷に據つて墻垣を設けず、茅屋衝門毫も村民の居と相違



● 稲田御坊本堂 (常陸)

西茨城郡笠間町大字稲田に在り、西念寺又稻養院とも稱し一に稲田御坊と云ふ蓋し稲田に所在するを以てなり。真宗にして、建保五年親鸞上人の草創に係る、東本願寺の懸所なり、寺域千九百九十九坪を有す、本堂には阿彌陀佛及び宗祖親鸞上人の像を安置す、中世兵燹に罹りて堂宇悉く焼失したるも、後ち二百餘年前再建し稍々舊觀に復して以て今日に至れり真宗の教典として有名な「教行信證文類」六卷は親鸞上人が當寺に在在中遺述する所、時は元仁元年正月、實に淨土真宗の開闢にして真宗の歴史上忘るべからざる寺刹と謂ふべし。寺門外の西方樓川の對岸に栗樹の林あり、毎年三回實を結ぶを以て里俗三度栗と稱す。是れ親鸞が真宗の將來成否如何を證したる栗なりと傳ふ。

● 笠間稻荷本殿 (常陸)

西茨城郡笠間町に鎮座す、笠間停車場より十三町を隔つ、一名胡桃下稻荷と云ひ、又俗に紋三郎稻荷と稱す、本殿、大鳥居、其他社宇頗る宏壯にして、境内又幽趣にして風致に富む、毎年二月十一月の二回大祭を執行し、遠近賽者群集し頗る雜沓を極む、爲めに臨時汽車の増發あり、蓋し此の附近有名の神社なりとす。笠間町は昔時笠間藩城下の一市街にして旅舎其他の設備整ひ沿線第一の都邑として知らる、停車場を距る三十町にして佐白山あり山上には佐志能神社一名三白權現あり、又舊笠間城址存し、今、城山公園と爲れり。笠間城は慶長年間松平周防守茲に據りたるも延享四年より牧野備後守定通封土八萬石を領して居城し、以奉歴代襲封し以て明治維新に及べり。

● 玉日宮墓 (常陸)

結城町字玉日の堀間に在り。墓は五層の塔にして數株の老樹鬱蒼として之を繞る、是れ真宗の祖親鸞上人の室玉日の前の墳墓なり。按ずるに玉日の宮は九條關白藤原兼實の女にして、建仁三年親鸞上人三十一歳の時其室となり、幾くもなく親鸞同門子弟の罪に座して承元二年越後に配流され、居ること五年、其間に於ける玉日の前は孤棲を守りて具さに辛酸を嘗め親鸞を慕ふて其配處に赴かんとし此地に於て病に罹りて遂に歿す、或は曰ふ親鸞の赦免に先だちて京都に病死すと、又三好爲教の女と稱して關東に下り惠心尼と稱したりと、或は親鸞の下野芳賀郡宇田山専修寺に在るを聞き跡を追ふて此

● 西山公隱棲地 (常陸)

久慈郡太田町の西方約十町、譽田村大字新宿に在り。是れ著名なる水戸藩主徳川光圀が隱居後、閑棲の遺址にして今尙ほ之を存す。光圀は世に水戸黄門と稱す、頼房の第三子にして水戸の藩主たり、寛文元年八月封を繼ぎ翌年十二月參議に任じ翌三年明の遣臣朱舜水を聘して師とし大に文學を興し又藩政を釐革し治績大に擧る、光圀學問該博、嘗て史記を讀みて慨然修史の志あり、後ち鴻儒を集めて大日本史編纂を企畫したるが浩漭にして多大の年月を要し其歿後正徳五年に至つて完成を告げたり、光圀又楠氏の墓を修して之を湊川に建てたり、元祿十三年十月致仕して水戸に歸り、政を綱條に譲り隱

● 徳川光圀筆蹟 (常陸)

是れ光圀が伊奈彌一郎に致したる自筆の書翰なり、署名に西山隱士の號を以てす、其致仕後西山隱棲後のものたるを知る可し。原本は東京吉田彌平氏の所藏に係る。

【常 陸】

●勢田の唐橋 (近江)

琵琶湖の水、勢田に至りて緊束し、一條の細流となりて南に走る即ち是れ勢田川にして此の流れなる瀬田村大字橋本に架せられたるものは勢田橋なり、所謂これ近江八景の一にして『勢多の唐橋』と稱せらる。大小二橋断續して架せられ、大橋は長さ九十六間、小橋は二十七間共に幅七間なり、中間に中島ありて二橋を連接す。此橋古くより存し、大津宮の時代既に此名あり、三代實録にも貞觀十三年勢田橋火くの記事を載せたり。橋上右顧すれば石山を仰ぎ左望すれば琵琶湖を眺め、景頗る佳にして、古來吟詠少からず傳へらる。

かたゝの浦のあまのうけ繩

圓光院

春のくる堅田の浦の朝なごに

見る目もしらす立つ霞かな

鎮あけて月さし入れよ浮御堂 芭蕉

●唐崎の松 (近江)

俗に唐崎の一つ松と稱す、又辛崎、可樂崎、韓崎等と書す。滋賀郡下坂本村の東邊にありて、琵琶湖畔に臨む、世に唐崎の夜雨として八景の一に數へらる、一幹にして支枝八方に亘る翠葉地を蓋ふこと百間、支柱數百を算す。松下に一小祠あり。往時は滋賀の郡の大渡にして絶勝の地たりしも後世湖濱の泥沙年々堆積して田土となりしもの多く、爲めに岸頭の風景甚だ清趣を缺きたり。

中興して密教を傳ふ。宇多法皇深く尊信ありて屢々本寺に臨幸ありたり、昔時は大伽藍にして寺領六萬石を領したりしが中世大に廢頽せり現今の本堂は古の講堂なり、昔の中堂の址を、今、中堂谷と呼ぶ。堂宇は淀君の修補する所なり、本堂の東に紫式部が源氏物語を著はしたりと傳ふる源氏の間なるものあり。此地觀月の勝區なるのみならず又螢の名所なり。

長能

都にて人や待つらん石山の

峰に残れる秋の夜の月

關白 政家

石山やにはてる月のさやけさは

唐土までも隈もなからん

林長老

秋風蕭颯一天涯 霜滿四山不帶霞

古木回岩寒月影 吟殘葉々霧中花

●比良の雪 (近江)

直立二千八百八十尺、登攀一里十五町を要する近江第一の高峰にして滋賀郡木戸小松兩村に位す周圍十五里二十九町に亘り、琵琶湖を夾んで伊吹山と相對す山勢雄偉巍然として天を摩す頂上常に雪を頂くこと早くして夏季に至るも尙消せず其残雪は頗る風趣に富み八景の一として賞せらる、頂上を小松山と云ひ、山背を萬川谷と呼ぶ、山中大飛瀑あり溶拜瀧と云ふ上段高二十間下段高六十間、此地を獅子谷と稱す、蓋し山中の奇勝なり。

(萬葉集)

さい波や比良の山風海吹けば

釣りする海人の袖かへる見ゆ

(夫木集)

千早振る比良の御山のみみぢ葉に

ゆふかけわたすけさの白雪

信實

都にて寒さぞ見ゆる峯越の

比良の遠山雪降りにつけり

みつきもの絶ぞ運ぶ東路の

瀬田の長橋おともといろに

爲家

鳩の海や霞みて暮る、春の日に

渡るも遠し勢田の長橋

匡房

横の板も苔蒸すばかり成りにけり

變世へぬらん瀬田の長橋

●堅田の浮御堂 (近江)

堅田に靡き落ちるかりがねとは近江八景の一として詠じられたるものにして堅田の浦の景勝なり。堅田は琵琶湖の西岸にして十四五間湖中に突出したるを堅田崎と云ふ、浮御堂は茲にあり。雅致を極めたる小閣にして、中に佛像を置く、浮御堂は海門山瀧月寺と稱す、京都紫野大徳寺に屬す、恵心僧都の開基と云ふ湖上の眺望木だ佳趣あり、近江八景の詩に曰ふ
鴻雁幾行更不孤 晚風帶月落東湖
囊沙背水堅田浦 猶見孔明八陣圖
成實
心引くかひこそなけれ逢ふ事は

●石山寺 (近江)

亦是れ近江八景の一に算せらる、もの即ち石山の秋月として、古より其勝を賞せらる、滋賀郡膳所村の南、石山村大字寺邊にあり、眞言宗の名刹にして豊聰太子の持佛二臂の如意輪觀音を以て本尊とす、西國三十三所第十三番の札所たり。天平年中僧辨の開基に係る後ち僧親賢

瀬田の唐橋



比良

石山寺



唐崎のツル松



る小閣にして、中に佛像を置く、浮御堂
は海門山満月寺と稱す、京都紫野大徳寺
に屬す、恵心僧都の開基と云ふ湖上の眺
望ただ佳趣あり、近江八景の時に曰ふ
鴻雁幾行更不孤 晚風帯月落東湖
囊沙背水堅田浦 猶見孔明八陣圖
成 賢

亦是れ近江八景の一に算せらるゝもの
即ち石山の秋月として、古より其勝を賞
せらるゝ、滋賀郡膳所村の南、石山村大字
寺邊にあり、眞言宗の名刹にして豊聰太
子の持佛二臂の如意輪觀音を以て本尊と
す、西國三十三所第十三番の札所たり。
天平年中僧眞辨の開基に係る後ち僧親賢

福山の唐橋



さい波や比良の山風海吹けば
釣りする海人の袖かへる見ゆ
(夫木集)
千早振る比良の御山のもみち葉に
ゆふかけわたすけさの白雪
都にて寒さぞ見ゆる峯越の
比良の遠山雪降りにけり
信 實

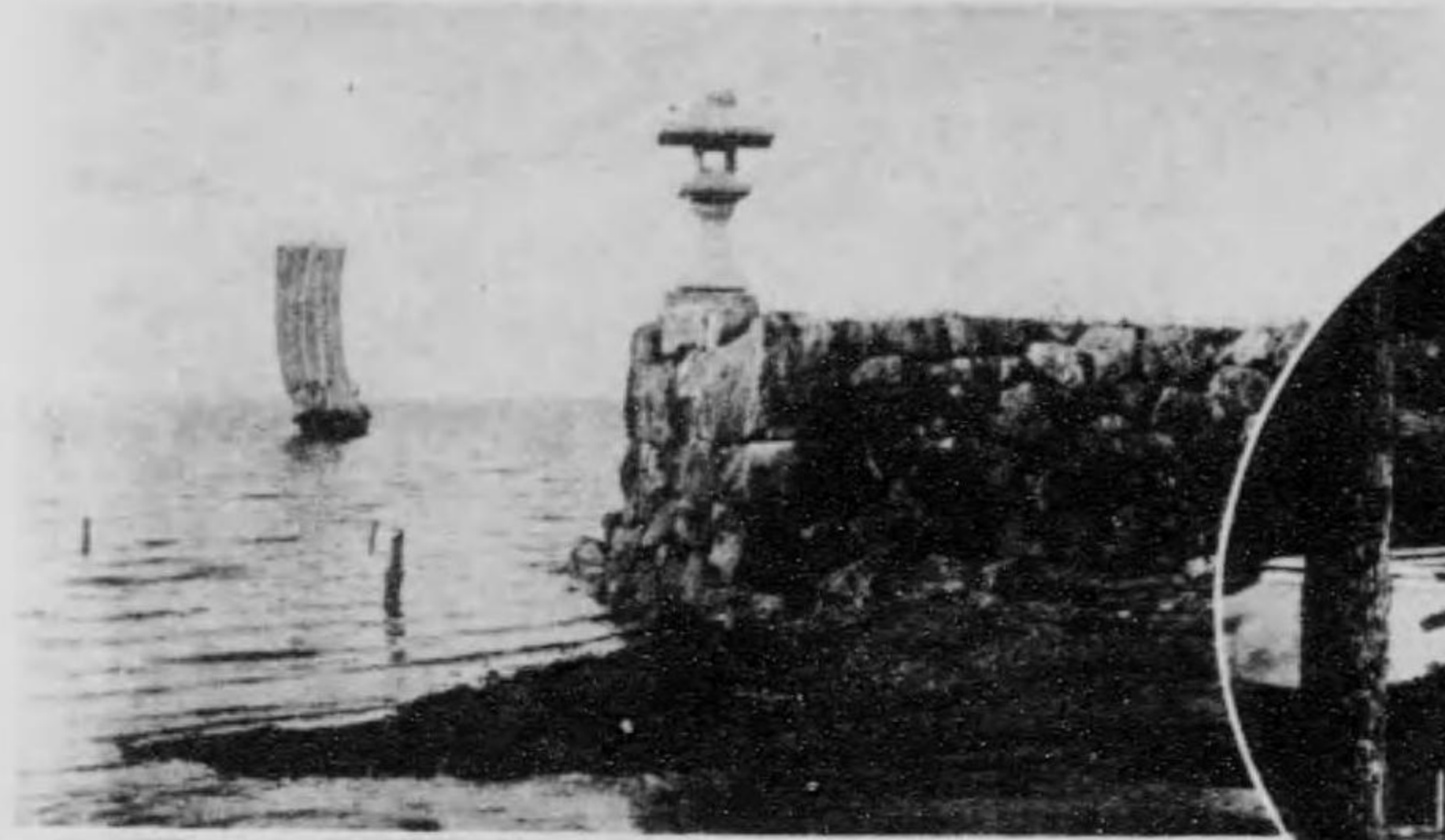


比良山

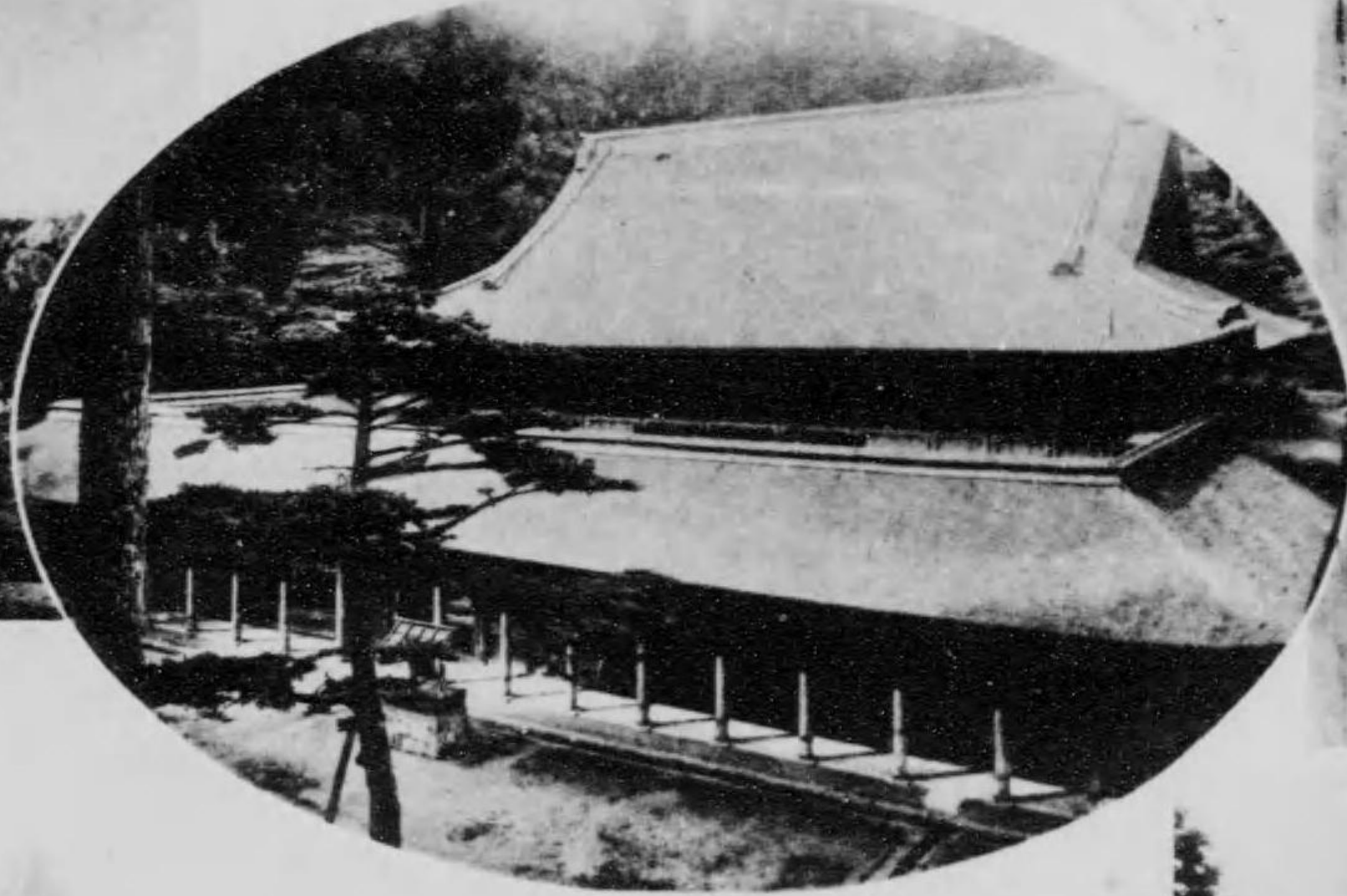
片田浮御堂



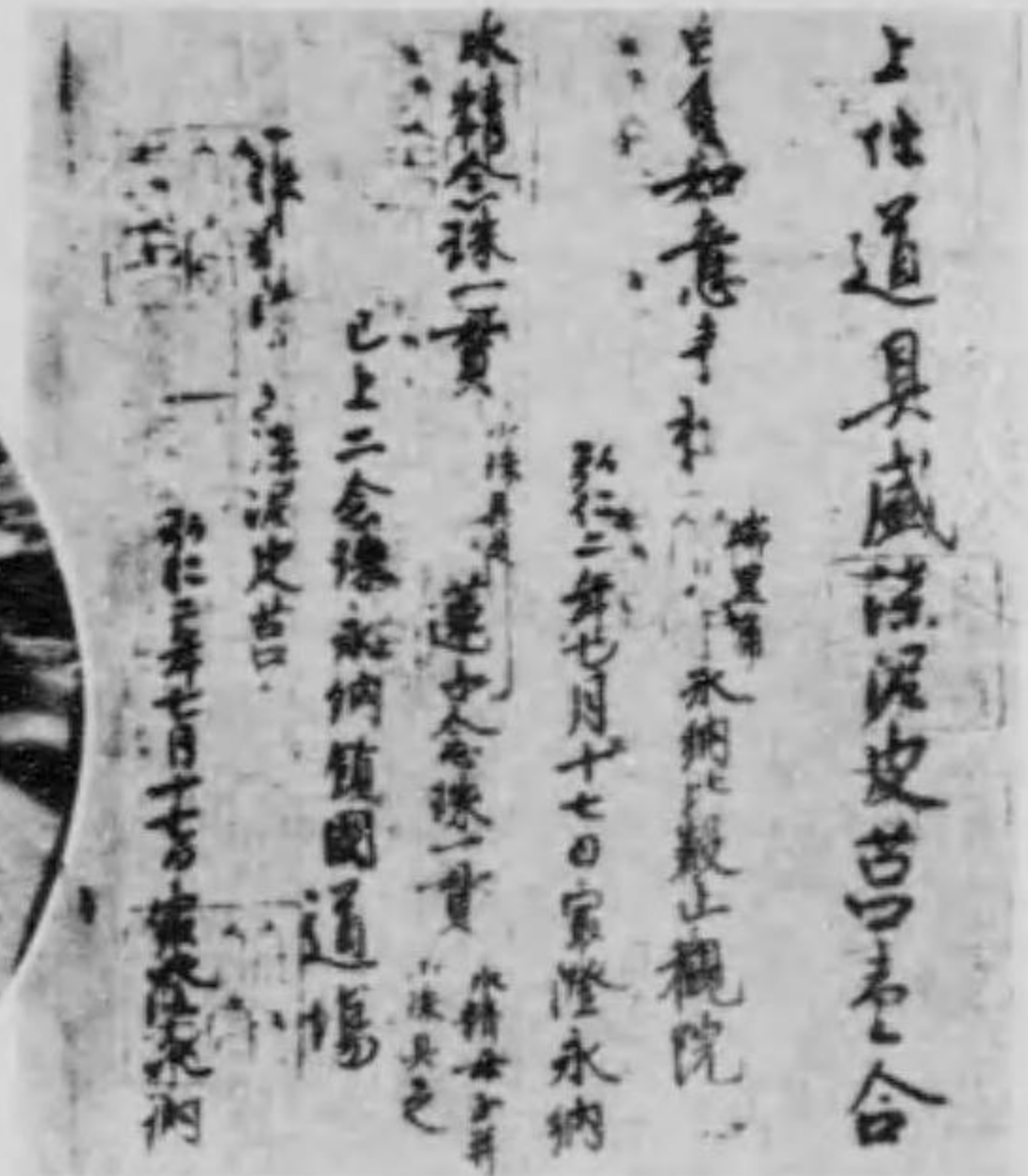
湖 琵琶 と 橋 矢



堂 中 本 根 寺 曆 延



蹟 筆 師 大 教 傳



●三井寺 (近江)

八景中晚鐘を以て知らるゝ三井寺は大津市の西北にあり、本稱は園城寺と云ふ昔は八百五十九坊を有する大寺たりしが創建以來一千年間に於て焼失十回に及び今は僅に五十坊を存す。中院、南院、北院の三區に分る、金堂は中院の中央にあり、唐院、三層塔、五層塔、大講堂、

●延曆寺 (近江)

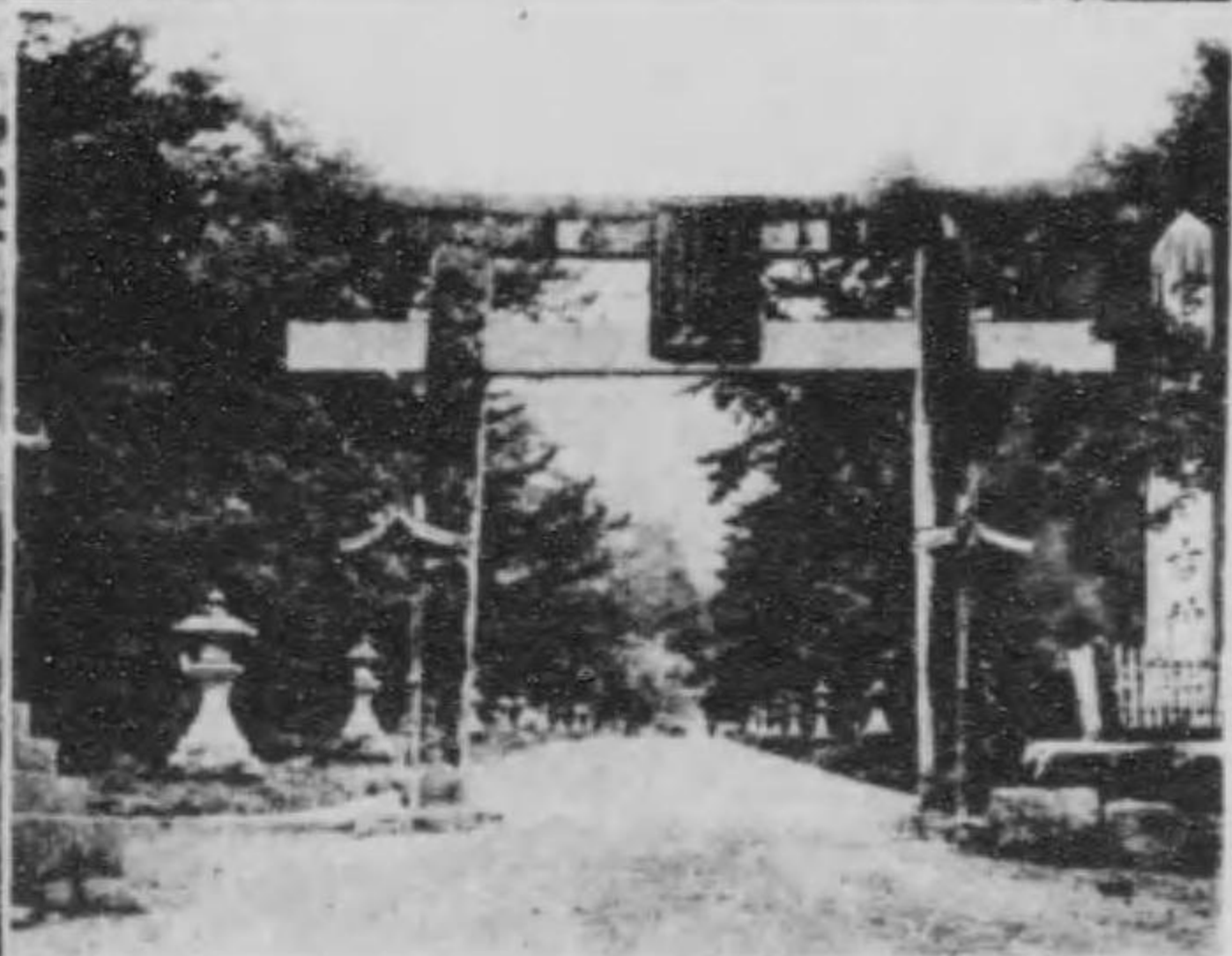
海拔二千七百二十二尺、近江、山城二州に跨り巍然として天を摩するものは比叡山なり、峯巒起伏し山裾は方五十餘町に盤踞す、最高峰を四明峯と云ひ、絶頂を大嶽と稱す、延曆寺は此の大嶽の東傍に位す、即ち是れ根本中堂なりとす。南麓阪本村より登攀五十町にして達す、山



寺 井 三



延曆寺横川中堂

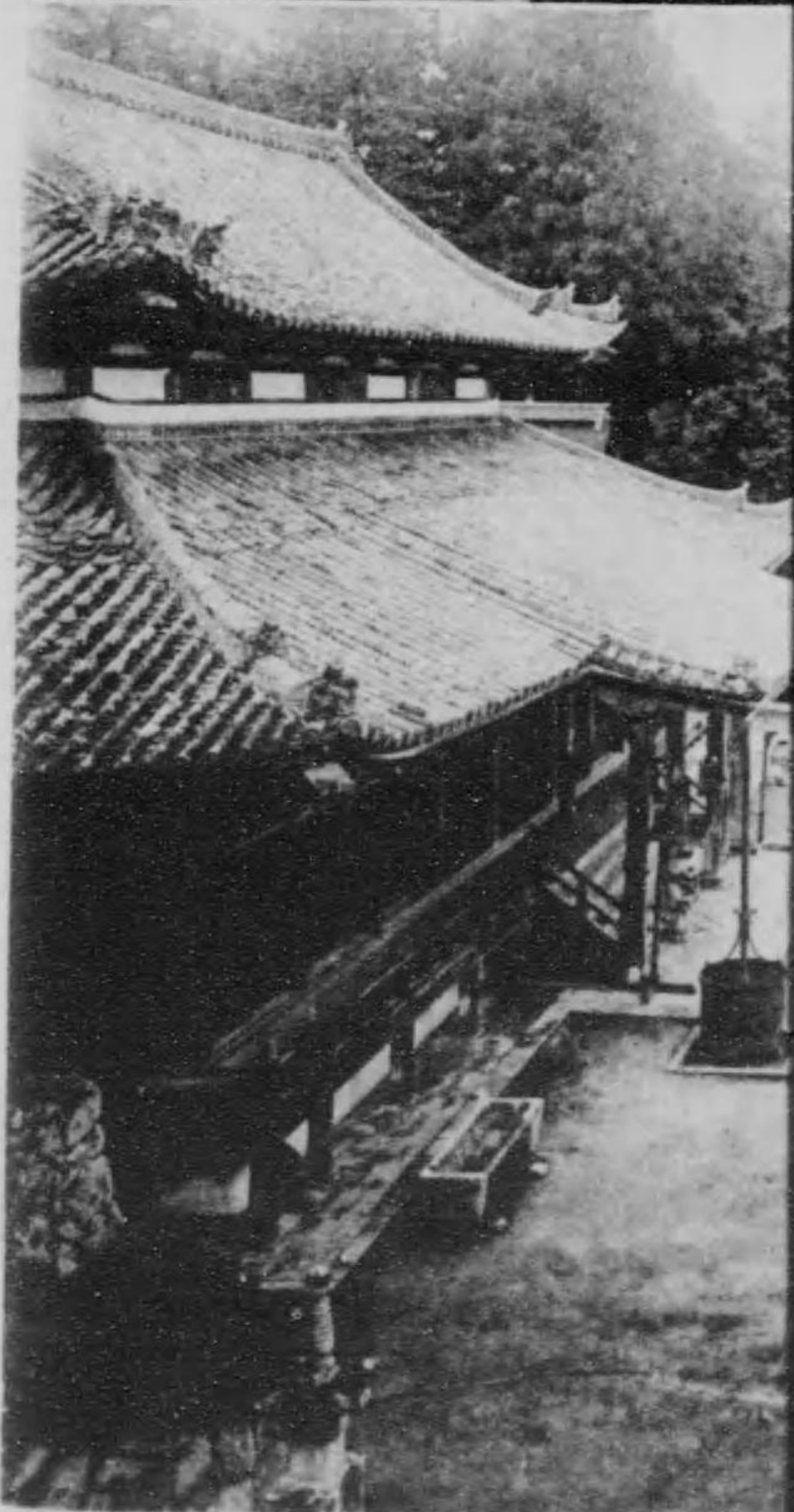
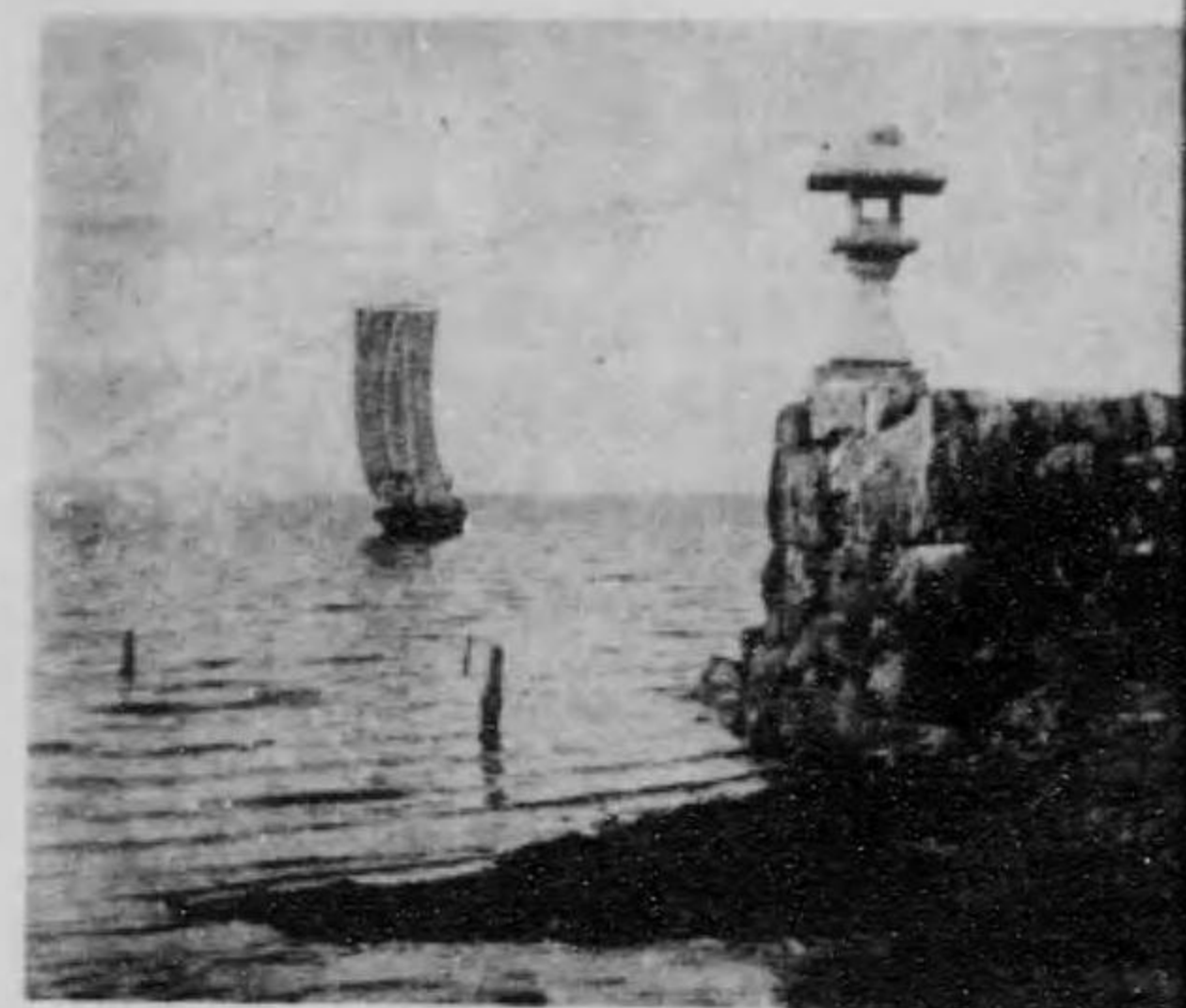


社 神 吉 日

し、中堂を楞嚴院と云ふ、慈覺大師の開基に係る、中堂の東側に四季講堂、元三堂、觀音堂等あり。

傳教大師、叡山中堂建立の時、自ら斧を取て柚木をたちそめ給ひける時の歌(新古今集)

阿耨多羅三藐三菩提のはとけたち
我が立柚に冥加あらせ給へ



●三井寺 (近江)

八景中晚鐘を以て知らるゝ三井寺は大津市の西北にあり、本稱は園城寺と云ふ昔は八百五十九坊を有する大寺たりしが創建以來一千年間に於て焼失十回に及び今は僅に五十坊を存す。中院、南院、北院の三區に分る、金堂は中院の中央にあり、唐院、三層塔、五層塔、大講堂、法華堂、大師廟、寶藏、鐘樓等周圍に建たり。金堂には大友夜須麿作の丈六彌陀を安置す。鐘樓は金堂の南にありて俗に破鐘堂と稱す、梵鐘は最も著名なるものにして高さ五尺五寸、厚さ三寸五分、口径四尺一寸、龍頭一尺一寸五分、傳説に依れば田原藤太秀卿が龍宮より得來りし者と云ふ。此他に金堂の左方に新鐘樓あり、鐘の量稍や前者と匹似す、是れ慶長七年高照院道澄の寄附に係るものなり。本寺は弘文天皇(大友皇子)の子大友の與多王の創建する所にして貞觀年中、僧圓珍に依りて中興し延曆寺の別院となれり。後ち修驗道をも兼ね別派を爲して寺門派と號す、現今の堂宇は豊臣、徳川兩氏の經營に成れるものなり。本寺は又敬稱の意にて御井寺と書す、蓋し金堂の側に井水ありて三密灌頂の關伽と爲すに依ると云ふ。

●延曆寺 (近江)

海拔二千七百二十二尺、近江、山城二州に跨り巍然として天を摩するものは比叡山なり、峯巒起伏し山裾は方五十餘町に盤踞す、最高峰を四明峯と云ひ、絶頂を大嶽と稱す、延曆寺は此の大嶽の東傍に位す、即ち是れ根本中堂なりとす。南麓西本村より登攀五十町にして達す、山上四望一も眼界を遮るものなく、東は琵琶の湖面を下瞰し西は京都の風色を指呼す壯快言ふべからず、古杉老樹蔚然として林立し、溪水滾々として流る満山幽邃山氣人に逼り森嚴殆んど人界を脱するの想あり。

延曆寺は天台宗の大本山にして山門と號す。延曆七年最澄上人(即ち傳教大師)勅を奉じて當寺を創建す、初め一乘止觀院と云ふ、後ち堂塔殿宇を増加し、東西兩塔院と爲し弘仁十四年嵯峨天皇勅して延曆寺の號を賜ふ、天長元年僧義真を本寺貫主と爲して天台座主と曰ふ、後ち慈覺、智證等出で、入唐し傳法して歸朝するや宗風大に振へり、中世僧兵なるもの、盛なりし時代には比叡山の僧徒を推して第一とし、是等を山徒若しくは山法師と稱せり。

根本中堂は東塔院に在りて戒壇堂、大講堂、法華堂、文珠樓等皆この中に存す、現在の建築は多く寛文年間の重修に係ると云ふ。西塔院は中堂の西北十餘町にあり、釋迦堂、相輪堂、法華堂、椿堂、元三堂、常行堂等茲にあり、之を總稱して寶輪院と云ふ。

●横川中堂 (近江)

横川谷の嶺上なる堂塔を云ふ、東西兩塔に並べて三塔と稱す、東塔の正北一里にして山を縦斷する所の横川谷を隔つ、西塔より嶺背を踏破して茲に至るを得べし、中堂を初嚴院と云ふ、慈覺大師の開基に係る、中堂の東側に四季講堂、元三堂、觀音堂等あり。

傳教大師、叡山中堂建立の時、自ら斧を取て杣木をたちそめ給ひける時の歌(新古今集)
阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち
我が立袖に冥加あらせ給へ

良 經
大たけの峰さはくくと吹風を
しつめすはいさ法のともし火

慈 鎮
法の水あさく成行く末の世を
思へばかなし比叡の山寺
林 羅 山
良嶽從來守紫宸 先王立作國家鎮
雲波五色三津浦 星斗千年七社神
湖水藤籠空得月 山櫻寂寞自過春
好風美景非無意 吾亦東西南北人

●矢橋の歸帆 (近江)
一に矢馳、又は矢早瀬とも書す、勢多村の北一里、琵琶湖に臨み頗る風景に富む、大津の石場に至る渡航一里、湖上の歸帆最も趣きあり。
林 長老

釣竿手熟白頭翁 辛苦客船西又東
幾度風帆歸去後 呂公榮達一盃中

●日吉神社 (近江)

大津を距る正北一里二十町比叡山の東麓にあり社格は官幣大社にして本宮には大山咋尊を祀る、結構宏壯にして善處を極む、第二を二ノ宮と云ひ國常立尊を祀る、第三を聖眞ノ宮と云ひ天忍穗耳尊を祀る、第四を客人ノ宮と云ひ伊弉諾尊を祀る、第五を十禰師ノ宮と云ひ、天瓊杵尊を祀る、第六を八王子ノ宮と云ひ國狭槌尊を祀る、第七を三ノ宮と云ひ惶根尊を祀る之を七社と稱し此他に十四の末社あり、毎年四月中旬大祭を執行す、當日は賽者群集し、近江第一の賑を呈す。

光 俊
つきてその曉ふかき法の御井
ながれ汲む身となるがたふとさ
定 圓
さよなみや三井の古寺かねはあれど
昔にかへる聲は聞えず
遊三井寺 服部 蘇門
園城古刹枕清流 遊客閑探處々幽
玉登仍留三井深 華鐘曾自九淵浮
威靈永鎮新羅廟 弘誓高標薩薩樓
更見止觀靜明境 孤輪影落大湖秋
秋寒し藤太が錆ひやく時 蕪 村

【近 江】

●粟津の原 (近江)

大津の東南、膳所村に在り。木曾義仲戦死の史蹟として著しく知らる。此地は往時大津朝廷時代に在りては津の市にて朝家の陪膳を献進せる所にして、後世膳所と稱するは蓋し之れが爲めなりと云ふ。此地亦近江八景の一にして、其晴嵐を以て聞ゆ。

基氏

關のあらし夜寒に吹くやさ、波の粟津の里に衣うつなり

●義仲寺 (近江)

栗津野の北、大津町字馬場に在り。天文二十二年近江國司佐々木高頼、石山寺に參詣の途次、木曾義仲戦歿の地を過ぎ慨然として其墳墓を吊し、茲に一字の寺を創建し、食邑を附し、堂宇を置けり。即ち今の義仲寺是れなり。佛堂には木曾義仲の靈牌を安置す。諡號を德音院義山大居士と云ふ。歴史の趣味を有すると否とを問はず、旅客の茲を過ぐる者は、必ず寺に衰して、英雄の靈牌を拜せざるもの無し。

●木曾義仲墓 (近江)

義仲の墓は大津市の東、字馬場に在り。即ち義仲寺の傍なり。昔時は之を義仲塚と稱したりき、當時馬場に一僧ありて義仲の靈を吊ふ爲め塚の側に一庵を結びたるもの即ち後の義仲寺なりとす。

壽永二年六月、木曾義仲、北陸道を上りし時には五萬餘騎と聞えたるに、僅に半歳を過ぎざる元暦元年の正月、四宮河原を落延る際には主從僅に七騎となり、栗津の原に來りては、義仲、兼平、主從唯だ二騎となりたり。此時兼平は、彼方の丘を指さし、義仲に勸めて彼の松樹の下に立寄り、心閑かに御自害あれ、其程

は防ぎ矢仕り、懸て御伴申すべしと言へども、義仲は領づきて、兼平を振捨て暇に任せて走せ行くにぞ、比は正月二十日の事にて水柱むすべる田を横さまに打つ程に、馬を深田に馳せ入れ如何とも進退自在を失へる折しも發矢と飛び來る敵の矢に中りて無慘なる最期を遂げたりき。

僧五岳

奇勳壓倒大頭公 深惜先鞭不令終
想像將軍當日恨 芭蕉墓畔立秋風

●今井兼平墓 (近江)

木曾四天王の隨一と稱せられ、義仲と最期を共にしたる今井兼平の墓は義仲終焉の地なる栗津ヶ原を隔つこと少許、栗津松原より西北に入る三町、田畝の中に存す。是れ往年膳所城主の建設する所に係る。亦是れ義仲の墳墓と共に當年英雄の蹟を偲ぶに足る。

●芭蕉翁墓 (近江)

義仲寺に在り。是れ芭蕉が生前詠みし「木曾殿と背中合せの寒さ哉」の句に基づけるもの、芭蕉は元祿の俳人として一代を風靡したる巨匠なり、遍く海内を歴遊し、元祿七年十月十二日大阪に滞留して病に罹り「旅に病みて夢は枯野をかけ廻る」の一句を辭世として歿したるが其遺言に依て遺骸を大阪より茲に運び義仲の墓側に葬りたり。門人其角が書ける墓銘の一節に曰く「木曾殿と塚を並べてと有し、戯れも後の語り句に成ぬると思へば今更に臨終の聞えもなし麗しく眠れるを期として川舟に昇載せ伏見より義仲寺に移してかたの如く木曾塚の右に並べ土搔納めたり自から古りたる柳もあり、かねての墓の契とならんと其儘に卵塔に擬ひあら垣をしめ冬枯の芭蕉を植てかたみとす

●賤ヶ岳古戰場 (近江)

伊香郡伊香具村の西に位し、琵琶、余

吾兩湖の中間に居然として蟠踞するものを賤ヶ岳とす。高さ僅に十二町餘に過ぎざるも、當年豊臣柴田兩雄の古戰場として著しく知らる。山麓に猿ヶ馬場、盲ヶ谷、蛭ヶ谷、尾の道等の小字あり。其山尾は南に曳いて淺井郡境界の山本山に至る。東尾は北國街道に臨む。史を按ずるに天正十年豊臣秀吉、織田信長の吊合戦として明智光秀を山崎に誅して以來、天下は靡然として秀吉に歸し勢威隆々たるより柴田勝家潛に之を除かんと謀り、茲に賤ヶ岳の戦は演ぜらるゝに至れり。當時秀吉は兵を湖北に備へたるが勝家の先鋒佐久間盛政急に大岩山を襲ひ、中川清秀之を防ぎて戦死す、此時大垣に在りたる秀吉は急遽來りて盛政を討つて大に之を破る、勝家遂に北國に敗走す。此時加藤清正、福島正則、片桐且元、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、精谷義助等、長槍を揮つて敵を殲す、世に之を賤ヶ岳の七本槍と云ふ。實に是れ天正十一年四月なりき、因に云ふ、中川清秀の墓は木之本村大字黒田の大岩山に在り、天和年中、清秀五世の孫中川久恒、碑を茲に建つ、碑の高さ五尺許、僧雄山の撰文を刻す、傍に志津嶽吊古之碑あり。

●逢阪山 (近江)

大津町の南、近江山城の分界地點に在り、號けて山と云へど些々たる阪路に過ぎず、往時關所の設けられたる地として有名なれば、古より茲を過ぐるもの多くは其風懷を詞藻に託す。蟬丸法師の「是や此往くも還るも別れては知るも知らぬも逢阪の關」及び三條右大臣の「名にし負は逢阪山のさねかづら人に知られてくるよしもがな」の二歌最も人口に膾炙す。阪の東方に關の舊址存す。又街道に關明神蟬丸祠、關の清水、小野小町の隠棲したる關寺の址等あり。

義仲寺



芭蕉翁墓

るもの即ち後の義仲寺なりとす。
 壽永二年六月、木曾義仲、北陸道を上りし時には五萬餘騎と聞えたるに、僅に半歳を過ぎざる元暦元年の正月、四宮河原を落延る際には主従僅に七騎となり、粟津の原に來りては、義仲、兼平、主従唯だ二騎となりたり。此時兼平は、彼方の丘を指さし、義仲に勸めて彼の松樹の下に立寄り、心開かに御自害あれ、其程

更に臨終の開えもなし麗しく眠れるを期として川舟に昇載せ伏見より義仲寺に移してかたの如く木曾塚の右に並べ土搔納めたり自から古りたる柳もあり、かねての墓の契とならんと其儘に卵塔に擬ひあら垣をしめ冬枯の芭蕉を植てかたみとす

● 賤ヶ岳古戦場 (近江)

伊香郡伊香具村の西に位し、琵琶、余

有名なれば、古より茲を過ぐるもの多くは其風懷を詞藻に託す。蟬丸法師の「是や此往くも還るも別れては知るも知らぬも逢阪の關」及び三條右大臣の「名にし負はば逢阪山のさねかづら人に知られてくるよしもがなし」の二歌最も人口に膾炙す。阪の東方に關の舊址存す。又街道に關明神蟬丸祠、關の清水、小野小町の隠棲したる關寺の址等あり。

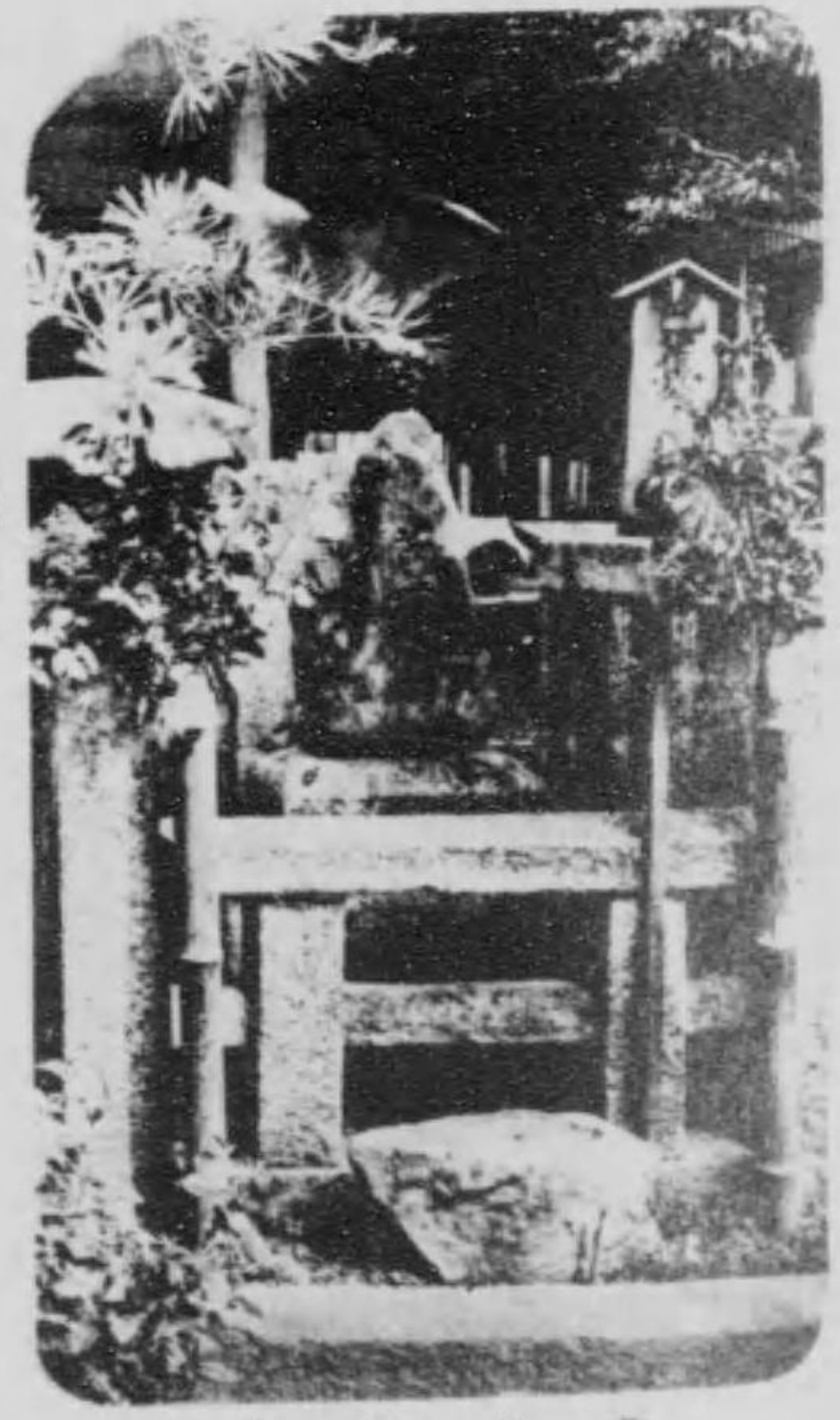
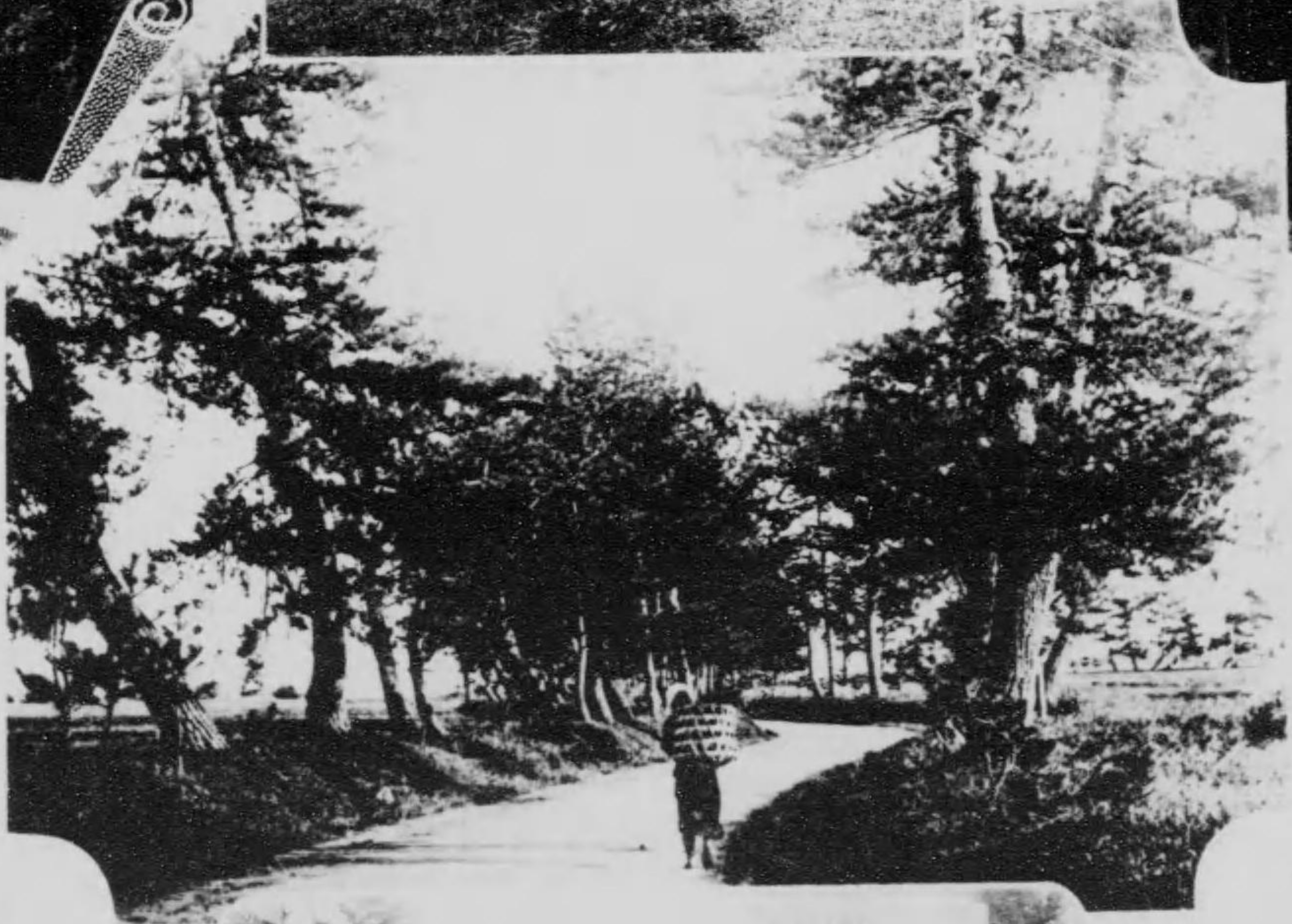
賤ヶ岳古戦場



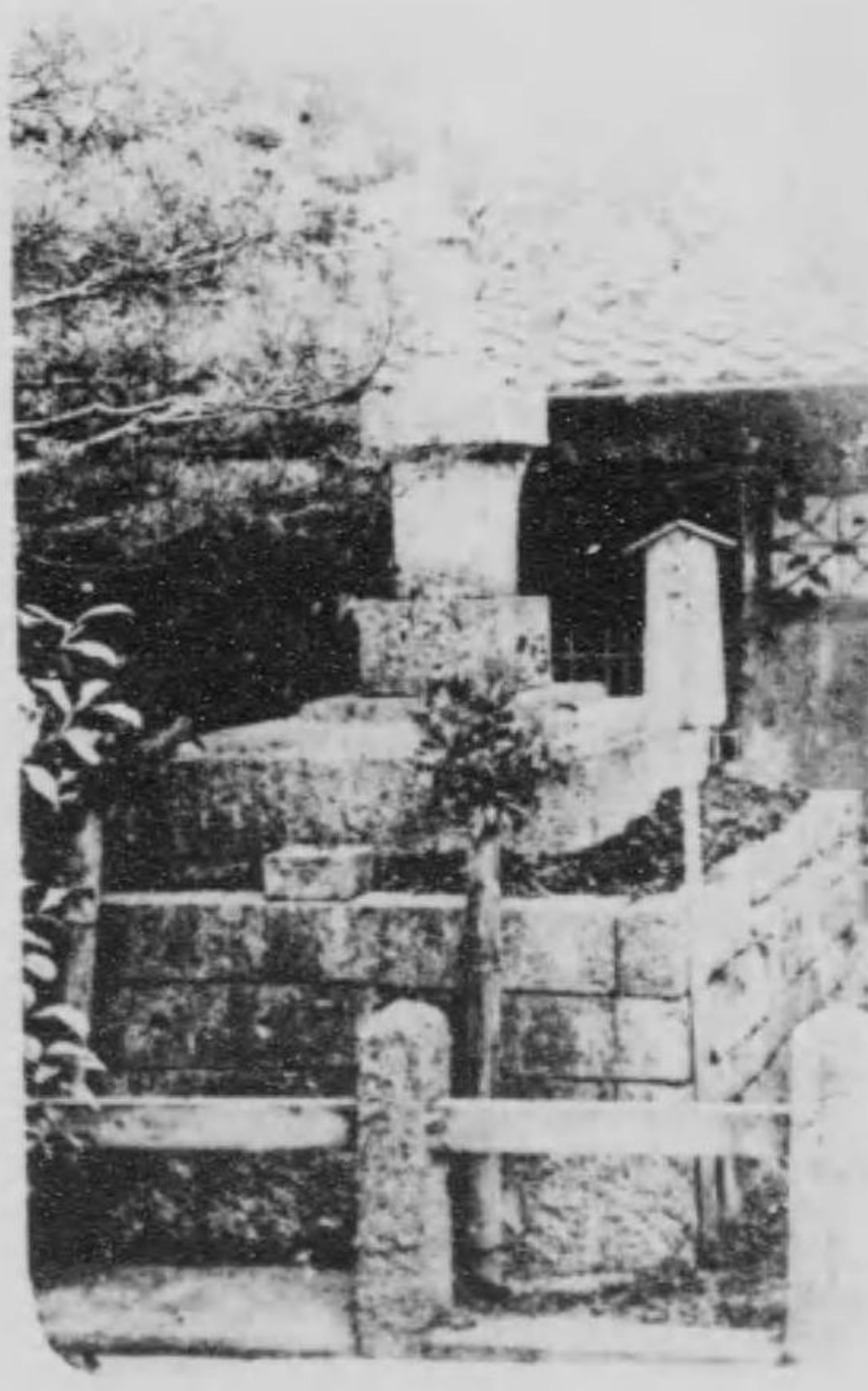
義仲寺



逢坂山



芭蕉翁墓



木曾會義仲墓



(下) 兼平墓 (中) 原津原



●近江富士（近江）

所謂これ傳説の蜈蚣山なるものにて野洲郡三上村に位す、本稱を三上山と云ふ一に杉山とも呼べり、其山姿頗る富嶽に似たるより近江富士と稱す、海拔一千二百尺汽車の野洲川鐵橋を渡るや其東方に巍然として中空に聳ゆるもの即ち此山なり。山嶺は二重の輪廓を爲して南北二峰あり、即ち雄山雌山と云ふ、山上展開し

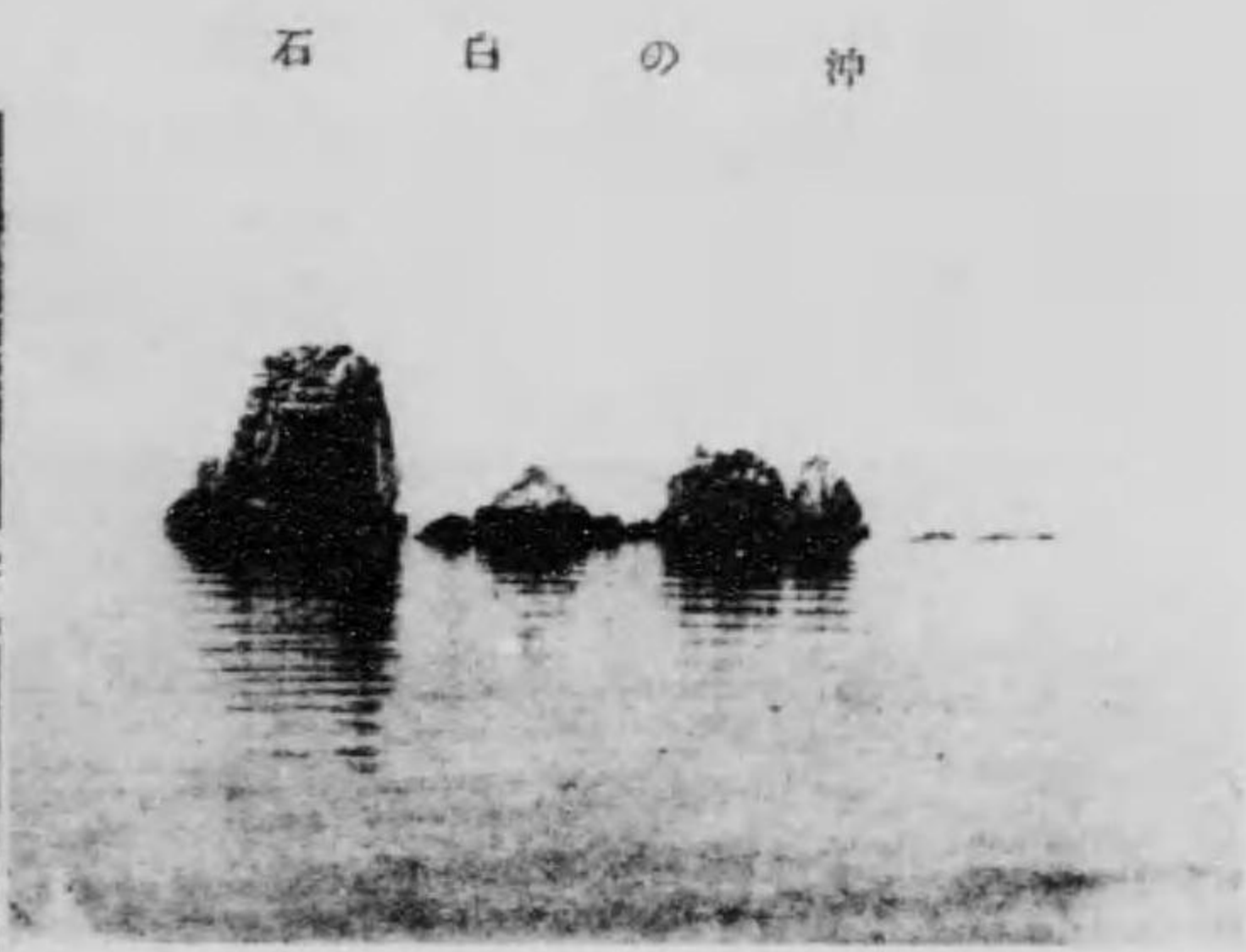
と稱したり、島内に奥津島神社あり、延喜式内、蒲生郡の大神なり、大同元年神封一戸を充てられ、又貞觀元年に授位の事あり、竹生島と匹敵すべき靈境なれども甚だ著はれざるは遺憾といふべし、然かも古來名勝の島嶼として詞藻に入れるもの尠からず、左に一二を掲ぐ

（萬葉集）

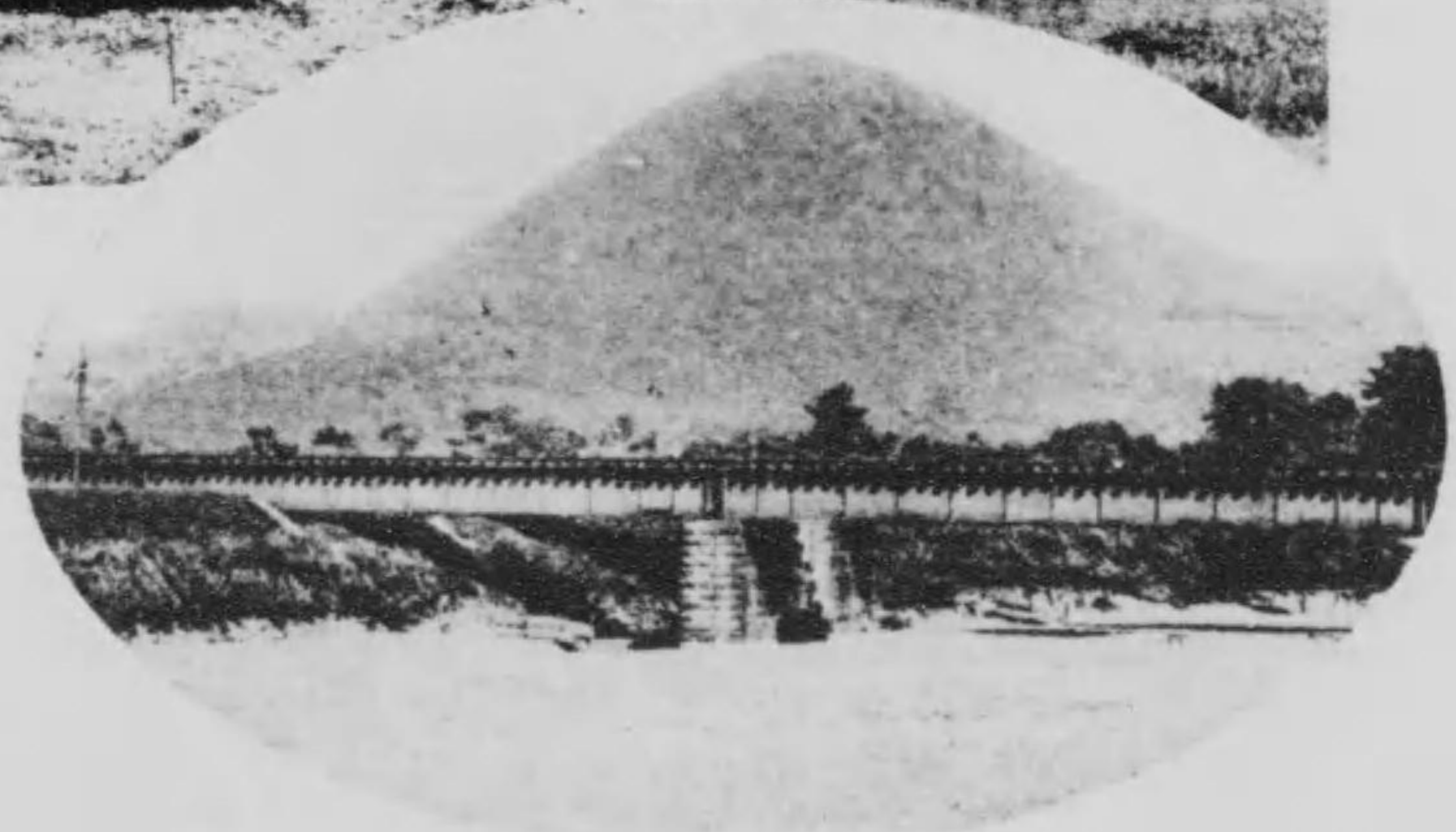
稱す、祭神は素盞鳴尊なりと云ふ、神殿神寂びて崇嚴の感深し。一書に記して曰く「三井寺の新羅神社は宇治殿頼通のお祈に頼豪阿闍梨参りたりけるに、妻戸より神の衣の袖さし出たり、後冷泉院の御時双岡に社を造り御靈會行ひたり、祇園の社とぞ云ひける」云々、又「神社考」に左の如く記せり。

圓珍自唐歸朝、忽有老翁、現于船舷曰、我是新羅國之神也、誓護汝、言訖已不見

沖の白石

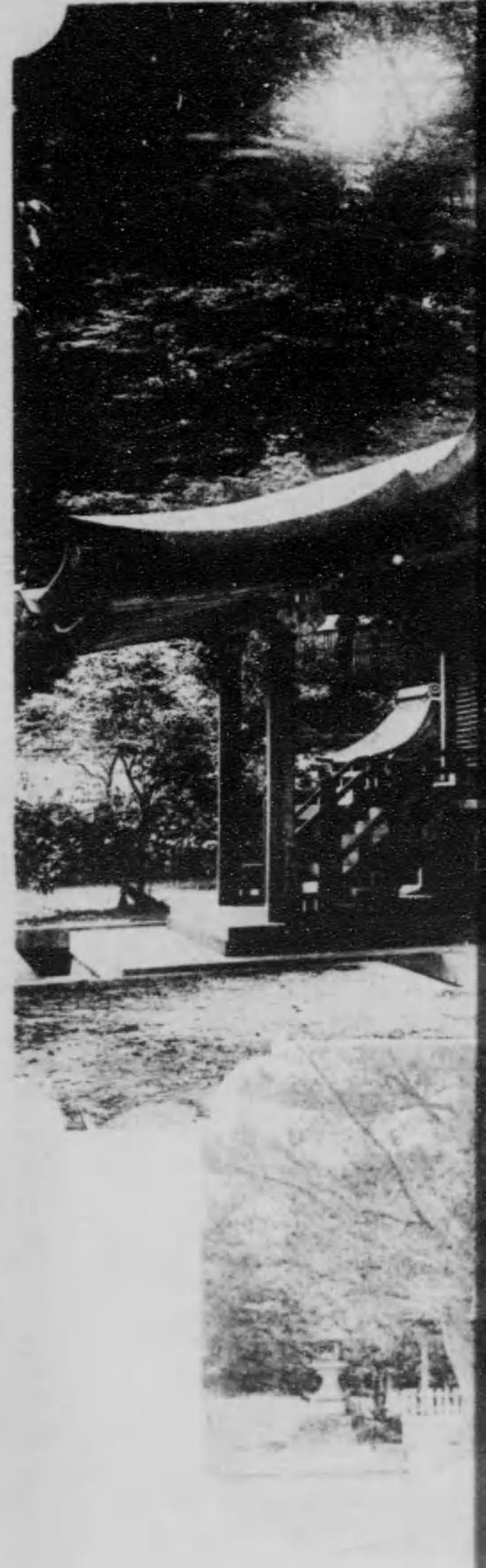


明智左馬之助駒松



三上山

建部神社



●近江富士 (近江)

所謂これ傳説の蜈蚣山なるものにて野洲郡三上村に位す、本稱を三上山と云ふ一に杉山とも呼べり、其山姿頗る富嶽に似たるより近江富士と稱す、海拔一千二百尺汽車の野洲川鐵橋を渡るや其東方に巍然として空中に聳ゆるもの即ち此山なり。山嶺は二重の輪廓を爲して南北二峰あり、即ち雄山雌山と云ふ、山上展開して遙に比良、伊吹、四明の諸岳を望み、

下瞰すれば琵琶湖の鏡面玲瓏として双眸に入る、絶勝筆舌の及ぶ所にあらず。山は周圍一里半、麓より登る事十八町にして頂上に達す。傳説に依れば、昔時此山に大なる蜈蚣棲息して、勢田の龍宮城に寇せしを以て田原藤太秀郷之を射殺したりと云ふ。是れ素より一條の俗談に過ぎず。又一書には此山の神を陀我神、或は天御影命なりとも云へり。

千早振三上の山のさかき葉の榮えぞまさる末の世までに
能 宜
常盤なる御神の山の杉村や
八百よろづ世のしるしなるらん
元 輔
萬代の三上の山の響きには
野洲の川水すみぞあひける
淨助 親王
雲晴る、三上の山の秋風に
さ、波遠くいづる月影

●沖津島 (近江)

長命寺の西北十八町許に在りて蒲生郡に屬す、即ち奥島を距る十餘町、伊崎島の西方に位置す。周圍一里二十餘町全島岩石より成る、島内一の田地なく戸數七十餘戸、島民悉く漁業を營む、鰻、鮎、鱈等の漁獲最も多し、本島は往時奥津島

と稱したり、島内に奥津島神社あり、延喜式内、蒲生郡の大神なり、大同元年神封一戸を充てられ、又貞觀元年に授位的事あり、竹生島と匹敵すべき靈境なれども甚だ著はれざるは遺憾といふべし、然かも古來名勝の島嶼として詞藻に入れるもの尠からず、左に一二を掲ぐ
(萬葉集)

淡海のみ奥津島山奥まけて
わが思ふいもが言のしげけく
(續千載集)
風わたる島の水海空はれて
月かげ清し奥津島やま
(新拾遺集)
降る雪はそれとも見えてさゝ波や
寄せてかへらぬ沖津島山
瀬山 陽

避風入湖鼻 繫舟蔭林樹 數家依崖住
汲路泥常滑 上岸借一枕 舟中忘蚊齒
泱旬滯藩城 紗帳申估畢 不如漁父家
漁燈播吾舫

●建部神社 (近江)

栗太郎瀬田村大字神領に在り、一に竹部大明神と稱す。近江國一の宮にして、大己貴命、天明玉命、日本武尊の三柱を合祀す、景行天皇四十六年四月の創建にして、建部稻依別王の造營に係り、白鳳四年建部連安麿に勅して此處に移さしめ給ふ建久年間源頼朝上洛の際社領を寄附せる以後、屢々兵燹に罹り、文明十二年勢多肥後守之を再建し以て今日に及べり明治十八年官幣中社に列せり、老松森樹境内に鬱生し、神域幽邃の内に、社殿蒼重として構へられ、静寂自ら俗氣を脱して畏敬の念を深からしむ。

●新羅善神社 (近江)

滋賀郡三井寺圓満院の北方五町に在り此邊を字北院と呼べり。一に新羅明神と

稱す、祭神は素盞鳴尊なりと云ふ、神歳神寂びて崇嚴の感深し。一書に記して曰く「三井寺の新羅神社は宇治殿頼通のお祈に頼豪阿闍梨参りたりけるに、妻戸より神の衣の袖さし出たり、後冷泉院の御時双岡に社を造り御靈會行ひたり、祇園の社とぞ云ひける」云々、又「神社考」に左の如く記せり。

圓珍自唐歸朝、忽有老翁、現于船舷曰、我是新羅國之神也、嘗護汝、言訖已不見見珍入京 翁亦來曰、我有一勝地、己先相收、建立院宇、度典籍、我加護到滋賀郡園城寺、明神語珍曰、我卜居寺之北野、而後乘輿、珍問曰執事者爲誰、明神曰三尾明神也、自此新羅威靈益顯、

●明智左馬之助駒繁松 (近江)

琵琶湖の西岸、堅田の浮御堂を距る遠からざる湖邊に在り。是れ傳へて明智左馬之介光春、湖水を渡り了つて其乘馬を繋ぎたる松なりと云ふ。

天正年間左馬之助光春は江州安土の城を守り居りたるが、豊臣秀吉大軍を以て攻め來るとの報に接し、光春は座して敵を俟んより事ろ出で、山崎なる光秀の勢に合して死を俱にするに如すと爲し、城兵を率て出發したるが、途中光秀既に敵死の報を得て、已を得ず引返し其本城なる坂本に據りて一族と共に最後を屏くすべしとて踵を返して粟津を北へ大津を指して馳行けるに秀吉の軍は雲霞の如く追撃し來る見るより左馬之助は、馬を早めて一散に駈出せり、此時既に味方の勢は敵の大軍に恐れて四散八落、琵琶湖に近づきし頃從士林半四郎が踏止りて敵を遮り戦ふ間に、左馬之助は唯一騎漫々たる湖水に馬を乗り入れ難なく對岸に押渡り馬を一松樹の下に繋ぎ其身は坂本城に入り壯烈なる最期を遂げたり。

●中江藤樹書院 (近江)

近江聖人として有名なる中江藤樹の講堂、即ち、藤樹書院は高島郡青柳村大字上小川にあり、書院の畔に一樹の老藤を栽ゆ、蓋し其號ある所以なり。

姓は春樹名は原、字は惟命、通稱を與右衛門と云ふ、藤樹は其號なり、又黙軒頭軒等の別號あり、藤樹の父は農となりて小川村に住す。祖は伊豫の大洲侯に仕ふ、藤樹祖父に養はれて大洲にあり、十一歳の時大學を讀み大に感悟發奮する所あり、十七歳大洲に來れる京都の僧に就て論語の講義を聞き次で四書大全を得て大に喜び日夜熟讀研讀す、既にして祖父及び父相尋で歿し母獨り小川村にあるを以て之に孝養すべく致仕して歸郷し益々讀書研精、陽明學を修み郷人の爲めに講學教育最も懇勉を極む郷民大に藤樹を徳とし近江聖人の名噴々として傳へらる。當時各地の諸侯禮を厚くして聘すると雖も藤樹固く辭して仕へず。岡山藩主池田光政請ふこと甚だ切なるより、門人熊澤蕃山を薦む、慶安元年八月二十五日藤樹四十一歳を以て歿す。因に藤樹及其子秀重の墓は青柳村の玉林寺にあり、後世村民の墓を祭る恰も慈親に仕ふるが如きものあり以て其德化の一斑を窺ふべし。

院畔古藤花盡時 泛湖來拜昔賢碑
餘風有似比良靈 流滅無人致此知

後藤 春艸
孝唯將一母 忠不事二君 積穀成俸償
上表吾情陳 童齡讀大學 知學在修身
宜哉父老語 淡海出聖人 勿尤信王氏
行實我所忻 蘋繁何處薦 大湖渺白雲

●彦根城 (近江)

彦根町金龜山にあり、即ち今の彦根公園なり。彦根城は素と井伊直政之を築か

んと欲して病中果さずして歿す、其子直勝亡父の遺志を繼ぎ茲に築きて佐和山城より移りて居城せり。其築城の際に徳川二代將軍 忠、井伊氏の爲めに伊賀、伊勢、尾張、美濃、飛騨、相模、越前の七ヶ國の十二大名に命じて其工事を援けしめ斯くて慶長八年工事を起し、其の三層の天守閣は京極の大津城より、西の丸の三層樓は淺井の小谷城より、天坪櫓門は羽柴の長濱城より移し、二十ヶ年を経て竣工を告げたり、城郭の周圍一里餘に亘る而して是れが設計は山本勘介の高弟早川彌惣右衛門にして所謂勘介流式を發揮し鐘郭繩張は城中第一の出色と評せらる、ものにして如何なる強敵の寄するとも容易に破るを得ざる堅城なりと云ふ

頼山陽
雄藩形勢控湖關 有客觀光一往還
積水橫包畿內地 浮雲斜指越前山
四強魚稻豐饒處 百雉城樓縹緲間
難護鄭侯兼戰績 渠魁廢址不違顏

●樂々園 (近江)

彦根城北三の丸の湖岸にあり。是れ井伊氏の別邸にして素と榎御殿と稱せり。此地金龜山を負ひ、北は膽吹山に對し亭榭の結構甚だ宏莊にして風韻景致に富む樂々園八景の勝あり、詩人谷鐵臣これが勝を賦したる時を亭中に掲げたり。

●井伊直弼肖像 (近江)

井伊直弼、幼名は鐵三郎、後ち掃部頭と稱す、彦根の藩主にして父を直中と云ふ十三代將軍家定の時大老となる當時國事多端にして鎖港攘夷の論高く海内紛糾を極めたるが直弼非常の決斷を以て勅許を待たず外國に向つて通商條約を締結したるより物議沸騰し且つ獨裁的に紀州より幼子家茂を迎へて十四代將軍となしたるより更に國內動搖を來たしたる結果、

反對派より多大の反感を買ひ遂に萬延元年三月三日登城せんとする際、水戸浪士佐野竹之助等十七士の爲めに櫻田門前に於て要撃せられて殺さる享年四十六。幕末開國の際に於ける直弼の措置に就いては毀譽褒貶議論甚なれども、果斷以て多難の時局に處したる膽略は政治家の骨頭あるものと推稱するに足る。

●井伊直弼筆蹟 (近江)

直弼號を柳樹の舎と稱し秀詠軒からす寫真に示す和歌は左の如し
爲君祈世

藤原 直弼

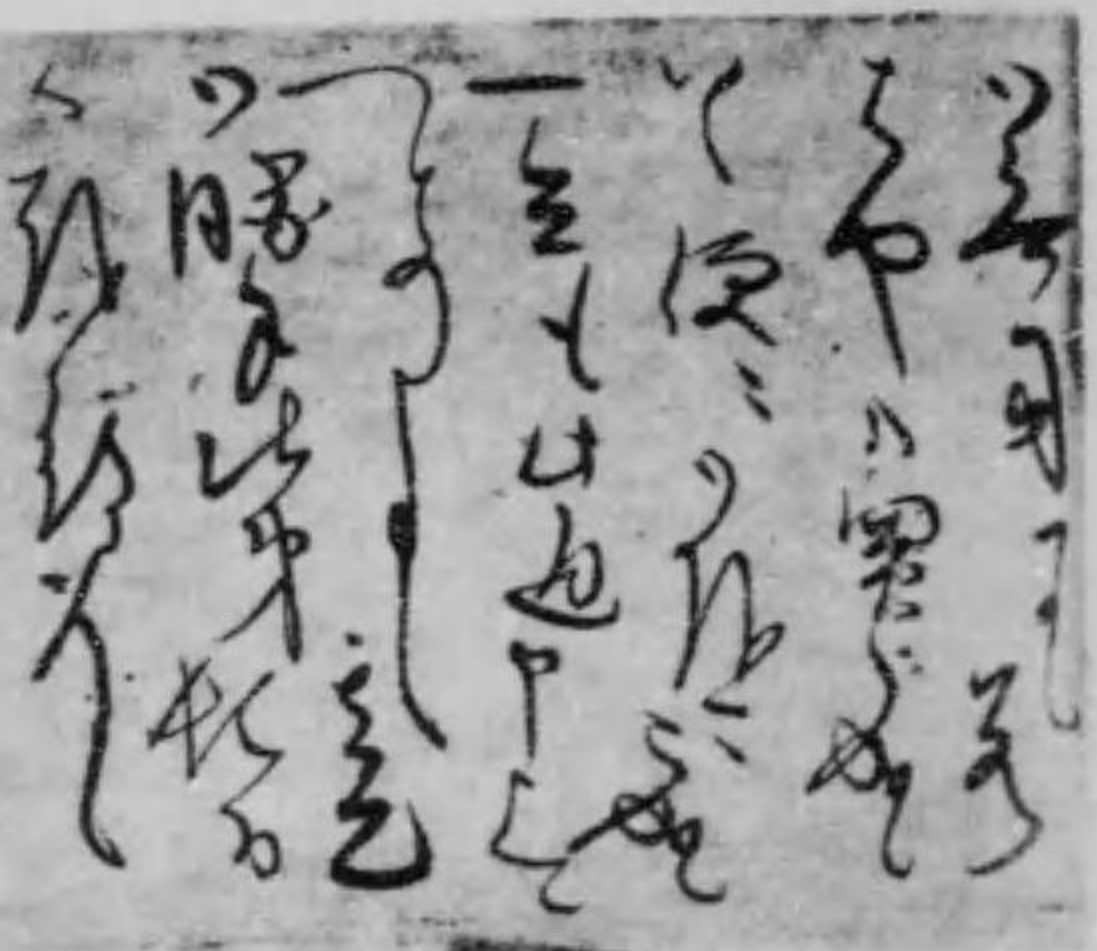
大かたの身をとていのる心かは
御代をあふくもたゞ君がため
語句の間又以て直弼が平生心事の一端を窺知し得べきものなしとせず

●龍潭寺 (近江)

井伊氏の菩提所にして、清涼寺と共に佐和山の麓にあり、本寺は直勝の弟井伊直孝曾て其封地たりし上野國より此地に移せるものなり。境内清楚にして風趣頗る佳なり。附近懸崖あり、女郎墮と稱す是れ關ヶ原の役佐和山落城の際城中の婦女身を以て茲に投じて多く死したりと云ふ。

因に曰ふ、直政は慶長六年六萬石を賜せられて上野國高崎城より近江に移りたるものにて前封を併せて十八萬石を得、元和元年其子直勝に別封三萬石を以て上野國を賜ひ直孝に實家を繼がしめ、江州長濱五萬石を賜ひ寛永十年直孝大老職に任せられて更に累勲を以て五萬石を加賜せられ、後又加封ありて三十五萬石となりしが、文久二年直弼の子直憲其の父大老職の日、禮を王家に缺き、人心騷擾の基を開きたりとの責を以て十萬石を削らる。

中江藤樹



藤樹書院



龍潭寺



餘風有似比良靈 流滅無人致此知 後藤 春艸

●井伊直弼肖像（近江）

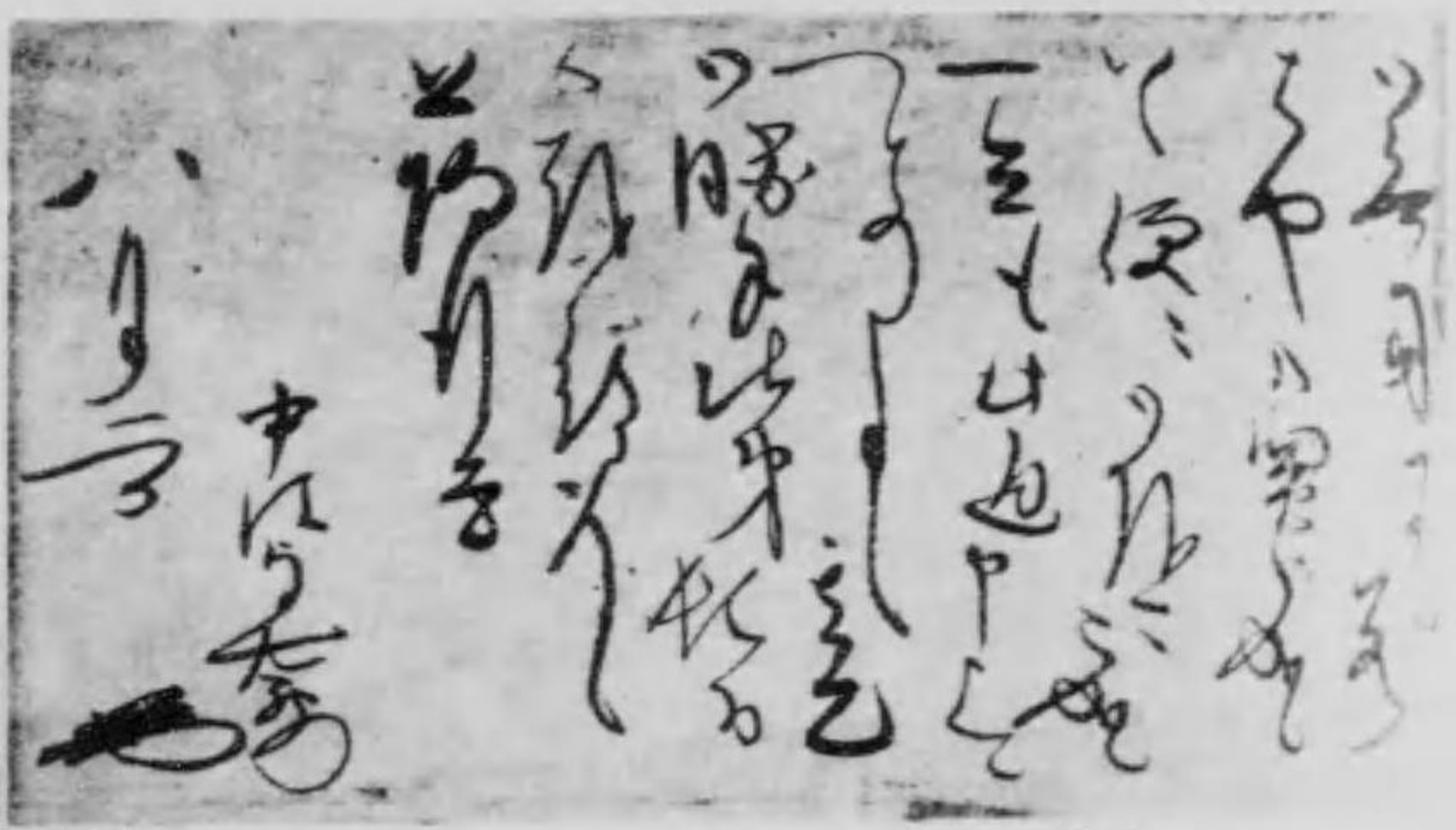
孝唯將一母 忠不事二君 積穀歲俸價 上表吾情陳 童齡讀大學 知學在修身 宣哉父老語 淡海出聖人 勿尤信王氏 行實我所折 蘋繁何處薦 大湖渺白雲

●彦根城（近江）

井伊直弼、幼名は鐵三郎、後ち掃部頭と稱す、彦根の藩主にして父を直中と云ふ十三代將軍家定の時大老となる當時國事多端にして鎖港攘夷の論高く海内紛糾を極めたるが直弼非常の決斷を以て勅許を待たず外國に向つて通商條約を締結したるより物議沸騰し且つ獨裁的に紀州より幼子家茂を迎へて十四代將軍となしたるより更に國內動搖を來たしたる結果、

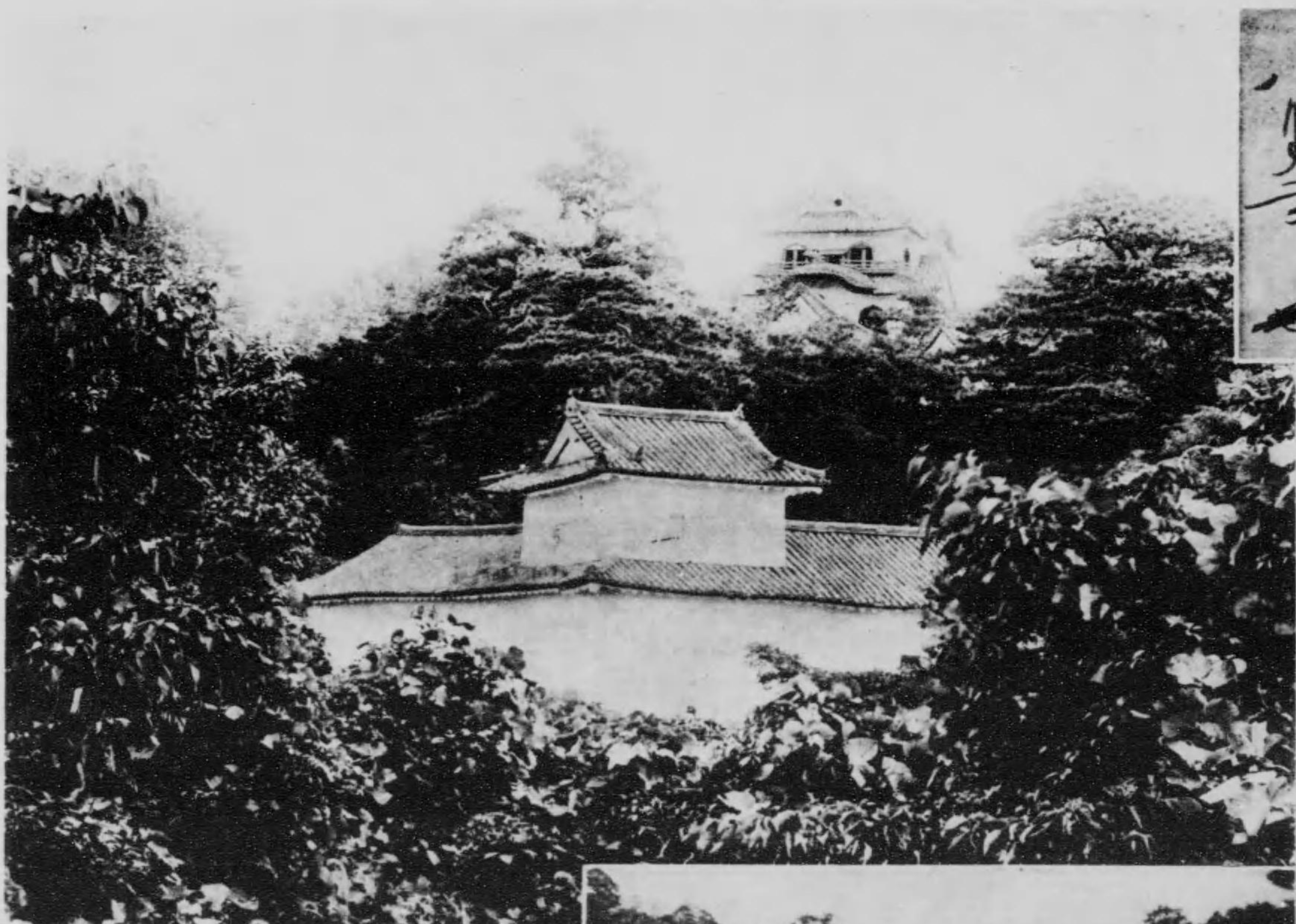
見せしめ上野國高崎城より近江に移りたるものにて前封を併せて十八萬石を得、元和元年其子直勝に別封三萬石を以て上野國を賜ひ直孝に實家を繼がしめ、江州長濱五萬石を賜ひ寛永十年直孝大老職に任せられて更に累勲を以て五萬石を加賜せられ、後又加封ありて三十五萬石となりしが、文久二年直弼の子直憲其の父大老職の日、禮を王家に缺き、人心騷擾の基を開きたりとの責を以て十萬石を削らる。

中江藤樹筆蹟



龍潭寺

彦根城



樂々園

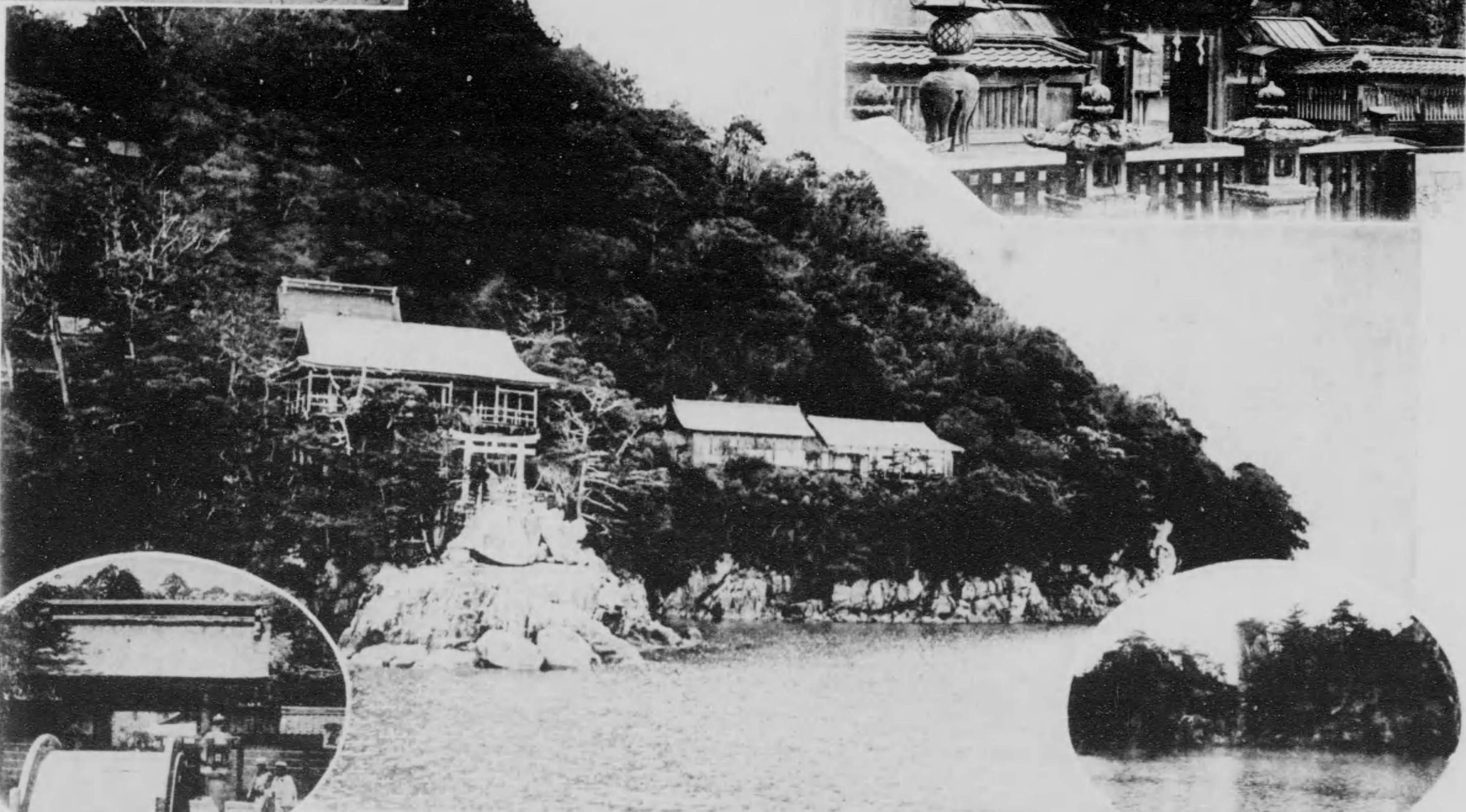
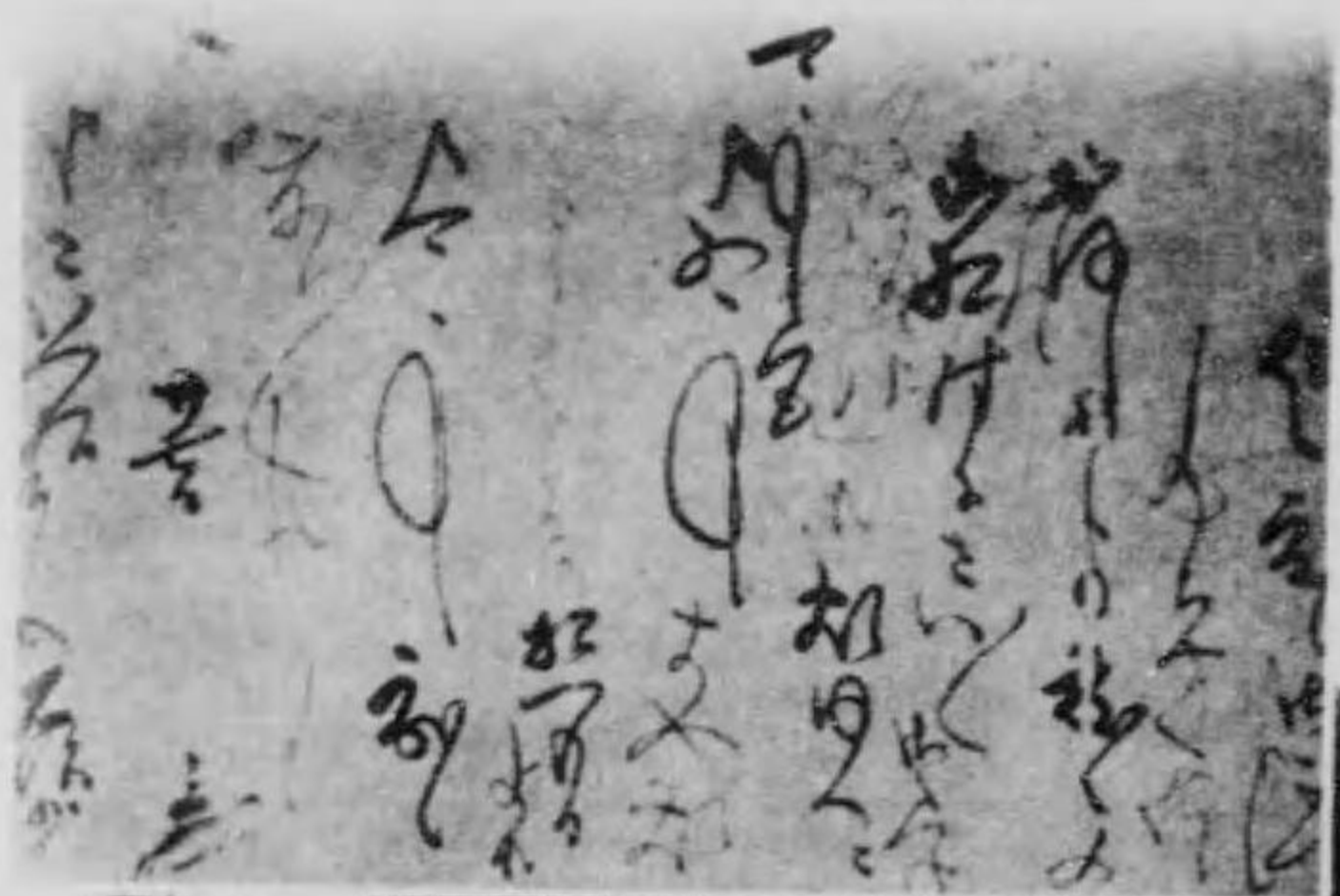


井伊直弼筆蹟

佐和山神社



石田三成筆蹟



竹生島辨天祠

多景神社



多景島

●竹生島辨天祠 (近江)

琵琶湖の北部に位する島にして東淺井

郡竹生村に屬す、大津を距る十六里の湖

中にあり、周圍十八町、水面を抜く事六

十尺、全島花崗石より成る、斷崖絶壁奇

景怪趣、鬼神の工と疑はる、樹木鬱蒼と

して湖水に映じ風景甚だ佳なり、上古此

島に二岐の竹を生じたるを以て竹生島と

名くと云ふ、又一説には島形筍に似たる

より竹生島の稱ありともいふ。島の東方

に小港あり其上に都久夫須麻神社、辨天

●多景島 (近江)

琵琶湖中の岩嶼にして一に竹島と稱す

蓋し竹篠叢生するを以てなり。又島中風

景に富めるより近來多景島と稱するに至

れりと云ふ。夫上郡八坂の湖上四十町に

位し、東西三十間、南北二町三十間、周

圍五町餘あり。島中に一字あり、見塔寺

と云ふ、日蓮宗にして明暦元年僧日請の

創建に係る、出山釋迦、毘沙門天、鬼子

母神、及び曼荼羅を收む、寺の北側に巨

巖あり法華題目を刻す。

守の居城なりしが、織田信長近江を平定

するに及んで丹羽長秀を茲に封す、後天

正十八年豊臣秀吉、石田三成を此地に封

じて十八萬石を賜ふ、關ヶ原役、城陥り

て三成の父爲成、兄重成、子重家等一族

悉く茲に自殺す。佐和山城下に清涼、龍

潭の二寺あり、山上に井伊神社あり、井

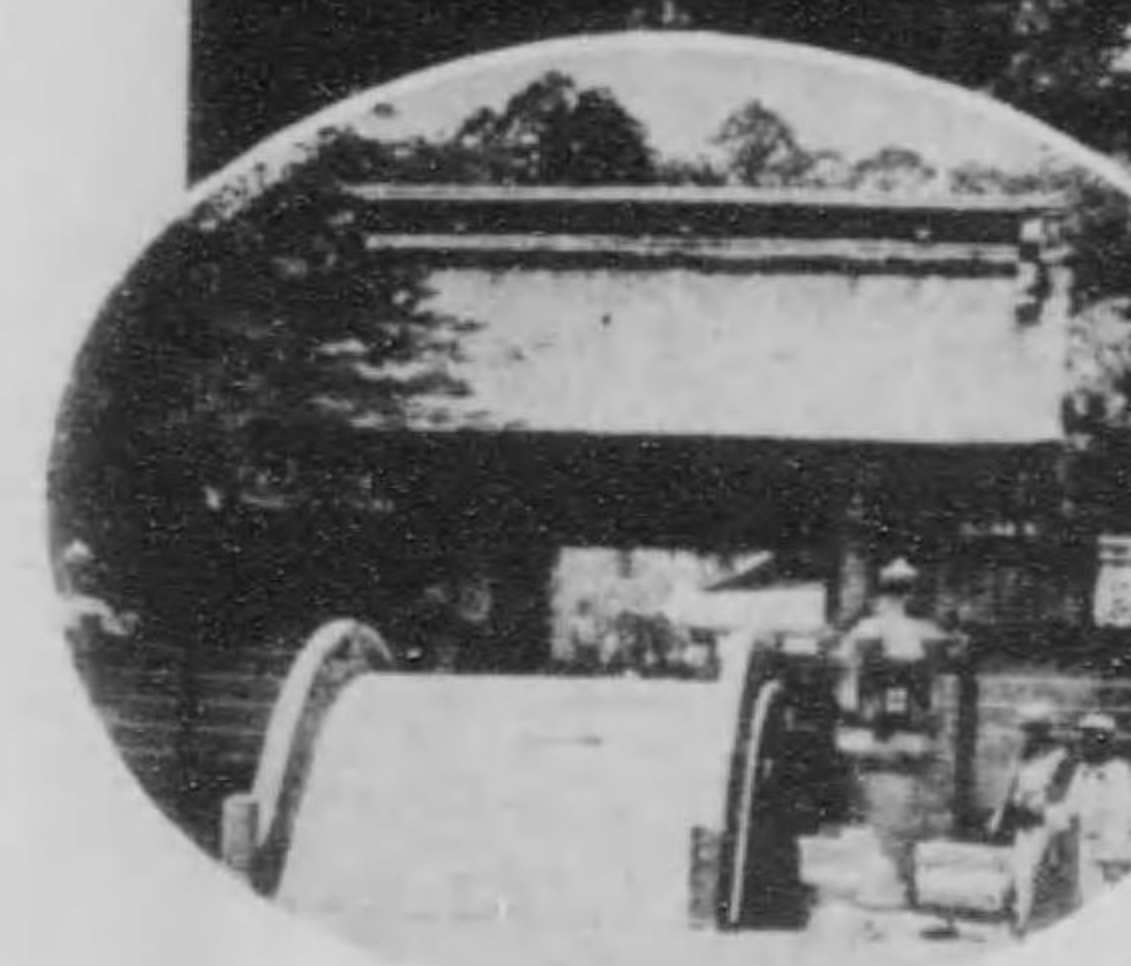
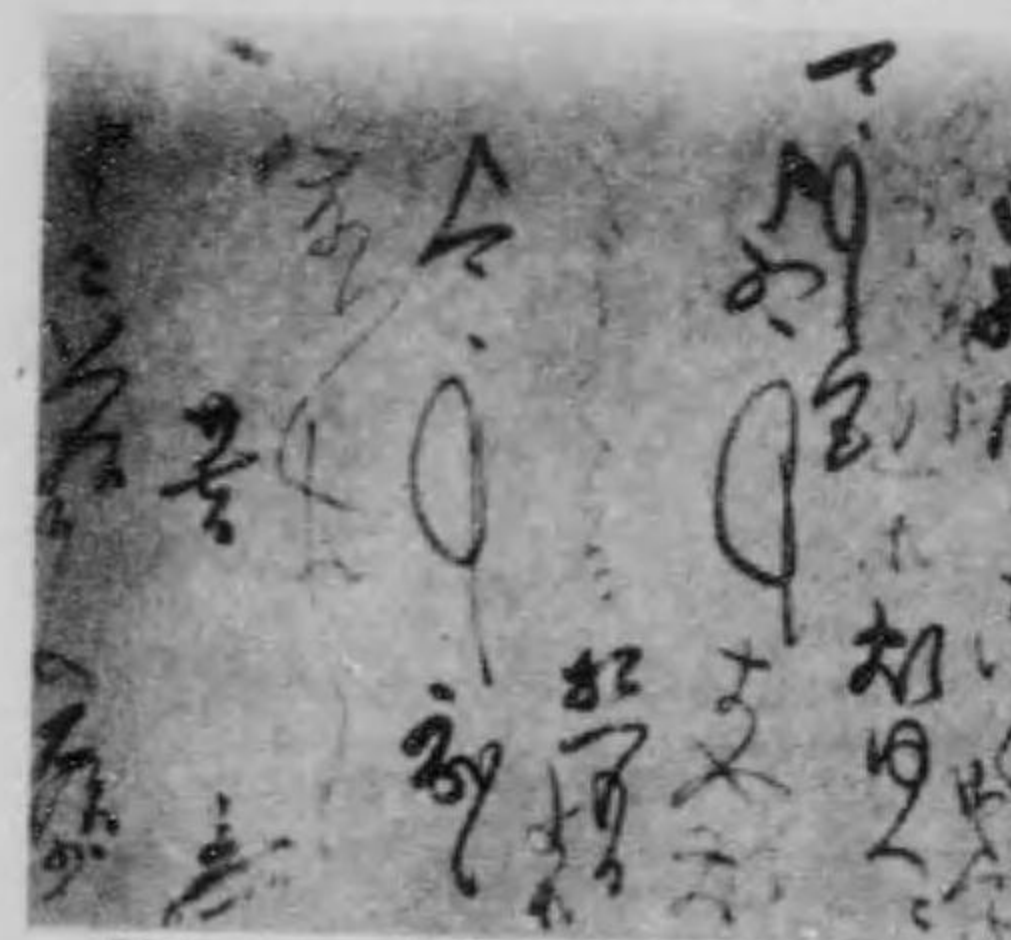
伊氏代々の祖靈を祀れり。

頼山陽

金龜尾尾太湖水 背負厨城百雄起

越山若山倒朝來 漕帆直到萬家市

勤奮藩維功第一 庚子之軍策誰決



多賀神社

●竹生島辨天祠 (近江)

琵琶湖の北部に位する島にして東淺井郡竹生村に屬す、大津を距る十六里の湖中にあり、周圍十八町、水面を抜く事六十尺、全島花崗石より成る、斷崖絶壁奇景怪趣、鬼神の工と疑はる、樹木鬱蒼として湖水に映じ風景甚だ佳なり、上古此島に二岐の竹を生じたるを以て竹生島と名くと云ふ、又一説には島形筈に似たるより竹生島の稱ありともいふ。島の東方に小港あり其上に郡久夫須麻神社、辨天堂觀音堂あり。辨天は安藝の嚴島、相模の江の島と共に日本三辨天と稱せらる、觀音堂は西國三十三所第十三番の札所にして千手觀音を安置す、寺を寶嚴寺といふ。

●多景島 (近江)

琵琶湖中の岩嶼にして一に竹島と稱す蓋し竹篠叢生するを以てなり。又島中風景に富めるより近來多景島と稱するに至れりと云ふ。犬上郡八坂の湖上四十町に位し、東西三十間、南北二町三十間、周圍五町餘あり。島中に一字あり、見塔寺と云ふ、日蓮宗にして明暦元年僧日請の創建に係る、出山釋迦、毘沙門天、鬼子母神、及び曼荼羅を收む、寺の北側に巨巖あり法華題目を刻す。多景島の西南、湖上に高さ三丈餘の巨石聳出す、號けて「沖の白石」と稱す、是れ天降りしものなりとの傳説あり。

●石田三成筆蹟

筆蹟原書は竪九寸二分、横一尺三寸六分、書簡の斷片零墨なりと雖も亦以て戰國の類才三成の風采を聯想し得べきの料たるを失はず、其宛名に假名にて「いつ」の字あるを見る、是れ眞田伊豆守信幸ならんか

●多賀神社 (近江)

大上郡多賀村大字多賀に在り。延喜式に多阿神社又は日之少宮と記されたるもの即ち當神社なりとす。社格は國幣中社にして、伊弉諾、伊弉册の二尊を祀る近江國中、日吉神社に亞ぐの大社にして社域宏壯にして土地高燥、千餘年を経たりと思はしむる老樹巨幹は天を蔽ふて森嚴の氣韻溢るゝを覺ゆ、本社、拜殿を始め、社務所、舞臺、樓門、四足門、神輿藏、其他末社、三宮、聖社、熊野社、天神社、蛭子社、荒神社、伊勢兩神宮、日向神社等あり。一の鳥居より社門に達する迄森樹生ひ繁りて幽邃を極め、社門に入りて正面拜殿に達す、是より八町を距て、當社の御旅所あり、亦頗る風趣に富めり。

高積善

靈島聞名遙寄懷 秋風尋到立徘徊
老松古柏相重挿 怪石奇巖似欲頽
行雨終朝連水見 低雲薄暮抱山廻
有神此上歲年久 天下精誠任浪來

●佐和山城址及井伊神社 (近江)

彦根町の北佐和山に在り。一に澤山又佐保山と云ふ。關ヶ原役石田三成茲に居城し東軍の爲めに敗る、後徳川家康、井伊直政に十八萬石を授けて佐和山城を與ふ、直政の子直勝、城を佐和山の西磯山に築きて此城を廢せり。佐和山城は始め京極氏の世臣磯野丹波

【近江】

目にて、誰か見ざらん竹生島
波にうつらふ米のたまがき

●永源寺（近江）

禪宗臨濟派の本寺にして愛知郡東小諒村大字高野の瑞石山に在り。一名を山上寺と云ふ。寂室禪師の創建に係る。寺は石端山の半腹に位置し、愛知川その東麓を繞り、満山楓樹の裡に堂閣殿宇峙ち、櫻流樹間に響き頗る幽趣を極む、本堂方丈、山門、庫裡、書院、鐘樓、衆寮、經藏、觀音堂等皆見るべし、觀音堂には禪師が龕に支那に在りたる時、其時刻に成る觀音の小像を安置す、世繼觀音是れなり。

寂室禪師は小野宮大臣實頼七世の孫にして正應三年五月十五日を以て生れ、十五歳の時、僧となり、佛燈國師を師として大悟し名を元光と改む、元應元年支那に渡り諸高僧に參禪し七年を経て歸朝せり。後近江に來るや佐々木氏頼深く禪師を崇信し、爲めに伽藍を此地に創建し熊原を以て寺領と爲し以て師を聘す、茲に於て禪師康安元年を以て入寺す、諸國の僧徒 つて師に従ふもの二千人に及ぶ。

長勝寺、建長寺、天龍寺に住職たるべき繪旨公帖あり、足利義滿亦深く師を敬して寺領を寄附す、又後光嚴天皇宸筆を賜ひて法要を下問あらせられしに對して禪師は乃ち法語二篇を奉獻す。貞治六年九月朔日七十八歳を以て入寂す、後ち塔を建て合空院と云ふ、後小松天皇勅して圓應國師の諡號を賜ふ、法弟に松嶺、異仲彌天、越溪の四人ありて、之を四派と稱し相續て當寺の住職となれり。後土御門天皇黃衣の宣旨を賜ひ、後奈良天皇亦紫衣の宣旨を賜ふ、元龜二年十二月織田信長の爲めに寺を焼かれたるが寛永二十年八月後水尾天皇の勅に依り佛頂國師來住して、唐製の釋迦、迦葉、阿難の三尊及宸翰を賜ひ東福門院より伽藍を再建せられ、馬郎婦觀音の巨張を寄附され、圓照寺宮より佛祖の舍利塔を寄附され、後又

後水尾天皇唐本の大藏經を納め給ふ、延寶三年住僧南嶺將軍家綱に謁し寺傳を歸りて紫衣の許狀を下附せらる。

●霜錦館、音無川、旦度橋

（近江）

永源寺は其名利なると共に、其境内の風趣絶勝を以て知らる、所謂「紅葉青山水急流」の句は當寺の勝を評するの語と云ふべし、殊に満山の楓樹は秋季に至れば悉く錦繡を示し、境内に霜錦館は音無川の溪流に映じ、美觀名狀すべからず、此間亦旦度橋の風韻、幽趣を彩りて、絶勝仙境の想ひあり。古來詩人騷客來つて諷詠せる詞藻甚だ多し。

藤井 竹外

落日層嵐影有無

溪橋縱目送歸鳥

霜林縱欠如丹葉

絕壁寒流是畫圖

琵琶湖外古禪關

楓樹千章夕照間

佛地莊嚴殊不俗

展將霜錦畏寒山

又東福門院伽藍再建ありし後、皇女二宮の尼とならせられし時、硯を當寺に納め給ひて左の詠ありたり。

海はあれど君が御影のみる目なき

硯の水のあはれかなしき

因に云ふ、有名な畫僧雪舟は此の永源寺より出でたる僧にて越溪と號せり。

●錦織寺（近江）

門徒宗一派一流の本山にして野洲郡中里村大字木部に在り、遍照山と號す。天安二年僧圓仁の創建にして當初は天台宗に屬し毘沙門天を以て本尊とせり。然るに嘉禎年間、親鸞上人、常陸の稻田郷に在りし時、霰ヶ浦に毎朝光輝を發するものあるを認め之を漁りて一尺八寸の阿彌陀如來を得、笈に納めて京都に歸る途次近江を過ぎて茲に安置し念佛道場となしたり、以來今に至つて當寺は眞宗五派本

山の一となれりと云ふ。寺域濶く、堂宇又宏壯、結構甚だ壯麗なり、境内に親鸞上人の記念樹と稱する笈掛松あり、寺寶の紫香錦は長さ十五尺幅三尺、是れ曆仁元年七月一日夜、天女天降り來つて織れるものなりと傳ふ。又四條天皇より賜はりたる天神護法錦織之寺の八字を認めたる勅額を有す。

一説に、當寺は山本源氏、錦織氏の人々發心の建立とも稱す、又、中世此郷の領主石鼻民部なる人、親鸞の徒となりて改宗せりとも云へり。

●長命寺觀音（近江）

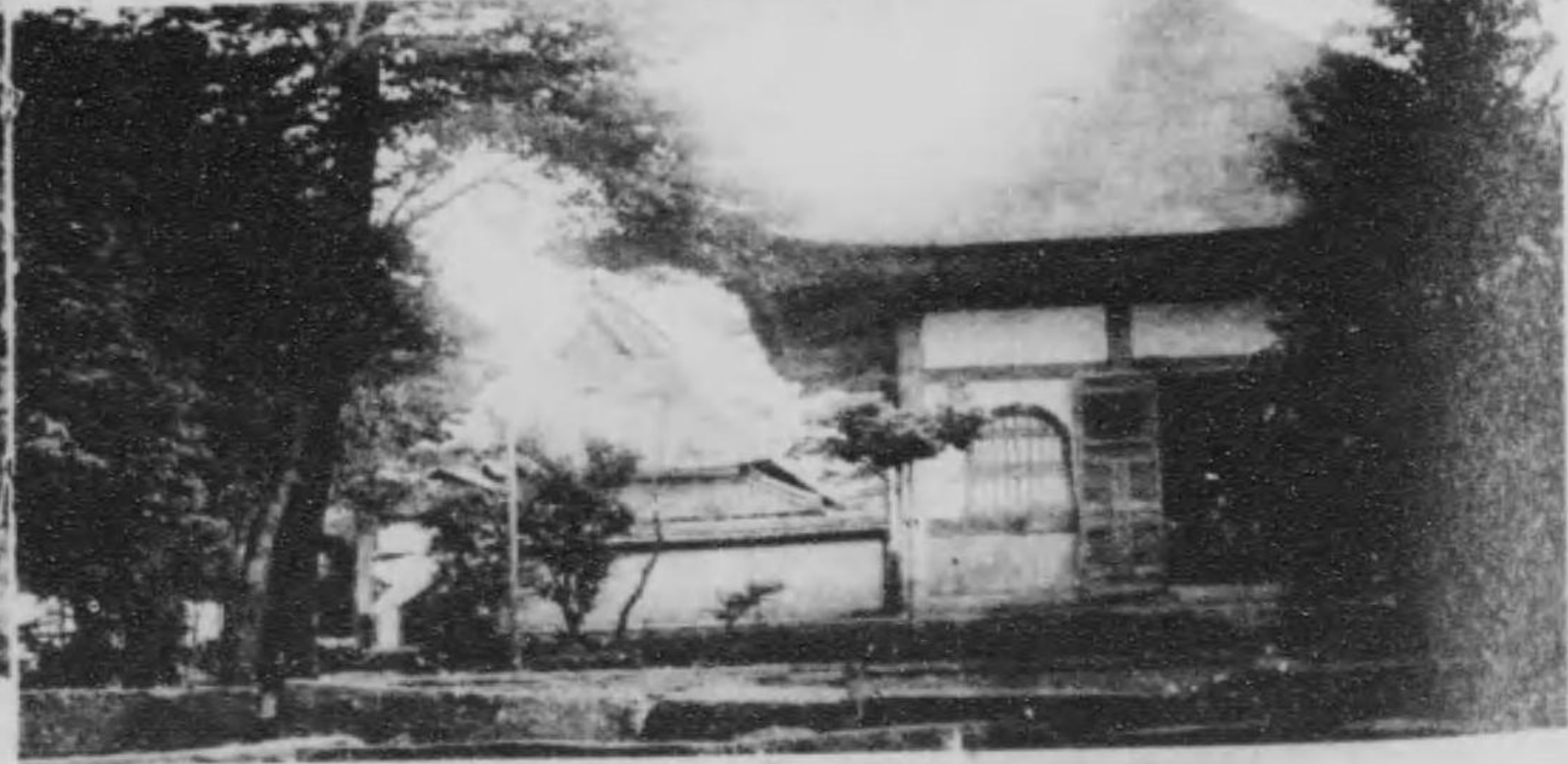
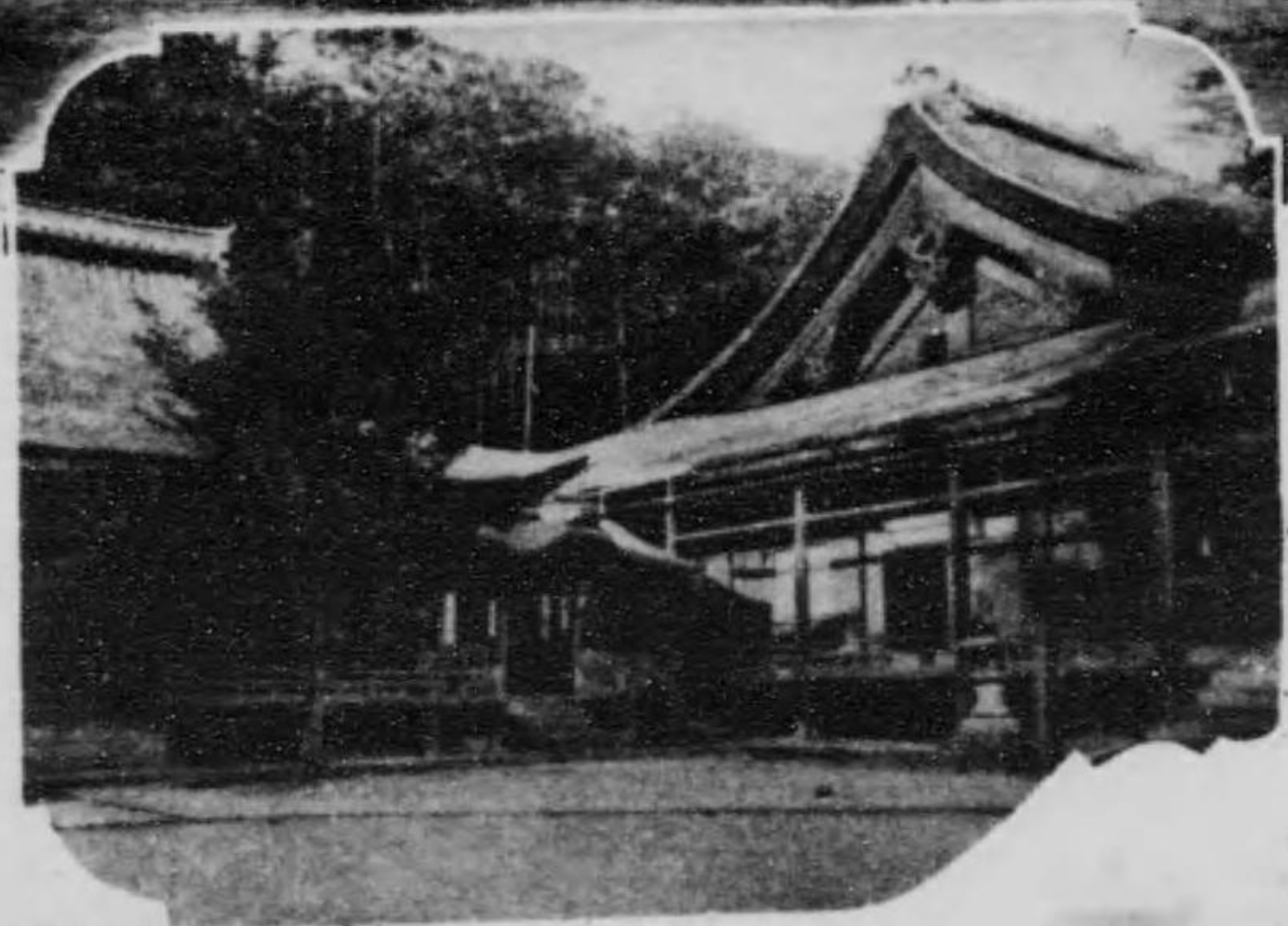
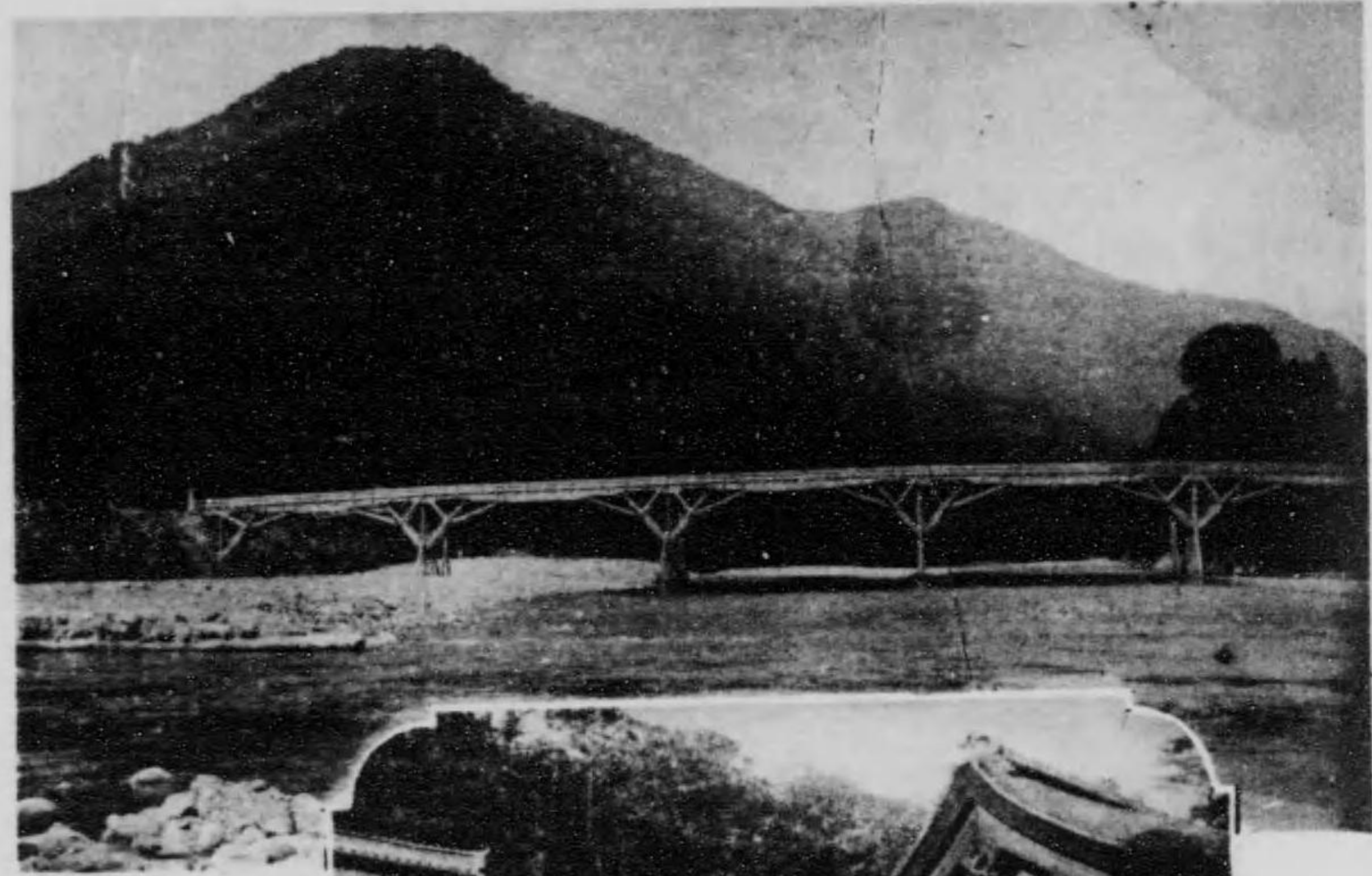
蒲生郡奥島村字北庄の西南に在り、豊聰太子の創建に係り、天台宗にして西國巡禮三十一番の札所なり。豊聰太子の作として有名な觀世音を以て本尊とす、寺は高き丘上に建ち、登路二條を設く、一は表坂にして八百八階を有し行路甚だ峻なり、一は裏坂にして稍々登り易し、此路を行く事二町にして華表あり、更に四町にして本堂に達す、山上眼界豁達して琵琶湖を下瞰し、四望の風色頗る佳絶近江勝區の一たるを失はず。

寺傳に依れば華山天皇、最愛の妃を喪はせられたるを悲み給ひ、落飾して花山寺に世を遁れさせられたる後紀州那智山より美濃の谷汲寺に至る三十三所の觀音を巡禮する事を思ひ立たせられて、皇妃の冥福を祈らせ給へり、是れ蓋し西國巡禮の始めなりと稱す。元暦元年佐々木秀義は平氏と戦ひて大原谷に戦死す、此時源頼朝佐々木追善の爲め當寺を再興す。天正年間、織田氏の兵燹に罹りて堂舎殿宇悉く烏有に歸したるが、後再び勸請して建立せるもの現在の堂宇なりと云ふ、一説に、當寺は佐々木秀義の子定綱、亡父の菩提の爲め再興したるなりと、姑く疑を存す。



長命寺 (中)

橋度内山寺源永



寺總館(F) 普門寺命長(中)

川無音

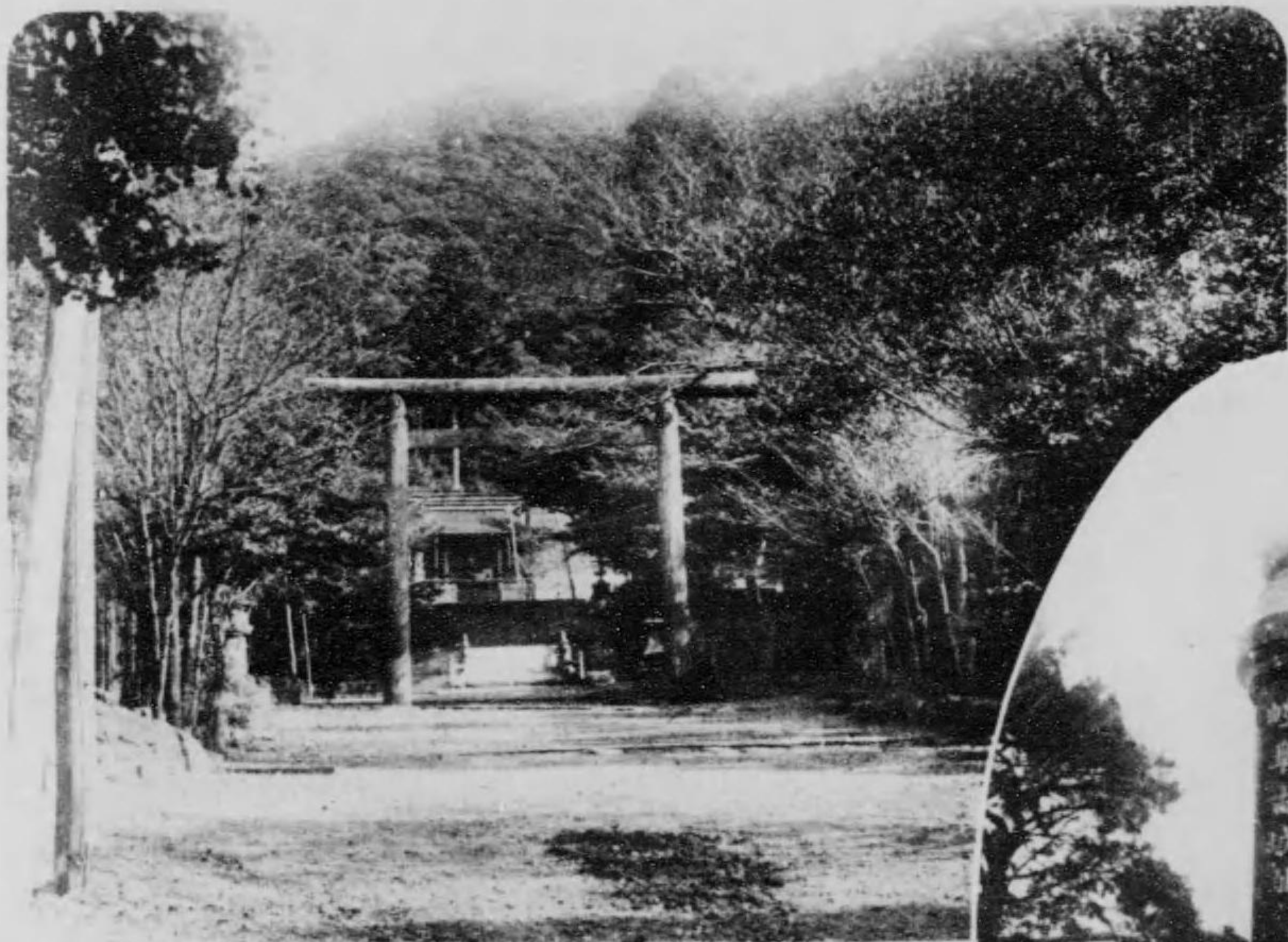


檀園及堂本寺源永

彌天、越溪の四人ありて、之を四派と稱し相續て當寺の住職となれり。後土御門天皇黄衣の宣旨を賜ひ、後奈良天皇亦紫衣の宣旨を賜ふ、元龜二年十二月織田信長の爲めに寺を焼かれたるが寛永二十年八月後水尾天皇の勅に依り佛頂國師來住して、唐製の釋迦、迦葉、阿難の三尊及宸翰を賜ひ東福門院より伽藍を再建せられ、馬郎婿觀音の巨張を寄附され、圓照寺宮より佛祖の舍利塔を寄附され、後又

門徒宗一派一流の本山にして野洲郡中里村大字木部に在り、遍照山と號す。天安二年僧圓仁の創建にして當初は天台宗に屬し毘沙門天を以て本尊とせり。然るに嘉禎年間、親鸞上人、常陸の稻田郷に在りし時、霞ヶ浦に毎朝光輝を發するものあるを認め之を漁りて一尺八寸の阿彌陀如來を得、笈に納めて京都に歸る途次近江を過ぎて茲に安置し念佛道場となしたり、以來今に至つて當寺は眞宗五派本

の冥福を祈らせ給へり、是れ蓋し西國巡禮の始めなりと稱す。元曆元年佐々木秀義は平氏と戦ひて大原谷に戦死す、此時源賴朝佐々木追善の爲め當寺を再興す。天正年間、織田氏の兵燹に罹りて堂舎殿宇悉く烏有に歸したるが、後再び勸請して建立せるもの現在の堂宇なりと云ふ、一説に、當寺は佐々木秀義の子定綱、亡父の菩提の爲め再興したるなりと、姑く疑を存す。



大垣城

(中) 岐阜古城址碑

瑞龍寺

● 稲葉山古城址 (美濃)

稲葉山は岐阜市の東に屹立する峰巒にして、周囲は巖石壁立して老樹蒼鬱たり、

東は日野村を限り、北は長良川に臨み、

西麓は則ち岐阜市街なり、山脈、南に延く

こと十八町餘の所を瑞龍山と言ひ磐石二

ヶ所存す、岐阜古城址は山巔にあり、而

して此城は建仁年中二階堂山城守行政の

創築に係り、後應永年間に及んで齋藤左

衛門尉利長之を修理し累代居城とせり、

織田信長美濃を略するや此に移りて西上

の本據と爲し天正十年信長薨去後二子信

今を岐阜公園となれる地は『山下御殿

及千疊敷』の名稱を存す、秀信の平常居

住せる處は槻谷の口と稱せる地なりと傳

ふ、此槻谷口は前記の登山口以外丸山よ

り榊谷口、赤川洞の間なる山背を登り天

守に至る小徑あり、峻険にして攀登容易

ならず、慶長年中秀信居城の際には人民

の登臨を許さざりし所ならんと言ふ『太

鼓槽の山』は亦此山上に存す、岐阜公園の

林泉は頗る壯觀を極む、園中物品陳列場

名和昆蟲研究所、神道中教院、太神宮等

あり、神道中教院は曾て板垣退助伯が刺

客に襲はれ『板垣死すとも自由死せず』と

し輒ち兵騎を散じ勝を官軍に致し去りて

椿原に至り幾ばくもなく薨じ給ふ、翌年

敕して之を祭るとは神社の縁起なり。當

社は丸山の北即ち古への椿原にありし

を、天文八年今の地に遷坐せり、境内五

千九百六十餘坪、老松古檜森々として社

壇を包擁す。

● 瑞龍寺 (美濃)

瑞龍寺は稲葉山の南麓にあり、臨濟派

妙心寺の末寺にして悟溪和尚の開基に係

る、當寺は齋藤越前守利藤入道妙椿其主

土岐成頼追善の爲め、天台の舊蹟に就き



●稲葉山古城址 (美濃)

稲葉山は岐阜市の東に屹立する峰巒にして、周囲は巖石壁立して老樹蒼鬱たり、東は日野村を限り、北は長良川に臨み、西麓は則ち岐阜市街なり、山脈、南に延くこと十八町餘の所を瑞龍山と言ひ岩址二ヶ所存す、岐阜古城址は山巔にあり、而して此城は建仁年中二階堂山城守行政の創築に係り、後應永年間に及んで齋藤左衛門尉利長之を修理し累代居城とせり、織田信長美濃を略するや此に移りて西上の本據と爲し天正十年信長薨去後二子信孝美濃を有ち此城に居たり、時に秀吉の攻むる處となり、信孝遂に敗亡せる後、秀吉之を其弟三左衛門輝政に與ふ十八年輝政吉田城に移り、秀次の弟三好少將秀俊代りて之に入り、後、信長の嫡孫秀信入りて十三萬石の封高を有す、慶長五年の役に秀信西軍に應じ、嬰守して東軍の至るを待ち、力戦克たずして陥る。

稲葉山に登るには三條の路あり、七曲口、百曲口、水之手と言ふ、何れも崎嶇たる峻阪にして、山中の老樹天に參し露衣を霑はし鬼氣人を襲ふの感あるも、山巔の眺望は千里双眼に歸し白山、駒ヶ嶽、惠那山、伊吹山等一々指點され、南に知多灣の煙波を望み、超然として世を忘るの壯快を覺ふ。

木下 實聞

殘壘荒陞積水阿 運傾後主若悲何
雲霞偏訝降幡下 山谷猶餘折戟多
臺廢千間空石礎 阪回百曲翳藤蘿
晚風忽起松濤涌 絕似當年奏凱歌
藤原 定家
忘れなんまつとなづけりほととぎす
いなばの山の峰の秋風
僧 尊 任
麓よりつづく田づらの稲葉山
みどりすやしき峰の松風

【美濃】

今を岐阜公園となれる地は「山下御殿及千疊敷」の名稱を存す、秀信の平常居住せる處は槻谷の口と稱せる地なりと傳ふ、此槻谷口は前記の登山口以外丸山より榊谷口、赤川洞の間なる山背を登り天守に至る小徑あり、峻險にして攀登容易ならず、慶長年中秀信居城の際には人民の登臨を許さざりし所ならんと言ふ「太鼓櫓の山」は亦此山上に存す、岐阜公園の林泉は頗る壯觀を極む、園中物品陳列場名和昆蟲研究所、神道中教院、太神宮等あり、神道中教院は曾て板垣退助伯が刺客に襲はれ「板垣死すとも自由死せず」と喝破せる所也。

●伊奈波神社 (美濃)

縣社伊奈波神社は稲葉山の山腹にあり五十瓊入彦命を祭り、日葉酸姫命、淳熈姫命、物部十千根命を合祀す。五十瓊入彦命は垂仁天皇第一の皇子にして、日葉酸姫命は御母后、淳熈姫命は皇子の妃なり、當時王化未だ邊域に洽ねからず、殊に陸奥國金丸城に據る者黨類多くして最も强悍なり、朝廷屢々兵を遣すと雖も鎮定せず、乃ち皇子五十瓊入彦命に勅して之を征せしむ、是に於てか命は王子市牟雄命及臣僚兵騎を従へて東下し、連戦年を度り遂に賊を滅して凱旋し美濃國平田河即ち長良川の古流に着し給ふ。

先是讒者あり、皇子東夷を率ゐて叛を謀ると奏す、天皇怒りて兵を發し給ふ、官軍來りて河の西岸に陣す、皇子之を望みて悵然たり、其臣毛里倫滿進んで曰く君は第一の皇子にして天位を繼ぎ給ふべき御身、親ら兵器を統べ給ふは、上は皇位を佐け外は不逞を征服せんとし、毫も私望あるに非ざるなり、直ちに敵を破り路を排き進んで闕下に詣りて分疏し給へと、皇子は「王師には抗すべからず」と爲

し頼ち兵騎を散じ虜を官軍に致し去りて榊原に至り幾ばくもなく覺じ給ふ、翌年救して之を祭るとは神社の緣起なり。當社は丸山の北即ち古への榊原にありしを、天文八年今の地に遷坐せり、境内五千九百六十餘坪、老松古檜森々として社壇を包擁す。

●瑞龍寺 (美濃)

瑞龍寺は稲葉山の南麓にあり、臨濟派妙心寺の末寺にして悟溪和尚の開基に係る、當寺は齋藤越前守利藤入道妙椿其主土岐成頼追善の爲め、天台の舊蹟に就き建立せるものなり、瑞龍は法號より出づ。境内老樹森々として幽寂、寺坊瀟洒、實に岐阜市古刹中の最なるものたり。

●大垣城址 (美濃)

天文四年宮川吉左衛門安定此地に築城す、城北より西北に流る、牛屋川を要害とし大橋を廻らしたり、大垣城の稱蓋し茲に起る、後、屢々城主代謝し文祿四年長門守祐盛城主たるに及んで三層の天主閣を築造せり、今猶巍然たるもの是れなり。元和八年松平忠良大に改修を加へ、寛永十一年戸田氏入城して屢々改築増營を施し、漸次規模宏壯設備整頓せり、關ヶ原時代には本丸、二の丸、三の丸の構へありしも、戸田氏に至りて天守閣所在地千二百坪を本丸と爲し、本丸、袋丸、天神丸、竹の丸を内郭とし、松の丸を以て藩主の居城とせり、内郭の周圍なる本町門、小橋口、清水口、竹橋口、柳口、竹島口、竹の口之を外郭とし、一朝事あれば、外郭七口を閉鎖し、以て中山道の要路を扼す、其防備の周到想ふべし、明治維新後陸軍省の所轄となり十三年公園となれり

類山陽

蘇水遙々入海流 樞聲雁語帶鄉愁
獨在天涯年欲暮 一蓬風雪入瀛州

●長良川の鵜飼 (美濃)

長良川は源を大日ヶ嶽の阿彌陀ヶ瀧に發し、武儀郡に出で、藍見川、稻葉郡に入りて長良川となり、流れ緩やかにして水清く、最も夏時の納涼に適せり、加ふるに其鵜飼は古來甚だ著名にして、養老の瀑布、虎溪の奇勝と共に美濃の三大奇觀と稱せらる。

醍醐天皇の御宇、藍見川即ち長良川の鵜飼鮎を朝廷に上りたる事あり、降りて延喜年間美濃の守護藤原利仁、勅を奉じ鮎を献上せる事が例となり、後、徳川時代「御三荷」と稱して年々鮎鮎を將軍に献す明治維新以來一旦廢絶せしも、宮内省より更に御獵場を定められ、鵜匠へは年々主獵局より手當金を支給するに至れり、是れ鵜飼に關する沿革の梗概なり、漁場の最良なる所は芥見、小瀬の二ヶ所にして、岐阜沿岸之に亞ぐ、毎五月上旬より七月上旬に至るを漁期とす、而して鵜飼漁は暗夜に利なるを以て、月の出でざる前、又は月の入るを待つて行ふ。

鵜飼船は其舷頭に篝火を照らし、漁夫を一艘に四人、之れに腰裝を着け風折帽を戴ける鵜匠前に立ち、鵜十二羽を使ふ次は中央にありて四羽を使ひ、其傍らに篙工と稱する器械の取扱を兼ねたる者あり、次は船乗り即ち船の運轉手なり、鵜匠鵜を放つや、十二の手繩を操縦し、大小四五尾より七八尾を吞みたりと認むる時は鵜を船に引くなり、多年の熟練とは言へ鵜匠の措置輕妙にして、緩急其度を忽らざるは驚歎の外なし、

梁川 星巖
一葉輕舟儘自由 金華山影漾中流
咬々不盡沙禽語 聽到西溪十八樓
森 春 濤
千絲柳色晚風柔 春動藍川古渡頭
欲問美人南國信 片帆吹上九華舟

岡本 黄石

六載重登十八樓 依然景象坐堪收
千尋蒼翠金華色 百里長河碧玉流
笑我舊題存醉墨 看他老友賦佳遊
餘生天地隨蓬客 又爲風光幾月留

寂遠 法師
鵜かひ舟たか瀬さしこすほどなれや
むすば、れゆくか、いり火の影
細川 幽齋
あまつ屋くもりゆくかといさり火の
影見えそむるをちの夜川に

芭 蕉
またやたぐひながらの川のあゆなます
面白うてやがてかなしき鵜舟哉
此長良川に俳人芭蕉の住みたる「十八樓」あり、是れ貞享年中芭蕉が東都より歸り、此に草庵ありしを十八樓と名けて住めるなりと、樓名は瀟湘の八景と西湖の十勝とを併せ稱するの意に出づ、其十八樓記は藝林に喧傳せるものなれば左に掲ぐ

美濃の國ながら川に臨みて水樓あり、あるじを加島氏と言ふ、伊奈波山後に高く、亂山西にかさなりてちか、いらすまた遠からず、田中の寺は松の一むらにかくれ、岸に沿ふ民家は竹のかこみの縁も深し、さらし布所々に引きたへて右にわたし船浮ぶ、里人の往かひしげく漁村軒をならべて網を引き釣を垂る、おのがさま、に、たい此樓をもてなすに似たり、暮かたき夏の日も忘る、ばかり、入日の影も月にかはりて波にむすばる、篝り火の影もや、ちかうなりて、高欄のもとに鵜かひするなど、まことにめざましき見ものなりけらし、かの瀟湘の八のながめ、西湖の十のさかひも涼道一味のうちにおもひこめたり、若此樓に名をいはんとしたらば十八樓といはまほしや、此あたり眼に見ゆるものなみ涼し。

●虎溪山永保寺 (美濃)

東濃第一の勝區として名ある虎溪山永保寺は、多治見驛より十餘町の地豊岡村大字長瀬にあり、南禪寺派の巨刹にして正和二年夢想國師開創、山號に虎溪、寺號に永保と稱するは共に支那廬山に取れるなり、十數棟の堂宇佛閣、樹を抽くものあり、溪に臨むものあり、山に據るものあり、全溪一里餘の面積に亘り、橋あれば必ず名あり、水にも岩にも樓にも相當の名あらざるはなく、寺域七千有餘坪老樹鬱茂して幽邃更に幽邃を加ふ。

●養老の瀧 (美濃)

養老山の東腹、面積八千町歩餘の地に養老公園あり、喬樹蒼鬱、流水亂石自ら勝を成し、殊に高九尺餘幅九尺許、素繩を岸頭に懸けたるが如き養老瀑布は此園第一の壯觀なり、輕踏たる瀑聲木葉を搖かし、飛沫雪となり珠となり煙霧となる。

梁川 星巖

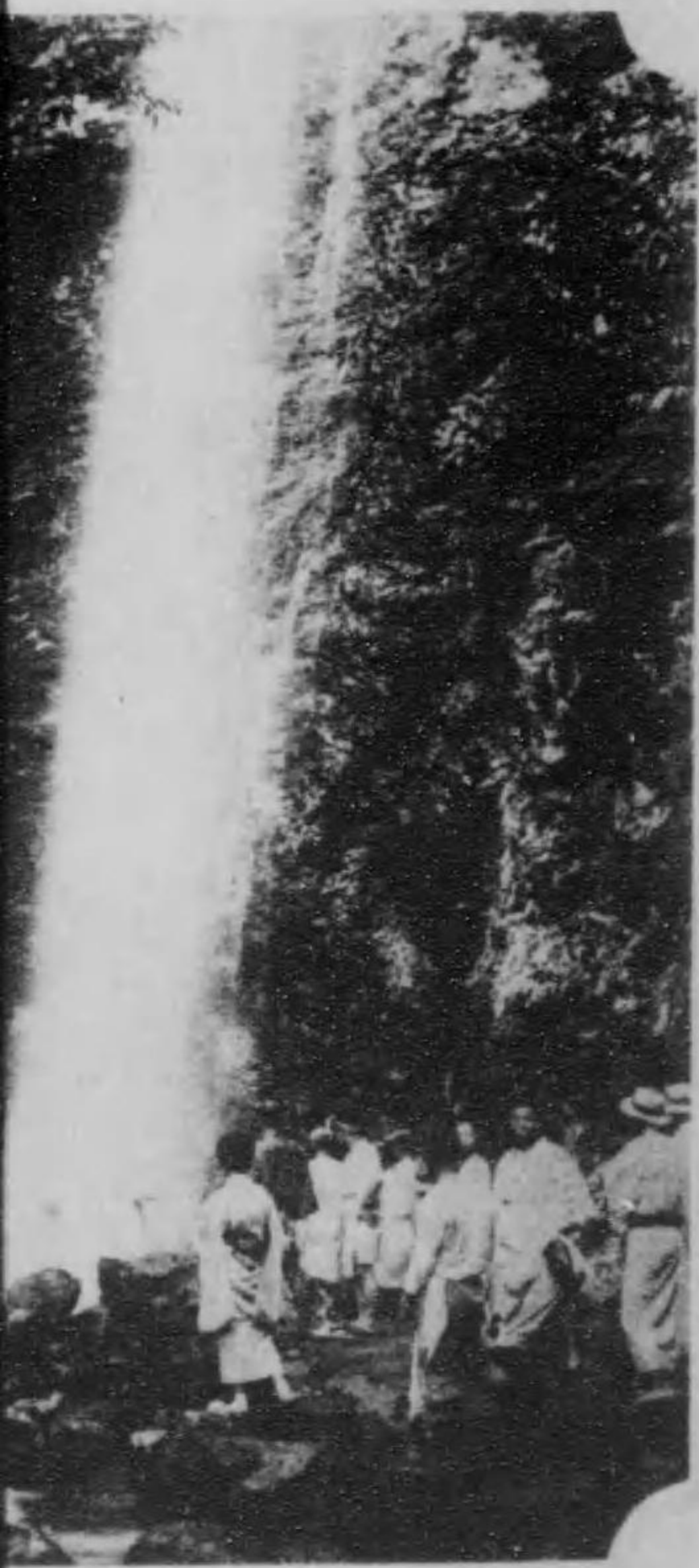
養老改元光史編 至今百丈瀑泉懸
寒風珠玉噴爲羽 白日雷霆轟在天

●南宮神社 (美濃)

色かはる美濃の中山秋こえて
また遠ざかる逢阪の關

此古歌は續古今集にある定家の咏なり其美濃の中山は南宮神社鎮座の地たる宮代村より約十八町、關ヶ原までの山嶺を言ふ、南宮社は元美濃國一の宮と稱され、古來有名の社祠にして、亦其風光に富めるより古歌に咏まれたるもの妙からず、祭神を金山彦命と爲す、社域廣く老樹鬱蒼として、頗る閑雅幽邃なり、後山に雨乞場として、關ヶ原の役毛利秀元の陣址あり、又垂井町に建てる石華表は高さ二丈一尺周圍七尺四寸、其上に掲げたる神額は、青蓮院宮一品尊純親王御筆なり、社は垂井町より約八町を隔つ。

南宮神社廻廊



養老の瀧



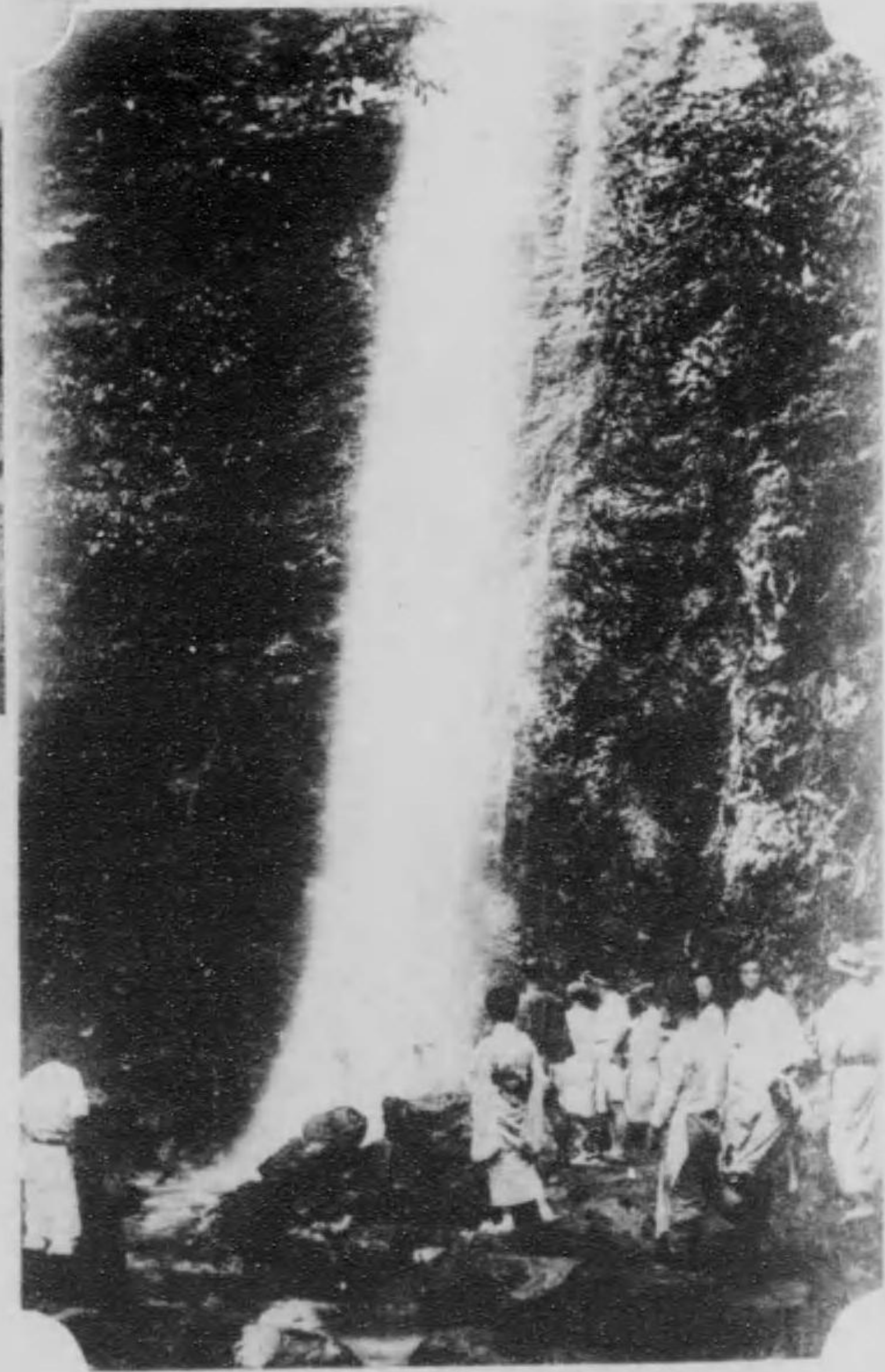
南宮神廟廻廊



一葉輕舟儘自由 金華山影漾中流
 咬々不盡沙禽語 聽到西溪十八樓
 千絲柳色晚風柔 春動藍川古渡頭
 欲問美人南國信 片帆吹上九華舟

梁川 星巖
 森 春 濤

時は鶴を船に引くなり、多年の熟練とは
 言へ鶴匠の措置輕妙にして、緩急其度を
 愆らざるは驚歎の外なし、



忘る、ばかり、入日の影も月にかはり
 て波にむすばる、篝り火の影もや、ち
 かうなりて、高欄のもとに鶴かひする
 など、まことにめざましき見ものなり
 けらし、かの瀟湘の八のながめ、西湖
 の十のさかひも涼道一味のうちにおも
 ひこめたり、若此樓に名をいはんと
 らば十八樓といはまほしや、此あたり
 眼に見ゆるものなる涼し。



南宮神廟

兼山永保寺

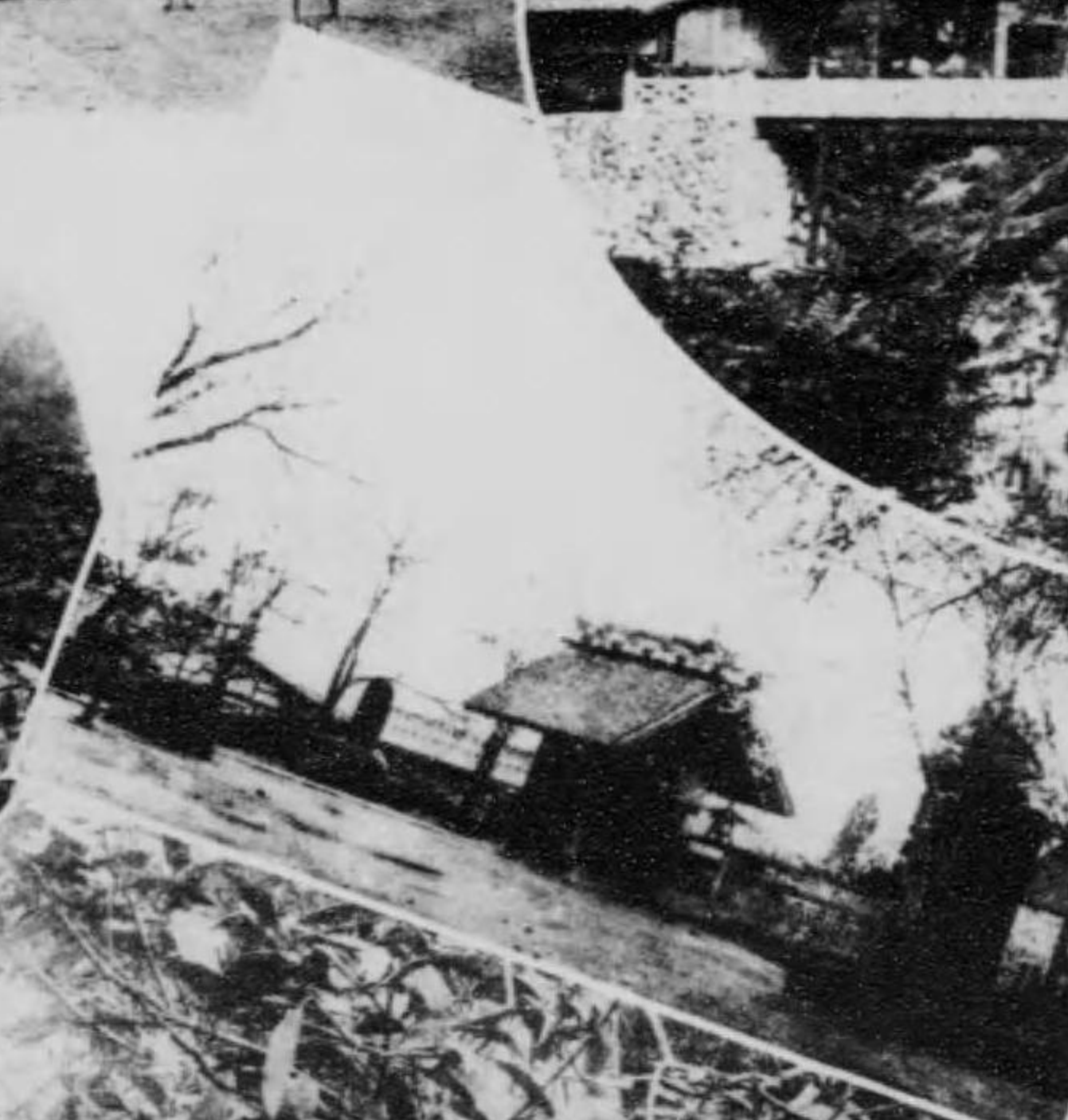
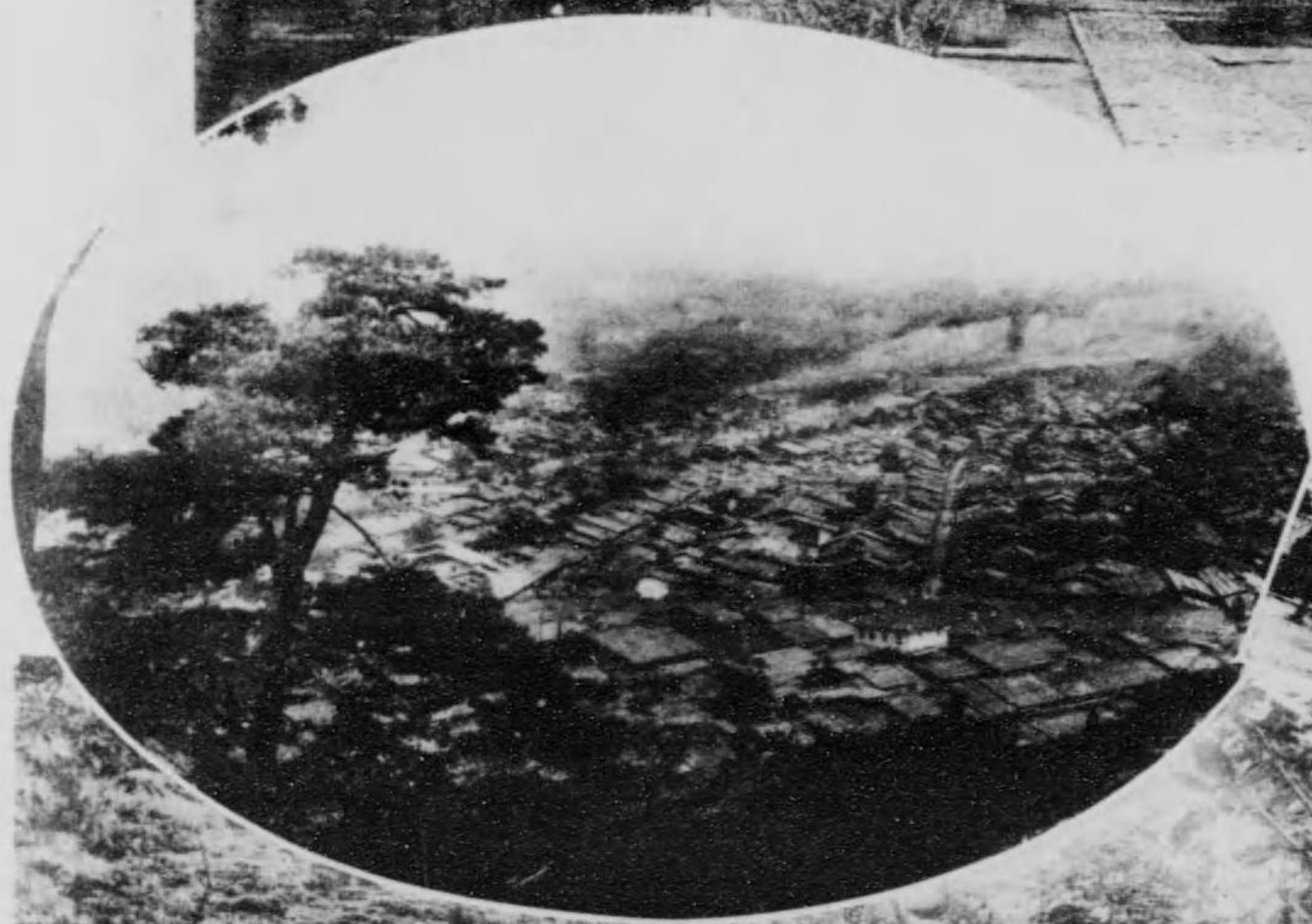
老翁の瀧

を言ふ、南宮社は元美濃國一の宮と稱
 され、古來有名の社祠にして、亦其風光
 に富めるより古歌に詠まれたるもの妙か
 らず、祭神を金山彦命と爲す、社域廣く
 老樹鬱蒼として、頗る閑雅幽邃なり、後
 山に雨乞場として、關ヶ原の役毛利秀元
 の陣址あり、又垂井町に建てる石華表は
 高さ二丈一尺周圍七尺四寸、其上に掲げ
 たる神額、青蓮院宮一品尊純親王御筆
 なり、社は垂井町より約八町を隔つ。

街市山高(中) 寺福崇(上)



橋六歌



●崇福寺 (美濃)

崇福寺は岐阜市郊外の名利にして、地は稲葉郡長良村大字福光と言ふも、長良の清流を隔て、岐阜市と相對す、文明元年の創建に係り、開基を美濃守土岐成頼及齋藤左衛門長廣とし、禪宗臨濟派の寺院なり。

境内一千九百八十餘坪、堂宇の數都て二十三棟、地藏願王菩薩を本尊として安

ふみだにも見ず朝六の橋

あさむつのはしはしのびて渡れども

とゝろとゝろとなるぞわびしき

是れ共に朝六橋を咏める古歌にして、

枕草紙には「橋は朝むつのはしと見ゆ、其

朝六橋は飛騨國益田郡小坂町の入口、即

ち小坂川の東より來りて益田川に奔注す

所に架せる橋なり。

此地は飛騨勝地の一と稱され、澄水、

怪岩、老樹の景頗る佳なり、橋南谿の東

院あり、境内瀟洒、其一隅に知事梅村氏

の碑あり、尙ほ北して寺内町に入れば巨

剎照蓮寺あり、更に越中街道を北に進め

ば町の殆ど盡くる所に斐太中學校あり今

ま町の沿革を略記すれば、始め永祿年中

金森氏封を移すに及び、飛騨全國幕府の

直轄となり、代官伊奈忠篤此に治所を置

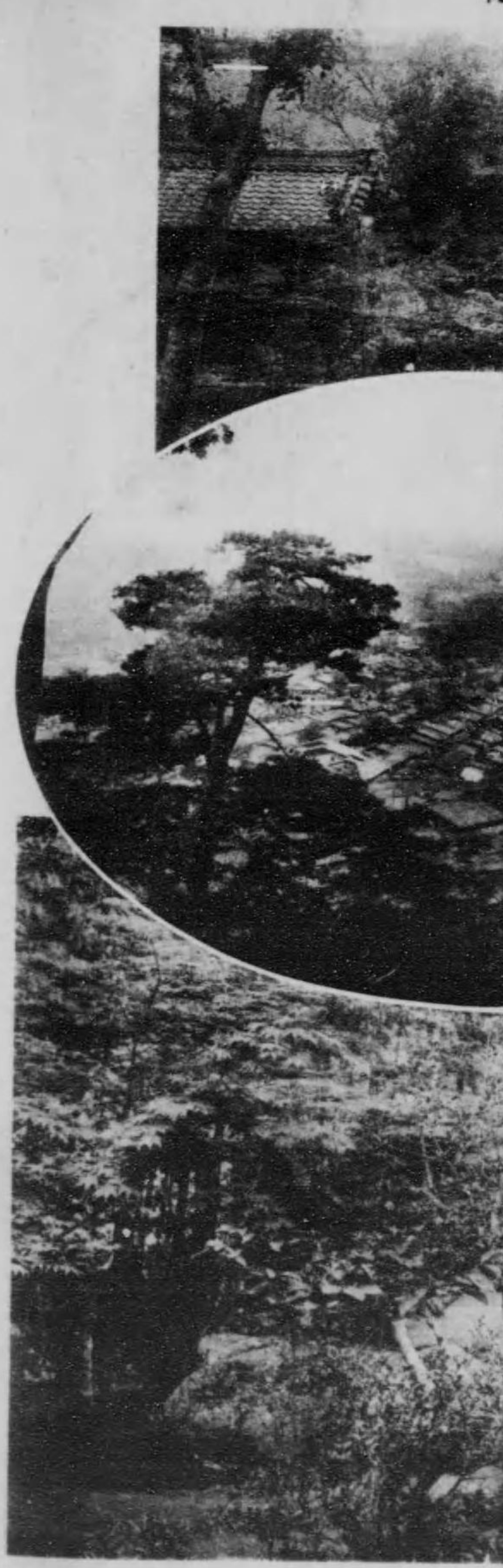
き、之を高山陣屋と稱す。

爾來加賀の前田氏命せられて高山城保

管の任に當り、其後永井織部城代たり、

廟長信田織(下) 社魂栢園山高(中)

スブルア本



●崇福寺 (美濃)

崇福寺は岐阜市郊外の名刹にして、地は稲葉郡長良村大字福光と言ふも、長良の清流を隔て、岐阜市と相對す、文明元年の創建に係り、開基を美濃守土岐成頼及齋藤左衛門長廣とし、禪宗臨濟派の寺院なり。

境内一千九百八十餘坪、堂宇の數都て二十三棟、地藏願王菩薩を本尊として安置す本堂の天井は元岐阜城本丸の床板を移し其儘用ひたるものなれば、關ヶ原役の激戦紀念たる鮮血は黒色に變じ、今尙は觀る者として慄然たらしむ、爲めに「崇福寺の血天井」と稱さる。

寺は織田家の香華院たりし關係上、其什寶中に織田氏の書類及器物あり、又鳥羽僧正筆繪卷物、巨勢金剛筆十六羅漢、牧溪筆楊柳觀音、兆殿司筆草駄天圖、其他古文書等を藏す、是れ歴史美術の上に於ける有力の參考物たり、岐阜公園の勝を探れる者亦必ず當寺に杖を曳く、實に金華山麓の一名勝地たるを失はず。

●織田信長墓 (美濃)

崇福寺の後園に織田信長墓及廟あり、信長本能寺に死するや、遺骸を此に葬れりと傳ふ、墓は後園の丘陵にありて、古廟漸く其形を存し、地、清淨なりと雖も他の英雄の墳墓に比すれば太だ寂たるを覺ふ。

●齋藤道三墓 (美濃)

崇福寺の西方凡そ一町餘の地にあり、弘治二年道三戦死の時此に埋めて墓石を立つと、道三は元西村勘九郎と稱し其主齋藤利良を弑したる逆賊なる事は正史に詳かなり。

●朝六橋 (飛騨)

ことつての人の心の危ふさに

【美濃、飛騨】

ふみだにも見ず朝六の橋
あさむつの橋はしのびて渡れども
とゝろとゝろとなるぞわびしき

是れ共に朝六橋を咏める古歌にして、枕草紙には「橋は朝むつの橋」と見ゆ、其朝六橋は飛騨國益田郡小坂町の入口、即ち小坂川の東より來りて益田川に奔注する所に架せる橋なり。

此地は飛騨勝地の一と稱され、澄水、怪岩、老樹の景頗る佳なり、橋南路の東遊記に「朝六橋は石橋にて、如何なる暗夜といへども其橋の上に至れば、少し明かになりて、人顔もおぼろに見え、譬へば朝六つ頃のあかりの如し、故に土俗朝六つ橋と名づく、もの知れる人の言ひしは、此橋の下には名玉ある故なるべしとまことにさもありぬべく覺ゆ」本居宣長の此橋を咏める歌に曰く
たをやめの蟬の羽袖もすしげに
ゆふ風わたる妻太の川橋

●高山市街 (飛騨)

飛騨國中第一の繁華地たる高山町は、國の中央に位す、四圍繞すに山を以てし中に小盆地を作る宮川町の中央を貫流し山河の形勢、街衢の状況恰も京都に似たるを以て一に小京都の名あり、町は宮川に依りて東西に二分せらる、即ち飛騨街道は此川の西に沿ふものにして、之を辿りて市街に入り、上川原町、東川原町を經、郵便局を右に見て左折すれば、大野郡役所、區裁判所、警察署、監獄、測候所、等の諸官衙並び立つ、更に北して國分寺通に出づれば、其北に國分寺あり國府の遺址亦遠からず高山城址は町の南端天神山の上において今公園と爲す更に東は木曾街道筋に當り、商家街衢を挟みて専ら此方面の顧客を迎へ自ら飛騨山地産業の中心を以て任す、其街道筋を北に辿れば左方天神山下の城坂通に神道中教

院あり、境内瀟灑、其一隅に知事梅村氏の碑あり、尙ほ北して寺内町に入れば巨剎照蓮寺あり、更に越中街道を北に進めば町の殆ど盡くる所に妻太中學校あり今ま町の沿革を略記すれば、始め永祿年中金森氏封を移すに及び、飛騨全國幕府の直轄となり、代官伊奈忠篤此に治所を置き、之を高山陣屋と稱す。

爾來加賀の前田氏命せられて高山城保管の任に當り、其後永井織部城代たり、而して前田氏城を請ひ之を毀ち守を撤せる後は、全國代官の管治に歸せり、明治元年高山縣を置き、尋で之を筑摩縣に合せ、同九年岐阜縣の管轄に屬し、現今大野郡役所を此地に置けり 名産としては一位細工、春慶漆器、其他絹織の類多し附近の地味肥沃にして農業に適し、木材は各地より産出するを以て商業頗る盛んなり、岐阜を距ること三十三里。

●公園と招魂社 (飛騨)

公園は町の東南隅白雲山にあり、白雲山は一名を天神山或は臥牛山と稱す、曾て金森長近此に城く、故に城山とも言ふ瀨山老松落々として繁茂し、其間多く櫻を植ゑ、春は萬櫻亂發し艶雪香雲凝つて流れず、亭榭其間に點綴す、夏は淡翠を看るに宜しく、秋冬の景亦佳絶、招魂社は此勝區に包擁せられて、東北隅にある高山八幡宮と共に神韻の地として稱さる。

●日本アルプスの半面 (飛騨)

日本アルプスの半面たる乗鞍ヶ嶽は、飛騨中第一の高山にして、大野、益田、吉城の三郡に跨り、信濃の西筑摩、南安曇の二郡に接す、其高さ直立一萬四百五十尺、登路は益田郡高根大字野麥より三里、朝日村大字青谷より九里、共に攀躋容易ならず。

●寝覺の床 (信濃)

西筑摩郡駒ヶ根村大字上松驛なる大字寝覺の里に在り、木曾川の急流竝に至つて最も迫り、緊縮して瀬となり、潭となり、怪岩重疊、奇石起伏し、或は突兀として柱の如く、或は平坦にして臺の如きものあり、大なるものは數十丈に及び、小なるもの又一二丈を下らず、其岩石各々形状に依りて名づけられつゝあり、曰く屏風岩、曰く硯岩、曰く烏帽子岩、曰く蓮華岩、曰く釜岩、曰く狙石、曰く浦島釣船石、曰く腰掛石、曰く象石、曰く獅子石、曰く床石、曰く葛籠石等とす、而して此溪流中の礫石を寝覺の床と稱す、激流奔湍進りて岸を噛み、石を打つ水聲は響々として物凄く散じて萬點の白玉となる壯絶快絶名狀すべからず。

近衛 家熙

谷川の音には夢も結ばじを

寝覺の床と誰か名付けけん

前大納言實起

老が身に思ひをそへて行道の

寝覺の床の名さへうらめし

●天龍峽 (信濃)

「斷崖折裂、斧劈の如く、平遠の水竝に至つて頓に巉岩の窄むる所となり、奔騰湍沫、鋭鋒の向ふ所、石皆辟易、猶怒りに勝へざれば、則ち往々倒流す」とは是れ坂谷明盧が天龍峽の奇勝を叙せる文なり。天龍峽は下伊那郡下川路村に在りて、飯田を距る南方二里餘即ち天龍川の兩岸最も相迫り懸崖削立左右を壓せる所にして、翠松其間に點綴せられ怪景奇趣言語に絶す而して其溪流深潭を作す所に一長橋を架す號けて姑射橋と云ふ。

岡本 實石

天龍河大百川注 峽中奇勝有十數

飛竿鳥帽歸塵 浴鶴巖抽有影

姑射橋高架其間 樵撫洞深鎖雲霧
明絶點塵燭々潭 別有龍角峰欲躡奈
無路 其下奔湍聲似咆 風雨晦冥
有如真龍怒 仙床盤平可憩休 定
有神人驚駕駐 芙蓉嶺似芙蓉形
奇勝一々堪題句 彼河伯若爲乎
能納百川流灌百田園 豈曾藏如斯奇
勝 噫嗚乎吾老矣徒遠慕

●宮の越城址 (信濃)

治承の昔、木曾義仲の本城所在地として有名なる宮の越は西筑摩郡日義村に在り、舊名を柏原と呼べり城址は宮の越驛の東端に在りて古へは宮腰と書せり、一名山吹城とも云へり、義仲牙城を妻籠、野尻兩所に築き、野尻城は其股肱たる今井兼平をして守らしめたり。宮の越城址は木曾川の南岸に臨み、今田圃と化し傍らに八幡宮の小祠建てり。木曾南宮と稱す義仲が柏原の八幡宮に於て元服せりと云ふは即ち此の神祠なり、其東隣に今井兼平の邸址あり。

●尹良親王御墓 (信濃)

下伊那郡波合村大字宮ヶ原丸山に在り境域は外圍九十四間、内圍四十七間之に二重の木柵を設け、後醍醐天皇孫尹良親王御墓と記せる木標を建てたり、墓碕は高さ九寸幅五寸の小碑にして碑面に文字を刻すれども磨滅して分明ならず、舊史に據れば尹良親王は應永三十一年八月十五日上野國落合城より三河國に赴き給ふ途次、波合大河原に於て賊軍と交戦し力竭きて自殺し給ふ隨臣青山藏人師重、

人師重は舊篠山藩主青山忠允の祖先なるを以て、青山家より祭料を供すと云ふ尙此地に堯翁院と號する曹洞宗の一刹あり、天明年間の火災に罹りて大半焼失して僅に本堂、經藏のみを存せるが、寺寶として尹良親王の位牌及び同親王筆の大般若經若干を藏す。

思ひきや幾瀬のよどを渡ぎ來て

この波合に沈むべしとは

是れ尹良親王の御辭世として傳へらる。

●德恩寺 (信濃)

宮の越驛の東北宇德恩寺村に在り、壽永年間の創建に係り、臨濟宗にして京都妙心寺派に屬す、本堂には地藏菩薩を安置す、境内に十王堂、藥師堂及び巴御前の墓等あり。堂内に義仲の位牌を收む、牌面には開山朝日將軍義仲公大居士の十二字を書す、又寺寶には義仲、及び其臣樋口兼光、今井兼平の畫像を藏す。

●木曾の棧道 (信濃)

蜀の棧道に比して有名なる木曾の棧道は西筑摩郡駒ヶ根村字沓懸に在り、國道より右折し溪流に沿ふて山を登ること半里斷崖絶壁天を衝いて對峙し自然の樞礎を爲す、是れ古の棧道にして今の棧道は全く其位置を異にし毫も危険なることなし、慶安元年尾張侯命じて兩端に岩石を疊みて樞礎を作り之に架するに長さ五十六間幅三間四尺の木橋を以てせしめ、其後寛保年間再び修繕を加へて、平路となせり現存せるものはなり。

空仁 法師

おそろしや木曾のかけ路の丸木橋

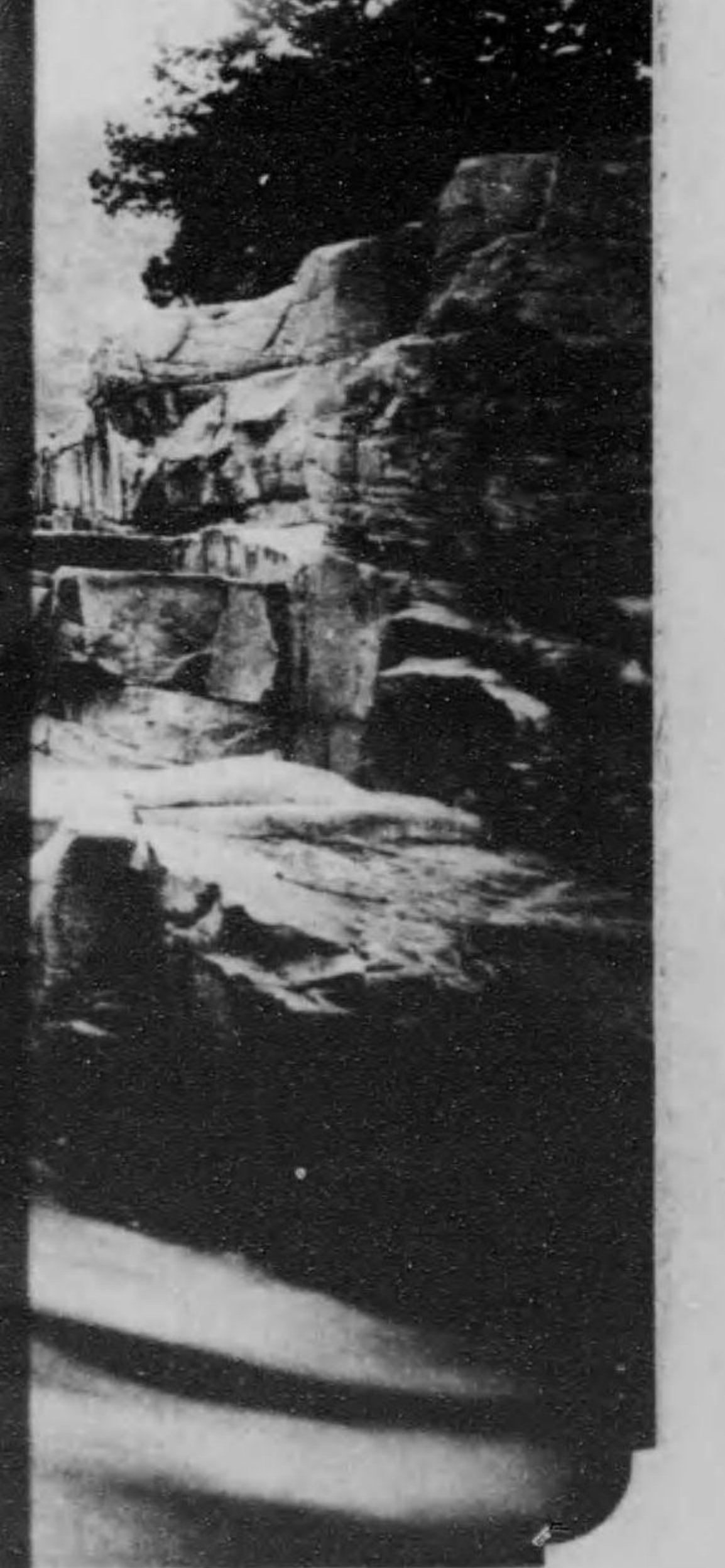
ふみみるたびに落ぬべきかな

類 賢

雲も猶下に立ちけるかけ橋の

遙に高き木曾のかけ路

樞礎や命をからむ鳥かつら 芭 蕉



越の宮

天龍峽は下伊那郡下川路村に在りて、飯田を距る南方二里餘即ち天龍川の兩岸最も相迫り懸崖削立左右を壓せる所にして、翠松其間に點綴せられ怪景奇趣言語に絶す而して其溪流深潭を作す所に一長橋を架す號けて姑射橋と云ふ。

岡本 實石
天龍河大百川注 峽中奇勝有十數
垂竿島嶼歸鷹雌 浴鶴巖抽有逸龜

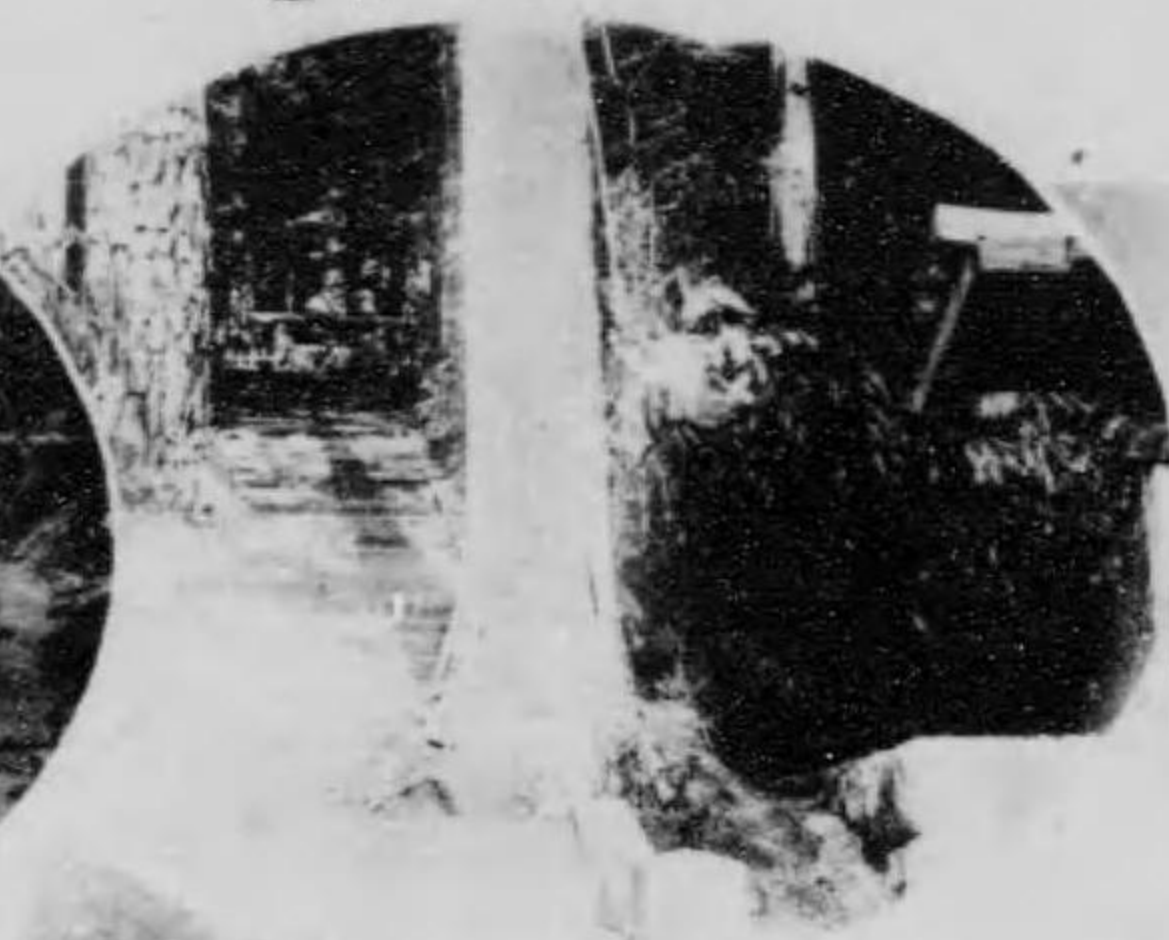
十五日上野國落合城より三河國に赴き給ふ途次、波合大河原に於て賊軍と交戦し力竭きて自殺し給ふ隨臣青山藏人師重、羽川安藝守、桃井宗綱、世良田義秋の諸氏亦茲に殉死す。青山以下殉死者の墓は此地を距る四町の處に在り。明治十一年明治天皇京都へ行幸の途次特に西四辻侍從を差遣して實地を視察せしめられ翌年墓丁を置かる、即ち今の守部なり、又藏

後ち寛保年間再び修繕を加へて、平路となせり現存せるもの是なり。
空仁 法師
おそろしや木曾のかけ路の丸木橋
ふみみるたびに落ぬべきかな
頼 賢
雲も猶下に立ちけるかけ橋の
遙に高き木曾のかけ路
橋橋や命をからむ鳥かつら 芭蕉

越の宮



墓御王親良尹



道棧の會木



寺恩徳



床の覺

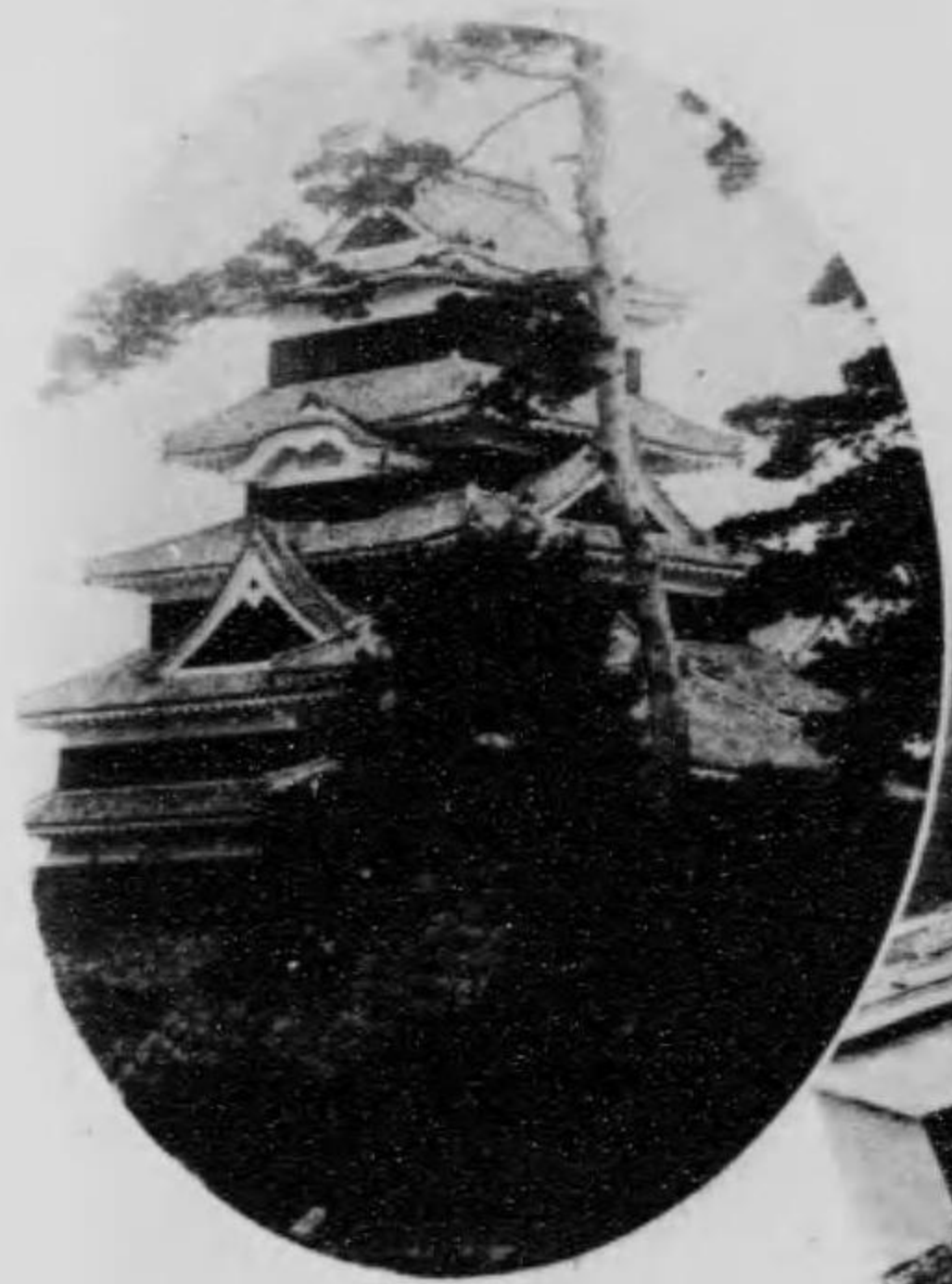
映龍天

下諏訪神社

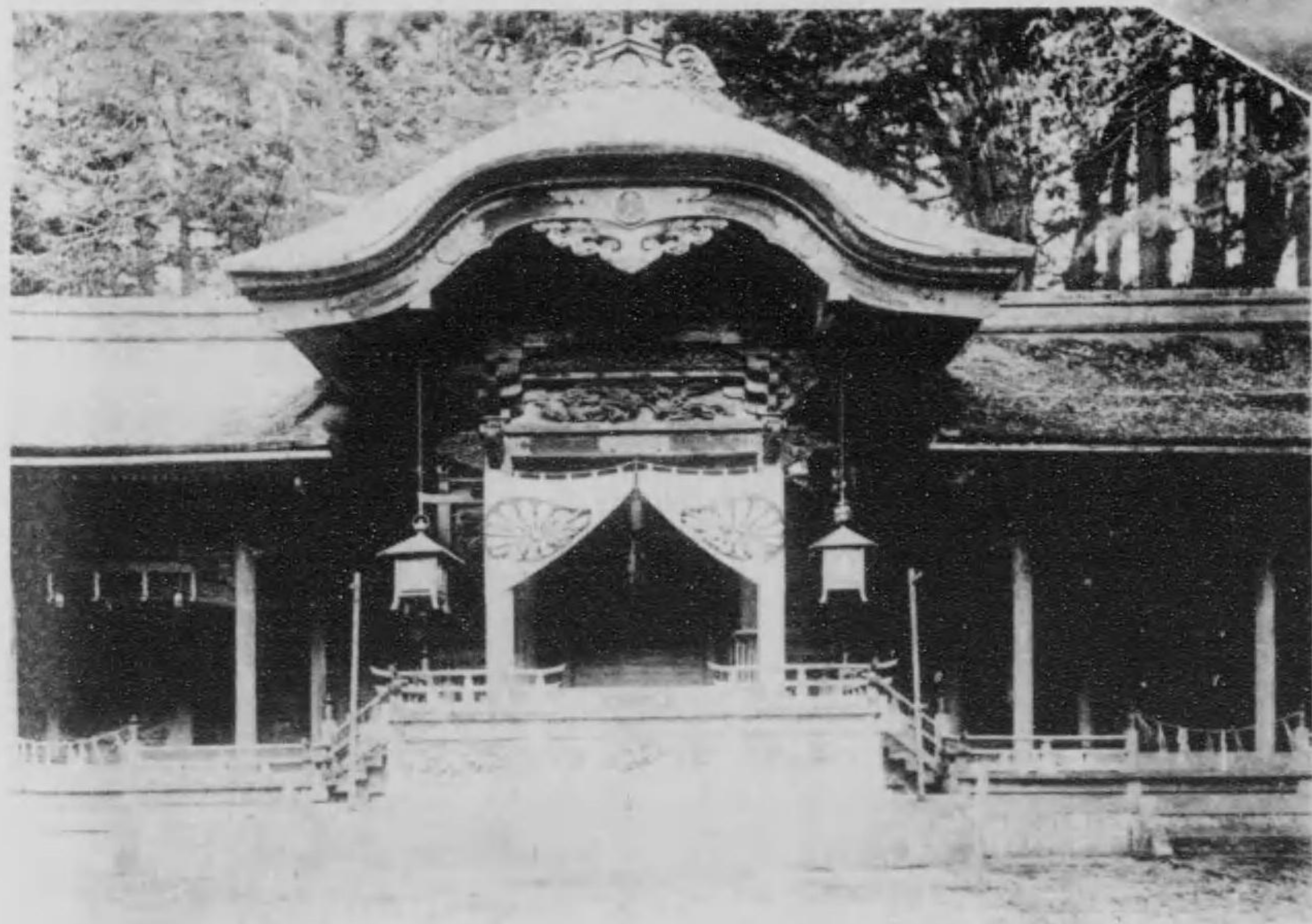


湖訪諏(下) 山捨姥(中)

松本城址



浅間温泉



上諏訪神社

●諏訪湖 (信濃)

信州諏訪郡の中央に在り、東西一里半

南北一里、周圍四里二十二町、海拔二千六百四十尺の高地にて山村水郭湖邊を繞りて風光甚だ明媚なり、富士見、分水嶺、八ヶ嶽、鷲ヶ嶽、鉢伏等の諸山より發する溪流は悉く此湖に注ぎ、溢れて西方山嶽の間を流出して、以て天龍川の源を爲す、湖内湖の山、田圃の各水、市に集

氏より年々祭費を寄附したりと云ふ。

●下諏訪神社 (信濃)

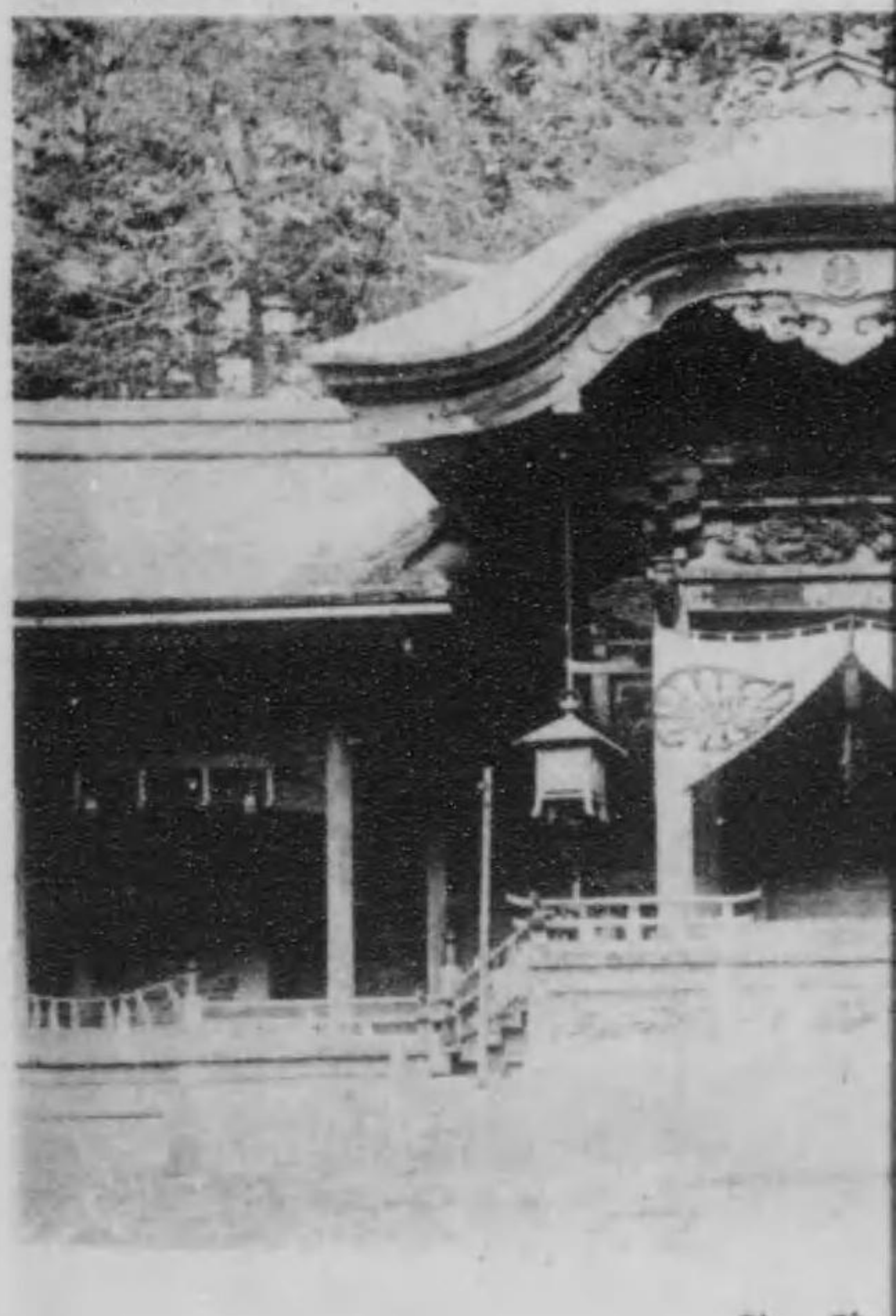
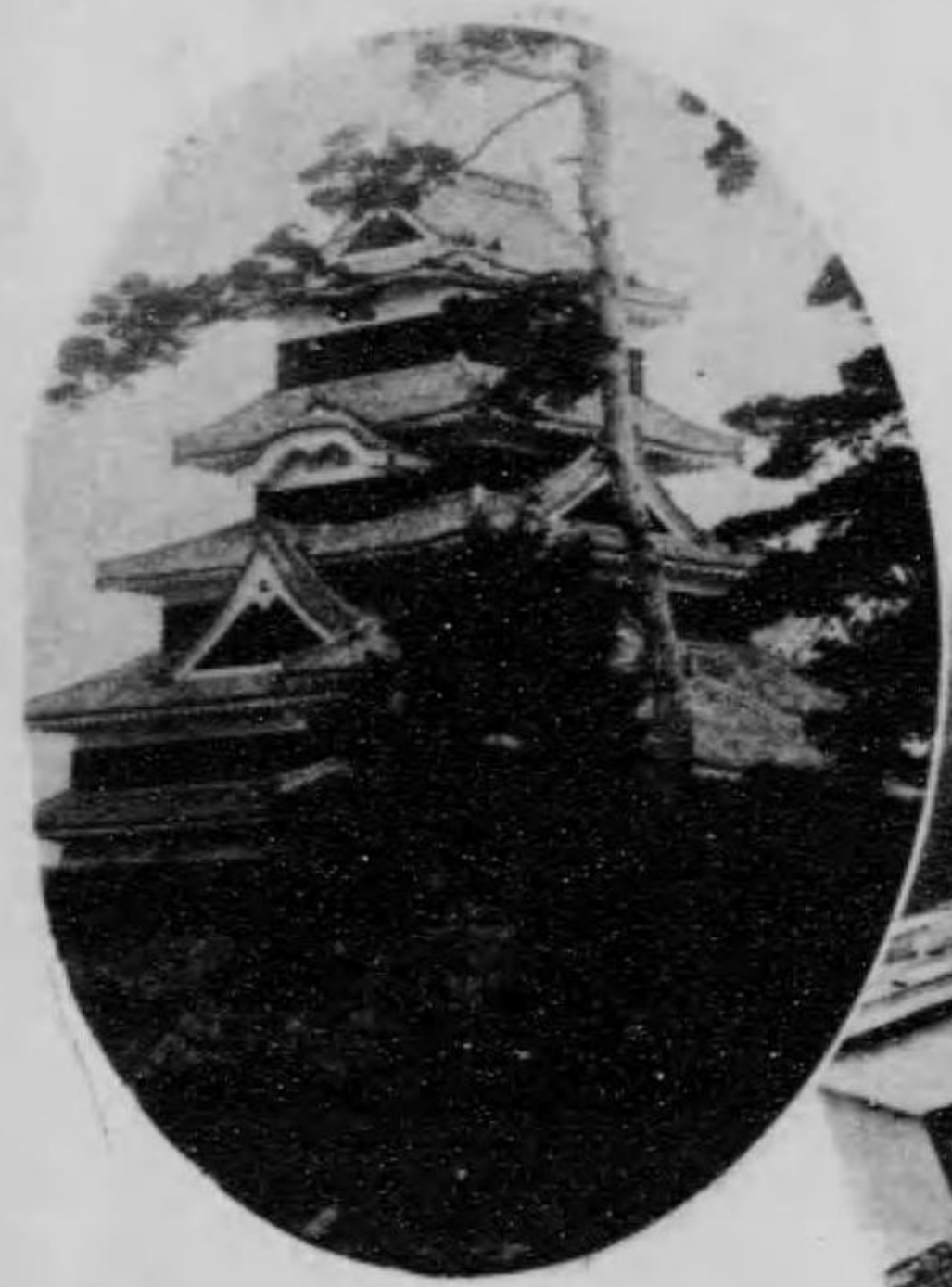
下諏訪の東岡に所在す。祭神は諏訪神の妃、八坂刀賣命にして官幣中社に列す。一説に依れば諏訪神は上宮、下宮の二社なれども其授位階位相關連して離るゝことなしと云ふ。下宮は近世神領五百石、大祝を金刺氏とす、後醍醐天皇の御宇に

●浅間温泉 (信濃)

松本市を距る東北三十町に在り。即ち

東筑摩郡本郷村の字にして古來温泉湧出するを以て著はる、泉質は無臭無色、透明にして温泉人體に適し、朝夕の炊事も尚温泉を用ひ飲料に供するを得べし。此地海拔千八百十八尺の高地にして空氣乾燥、東方は本郷山を負ひ、西北は犬飼山の連脈に接し、南は郡外盛く遊りて松

松本城址



神社

●諏訪湖 (信濃)

信州諏訪郡の中央に在り、東西一里半南北一里、周囲四里二十二町、海拔二千六百四十尺の高地にて山村水郭湖邊を繞りて風光甚だ明媚なり、富士見、分水嶺、八ヶ嶽、鷲ヶ嶽、鉢伏等の諸山より發する溪流は悉く此湖に注ぎ、溢れて西方山嶽の間を流出して、以て天龍川の源を爲す、湖面鏡の如く四周の峯巒水面に倒映し富士又其雄姿を映じ來る、即ち古人の詠じたる「諏訪の湖衣が崎に來て見れば富士の上漕ぐあまの釣舟」とは蓋し之れを謂ふものなり。而して冬季は湖面氷結して厚さ一尺乃至二尺に及び人馬水上を往來す、近來好個の氷滑場として冬期茲に遊戯するもの頗る多し。湖中に瓦斯温泉を噴出する所あり、地學者は此湖を以て太古大噴火口の遺跡となせり。湖中鯉鱒、鰻、鯉等を多く産す、湖邊の地は肥沃にして米穀豊熟し諏訪平の稱あり。

顯 仲

諏訪の海の水上の通ひ路は

神の渡りてとくるなりけり

家 長

駒とめて諏訪の門わたる旅人の

水の橋の音やさやけき

阪谷 朗虚

一碧澄湖四翠濡 機山沈樞有耶無

風波不動干戈迹 粉蝶依然舊勝區

●上諏訪神社 (信濃)

上諏訪の南方一里半中洲村に在り、官幣中社に列し、國中無双の大神と崇めらる。本社は下宮の前神八坂刀賣命に對して上宮と稱す、祭神は建南方刀賣命なり。一に南方大明神と云ひ或は法性大明神と云ふ、即ち信濃國の一宮なり。社殿頗る莊麗、境内の西隅に高七尺の古塚あり、神靈を歎むる所とす、昔時は甲州の武田

【信 濃】

氏より年々祭費を寄附したりと云ふ。

●下諏訪神社 (信濃)

下諏訪の東岡に所在す。祭神は諏訪神の妃、八坂刀賣命にして官幣中社に列す。一説に依れば諏訪神は上宮、下宮の二社なれども其授位階位相關連して離るゝことなしと云ふ。下宮は近世神領五百石、大祝を金刺氏とす、後醍醐天皇の御宇に當り、大祝の家断絶したれば武居祝の童男十五未滿の子を以て大祝職を行はしめ年長すれば替へたり、其下に長官武居祝以下の五官あり祭事を掌る。諏訪上下兩社の神主が時に兵馬の事にも従ひし事は盛衰記にも載せられ諏訪上宮には諏訪次郎、千野太郎、下宮には手塚別當、同太郎云々の名あり。正平年中南北朝分裂時代には下宮は常に宮方に從屬し、上宮と其趨嚮を異にしたるが如し。

●姨捨山 (信濃)

信州更級郡に所在し千曲川の西岸に峙ち川を隔て、埴科郡の鏡臺山と相對す。姨捨山は一名冠着山又は更科山と稱す古來觀月の勝地として知らる。川中島の平野遠く脚下に連り、千曲の碧條帯の如く流る、月夜山に登つて展望すれば田水悉く月影を宿して美觀言ふべからず、之を田毎の月と稱す。山麓の丘に一字あり放光院長樂寺と云ふ、附近に姨石なる巨岩時ち傍に老桂樹あり。往時親の如く孝養せし姨を此山に捨てたるも悲みに堪ずして「我心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と詠じ再び行きて捨てたる姨を迎ひ來りしとの傳説あり。

三千 風

姨捨てし山の訴人か杜宇

芭 蕉

俤や鏡一人泣く月の友

●淺間温泉 (信濃)

松本市を距る東北三十町に在り。即ち東筑摩郡本郷村の字にして古來温泉湧出するを以て著はる、泉質は無臭無色、透明にして温泉人體に適し、朝夕の炊事に尚温泉を用ひ飲料に供するを得べし。此地海拔千八百十八尺の高地にして空氣乾燥、東方は本郷山を負ひ、西北は大洞山の連脈に接し、南は郊外遠く連りて松本市街を望む。温泉は上淺間、下淺間の二ヶ所に分れ共に二十四五ヶ所あり、日用の物資、百貨等は大抵辨じ得られ諸種の設備整ひ居るを以て茲に遊ぶ浴客四時絶ゆる事なく、且つ日曜日如きは松本市人の娛樂場として來浴するもの多く常に般賑を呈せり。因に云ふ、此地を距ること九町、女鳥羽瀧あり、又此地の産土神として往昔淺間國司菅生王の靈を祀れり。

●松本城址 (信濃)

一名深志城と稱す、松本市北深志に在り。城は永正年間小笠原氏の一族島立貞永なる者井川の城を茲に移して築けるも、後天文三年小笠原長時林より移りて茲に居りしか二十二年武田信玄と楢井原に戦ひ敗れて城は武田氏の有に歸し其番城となれり、天正十年長時の子貞慶一舉して舊領を復し徳川氏に附從す、十八年小笠原氏下總に移封したる後、石川康昌十萬石を以て茲に居城し大に修築を加へたるが慶長十八年故あつて除封せられ小笠原氏又來りて居城す斯くて後松平、堀田、水野等を経て享保年間戸田氏志摩より移封し來り世襲して以て明治に及べり、維新後廢城となりて今僅に五層の天守閣のみを存す高さ二十五間、其北に三層樓、東南に二層樓あり、俗之を月見橋と稱す。

●善光寺（信濃）

長野市の北端、大峯山の麓にあり、南面して市街を俯瞰す、殿堂頗る宏大にして香火常に盛んなり。本尊は一光三尊佛と稱し閻浮檀金の阿彌陀如來にして一尺五寸の靈像なり。寺傳に依れば推古天皇の朝、伊那郡の人本田善光この佛像を難波の堀江に獲て歸村し、伊那郡座光寺村に置きしを皇極天皇の朝に至て更に今の地に移したりと云ふ。後ち戦國時代に武田信玄之を甲斐に移し新善光寺村を建設したるが武田氏滅亡の後、織田氏之れを美濃國岐阜に奉じ、徳川氏更に之を遠州濱松に移し再び甲府に復したるを豊臣氏又之を京都に迎へ轉々四十餘年に及び慶長三年八月長野に復するに至れり現今の堂宇は元祿年間の起工に係り寛永年間に竣工を告げたるものにして、東西十五間南北二十九間三尺、高さ十丈あり、其柱數は百三十六本にして椽の桁數は法華經の字數に則り六萬八千三百八十四枚なりと傳ふ、山門は寛延三年の創建に係り二重の樓門にして高さ六丈六尺、桁行十一間、樓上に文珠四天王を安置す。舊寺領は千石を有し。天台宗の大勸進、淨土宗の大本願以下四十六坊あり。此中衆徒二十一坊妻戸十坊、中衆十五坊に分たれり、昔時法然、親鸞兩上人の止宿せりと云ふ坊は中衆の一院なり。

堂は四方に階段を設け、正面の板敷には大香爐を置き、其右脇に太鼓、左脇に花瓶あり、花瓶には常に松を挿す、是れ親鸞上人手活の松なりと云ふ、堂の中央高所を内陣とし其西方に本尊を安置す寺域は東西四百四十七間、南北九十四間面積一萬五千三百餘坪參詣者四時織るが如く實に海内無双の名刹なり。

●善光寺大勸進（信濃）

善光寺の住職は天台、淨土二宗の尼僧

にして之が僧寺を大勸進と云ひ、尼寺を大本願と稱す。大勸進は天台の僧之れに居りて本寺の別當たり、大本願は紫衣の尼寺にして皇族又は貴紳の女性世々之れが住職たるの例なり。因に云ふ、本堂にては毎年舊三月十五日、十月十五日の兩日を以て會式を行ひ。六月十三、十四の兩日大法會を執行するを例とし、此日長野市中は山車を曳出し萬燈を點じ賽者群集して名狀すべからざる雜沓を極む。

●淺間山（信濃）

照らせ猶濁りにしまぬ難波江の
あしまにみえし有明の月
左に善光寺に關する「參考本盛衰記」の一節を掲ぐ

善光寺如來と申は、昔天竺毘舍離國の月蓋長者、一光三尊の御體を、閻浮檀金以て鑄移し奉る、閻浮提第一の佛像也、佛法東漸の理にて百濟國に渡り、欽明天皇の御宇に浪に浮び本朝に來り給ひたりしを、推古天皇御宇に、信濃國水内郡住人、本田善光と云者、遙に負下し奉て、我家を堂とし、我名を寺號に附つ、安置し奉てより以降日本最初の佛像、本師如來と仰ぐ云々。

●淺間山（信濃）

信州北佐久郡と上州吾妻郡とに跨る活火山として知られたる淺間山は海拔八千八百四十四尺、現火口は周圍約十二町、深約一百間、俗に之をお釜と稱す、其底は堅牢なる岩石より成り、孔壁より墜落せる岩塊累々として堆積す、而して其基底及び側壁の各所より常に水蒸氣、亞硫酸瓦斯、硫化水素瓦斯を噴出し、時に又灰又は砂礫を降することあり。現火口の正部に二重の弓狀を爲す岩壁あり、其の近きを前掛山と云ひ、遠きを牙山と云ふ、共に舊火口環壁の留殘するものにて牙山は最舊火口、前掛山は舊火口なり。

淺間山に登るには杏掛又は退分よりするものもあるも、最も容易なるは小諸より登るに在りとす。淺間山の東及南に多數の小火山ありて其最も著るしきを小淺間山と云ふ、又杏掛驛の東北なる離山も休火山にして山頂に凹所あり、淺間の頂上より四方に放散する熔岩流の最大なるは上州吾妻郡に流下したるものにて長さ十六里に及ぶと云ふ山嶺には新古の噴出岩堆積して草木を生せず、半腹には落葉松及び二三の雜草茂生す、山麓に降下するに従ひ草木益々多く追分原には通常の赤松繁茂せり全山水に乏しく唯だ南麓に數箇の小池あり、其中三箇は赭赤色の泥水を蓄へ、俗に之を血ノ池と呼ぶ其水溢れて下るを赤瀧と稱す、他の一池の灰黑色なるを俗にいはぐろ池と云ふ、登山は比較的容易なるを以て夏季杖を茲に曳くもの多し、登山里程は小諸より山頂まで四里餘、追分驛より山頂まで三里餘なり、山麓野村に一刹あり眞樂寺と云ふ是れ淺間山の別當にして結構宏壯を極む、往時は火口の傍に一石祠ありしも噴火の爲め滅亡に歸せり、蓋し是れ奥の院なるべし傳ふる所に依れば淺間山の噴火は天武天皇の御宇、白鳳十四年より明治二十二年に至る迄の間に於て二十九回の噴出あり大永七年より三百六十二年間に二十八回の噴出ありたると、又天明三年の大噴火の際には沙土を降らす事二十里に及び民家の埋没せるもの一千八百、死者八千に達し江戸にまで降灰し積る事一寸に及びりと云ふ。

（後撰和歌集）

信濃なる淺間の山も燃なれば

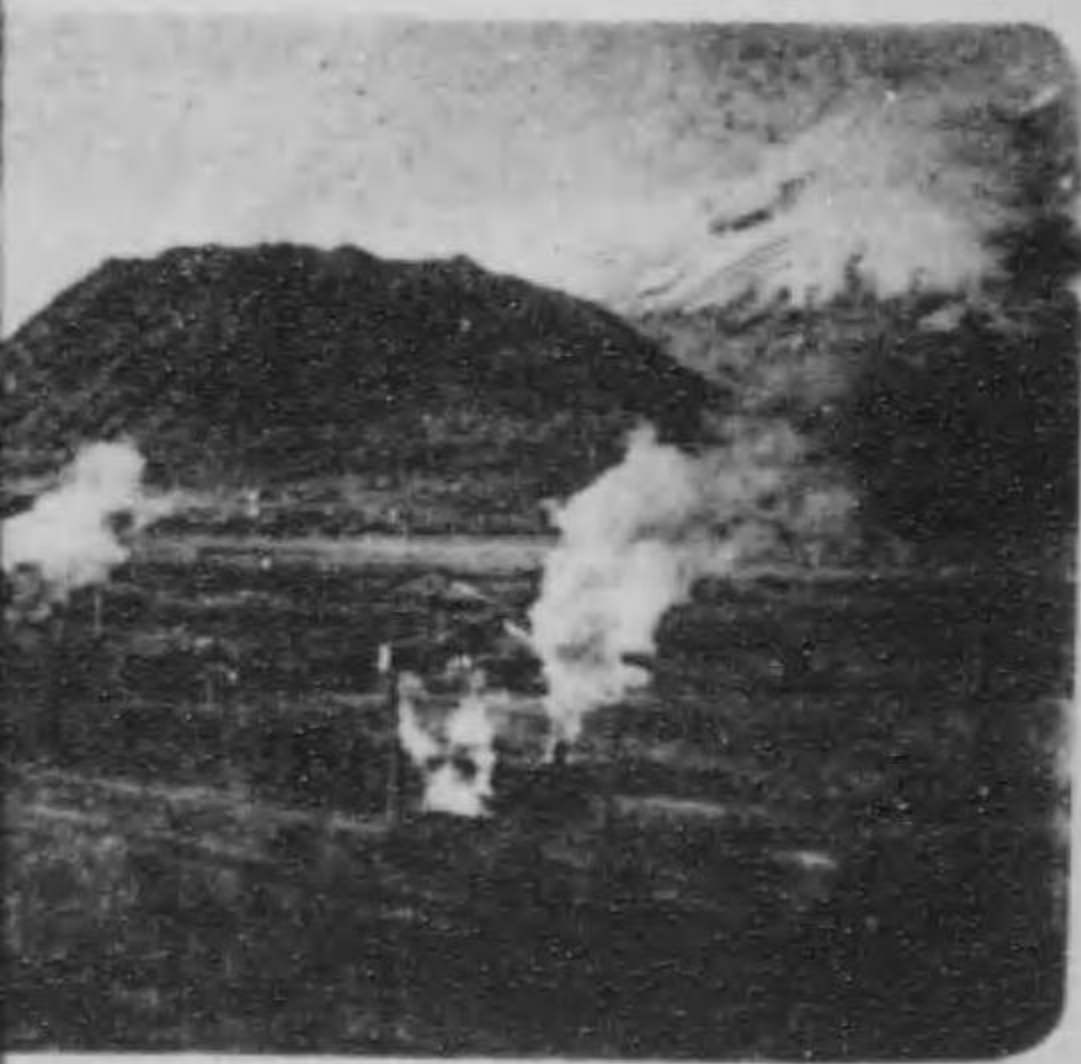
富士の煙のかひやなからむ

在原 業平

信濃なる淺間が岳に立つ煙り

遠近人の見やはとがめん

因に川中島の記事は次頁に併録せり



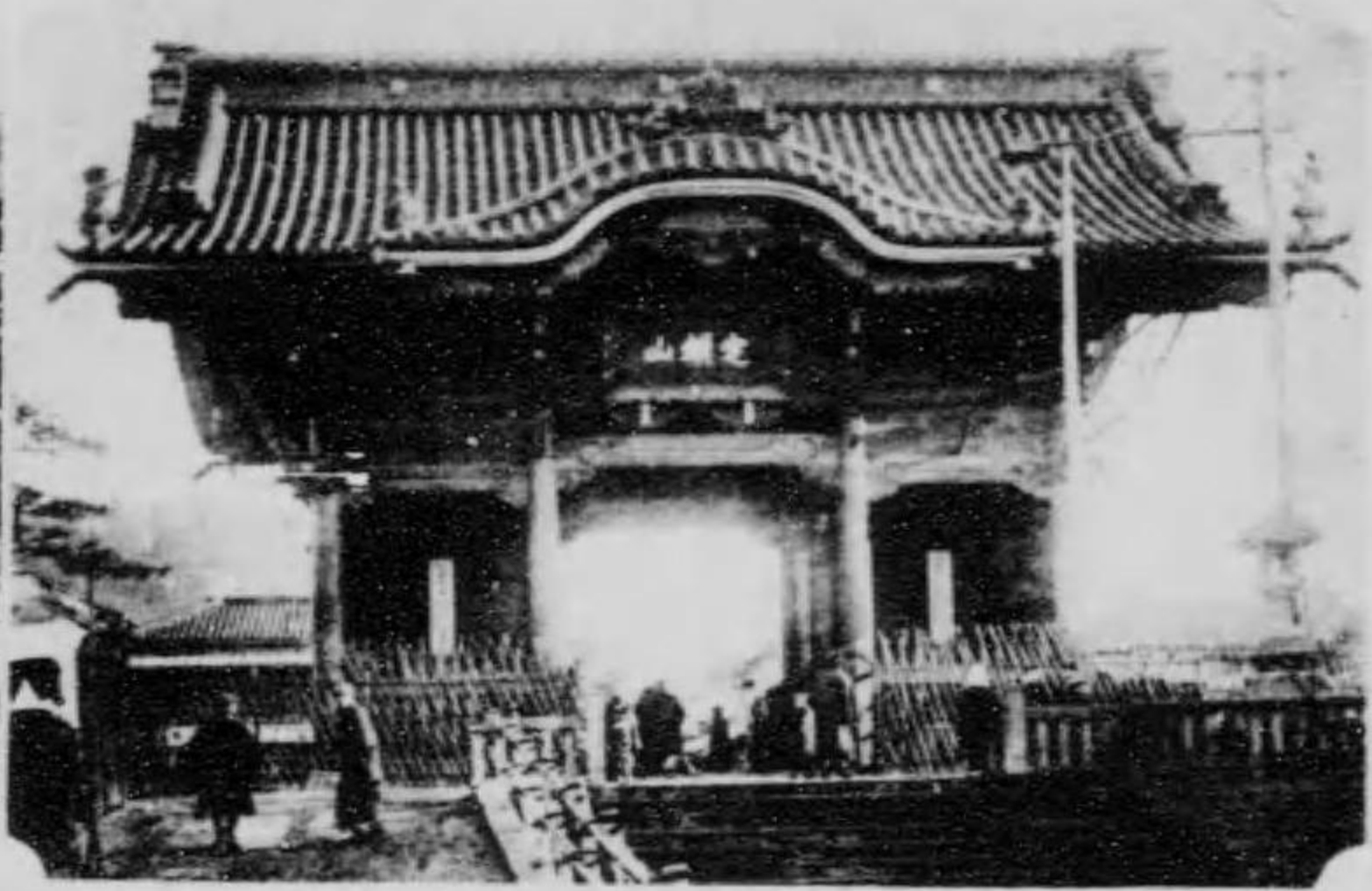
經外澤より淺間山を望む

山 清 路



磐井澤より山間を望む

大 聖 進



善 光 寺 山 門



善 光 寺 本 堂

云ふ坊は中衆の一院なり。
 堂は四方に階段を設け、正面の板敷には大香爐を置き、其右脇に太鼓、左脇に花瓶あり、花瓶には常に松を挿す、是れ親鸞上人手活の松なりと云ふ、堂の中央高所を内陣とし其西方に本尊を安置す寺域は東西四百四十七間、南北九十四間面積一萬五千三百餘坪參詣者四時織るが如く實に海内無双の名刹なり。

●善光寺大勸進 (信濃)

善光寺の住職は天台、浄土二宗の尼僧

火山として知られたる淺間山は海拔八千八百八十四尺、現火口は周圍約十二町、深約一百間、俗に之をお釜と稱す、其底は堅牢なる岩石より成り、孔壁より墜落せる岩塊累々として堆積す、而して其基底及び側壁の各所より常に水蒸氣、亞硫酸瓦斯、硫化水素瓦斯を噴出し、時に又灰又は砂礫を降することあり。現火口の正部に二重の弓狀を爲す岩壁あり、其の近きを前掛山と云ひ、遠きを牙山と云ふ、共に舊火口環壁の留殘するものにて牙山は最舊火口、前掛山は舊火口なり。

回の噴出ありたると、又天明三年の大噴火の際には沙土を降らす事二十里に及び民家の埋没せるもの一千八百、死者八千に達し江戸にまで降灰し積る事一寸に及びりと云ふ。

(後撰和歌集)

信濃なる淺間の山も燃なれば
 富士の煙のかひやなからむ

在原 業平

信濃なる淺間が岳に立つ煙り

遠近人の見やはとがめん

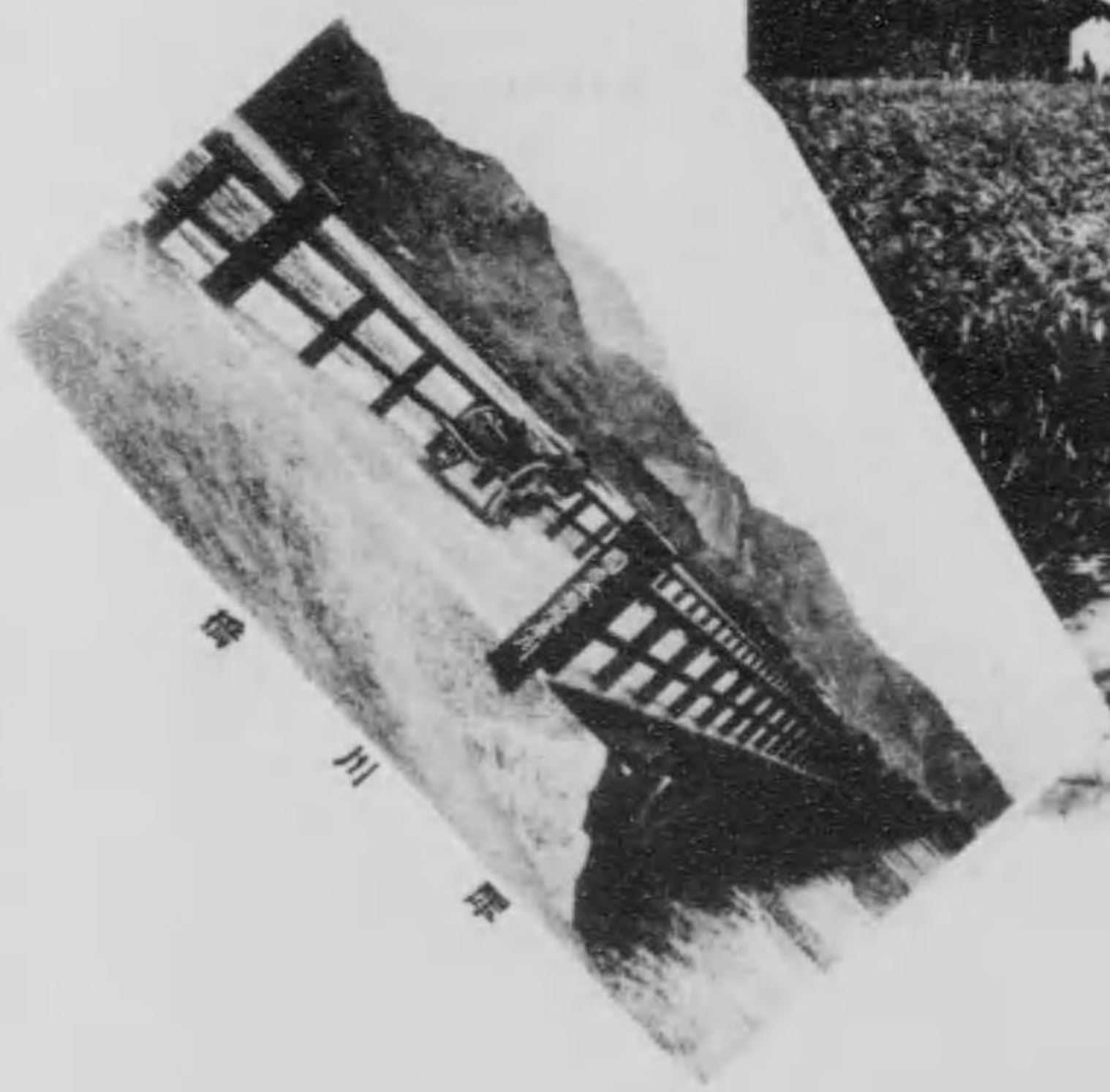
因に川中島の記事は次頁に併録せり



山本助助墓



川中島八幡原



●川中島 (信濃)

鞭聲蕭々夜過河、曉見千兵擁大牙と山陽外史に依て詠せられたる歴史の地として著名なる川中島は、犀川、千曲川の中州にして、所謂善光寺平の中心地たり、即ち

上田、松本、長野三街道の交會點に所在す、昔時は埴科、更級、水内、高井の四郡に亘りしを以て川中島四郡と稱したりしが今は更級郡青木島、眞島、小島田、西寺尾の諸村に屬す。

と首とを合せたる所として名づけたるものなるが、後世出水の爲め其所在を失ひたり。又附近に「七太刀」「三太刀」と稱する地あり、是れ信玄と謙信との接戰奮闘せし地なりと云ふ。

て過ぐるを例としたりと傳ふ。

●山本晴幸墓 (信濃)

松代町を距る北の方半里、埴科郡寺尾村字柴村の阿彌陀堂境内に在り、墓石の高さ臺石共に一丈餘、方形にして上部に笠石を戴く、此墓素と川中島の八幡ヶ原に在りたるを、千曲川出水氾濫の際缺潰して其址を失ひたるを以て、後世此地に移したりと云ふ。

龍戰虎鬪無暫休 越軍甲兵互結仇
自古兩雄不並立 至今二水交爭流
遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇
鞭聲蕭々夜過河 曉見千兵擁大牙
海 莊

頼山陽



●川中島 (信濃)

鞭聲蕭々夜過河、曉見千兵擁大牙と山陽外史に依て詠せられたる歴史の地として著名なる川中島は、犀川、千曲川の中州にして、所謂善光寺平の中心地たり、即ち上田、松本、長野三街道の交會點に所在す、昔時は埴科、更級、水内、高井の四郡に亘りしを以て川中島四郡と稱したりしが今は更級郡青木島、眞島、小島田、西寺尾の諸村に屬す。

史を按ずるに天文二十二年より以降十餘年間に亘りて武田、上杉の兩氏兵を此地に交へたるが就中最も激烈なりしは永祿四年九月九日の戰にして、當時鎌信は茶臼山に陣し、信玄は妻女山に陣し兩軍相對持せり、其一大血戰地點は小島田、八幡ヶ原、陣屋ヶ原等なり、因に武田信玄の戰死せしは八幡ヶ原にして、其墓は西寺尾村宇水澤の典厩寺に存す。

梁山 星巖
 千山圍野轟 二水夾墟通 云是河中島
 當年角兩雄 灘聲晴亦雨 木末暮多風
 不見兵戈集 西天月一弓

大窪 時佛
 元是英雄酣戰地 稻花看作陣雲邊
 兩山就峙六十里 二水爭流三百年
 曉霧到今迷野鳥 秋風如此咽寒蜂
 猶憐父老存遺迹 一座叢祠傍碧田

●八幡ヶ原 (信濃)

川中島合戰中の最も激戦の演せられたる地にして、陣屋ヶ原を距る十七八町の地にあり、永祿四年九月九日の戰に於て武田信玄、山本晴幸等甲州方の諸將此地に戰死せるもの少なからず、原は今茫茫たる田圃と變ず、風雨春秋幾百年當時を追想し來れば轉た今昔の感を深うす。

因に曰ふ、八幡原には、「胴合の橋」と云へるあり、是れ戰死せる山本勘介の胴

【信濃】

と首とを合せたる所として名づけたるものなるが、後世出水の爲め其所在を失ひたり。又附近に「七太刀」「三太刀」と稱する地あり、是れ信玄と謙信との接戰奮闘せし地なりと云ふ。

頼山陽
 鞭聲蕭々夜過河 曉見千兵擁大牙
 遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇
 龍戰虎鬪無暫休 越軍甲兵互結仇
 自古兩雄不並立 至今二水交爭流
 雪對殘壘蛟蛇走 秋冷荒祠風雨愁
 唯有與亡長不管 蘆花洲畔一眠鷗

●山清地 (信濃)

隠れたる絶勝として驛客の間に稱せらる、山清地は東筑摩郡生阪村と北安曇郡廣津村との間に在り、即ち犀川の上流にして松本市の白坂より犀川を下ること五里、沿岸最も相迫れる勝地にして南岸の生阪には猿飛石、水神岩、獅子岩、河伯の窟屋等の名勝あり、就中獅子岩上に架する三清橋の邊、最も風景に富む、又北岸の廣津には菩薩山、二十五峯等聳え、或は碧潭或は急流、怪石奇岩相錯綜し、其の兩岸の最も肉薄する所は僅に十三四間、其間舟を行く、轉た人をして心膽を寒からしむ、景趣概して畫圖の如く、眞に仙境に入るの想ひあり、蓋し東筑摩一の奇勝なりとす。

●諸角豊後守墓 (信濃)

更級郡稻里村宇塔の腰に在り。此地川中島合戰の古戰場として知らる。諸角豊後守、名は昌清と云ふ、甲州軍の一將にて驍勇の聞えあり、川中島第二次激戦の際、信玄の急を救ひて終に此地に壯烈なる最期を遂げたり、後世武士が騎馬にて此墓前を過ぎんとするものあれば必ず馬驚きて進まず、依て馬より下り

て過ぐるを例としたりと傳ふ。

●山本晴幸墓 (信濃)

松代町を距る北の方半里、埴科郡寺尾村宇柴村の阿彌陀堂境内に在り、墓石の高き臺石共に一丈餘、方形にして上部に笠石を戴く、此墓素と川中島の八幡ヶ原に在りたるを、千曲川出水氾濫の際缺潰して其址を失ひたるを以て、後世此地に移したりと云ふ。

山本晴幸は勘介と云ひ、道鬼入道と稱す、甲州武田方の有名なる謀將にして、左眼明を失ひ、且つ片脚傷きて跛足たるにも拘らず、武勇絶倫、智謀に富み屢々越後勢を備したるが終に永祿四年九月九日の激戦に於て壯烈なる戰死を遂げたり

●犀川 (信濃)

信州西部の巨流にして、奈良井、梓二川の合流より成り松本市の西北を沿流し穂高、高瀬の二川を併せ、更に千曲川と合して信濃川と成る、流程三十三里に達す。松本市より新町に至る十四里犀川の沿岸風景に富むの地多し、此間總て舟楫の便あり。嘗て弘化年間信濃大地震の際夏級郡の虚空藏山崩壊して犀川を塞ぎたれば其結果として滯水は船場、生坂邊まで逆流し、沿岸諸村を流失し人畜死亡多く被害甚大なりしと云ふ。

犀川に就て一傳説あり、此川往時は一大湖水なりしを東北に疏水し陸地となりしものなり、北安曇郡十日市に川合神社あつて海神を祭る、是れ白龍と犀龍と相交りて生める子を日光泉小太郎と稱し父母の命を承け湖水を突破し水を落したりと云ふ。犀川に架する一奇橋あり、久米路橋と稱す、水内街道に當る、北部は岩石の上に樞を組み橋礎とし、橋上曲折して曲尺の形を爲す、故に又曲橋の名あり、奇工驚く可し、附近亦景勝に富む。

●榛名山 (上野)

赤城、妙義の二山と共に上野の三名山と稱す。群馬、吾妻の兩郡に跨りて位す、標式的三重式の消火山にして中央に榛名富士と稱する火口丘あり、其西方には榛名湖なる火口原湖あり、榛名富士は一名小富士と稱す美なる圓錐狀を呈し頂上に馬蹄形の火口あり、海拔四千八百尺湖面より高さ事八百二十八尺なり。烏帽子、鬘櫛、硯岩、掃部、氷室、摺襖岩等の諸山榛名を擁して其の外輪山を成す。山中怪巖奇石多く其間紅葉點綴して秋季の風趣頗る佳なり。榛名神社は外輪なる掃部山の中腹に在り即ち天神嶺より下る事十八町にして達す。縣社にして意田支命を祀る、素と滿行大權現と稱し往古は繁盛して三千百坊を有したりと慶長十九年一山評議して天海僧正に歸し天台宗を奉じ其別當を岩殿山滿行院と稱せり。明治維新後社寺分立する事となれり。登山するには伊香保より道程二里餘、然れども南麓室田村より登るを順路とす。

●榛名湖 (上野)

舊名伊香保沼と稱す、伊香保富士の麓なる牧場に沿ふて行く事、數丁にして達す、湖は南北に長くして十七町、東西は直徑十一町、周圍一里、水深は最も深き所は十二尋に及ぶとぞ所謂榛名の神の神洗水と稱せらるゝものなり、素と是れ噴火坑なりとも云ふ。湖の東北に在るを伊香保富士と云ひ、其下には一畚山あり、又北畔には烏帽子嶽、鬘櫛山、硯ヶ嶽等峙てり、湖の餘水は北隅なる沼尾川の火口湖より流下して三飛泉を爲す、就中辨天瀧最も壯觀なり。東南の汀には花菖蒲多く生ず、是れ和歌に「伊香保の沼のあやめ草」と詠まれ居れるもの、且つ夏季は菖の名所として景趣甚だ佳なり、夏時歩を茲

に運びて湖面に棹し、水趣涼味を掬するも頗る多し。

順徳院

眞菰刈る伊香保の沼のいかばかり

波越へぬらん五月雨の頃

俊成女

影くらき伊香保の沼は夏草の

露の汀に月ぞやどれる

●妙義山 (上野)

上野國北甘樂、碓氷の二郡に跨り、居然として天を摩するものは妙義山なり山は白雲、金洞、金鶏の三峰に分る、白雲金洞の二峰は共に高さ三千八百四十五尺、金鶏は二千九百四十尺なり、金洞は最面に位せるも遠望すれば白雲金洞の間に見ゆるを以て之を中岳と稱す、瀧山奇岩怪石ならざるなく石門石柱到る處奇景を呈す。東方山腹に神社あり、妙義神社と稱し郷社にして日本武尊を祀る、一説に依れば是れ山靈崇拜の古俗なりと、又尊意僧正を祀るとも云ふ。社殿高潔にして丹碧燦爛たり境内老杉巨樹鬱然として幽邃を極め、自ら崇高の念に堪へざらむ。登攀は磯部又は松井田よりするを順路とす、妙義町まで約一里夫より碓氷川を渡れば前面既に妙義山の屹立するを見る。山中紅葉多く秋季の風趣最も佳絶にして登山者多し。

望金洞

齋藤 竹堂

我與林巒有宿因 一年兩見碧嶺岫

層嵐撲面來如雨 應是山靈記故人

●妙義山石門 (上野)

妙義神社の賽路を左折し十數町を登れば石門に達す、是れ蓋し妙義山の第一石門なり峨々たる怪岩天に嘯きて立つ正に神工鬼斧の觀あり、更に數丁にして第二石門に至る、道頗る峻峻にして登攀者皆鐵鎖によりて登る、次で第三第四の石門

あり、之を経て更に鐵鎖を辿りて攀づれば終に頂上に達す、頂上には一小祠を建つ、石門の數は幾十を數ふ、人の稀に至る者あるも大抵は十六門にして止む。其第四門の邊最も奇景を極む。

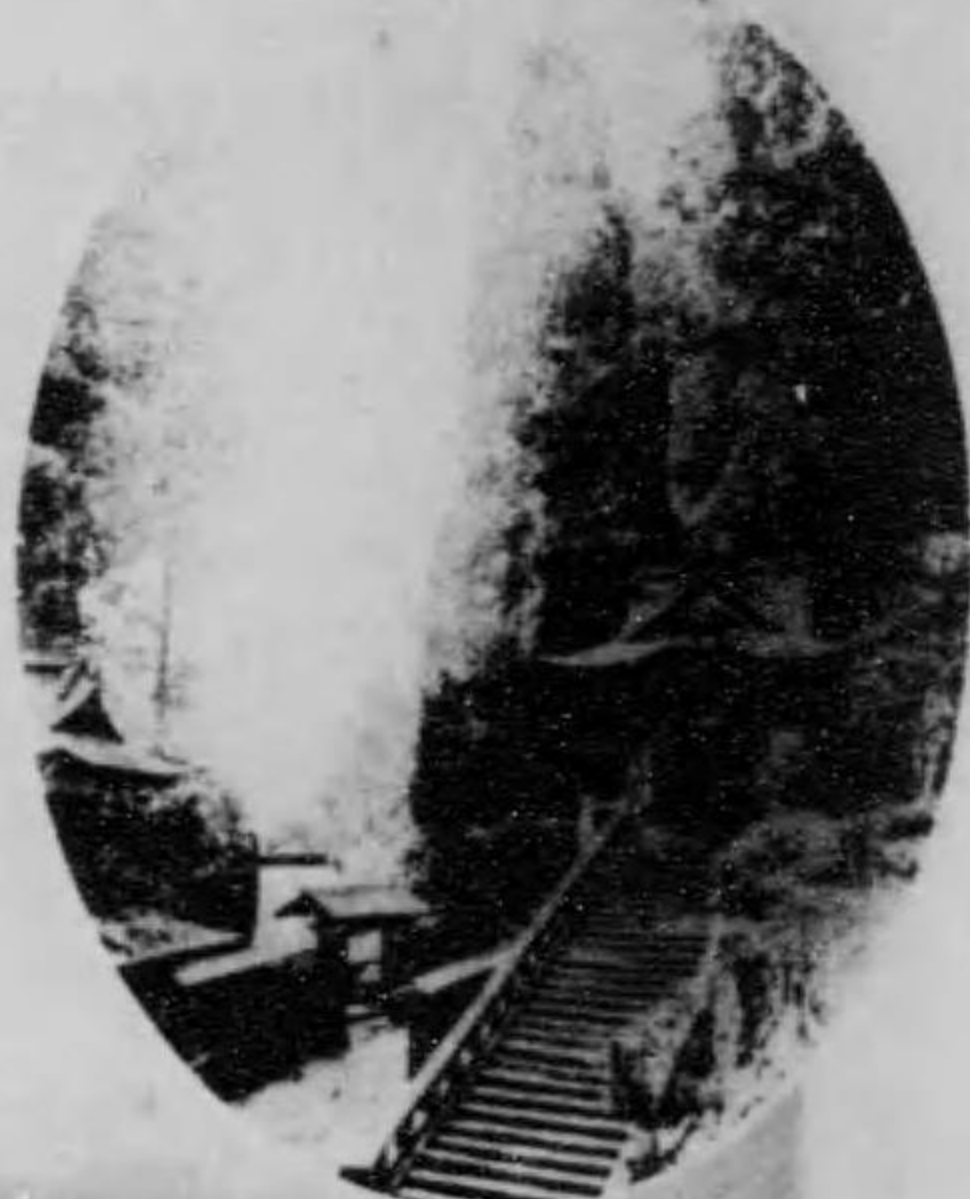
●赤城山 (上野)

是亦上野三名山の一にして、利根、勢多二郡に跨る。海拔實に六千五百尺、南は關東の平野に面して長裾を曳き西は利根の流れを隔て、榛名山と相對し、北は日光山脈に連る、山谷は二重式火山を成す、外輪山は黒檜山、駒ヶ嶽、五輪峠、野坂峠、荒山の諸山連り圍中舊火口を存す、是より稍東南に方りて地藏山の中央火口あり、火口原の大部は水を湛へて湖を爲す即ち是れ赤城湖なり、此湖俗に大沼と稱す、東西十五町、南北九町、周圍一里二町、曲玉狀を爲す、餘水沼尾川となりて利根に合す、湖畔に赤城神社あり磐筒男命、磐筒女命、經津主命を主神とし東照宮を相殿として祀る。之を赤城神社の本宮とし南麓三夜澤に在るを里宮とす、又別宮は地藏嶽に在り。

●利根川 (上野)

關東第一の大河にして、一名を坂東太郎と稱す、源を利根郡藤原村の文珠山に發し、附近諸山の溪流を合せ潜流數十町屈曲して西南に走り、行く／＼赤谷、薄根、片品、吾妻の諸川を併せ、東西群馬の郡界に入り東下して廣瀬川と合し更に東流して武藏下總の間に入る、水源より茲に至る延長實に二十八里餘、濶さ四十間に達す。

上流は其兩岸削如として奇巖起伏し景趣又凄絶快絶を極む、河上奇橋を架するもの二三あり戸鹿野橋の如きは左右橋臺框を組て全橋を支へ一の橋脚を用さず、一奇工と謂ふ可し。



社神名様



水と稱せらるゝものなり、素と是れ噴火坑なりとも云ふ。湖の東北に在るを伊香保富士と云ひ、其下には一畚山あり、又北畔には烏帽子嶽、鬘柳山、硯ヶ嶽等峙てり、湖の餘水は北隅なる沼尾川の火口湖より流下して三飛泉を爲す、就中辨天瀧最も壯觀なり。東南の汀には花菖蒲多く生ず、是れ和歌に「伊香保の沼のあやめ草」と詠まれ居れるもの、且つ夏季は螢の名所として景趣甚だ佳なり、夏時歩を茲

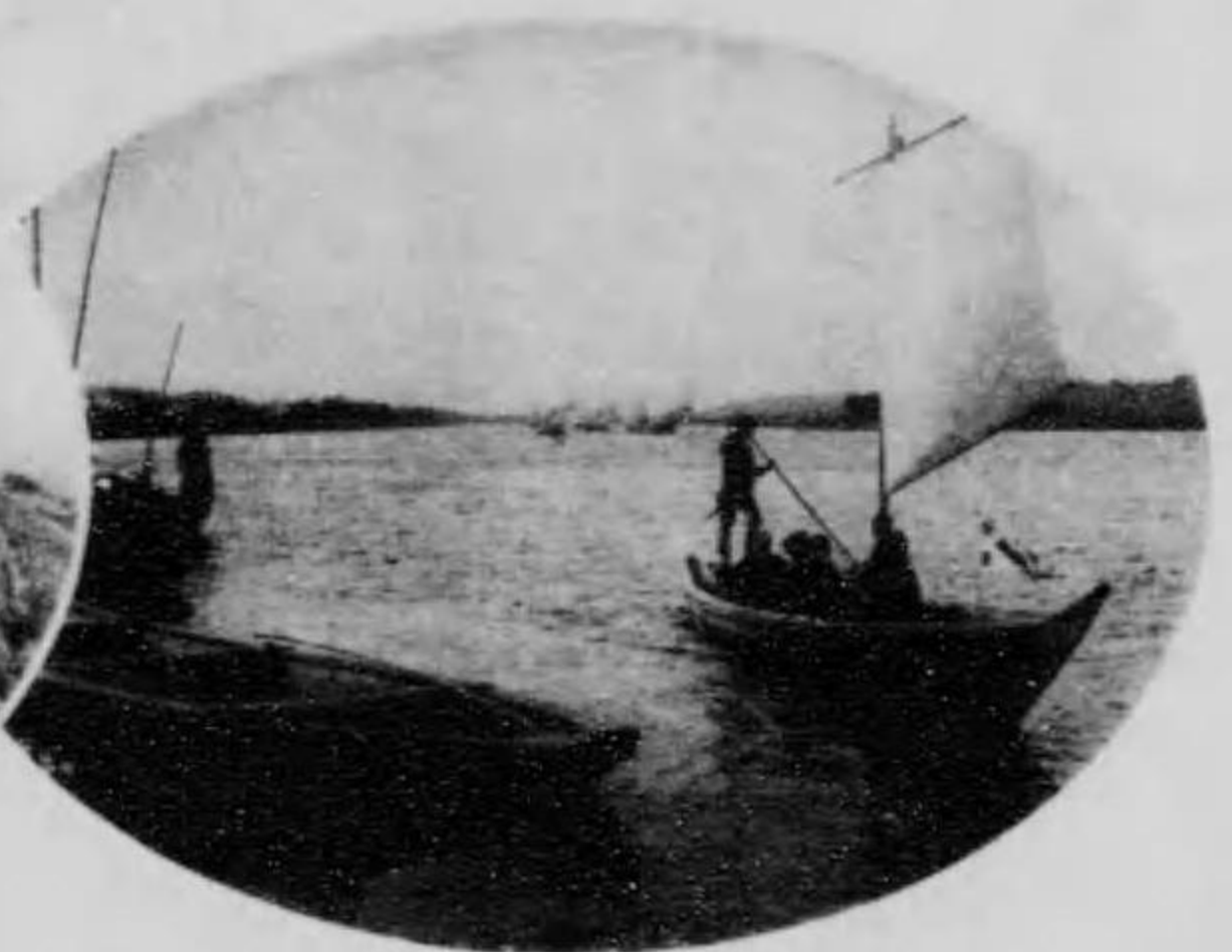
我與林巒有宿因 一年兩見碧嶺岫
層嵐撲面來如雨 應是山靈記故人
● 妙義山石門 (上野)

妙義神社の賽路を左折し十數町を登れば石門に達す、是れ蓋し妙義山の第一石門なり峨々たる怪岩天に嘯きて立つ正に神工鬼斧の觀あり、更に數丁にして第二石門に至る、道頗る險峻にして登攀者皆鐵鎖によりて登る、次で第三第四の石門

根、片品、吾妻の諸川を併せ、東西群馬の郡界に入り東下して廣瀬川と合し更に東流して武藏下總の間に入る、水源より茲に至る延長實に二十八里餘、濶さ四十間に達す。

上流は其兩岸削如として奇巖起伏し景趣又凄絶快絶を極む、河上奇橋を架するもの二三あり戸鹿野橋の如きは左右橋臺框を組て全橋を支へ一の橋脚を用ずり、一奇工と謂ふ可し。

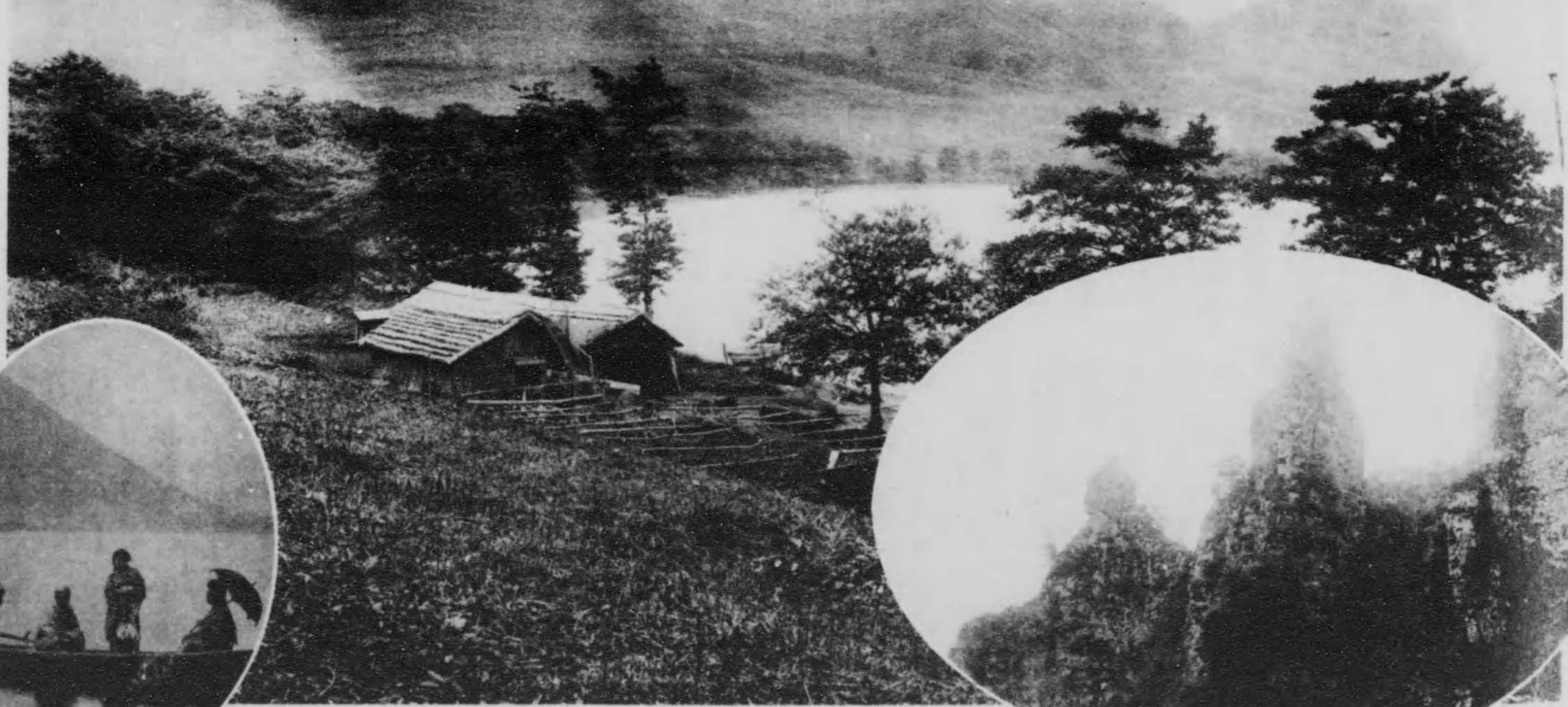
利根川



赤坂山



妙義石門



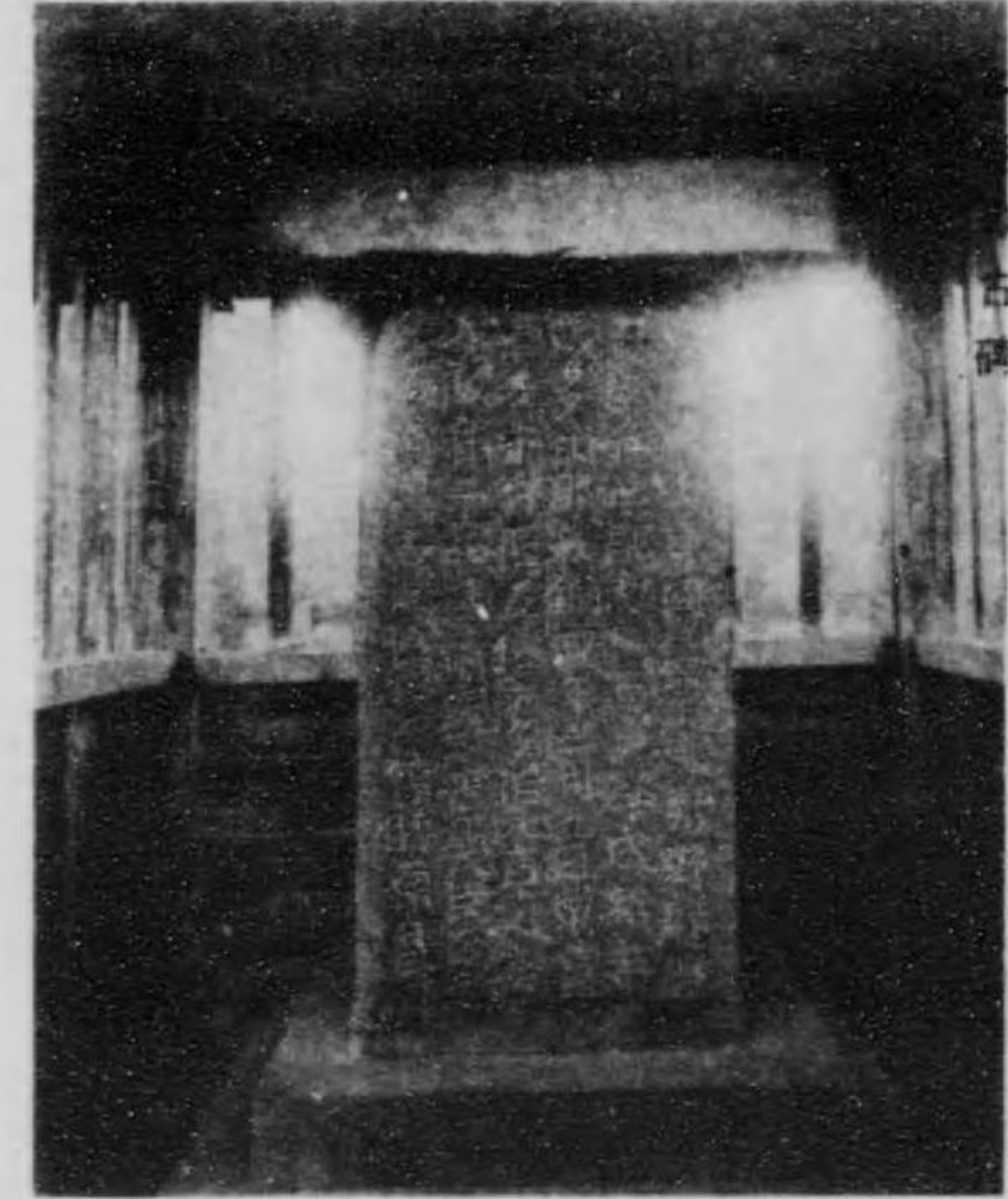
妙義山名嶽

妙義山

妙義湖名遊

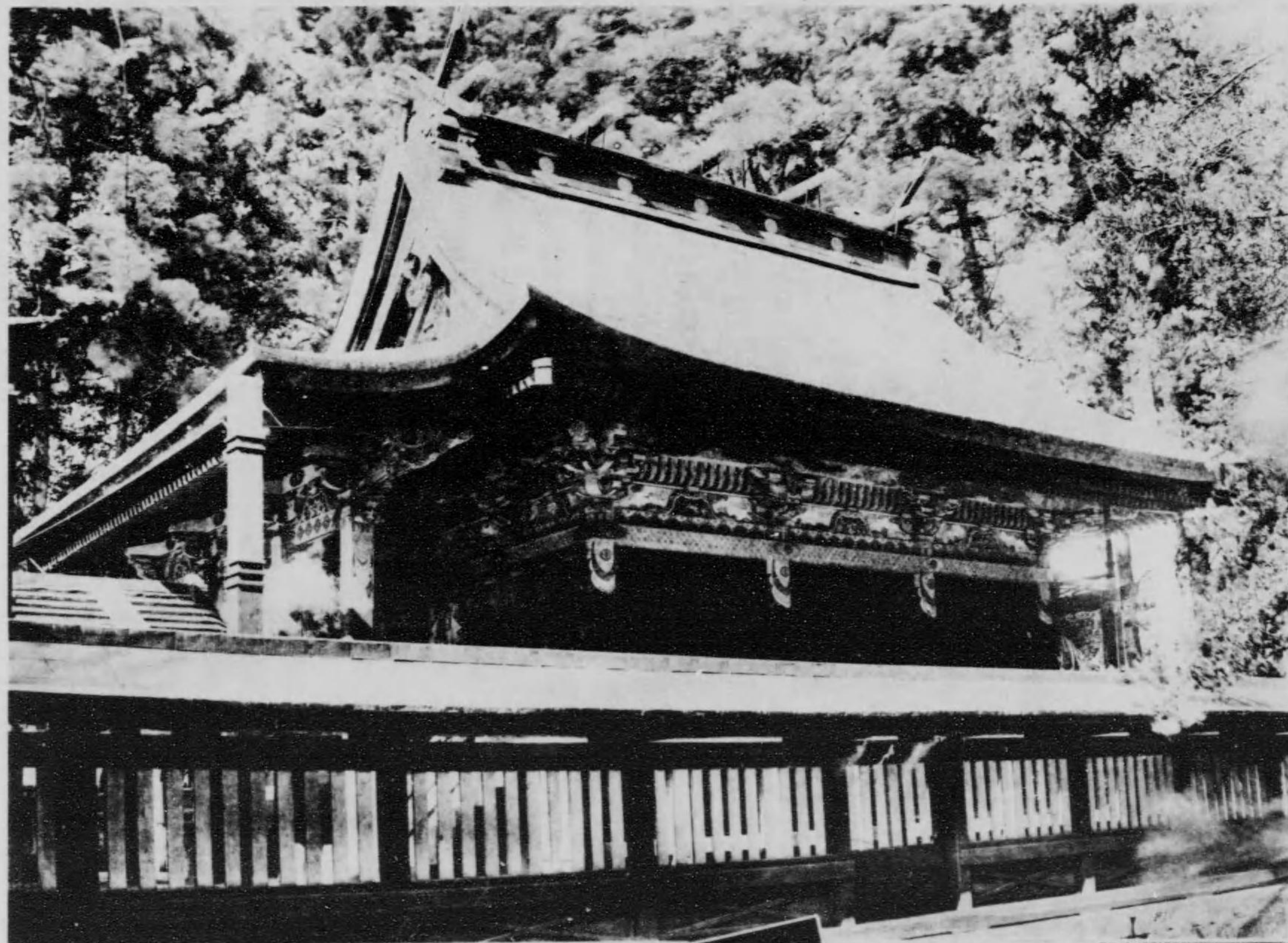


伊香保温泉



草津温泉

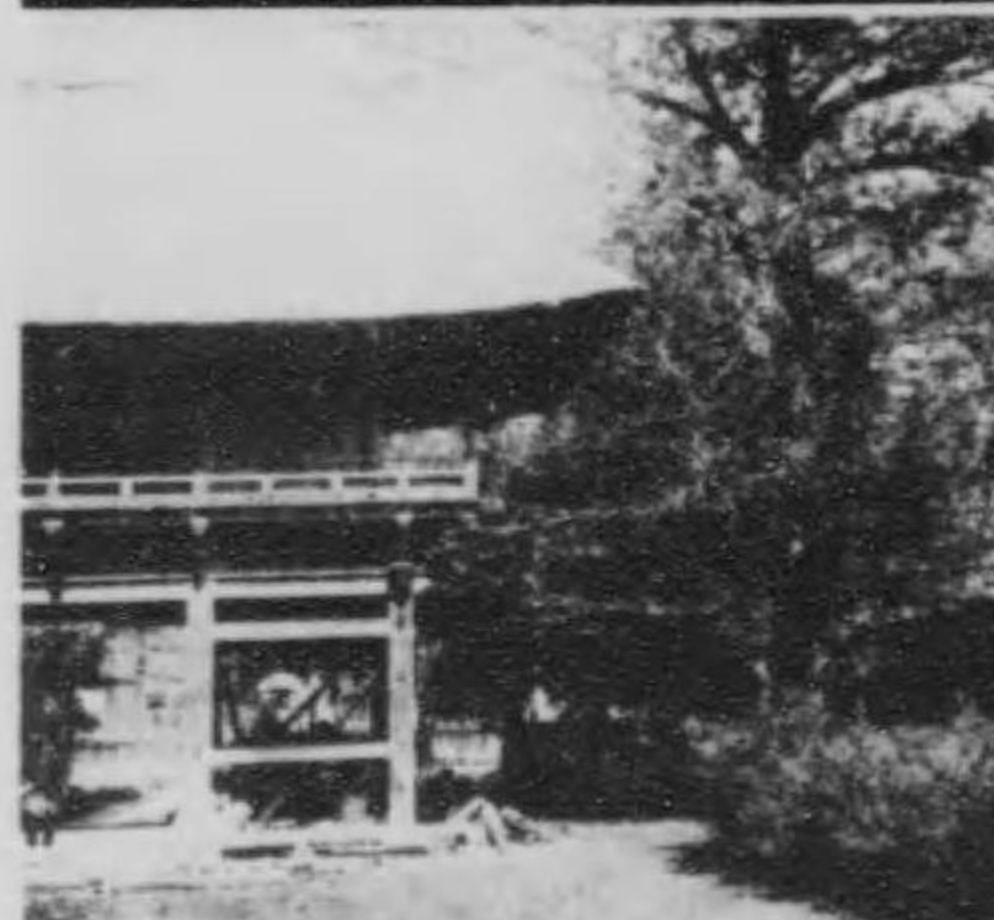
貫前神社



伊香保神社の松



文福茶壺



茂林寺

●貫前神社 (上野)

北甘楽郡一の宮に在り、一の宮明神と稱す國幣中社たり、其社名貫前は一に披録と書す。經津主命を祀る、即ち當國一の宮なり、此神社あるを以て土地の名に呼ぶに至れり、安閑天皇の元年始めて本社を此地に勧進し白鳳二年奉幣使を遣はされ、其後貞觀元年清和天皇宸筆の詔額を賜ふ、社地は稍々低くして總門を入り

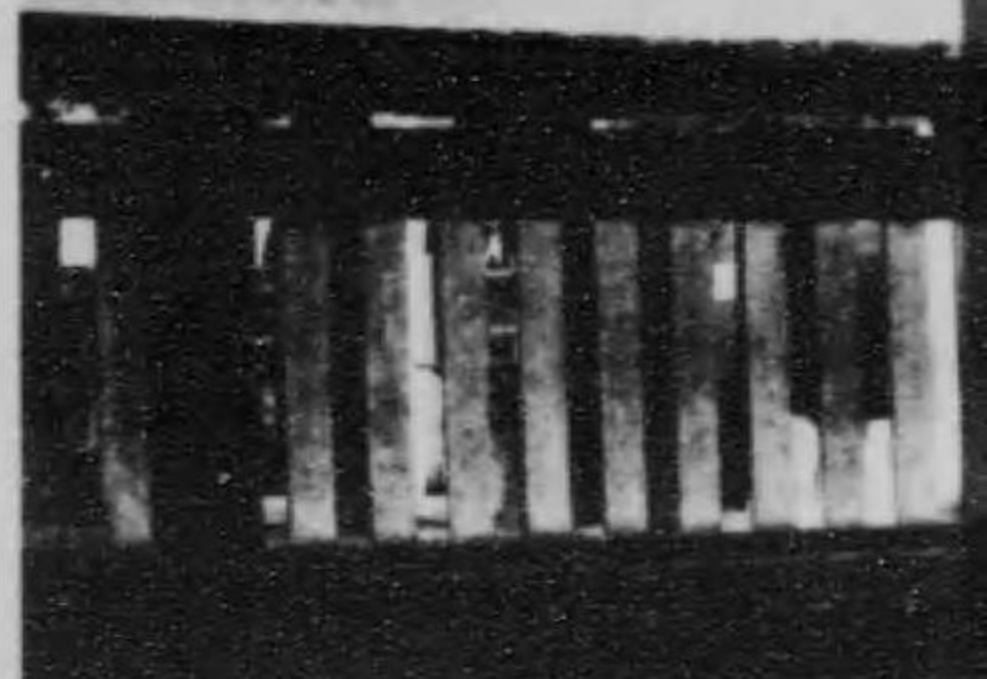
二郡を合して新に多野郡を設けたり。

●草津温泉 (上野)

本邦温泉中の著名なるものにして古來有馬温泉と並稱さる、上州群馬郡草津町に在り、前橋を距る西北十八里二十町即ち白根山の東麓にして、山麓低下せる高原に沿へる村落は草津温泉の湧出する所なり、泉源數ヶ所あり就中最も大なるを御汲上の湯と稱す、其他白旗、鶯熱、地

●御影の松 (上野)

澁川より西の方一里、即ち高崎より伊香保に至る道の右傍に在り、亭々たる一株の松樹天を衝いて聳てり、是れ明治十二年、英照皇太后陛下伊香保行啓の途次此の松樹の下に御野立あらせられたるを後ち里人此地を紀念として永久に坤徳を記さん爲め其節の供奉員萬里小路藤原博房に和歌を請ひ當時の群馬縣令榊取素彦



寺 林 茂

●貫明神社 (上野)

北甘樂郡一の宮に在り、一の宮明神と稱す國幣中社たり、其社名貫前は一に拔録と書す。經津主命を祀る、即ち當國一の宮なり、此神社あるを以て土地の名に呼ぶに至れり、安閑天皇の元年始めて本社を此地に勧進し白鳳二年奉幣使を遣はされ、其後貞觀元年清和天皇宸筆の詔額を賜ふ、社地は稍々低くして總門を入りて石階を下れば右には額殿、齋庫あり、正面には樓門あり、其左右に祓殿、社務所、神樂殿等並び建ち樓門の内には本社、拜殿儼然として建つ、社後には齋齋たる老松亭々として天を摩し林中に御神水なるものあり、又境内に日枝神社、内宮、外宮、阿夫利神社、琴平神社及び末社二十二座あり、大祭典は毎年三月五日を以て執行す、當日は遠近より賽人群集し非常に雜沓腹脹を極む。

●多胡碑 (上野)

吉井町と蕪川との中間にして、多野郡大字池村に在り。高さ四尺一寸、幅上部一尺六寸、下部二尺餘、碑面に左の文を刻す。

辨官符上野國片岡郡綠野郡甘樂郡並三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中辨正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊是れ下野の國造の碑、陸前多賀城の碑と共に我國の三古碑と稱せらる、字體古勁にして苔蒸し且つ文字多く缺損して讀み易からず。

一説によれば和銅六年甘良郡(織袋、韓級、矢田、大家)、綠野郡(武美)、片岡郡(山名)の諸郷を割きて置けり、多胡碑は即ち此事を記したるものなりと。又中世源義賢此地に住して多胡先生と呼ばれたりと云ふ。明治二十九年綠野、南甘樂の

【上野】

二郡を合して新に多野郡を設けたり。

●草津温泉 (上野)

本邦温泉中の著名なるものにして古來有馬温泉と並稱さる、上州群馬郡草津町に在り、前橋を距る西北十八里二十町即ち白根山の東麓にして、山麓低下せる高原に沿へる村落は草津温泉の湧出する所なり、泉源數ヶ所あり就中最も大なるを御汲上の湯と稱す、其他白旗、鷲熱、地藏、風、金比羅等の湯あり、諸泉の流末合して一流となる此流に沿ふて旅館客舎多く設けらる四時來浴するもの多く頗る腹脹を極む。附近に白根神社、光泉寺、常布の瀧等訪ふべき名勝尠からず。因に曰ふ、白根山は一名荒山と稱し海拔八千尺、草津温泉より行程三里餘にして達す、山頂に噴火坑ありて熱泉を湛へ信濃の淺間山と相對し常に白煙を吐きつゝあり。

●伊香保温泉 (上野)

草津と共に上州著名の温泉なり、市街は上の山と呼ぶ、榛名山脈の中腹に位す、此地海拔二千六百尺の高處にあり、南は山を負ひ、西は溪流に臨み北東に向つて展開せり、市街の人家は悉く峻崖に依つて作られ、層一層と階を上りて兩側に建て構へり、東西三町、南北四町に過ぎざるも夏時清涼なるを以て浴客甚だ多く、且つ附近山峰の眺望佳にして秋は紅葉の美觀あり、温泉は市街を距る西南約八町の二ツ嶽の山麓溪間なる吹上より涌出するものを合流して一溝とし寛を以て各温泉旅館の浴槽に導けり。

税所 敦子

いかは山うへなき御代のしるし
ありて雲井の月も宿りけるかな
因に、往時は黒髮山、舟尾山、二ツ嶽、水澤山まで總て伊香保嶺と云ひ、萬葉集にも伊香保嶺(イカホロ)と載せたり。

●御影の松 (上野)

澁川より西の方一里、即ち高崎より伊香保に至る道の右傍に在り、亭々たる一株の松樹天を衝いて聳てり、是れ明治十二年、英照皇太后陛下伊香保行啓の途次此の松樹の下に御野立あらせられたるを後ち里人此地を紀念として永久に坤徳を記さん爲め其節の供奉員萬里小路藤原博房に和歌を請ひ當時の群馬縣令棋取素彦の文を需めて共に之を石に刻し以て松樹の下に建設す、
博房 卿

芝中の松のやどりに千代かけて
残るは君が御影なりけり

●茂林寺及文福茶釜 (上野)

邑樂郡六郷村大字堀江に在り、古來文福茶釜の什寶あるを以て知らる、當寺は應仁二年の創立にして赤井正光の開基に係り大林正通禪師を以て開山とす、曹洞宗にして本尊は釋迦如來なり、文永二年密天正茂和尚の時勅願所となれり、境内二千九百五十六坪、總門、山門、本堂、方丈、開山堂、藥師堂、位牌堂、庫裡、寶庫、東司等廿餘棟あり。寺傳に據れば正通和尚嘗て榛名山下に於て守鶴と稱する一僧に逢ふ、守鶴切に侍僧たらん事を乞ふ儀、正通伴ふて歸り館林に地を下して一字を創建す即ち是れ茂林寺なり、其後大衆雲集したるが守鶴は自ら茶を煮て大衆に給するに茶釜の湯汲めども盡る事なし、一日守鶴午睡したるに正通其室に至り見れば何ぞ圓らん守鶴化して狸の姿となれり、正通大に驚きたるが默して其室を出づ守鶴覺めて大に愧ぢ、竟に寺を去れりと云ふ。文福茶釜は大き一と抱へあり紫金銅質にて當寺の什寶たり尙寺寶として明舜舉の牡丹畫、山水等を藏す。

●高山神社 (上野)

上州金山の麓、太田町に在り、是れ寛政年間の慷慨家高山彦九郎正之を祀れるものなり、神社は明治十二年十一月創建する所にして。當時明治天皇は彦九郎が勤王を追賞せられて「國の爲め心つくし高山のいさをも無くて果てしあはれさ」の御製を賜はりたり、社實には眞筆一軸、水器、烏帽子等あり。(因に云ふ、高山彦九郎の事は其終焉地なる筑後國久留米の條に於て記したれば茲に贅せず) 太田町は新田山南の一驛にして前橋を距る八里、足利を距る二里に在り、此地吞龍上人の寺院あるを以て著しく知らる高山神社は此の吞龍寺院(大光院)の北方なる金龍寺前面の丘上にて俗に天神丘と云ふ。彦九郎の生れし細谷村は太田より西南一里の所なり。

●新田神社 (上野)

新田郡新田山の絶頂にあり、太田市街を距る北の方三十町許なり、明治六年二月の創建に係る、即ち贈正一位新田左中将義貞朝臣を祀る、社格は縣社にして、朝廷特旨を以て別格官幣社に列せらる。神殿、拜殿、饗殿等の諸社殿あり、又社傍に日の池、月の池と稱する二池あり、梅櫻等諸木を栽へたれば四季の花の眺め有りて風趣を彩る、境内に御嶽神社、淺間神社、梅若稻荷神社、琴平神社等あり、祭典は毎年四月二十日と十一月二日の二回執行す。

因に云ふ、新田山は一名金山、又は松山と稱す、唐澤山と相連りて其南に峙つ、古來よりの名所にして萬葉集其他に詠詠少からず、山に躑躅多く初夏の眺め頗る美觀にして笈を曳くもの多く又秋は多く松茸を産するを以て遠近より茸狩に赴くもの尠からず。

●新田義重廟 (上野)

太田町なる大光院に在り、大光院は太田市街の北十餘町の所にして新田山の谷口なり、俗に新田寺と稱す。新田氏の祖大炊助義重の廟は、即ち本院に祀られ在るなり。寺傳に據れば新田義重は深く佛乘を信奉し圓光大師を渴仰して七堂伽藍の寺尾に創立せりと云ふ、然るに其後義貞王事に盡くして戦死するに及んで伽藍も亦焼失し僅に其礎石を有するのみとなり。

慶長年間徳川家康其祖先新田義重の舊跡を尋ねて此に一寺を創建せり。是れ現今の大光院なりとす。

●大光院 (上野)

俗に吞龍寺と云ふ、慶長年間、家康大光院を創建するに方りて増上寺の觀智國師専ら其事に與り、弟子吞龍に附與したるを以て吞龍即ち大光院の開基となれり然して幕府は田祿三百六十石を寄附し歴世官家より修理する事となせり、寺域は九千四百八十五坪餘、本堂、大書院、開山堂、小書院、庫裡、額堂、鐘樓堂、新田義重廟、吞龍廟等あり、本堂の前に一老松あり、臥龍と銘す、當寺に有名なる子育觀音ありて都人士の參詣する者多く終に子育吞龍を以て呼ばるゝに至れり。毎年四月八日、八、九の三日間吞龍の忌日法會を修し末寺三十箇寺の僧來會し賽入群集して頗る盛況を極む。

史を按ずるに、慶長十六年十一月九日家康徳川氏の祖先の位牌を搜索する爲め土井利勝成瀬隼人を添へて觀智國師を新田に趣かしめたるが其結果世良田の附近に於て瓦石佛等を發見し新田氏が古刹の址なるを確め乃ち寺を新田金山の麓に造立し大光院と號し、寺領を附し住僧には紫衣を賜へり。

●金山城址 (上野)

新田山に在り、即ち金山は古への新田の庄にして新田義貞の居城なりき。一説に依れば金山城は往時小野篁の遺營に係り其後新田氏歴代の城となりしと云ふ。新田氏の始祖義重以來、義貞に至るまで茲に居住したるが義貞に至りて一大修築を施したるも義貞中途にして戦歿し其工事を果すを得ざりしかば其孫貞貞之れを繼承して遂に竣成せりとぞ。

貞氏、永享中、足利將軍義教より上州守護職被仰付東上州七郡の領主となる、其子貞國、國繁、業繁、國經、康繁相繼ぎ金山城主たり、成繁に至りて姓を由良に改め刑部大輔と稱し、北條氏康、上杉謙信等と屢々戦ふ、天正十六年成繁の子小田原に拘留せられ、其結果遂に金山城を崩渡して桐生に引退し金山には小田原の家來清水上野介在番し、同十八年に至つて廢城せり。

●金龍寺、新田靈廟及木像 (上野)

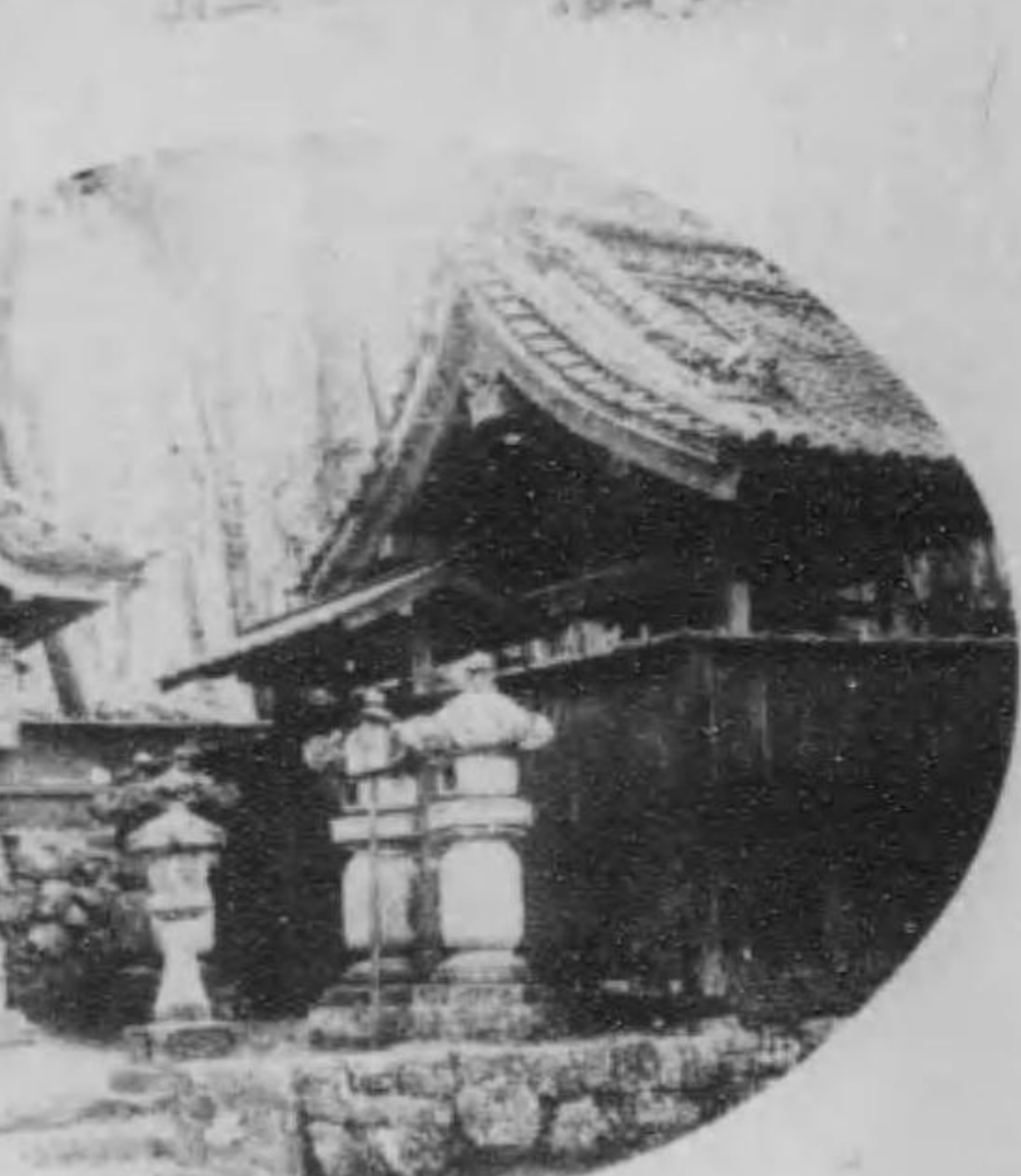
金龍寺は太田町大光院の北方に在り、亦是れ新田氏に因縁淺からざる寺刹にして、寺内に新田義貞の靈廟あり、又堂内に新田義貞の木像を安置す。當寺は應永五年横瀬貞貞の開基にして同廿四年義貞の遺骸を越前の足羽より茲に改葬し、諡して太田山金龍寺殿眞山了悟大禪定門と云ひ、大見禪龍を延いて開山となせり。堂の後方に新田義貞の墓と稱するものあり、其傍に數十基の墓碑累累として建つ、中には永正、永祿、天文年中のものあり。

慶長年中、横瀬國繁、當國を去つて常陸の牛久城に移るや、彼地の若柴村に同名の新寺を創建し名けて若柴金龍寺と稱せりと云ふ。

新田義貞像



高山神社



新田義重廟

開神社、梅若稻荷神社、奉本神社等あり
祭典は毎年四月二十日と十一月二日の二
回執行す。

因に云ふ、新田山は一名金山、又は松
山と稱す、唐澤山と相連りて其南に峙つ、
古來よりの名所にして萬葉集其他に詠詠
少からず、山に躑躅多く初夏の眺め頗る
美觀にして笥を曳くもの多く又秋は多く
松茸を産するを以て遠近より茸狩に赴く
もの尠からず。

法會を修し末寺三十箇寺の僧來會し賽人
群集して頗る盛況を極む。

史を按ずるに、慶長十六年十一月九日
家康徳川氏の祖先の位牌を搜索する爲め
土井利勝成瀬隼人を添へて觀智國師を新
田に趣かしめたるが其結果世良田の附近
に於て瓦石佛等を發見し新田氏が古刹の
址なるを確め乃ち寺を新田金山の麓に造
立し大光院と號し、寺領を附し住僧には
紫衣を賜へり。

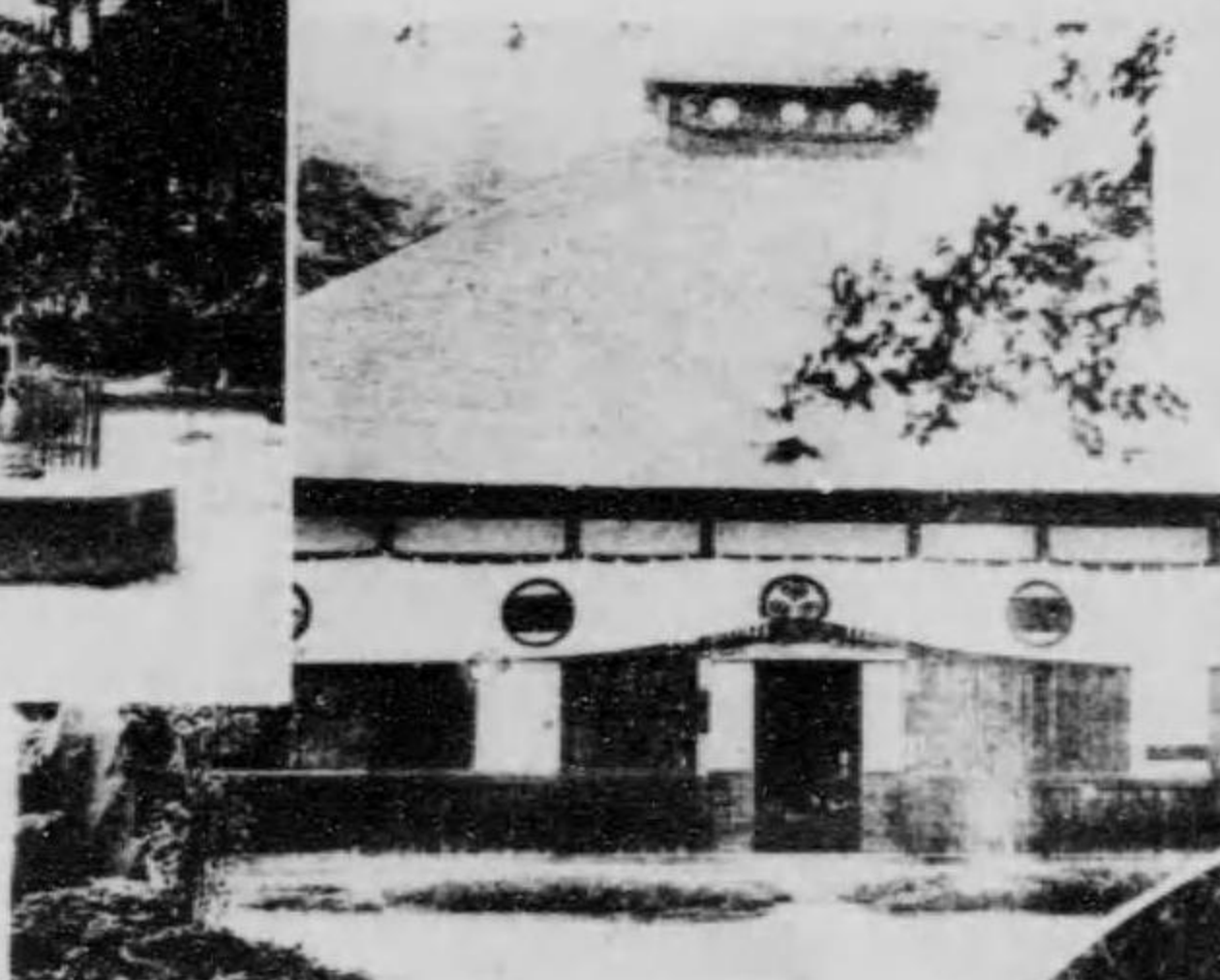
して太田山金龍寺殿眞山了悟大禪定門と
云ひ、大見禪龍を延いて開山となせり。
堂の後方に新田義貞の墓と稱するもの
在り、其傍に數十基の墓碑累々として建つ、
中には永正、永祿、天文年中のものもあ
り。

慶長年中、横瀬國繁、當國を去つて常
陸の牛久城に移るや、彼地の若柴村に同
名の新寺を創建し名けて若柴金龍寺と稱
せりと云ふ。

新田義貞像



新田靈殿



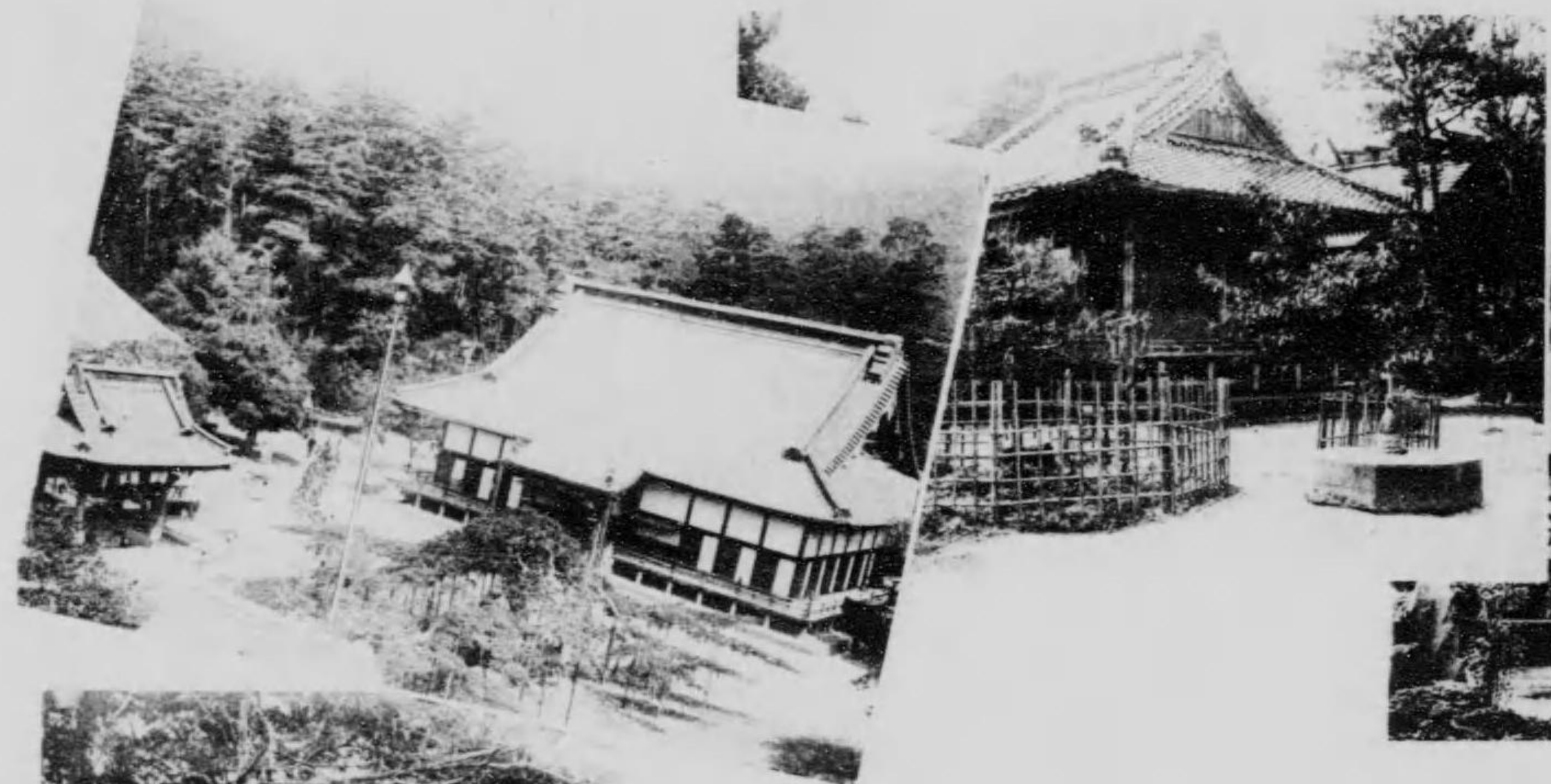
高山神社



新田義貞廟



新田神社



大光院



金山古城跡

日光唐門

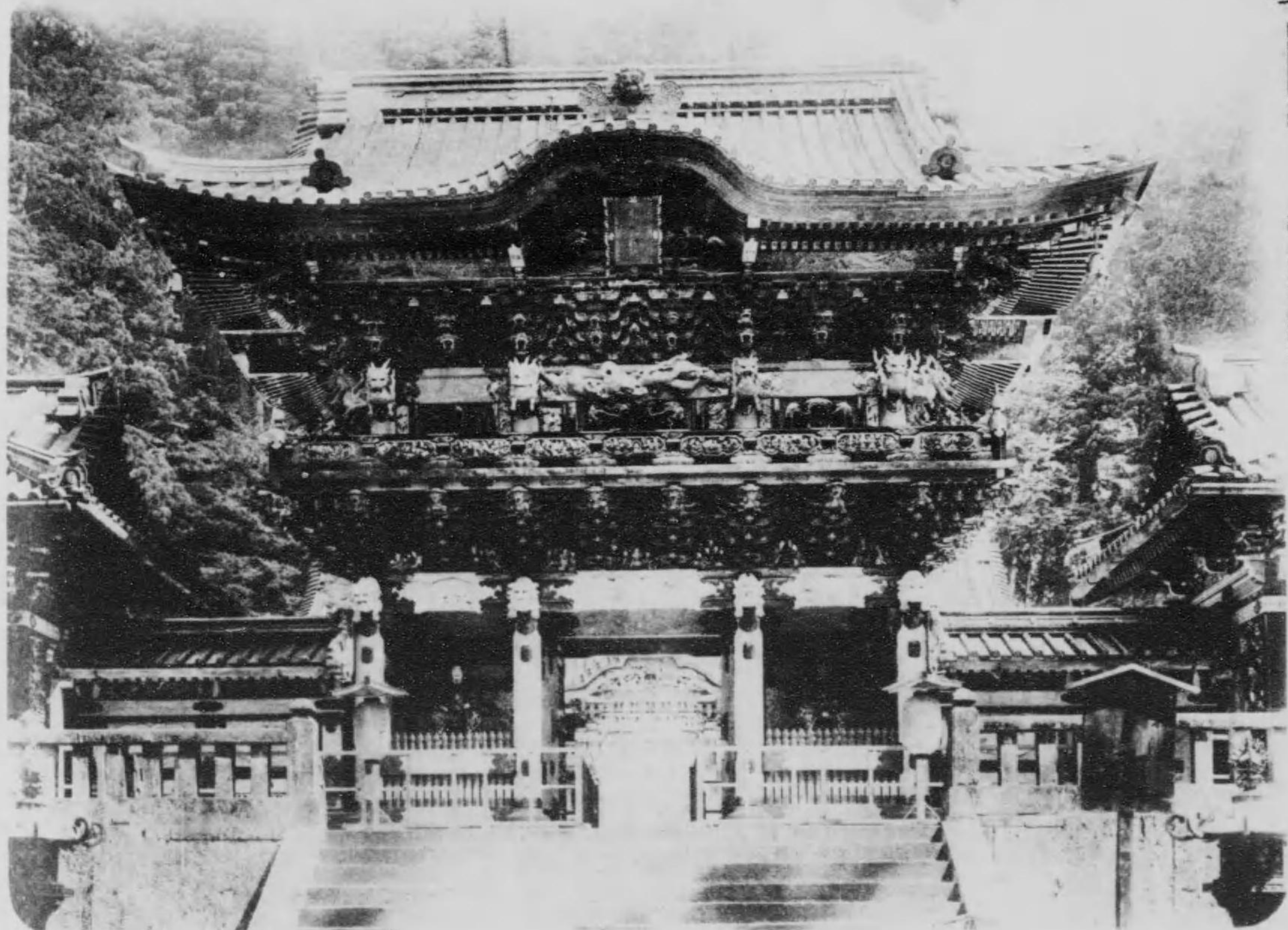


奥の門

神橋



御水屋



日光明門

●東照宮奥院廟 (下野)

日光山中の壯觀たる東照宮は亦天下の壯觀を以て稱さる『日光を觀されば結構を語るべからず』の意は蓋し此に存す。

家康病褥に在りて窈かに天海を招き

『吾れ死せば遺骸を久能山に葬り、一年の後更に日光山に改葬すべし』と遺命す、家

康死するに及で天海乃ち京師に上りて神

號の宣下を請ひ、元和三年三月十五日遺

此門は日本美術の粹を悉く茲に聚めたる如く終日之を觀るも飽くことを知らずとし、俗に之を日暮門と言ふ、門に樓あり、覆ふに銅瓦を以てし堅四間横四間、楣桁梁柱皆な采せず、細かに人物、鳥獸、花卉を彫り檐に金鈴を懸け、天井に昇降

二龍を畫く狩野元信の筆なり、其左右に

回廊あり是又悉く花鳥を刻し、精緻巧麗

洵に人目を眩す、此門を距る數十歩にし

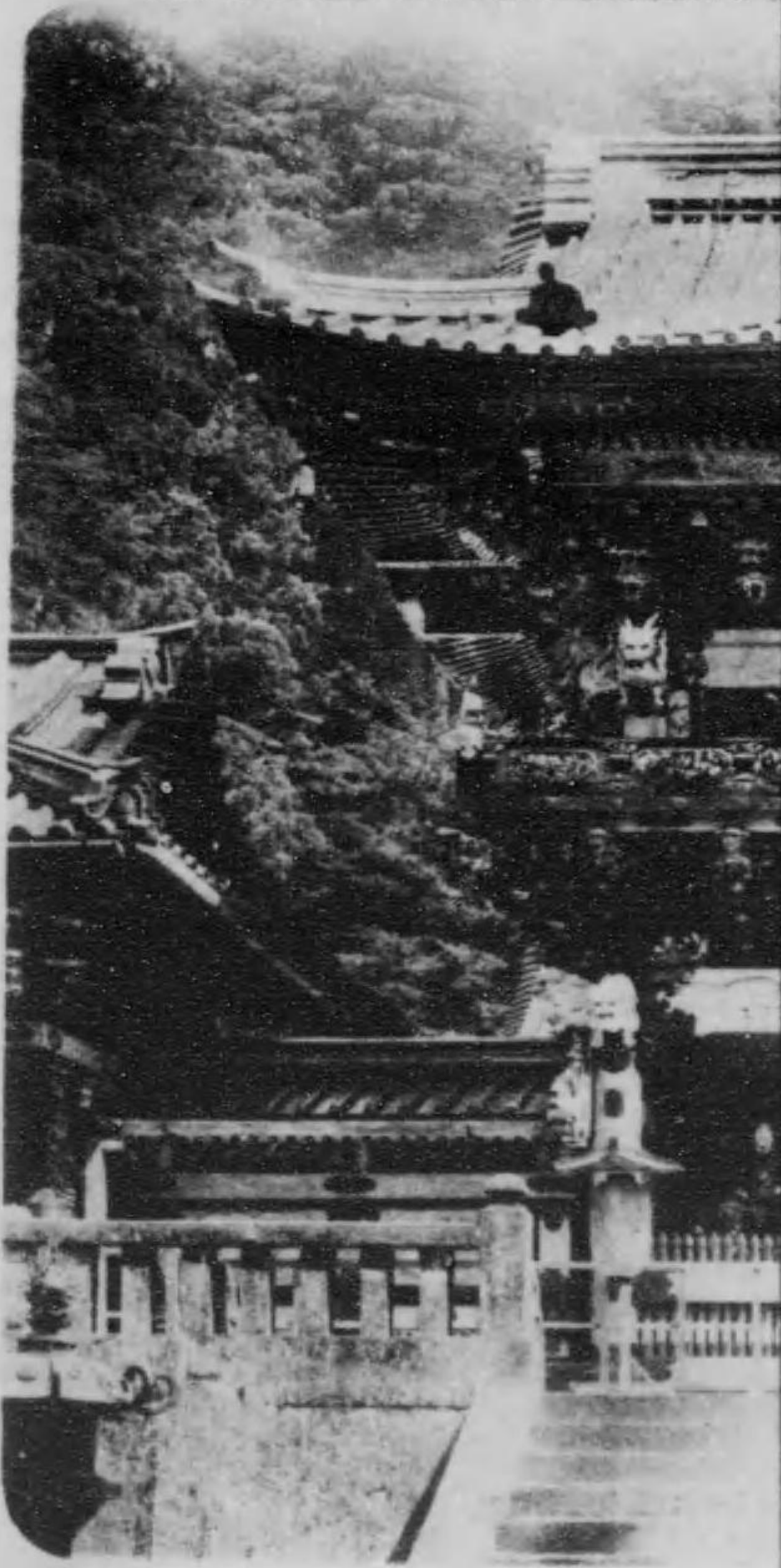
て又門あり、唐木を以て造れるが故に之

の猫を置く、傳へて名匠左甚五郎の眠猫と稱す、此を過ぎて阪下門を入り數百級

の石磴を躋れば中腹に内廟あり、青銅の華表を建て拜殿の背後に青銅擬寶珠形の寶塔を安んず、是れ家康の遺骨を歛むる所なり。

●三代の廟と仁王門 (下野)

徳川三代の將軍家光は慶安四年四月二十日を以て逝けり、是亦生存中遺骸を此



●東照宮奥院廟 (下野)

日光山中の壯觀たる東照宮は亦天下の壯觀を以て稱さる『日光を觀ざれば結構を語るべからず』の意は蓋し此に存す。

家康病癒に在りて窃かに天海を招き『吾れ死せば遺骸を久能山に葬り、一年の後更に日光山に改葬すべし』と遺命す、家康死するに及て天海乃ち京師に上りて神號の宣下を請ひ、元和三年三月十五日遺骸を柩に收めて久能山を發し四月四日光座神院に着、同十四日を以て假神殿に移せり、寛永十三年秋元泰朝に命じて神殿を改造せしむ、泰朝乃ち天下の良匠名工を集めて社を新築せしめ又諸侯の材料器物を献する者多く、幾ばくもなくして社殿成り神靈を此に徙し後、正保二年後光明天皇勅して東照大權現の神號を賜ふ

其表門に石の華表ありて後水尾天皇の宸筆『大照大權現』の匾額を掲ぐ、四基の巨石燈は其内にあり、舊二王門跡を經、左折すれば左に三神庫あり、皆な銅瓦葺朱、破風下に巨象二頭を刻み花鳥草卉丹青絢爛たり、之に隣りて神庇あり堅三間横五間強、素木造にして承塵の下に松竹牡丹を刻み、釘鉸總て金を鍍し承塵に葵の紋を附す、神庇と相距る數十歩其正面に巨石の洗手盤あり、長さ八尺五寸濶さ四尺餘、一の花崗石を穿ちて之を作り、四隅に石柱を建て屋を以て之を覆ふ『御水屋』之れなり、傍に燈籠百十八基あり、内銅十五、鐵二、石百一皆な諸藩主の寄獻に係る、水盤と相並びて輪及青銅の華表あり、玆より石階を登れば瑞垣の内は鼓樓鐘樓ありて左右に相對し朝鮮國より寄進せる蟲喰鐘、琉球より献せる連燈籠阿蘭國より贈りし廻燈籠等側に立ち、正面に向へば陽明門在り、

●陽明門 (下野)

【下野】

此門は日本美術の粹を悉く茲に聚めたる如く終日之を觀るも飽くことを知らずとし、俗に之を日暮門と言ふ、門に樓あり、覆ふに銅瓦を以てし堅四間横四間、楯桁梁柱皆な采せず、細かに人物、鳥獸、花卉を彫り擔に金鈴を懸け、天井に昇降二龍を畫く狩野元信の筆なり、其左右に回廊あり是又悉く花鳥を刻し、精緻巧麗洵に人目を眩す、此門を距る數十歩にして又門あり、唐木を以て造れるが故に之を唐門と稱す。

●唐門 (下野)

唐門は四方棟唐破造にして、屋上に銅製の恙の蟲を繋ぎ、外柱には昇降二龍を彫り、内柱の周圍に蟠龍獅子を鐫し、楯間破風等には孔子十哲並に七福神七賢人を刻む、天井に天女の彫像あり門扉亦唐木を用ひ、菊、牡丹、梅等を彫刻す、門を入れれば即ち拜殿にして桁行十二間二尺梁間四間五尺、中之間は六十三疊を敷き、楯間素木を用ひて風風を彫し、承塵に三十六歌仙の匾額を掲ぐ、之れ後水尾天皇の宸翰、畫は土佐將監の筆なり、殿の右室を聽問所と稱し左室を門主の休憩所と謂ひ、天井を劃して天女を彫刻し二室共に其隔板唐木を接合して花鳥を刻す、拜殿と本殿との間に石之間あり、登石を敷き屋を支ふるに四柱を以てす、即ち皆な堆朱にして一柱の費す所實に八萬兩と言ふ。

石之間の内本殿深く沈し梁欄間等には鳥獸草木を刻し、殿中に内殿空殿と唱ふる所あれ共之を窺ふを得ず、龜中東照宮神位及源賴朝豊臣秀吉の像を刻し、人の就て拜するを許さず、元輪王寺宮と雖も此に至る猶七日の齋を經るに非ざれば龜を開くことを得ざりしと言ふ、又唐門を出で、神樂殿と社務所との間を過ぎ瑞籬の傍に至れば門ありて、承塵の下に丸影

の額を置く、傳へて名匠左甚五郎の眠猫と稱す、此を過ぎて阪下門と入り數百級の石燈を躋れば中腹に内廟あり、青銅の華表を建て拜殿の背後に青銅擬寶珠形の寶塔を安んず、是れ家康の遺骨を歎むる所なり。

●三代の廟と仁王門 (下野)

徳川三代の將軍家光は慶安四年四月二十日を以て逝けり、是亦生存中遺骸を此に歎むべきことを遺命す、三代の廟を大猷院殿と言ふ、正面に仁王門あり悉く朱を施し、左右に那羅延金剛、密迹金剛を安んじ、裏に東照宮より移せる仁王を置、門を入りて左折すれば二天門あり、樓上勾欄擬寶珠には金を鍍し處々葵章を點す、此門は北に向ひ右に持國天左に廣目天を安置し、裏に風雷の二神を置く、其匾額は後光明門院の宸筆なり、階あり七十二級之を登れば瑞籬内に鼓樓鐘樓あり、其正面に夜叉門あり門は破風造にして桁梁亦金彩を施し、表に毘陀、提陀羅を安んじ、裏に烏摩羅、阿跋摩の二夜叉を置く。

門の左右に廻廊あり内に唐門あり鏤刻の精采畫の美亦言を俟たず、左右に長廊あり黒漆を以て塗り一周して拜殿本殿を圍む、拜殿は向拜附にして五級の階門あり、階は臘色の研出しにして勾欄には朱を施し、金を鍍す殿内に疊六十二席を敷き中央に金装の天蓋を懸け、佛具燈籠皆鍍金燦爛として目爲めに眩す、本殿は二重屋根にして方五間強、常に内扉を鎖しで人に見せしめず、之より再び唐門を出て廻廊に沿ひて右方の塀重門を過ぎ、更に包門を過ぎて磴を登れば皇嘉門あり、更に登れば奥の院拜殿に達し、背後に瑞籬を繞らし青銅の寶塔を建つ、之れ即ち家光の遺骸を葬れる所にして塔の形略は家康の寶塔と相似たり。

●中禪寺湖 (下野)

中禪寺は元神宮寺の法號なりしを後、地名となれり、中禪寺湖は東西二里南北三十町周回五里餘にして湖畔に中宮祠あり、水面一碧峰巒之を圍み、風光の絶佳なる箱根蘆之湖と相匹敵す、又別に南湖八功德池、雪浪湖とも言ふ、水極めて清澄且つ一點の塵芥なきより、元は鱗蟲此に棲ますと言ひしが、維新後鯉、嘉魚、鮭、鱈等の魚種數萬尾を放ち其生否を檢せしに漸次繁殖して今や山上第一の漁場となれり。

中禪寺湖邊は往昔女人禁制の地域にして、齋戒登山の結界たりしかば、屋舎を禪頂小屋と呼びしが、今は結界の風習全然撤廢せられて、北涯なる神祠の前頭には幾多館舎の設備ありて遊客を俟つ。

●華嚴の瀧 (下野)

晃山七十二瀑中の魁を以て聞ゆる華嚴瀧は、不動坂より中禪寺、大平に至る路邊より南にあり。即ち大谷川の源にして大湖の水、懸崖を瀉下して一大壯觀を爲す。華嚴瀧に至るには神橋より中禪寺道に就き清瀧觀音堂の側らを過ぎ牛玉坂を登れば馬返村に達す、此處より坂路漸く峻しく深澤の茶屋を過ぎ數町にして劔ヶ峰に至る。此所中禪寺道第一の峻道にして其危きこと白刃を渡るが如し。

磐を隔て、遙かに法幢般若の二瀑を望み、大平より四五町忽ち轉じて左折すれば華嚴瀧の前に出づ、神橋より茲まで凡そ三里、瀑は大なる中禪寺湖より落ち大谷川に注ぐものにして、直下七十五丈幅八間餘、其下は人跡の能く到る所にあらざる瀑の東方約三十間を隔て、懸崖に斗出せる危巖あり、蘿に縋りて磐上に降り、頭を延べて僅かに其水勢を俯瞰するを得るのみ、岩巖と稱する小島あり水廻を絞つ

て飛翔し、水聲は鞞轆として近づけば耳聾せんとす、傍らに一碑立つ其勅時左の如し。

小野 湖山

晃山勝槩甲天下 華嚴瀑布冠晃山 偉哉造物工夫作巖壑 更作大湖漚 其間 湖缺一隅如天缺 水勢奔飛 大瀑懸 一落千丈又萬丈 怒號撼 地雷震 是水非水雪非雪 亂爲 珠玉散爲烟 山日倒射溪風激 使人耳聾目眩心膽寒 壯則如孟軻 直養之氣質天地古今 快則如項羽 鉅鹿之戰賊人馬萬千 不數廬岳天台勝 斷爲宇內真大觀 嗚呼謫仙 逝矣仙才絕 欲敢題詩原厚顏 我聞佛有諸宗華嚴居第一 乃以名瀑 非偶然

●巖頭の感 (下野)

萬有の真相は不可解也として、身を華嚴の瀧に投せる藤村操が當年大樹を削り之に書せる所謂「巖頭之感」なるものは、悠悠たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小艇を以て此大を測らんとす。ホレーショの哲學竟に何等のオーソリチーを價するものぞ、萬有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」我此恨を懷て煩悶終に死を決す、既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし、始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。の數行なりき、是れ實に明治三十六年六月にして、當時彼れの叔父那珂文學博士は「余の如き樂天主義の甥に如何なれば斯る極端の厭世家を生じたるか」と言へり。

●含滿ヶ淵 (下野)

含滿ヶ淵は日光西町の西南にして、大谷川右岸の總橋なり、即ち大谷川の水此

に流れて深潭を爲せるに因る。

兩岸の水涯に絶壁の如き奇岩水際より現れ、臥すものは虎の如く、起つものは豹の如く磊落極まりなく急湍其間を注射す、中に巨巖あり北岸に屹峙し其勢ひ鬼斧の劃するに似たり。巖上に不動の石像を安んず、巖下の碧水盤渦して潭底測り知り難し、一岩横九尺餘際七尺の平面に「憾合」の梵字あり、之を弘法の投筆と呼ぶ、左岸に石佛數百軀を列し遠く之を望めば兵士の隊を組みて整列するが如し溪上に護摩壇あり、圓柱の四阿屋にして靈庇閣と言ふ。

●二荒神社 (下野)

東照宮表門を過ぎ新馬場を経て西二町餘の地に鎮座する二荒神社は、國幣中社にして大己貴命を祭神とす。

始めは新宮權現と稱し僧勝道の草創に係り爾後遷移一ならず、建保以降兵亂相接ぎ、祠宇殆ど頽廢に歸せしを、東照宮遷座後徳川家光本社を改造せしめ大に其美觀を増す、東に向ひて青銅の華表あり其裡に神庫、舞樂殿あり、拜殿は間口七間奥行四間半、總朱塗にして正面に唐門あり、唐門の内は即ち本殿なり、殿は八棟造り濱椽向拜付き總朱塗にして、楣間には鳥獸花卉を刻し施すに五彩を以てす

●眠り猫 (下野)

名匠左甚五郎作と傳ふる「眠り猫」の彫刻物は別項興院廟に記せる如く、所謂猫の門蛙股の間に置けるものなり。

●裏見の瀧 (下野)

日光神橋より西南一里餘字荒澤に在り瀑は惟巖の突出せる上より落下し、其高十丈餘幅二間を超ゆ、左右に二小瀑あり、相生瀧、布引瀧と言ふ、壯觀は瀧の背面よりするを最とす裏見の瀧の名は故に存す



藤村操筆



る、大平より四五町忽ち轉じて左折すれば華嚴瀑の前に出づ、神橋より茲まで凡そ三里、瀑は大なる中禪寺湖より落ち大谷川に注ぐものにして、直下七十五丈幅八間餘、其下は人跡の能く到る所にあらず瀑の東方約三十間を隔て、懸崖に斗出せる危巖あり、蘿に縋りて磐上に降り、頭を延べて僅かに其水勢を俯瞰するを得るのみ。岩燕と稱する小島あり水煙を破つ

の數行なりき、是れ實に明治三十六年六月にして、當時彼れの叔父那珂文學博士は『余の如き樂天主義の甥に如何なれば斯る極端の厭世家を生じたるか』と言へり。

●含滿ヶ淵 (下野)

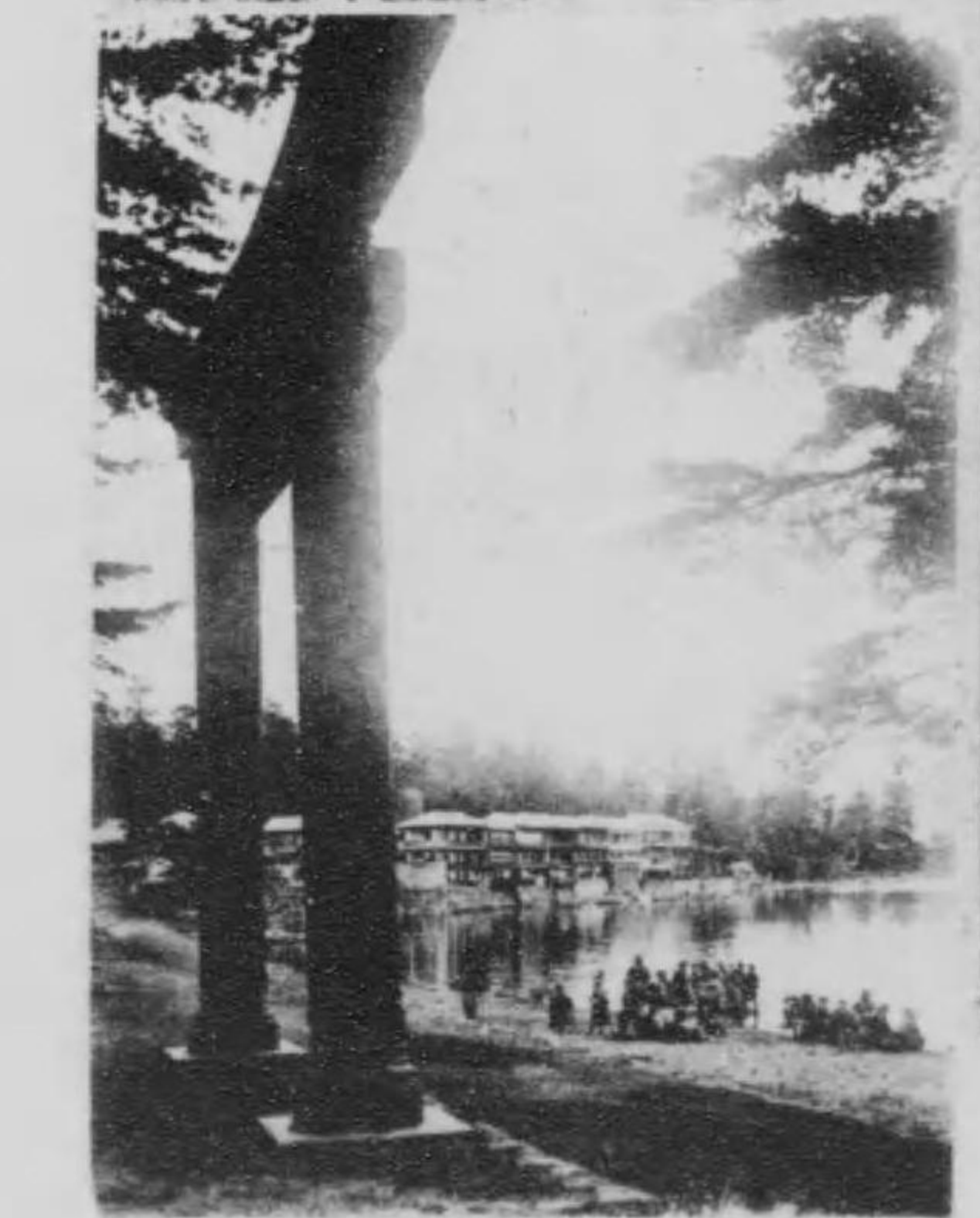
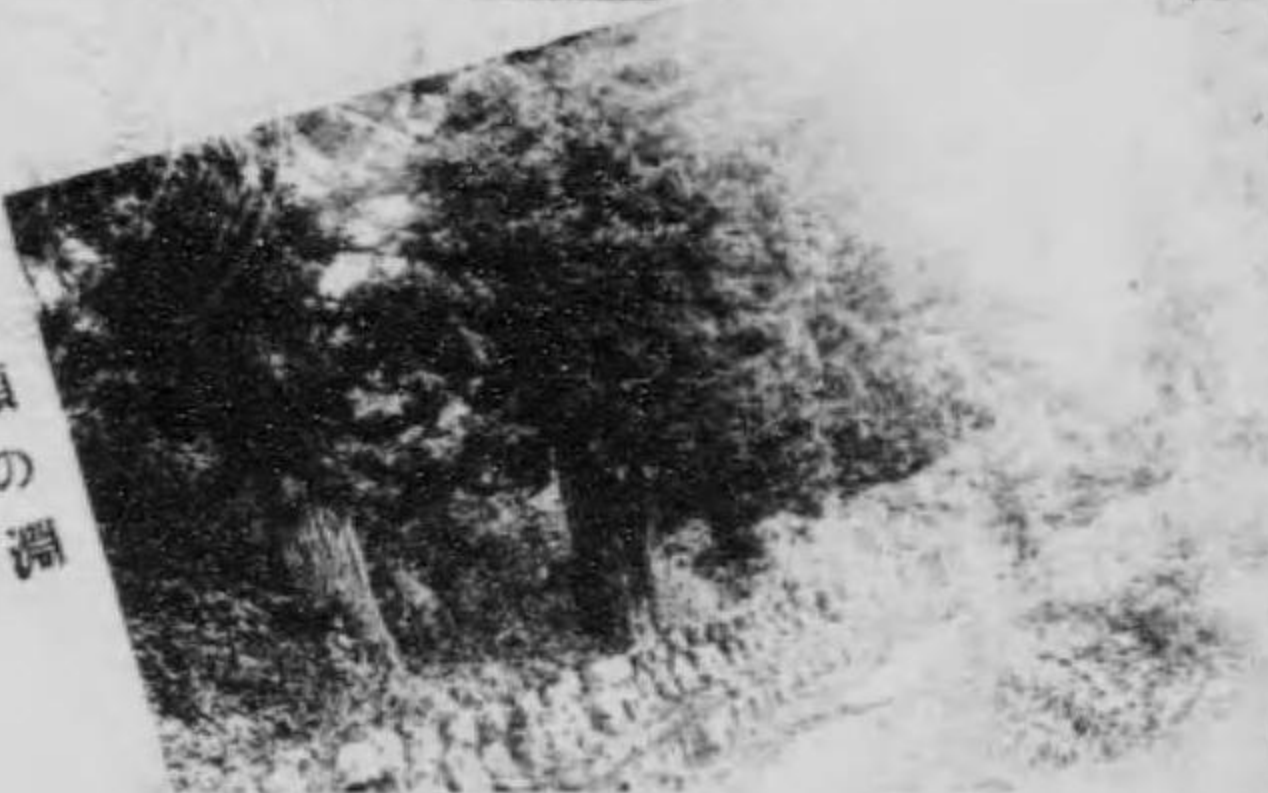
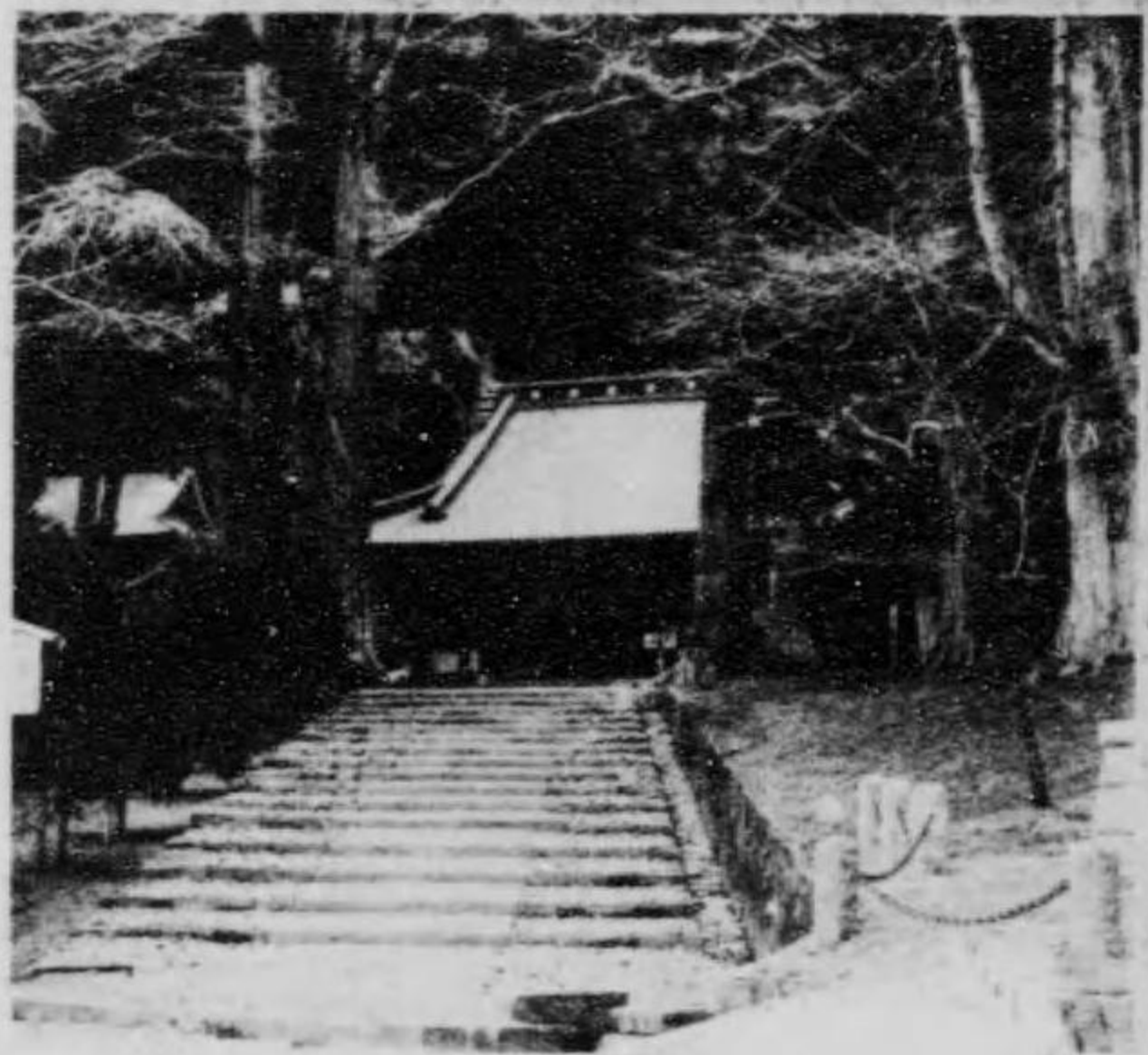
含滿ヶ淵は日光西町の西南にして、大谷川右岸の總稱なり、即ち大谷川の水此

●裏見の瀧 (下野)

日光神橋より西南一里餘宇荒澤に在り瀑は危巖の突出せる上より落下し、其高十丈餘幅二間を超ゆ、左右に二小瀑あり、相生瀧、布引瀧と言ふ、壯觀は瀧の背面よりするを最とす裏見の瀧の名は茲に存す



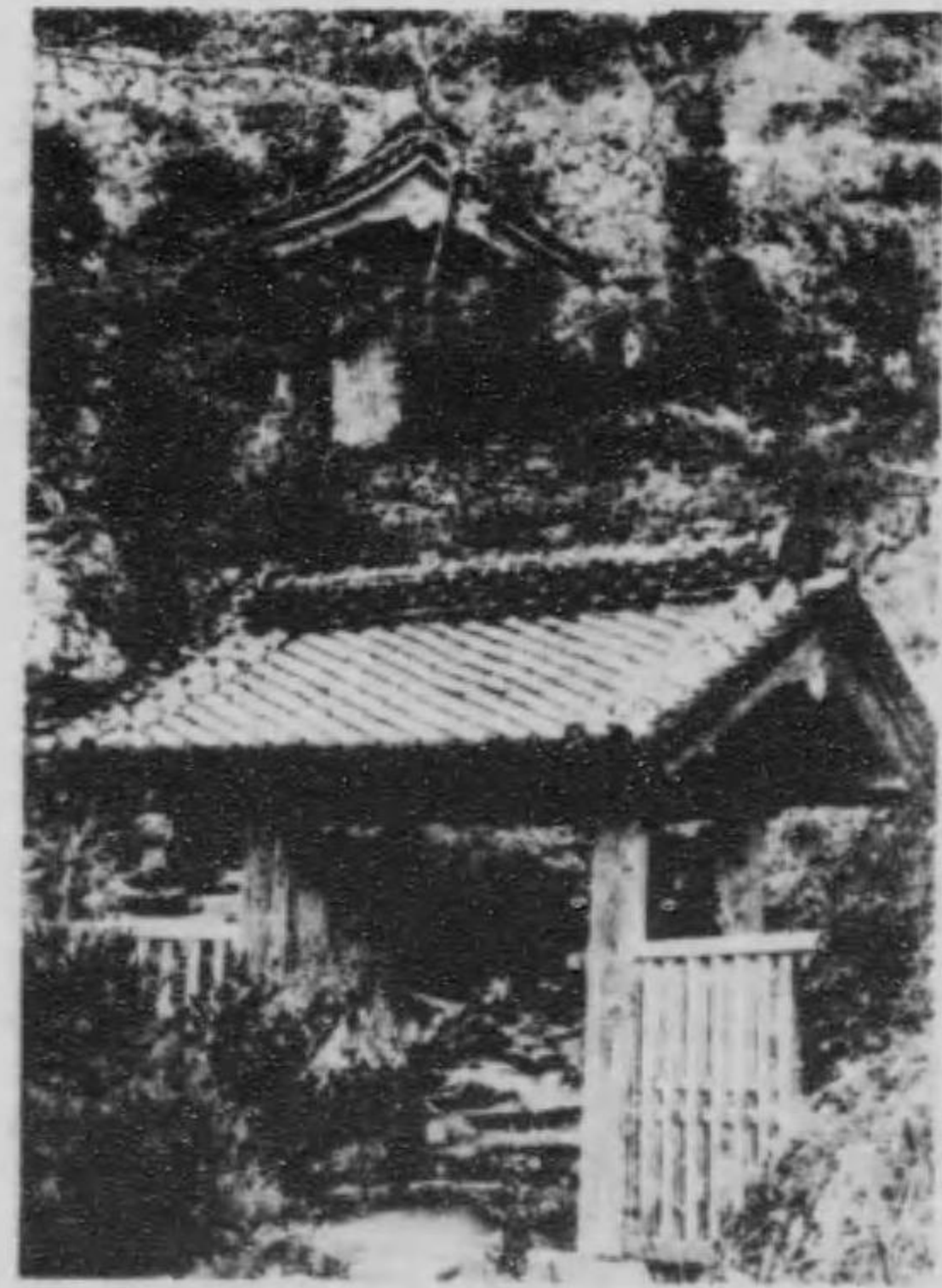
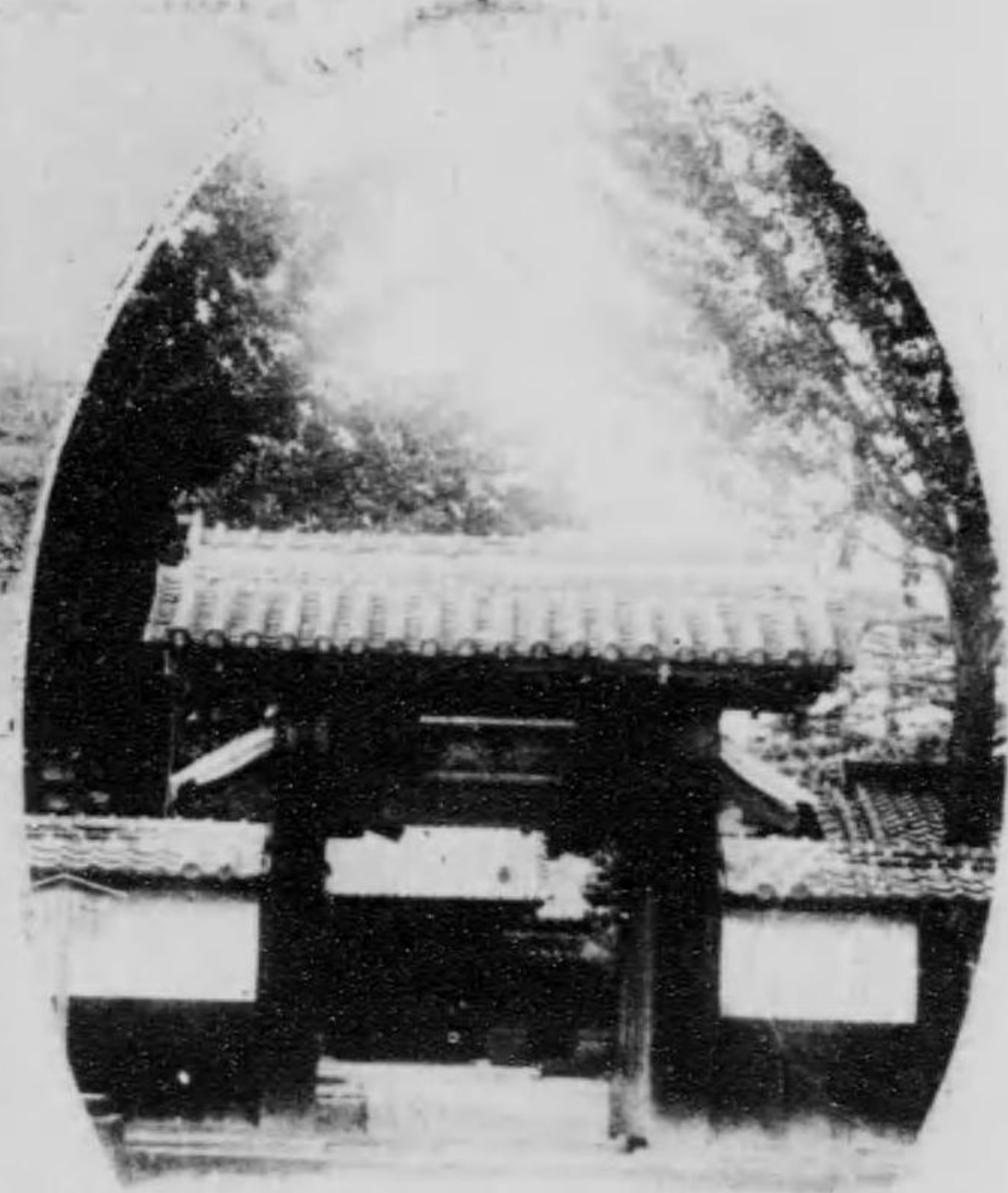
華嚴の瀧



中禪寺湖

瀧の端

足利學校

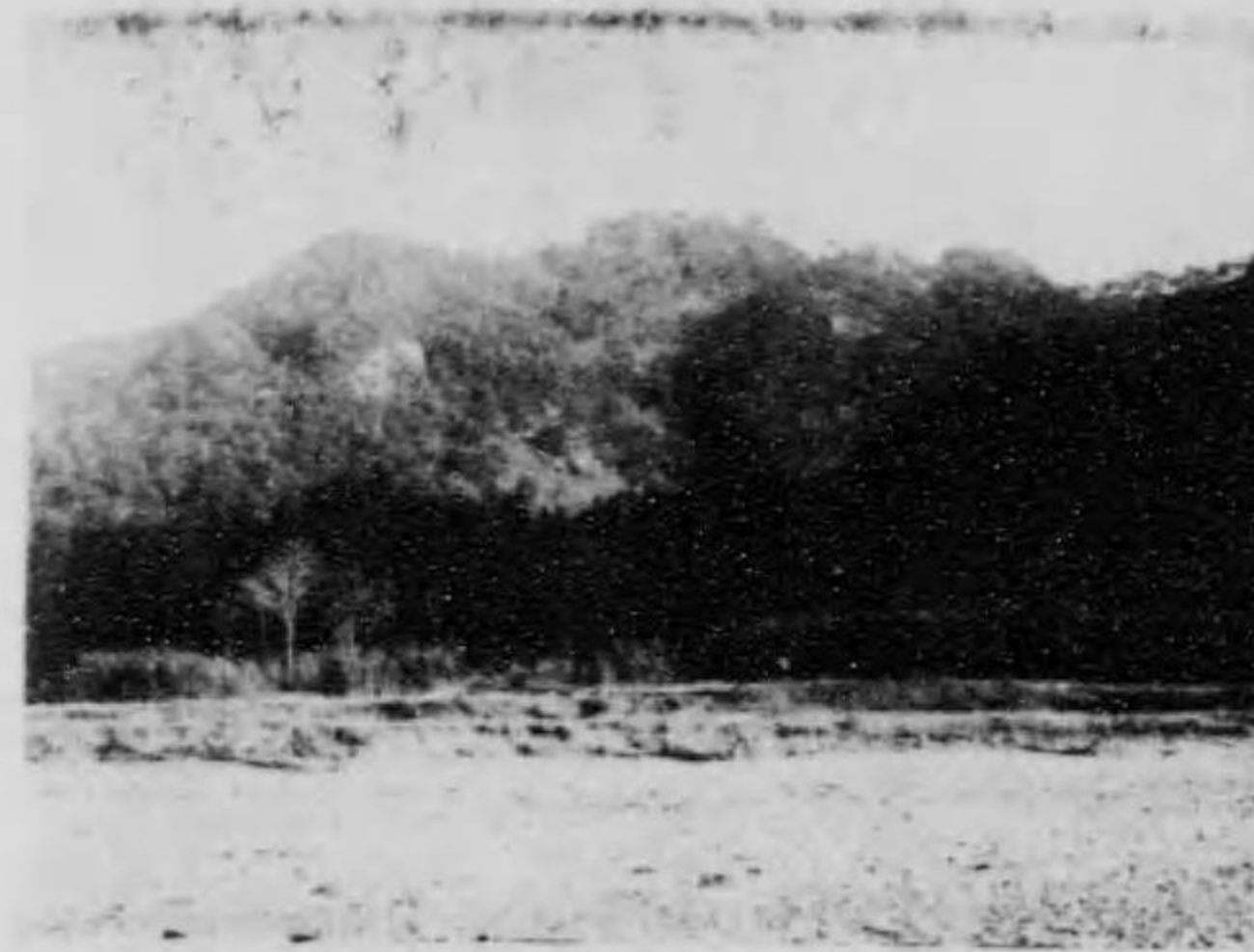


行道山の一門の二門

唐澤山神社



唐澤山全景



●唐澤山神社 (下野)

往昔藤原秀郷居城の地として名ある唐澤山は、田沼町大字栃木と大伏町大字富士の間に在り、佐野驛より北一里三十町登路二あり一は佐野より大伏町市街を過ぎ、一の華表より左折して野徑に就き富士村を経て山に入る、一は佐野鐵道の線路に沿ひ、字吉水より右折して坂路に就

山中巖壁聳峙し阪路崎嶇として齊り昇

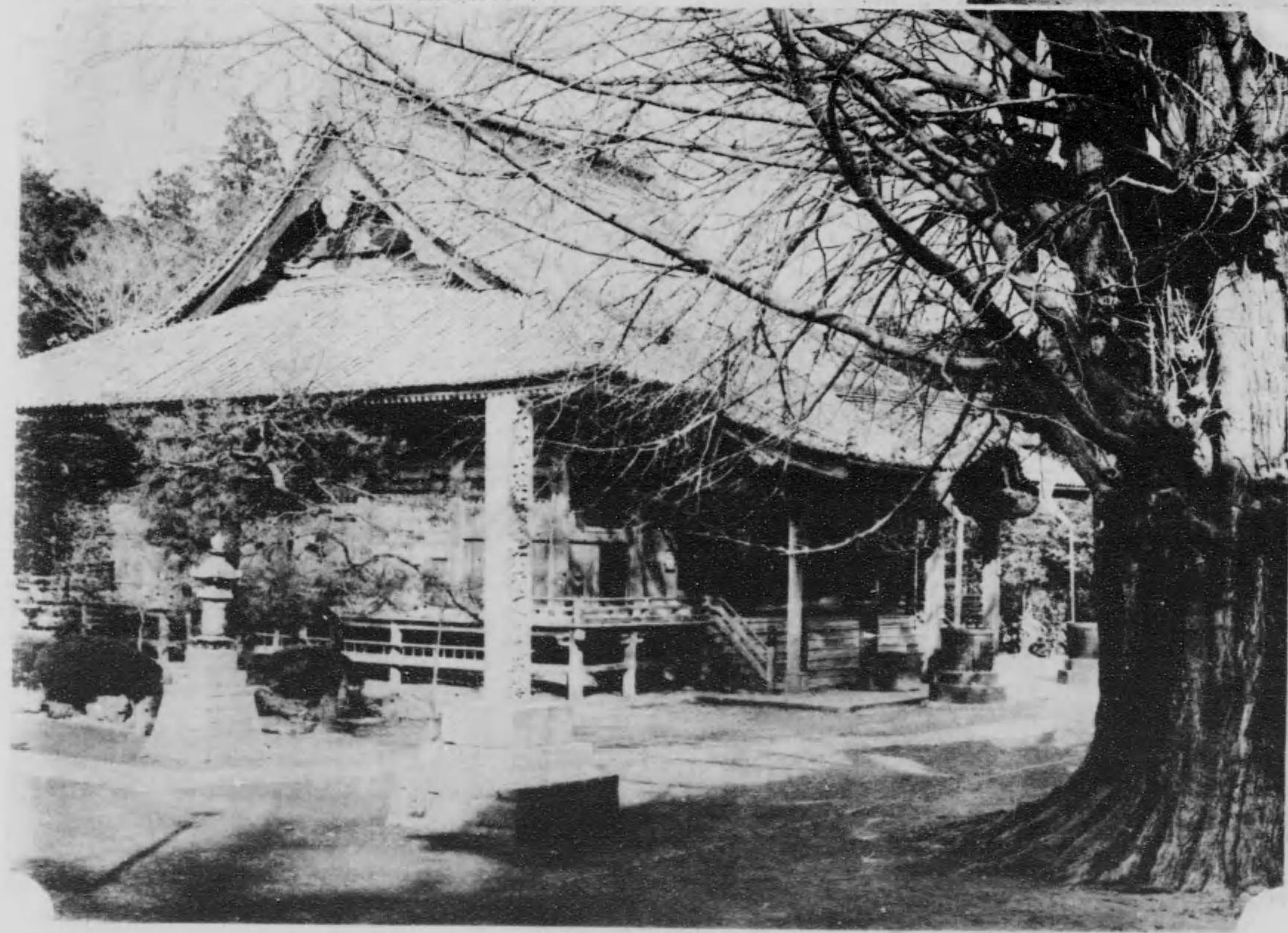
からざるも風色殊に幽遠、其山頂に至れば四顧洞達、俯して八州の野を遠望すべく、山の直立凡そ一千二百尺、麓には雌雄の小瀑布ありて優に萬斛の盛熱を一洗し盡すべし、關東有数の靈刹たる淨因寺は此山頂にあり、淨土宗にして其堂宇頗る壯麗、阿彌陀如來を本尊とす、寺門の如き構造の精緻を以て著れ、一の門二の門

後世は尾氏世々此地を領し、後、戸田忠

利之を領して子孫に傳へ、明治維新に至り終に廢城となれり、今ま城址として見るべきものなし、唯だ地、其物を存するのみ。

●鍔阿寺 (下野)

足利町の北裏にあり、俗に大日如來と呼ぶ、眞言宗の檀林にして、金剛山と號し足利上總介義兼の創建なり。



鍔阿寺



●唐澤山神社 (下野)

往昔藤原秀郷居城の地として名ある唐澤山は、田沼町大字朽木と大伏町大字富士の間に在り、佐野驛より北一里三十町登路二あり一は佐野より大伏町市街を過ぎ、一の華表より左折して野徑に就き富士村を経て山に入る、一は佐野鐵道の線路に沿ひ、字吉水より右折して坂路に就く。

山は關東平野の北隅に位し、一丘陵の隆起せるに過ぎずと雖も、前面諸峰の遮蔽するものなく頗る展望に富む、神社は其山頂に鎮座す、明治十八年の創建にして別格官幣社なり、此所より眺望すれば房總ヶ雲外に望み豆相を天末に瞻る、駿嶽南に揖し常峰東に拱し武甲信誓二毛の諸山羅列して眼前にあり、岩船、三毒、丘の如く埒の如く左右に踞伏し地形は鼓岩前に欹ち螺丘後に竦へ、一面は土阜群松儼々として駢次し、一面は石崖峻嶮落落々として突起す、近傍の遺蹟としては秀郷壘城の故址たる吉水の若宮八幡、其靈牌を存する朽木の本光寺、鐘を記れる根古屋神社等あり、而して秀郷の舍せる石窟なるもの蓬山の奥に存す、其屋形天造鬼窟に成り哈呀數人を容るべし、此他藤四の館藤五の淵歴々として其蹤を徴するに足る、蓬山は幽邃にして唐澤山の敞豁なると同じからず、淵に沿ふて奇岩怪石點在し、飛泉あり激湍あり、瀾瀾ぎ淵承け餘流相會せるもの旗川となり、山中の四峰之を蓬萊と稱す、其西の一峰は層巖巒然、水其下を環り標渺として仙境の觀あり。

●行道山淨因寺 (下野)

行道山は足利郡北郷村大字月谷にあり足利町より同村菅澤まで一里餘、それより猶登ること三十町にして達す。

山中巖壁聳峙し阪路崎嶇として齊り昇からざるも風色殊に幽邃、其山頂に至れば四顧洞達、俯して八州の野を遠望すべく、山の直立凡そ一千二百尺、麓には雄の小瀑布ありて優に萬斛の塵熱を一洗し盡すべし、關東有數の靈刹たる淨因寺は此山頂にあり、淨土宗にして其堂宇頗る壯麗、阿彌陀如來を本尊とす、寺門の如き構造の精緻を以て著れ、一の門二の門殊に觀るべきものとして傳はる。

●足利學校 (下野)

校は足利町の北にあり、淳和天皇の天長年間小野篁の創建なりと言ひ、或は上古國學の遺制と言ひ、又は足利義兼の建設する所なりと言ひ、諸説區々にして分明ならず、爾後細衰へてより學政も亦隨て廢絶せしが、永享年間上杉憲實此校を再興し、鎌倉圓覺寺の僧快元を以て庠主とし、宋版の五經注疏を彼邦より購求し其他古書若干部を備へて大に文學を振興せり、之より細流の管する所となり、代々江戸金地院に屬し、徳川氏の時學田藩主戸田氏に校務を委任し、廢藩置縣の時朽木縣の管有となり、足利町の有志者を選びて保護員とし衆庶をして自由に藏書を閱覽せしむ、校内に孔子の像あり高三尺餘、左に思子、孟子右に曾子、顔子の木牌を置き、左方の一室に小野篁の像あり、今は地を割き小學校を置く、此校の事は山吹日記、柳庵隨筆等に詳かなり。

因に足利城址は同町西北の山上にあり天喜年間足利成行始めて此に城を築孫家綱女性凶害によりて遂に足利庄の領主を罷められ城を新田義軍に賜ふ家綱の孫又太郎忠綱に至り平家滅亡せしを以て彦間の山中峽澤に潛居し遂に自及して死す、後、足利義康の有となり、子孫世襲し八世尊氏此地より勃興して天下を横行す、

後世に足利氏世々此地を領し、後、戸田忠利之を領して子孫に傳へ、明治維新に至り終に廢城となれり、今ま城址として見るべきものなし、唯だ地、其物を存するのみ。

●鍔阿寺 (下野)

足利町の北裏にあり、俗に大日如來と呼ぶ、眞言宗の檀林にして、金剛山と號し足利上總介義兼の創建なり。

當寺は往古足利の別業と稱し、鎮守府將軍源義家下野守たりし時、之を足利庄に置き、其三男にして新田氏及足利氏の祖たる義國始めて此に居る、其子陸奥守判官義康父の後を承け氏を足利と稱し鳥羽上皇に仕へて昇殿を許され、其子上總介義兼八條院藏人となり、北條氏を娶りて左馬頭義氏を生む、頼朝の伊豆に起るや往て之を佐け、文治四年構内に持佛堂を建て伊豆の理眞上人を護持僧と爲し、建久六年其室時子の死に遭ひ翌年入道して義稱と號し、源姓數代の居城たりし別業の一部を割き、此に七堂伽藍を草創して源家相傳の大日如來を本尊とす、爾來七百五十有餘年の星霜を経たるも曾て天災地變の侵す所とならず、塔宇堂構依然として舊觀を失はず。

而して當寺は曾て勸願所たりしかば其建造物及什寶等保存すべきもの多く、明治廿五年内務省は特に保存金を下附し同四十一年八月に至り其堂宇は特別保護建造物に編入せらる。又大正三年八月廿五日を以て國寶となれる青磁の花瓶壹對及香爐一個は足利義滿の寄進に係るものなり、明治四十二年特別大演習の朽木縣に舉行せられたる時、先帝陛下には當寺に臨ませられ所藏の什寶を天覽あらせられたり、當寺の什寶は其數幾千なるやを知るべからず、殊に最も珍らしきものは目通り三十五尺餘高さ八十尺餘の大銀杏樹なりとす。

● 塩原温泉 (下野)

塩原温泉は西那須野驛より五里半を隔つ。荒涼たる那須野を過ること三里にして關屋村に出づ、更に歩を進むれば麓て一步に一景を生ずる山に入る、前きに箒川の清流に俗塵を洗へるもの、茲に又急瀬の奔湍を眺め清溪の深潭に臨む、心神自ら爽快となり些の疲憊を覺ゆるなし、仙髻、聯珠、猿聲、留春等の小瀑布に迎送せられて鹽原山の麓に達するも、温泉區域廣くして其何れへ行くべきかに感ふ。

曰く上鹽原、曰く中鹽原、曰く下鹽原曰く湯本鹽原の四ヶ村に散在する温泉場中、下鹽原には大綱、福渡戸、鹽釜、鹽の湯、畑下戸、門前、古町等多くの温泉あり、大綱温泉は箒川の深谷に湧出し溪間、浴槽を設く、之より溪流に沿ふて二十町進める所を福渡戸と言ふ、更に官心て右折すること七八町にして鹽釜に達す此温泉より西南十町餘の所に湯の鹽温泉ありて仙人崖、城山、紅巖澤、松鉢澤等の勝地點在す、畑下戸を経て門前温泉に至れば此所は人家軒を列ねて最も般賑なり、小松内府重盛の叔母妙雲尼の齋蹟と傳へらる、妙雲寺は今猶存す、箒川を隔て、門前と相對するは古町温泉にして、其間に架せる蓬萊橋なる大鐵橋は恰も長虹の如し、不動の湯、中の湯、中山の湯、角の湯、瀧の湯、御所の湯等あり小瀑布亦到る處に多く舊蹟も少なからず、門前より箒川を渡り山路を登れば須卷温泉あり、喜十六山の半腹なり。

故紅葉山人の作中に「西那須野驛より直に西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野に入れば、天は濶く、地は退かに、唯平蕪の迷ひ、斷雲の飛ぶのみにて、三星の坦途、一帶の重巒、鹽原は其所ぞと見えて行くほどに路は窮まらず」云々

又曰く「回顧橋に三十尺の飛瀑を踏み、山中の景は始めて奇なり、之より行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋、山あれば巖あり巖あれば必ず瀑あり、全溪にして七十瀑地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯、猶數ふれば十二勝十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき、抑も此所の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に折る、片組の四里に岐れ、十一里に亘りて到る處巖巖の水を挾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり」と此一節以て鹽原の全態を盡せり。

● 塩原の逆杉 (下野)

鹽原七不思議の一に數へらる、逆杉なるものは、字中鹽原小田ヶ市を少し離れたる八幡神社内にあり、二株の老杉にして周圍共に四丈を超ゆ、枝は垂れて地を掠めんとす、其幾百年を経たるを知らず。

● 殺生石 (下野)

址は那須郡湯本村にあり、玉藻前の物語と、源翁和尚得度の事は普く世人の知る所、和漢三才圖會に其事を記して曰く「近衛帝久壽參年中、一夕宮中管絃之夜、燭滅、時帝寵妃玉藻前、身放光、帝自是不豫、安部易成卜之曰、是玉藻前所爲也于時玉藻化狐、逃東國、因詔三浦介義明千葉介常胤、上總介廣常、馳無狐下野國那須野、義明射殺之、爾後百年餘、狐靈爲石、世俗曰殺生石、觸其石則鳥獸人民皆死、後深草帝實治年中詔傳源翁、源翁到石傍、題偈舉植扶卑一下、石忽破碎、其夜一女子現、謝禱曰、妃得淨戒先天、言訖沒矣」其偶なるものは「法々塵々端底、本來面目未曾識、現案公大難事、異類中行任意量」云々、石は今地中に埋没し

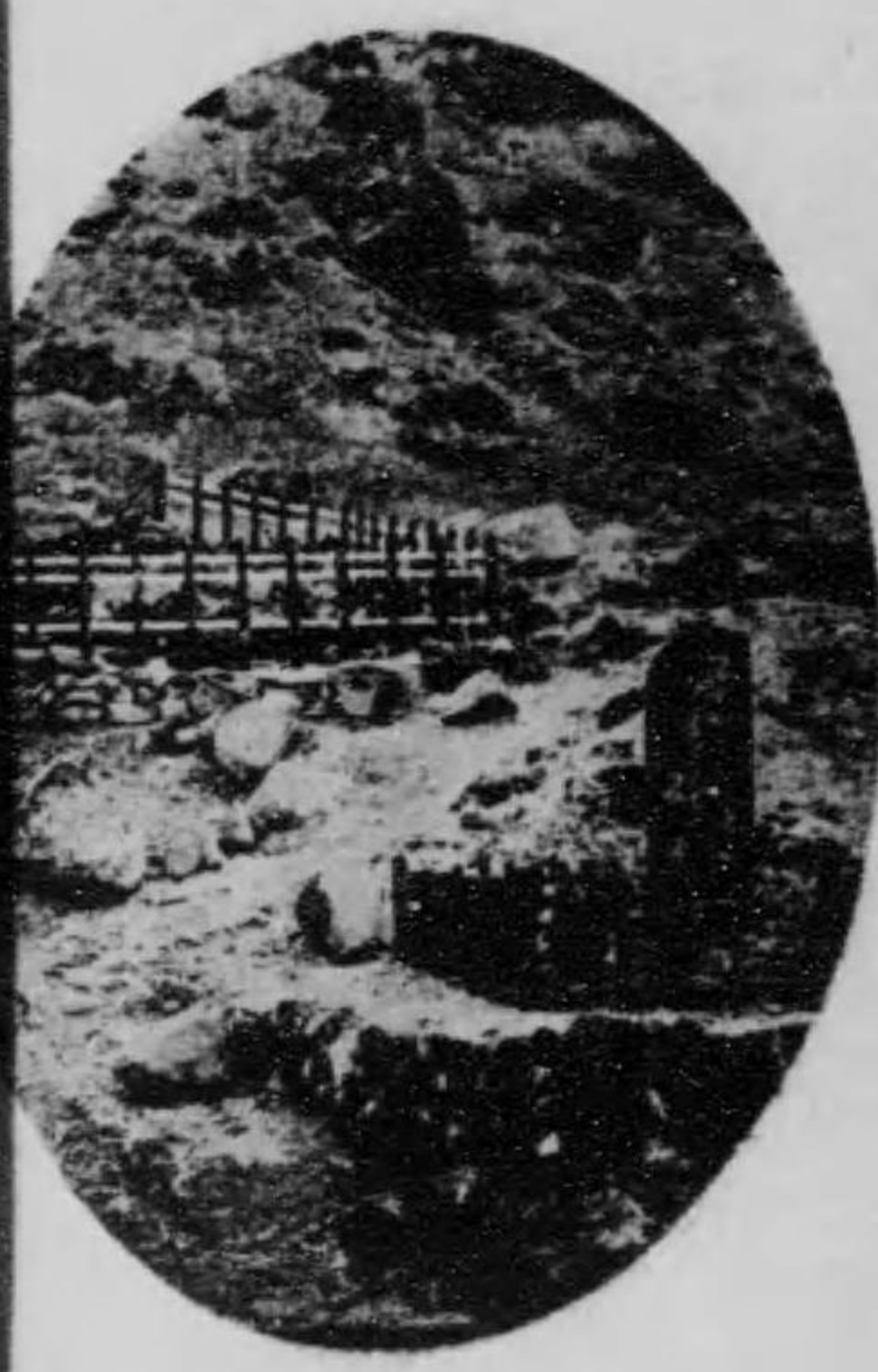
たれ共、近傍一種の臭氣を漂らして呼吸を塞するが如き心地を起さしむ、或は之れ炭酸噴汽孔に類するものならんと、此殺生石に關係ある源翁和尚墓と稱するも鳥山町泉溪寺に在り、果して眞なるや。

● 温泉神社 (下野)

神社は亦湯本村に鎮座す、祭神は大己貴命少彦名命の二神にして相殿に譽田別命を祭る、平家物語那須與一扇の射る條に「歸命頂禮八幡大菩薩、日本國中大小神祇、別しては下野國那須大明神、弓矢の冥加あるべくば、扇を座席に定めたまへ、源氏の運も極まり家の果報も盡くべくは、矢も放たぬ前に深く海中に沈めたまへ」と祈念し云々とあるは即ち當社なり、今ま社に蔵する鑄矢は與一の奉納したるものと傳ふ、又温泉の開祖狩野三郎の射止めしと言ふ萬字の鹿角及其他の社寶を蔵す。

● 那須與一墓 (下野)

那須郡鳥山町天性寺境内に「那須與一墓」と稱する塋域あり、小丘の中央に三尺餘の五重塔ありて、其左右に各一尺餘の塔十基相列なり、一塔毎に形狀を異にす此大小十一塔と少しく離れたる所に又二箇の墓碑あり、碑面磨滅して容易に讀むを得ざれ共、右なる墓碑には「好山一夢居士」那須與一家臣俗名板垣治太夫景貞左の墓碑は、傑峯秀英居士」俗名渡邊千右衛門尉久直と見ゆ、是れ果して那須主從の墓なるや、茲に疑はしきは治太夫景貞の墓碑側面に天和二壬戌年、千右衛門尉久直の分は貞享元甲子天とある事是れなり、天和二年は五代將軍徳川綱吉時代にして今より僅かに二百三十餘年前なれば、與一主從の墓と認むる事疑ふべし又同郡佐久山町に與一墓及同人腰掛松なるものあり、記して證者の判断を俟つ。

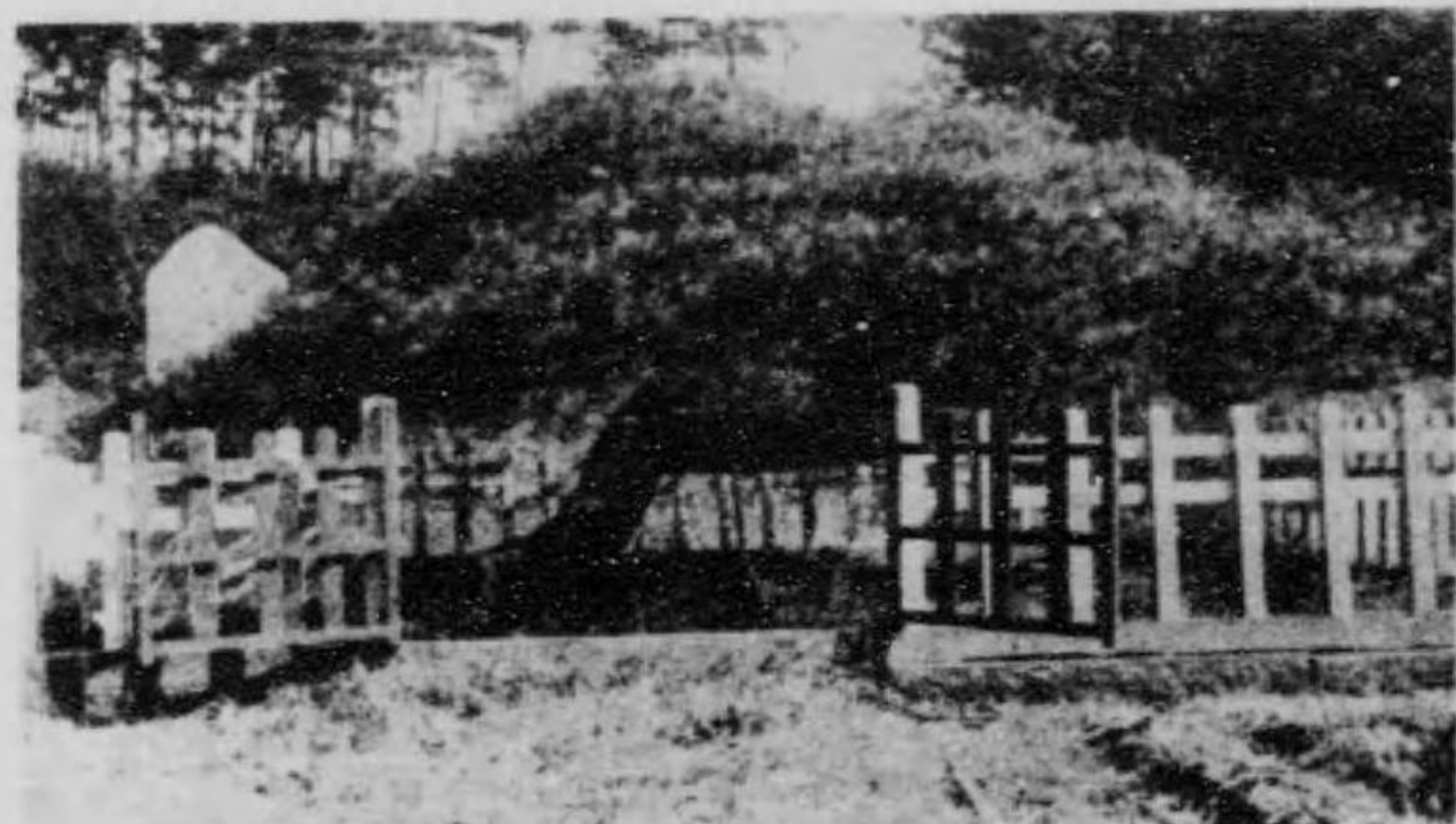


殺生石

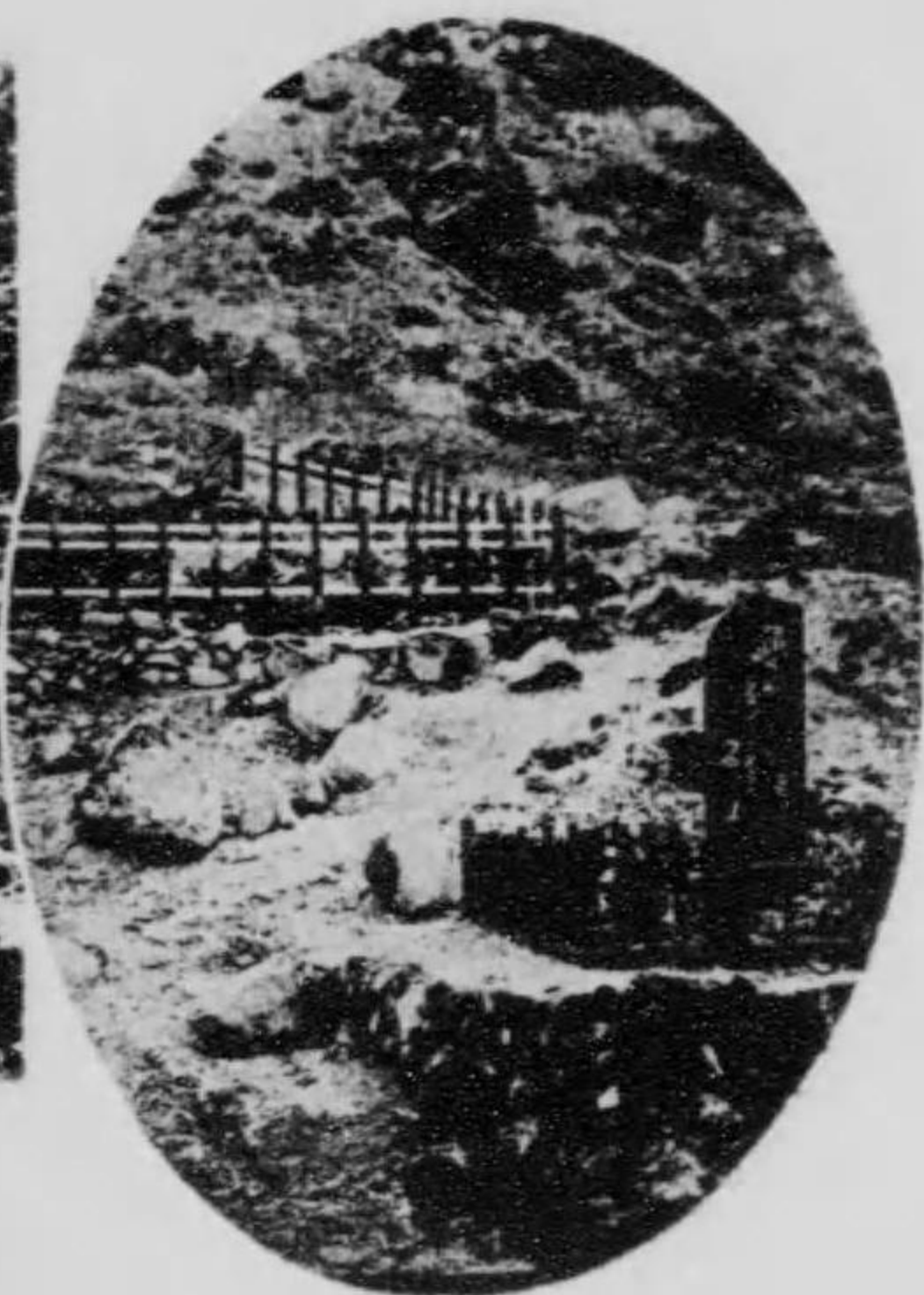


源翁碑

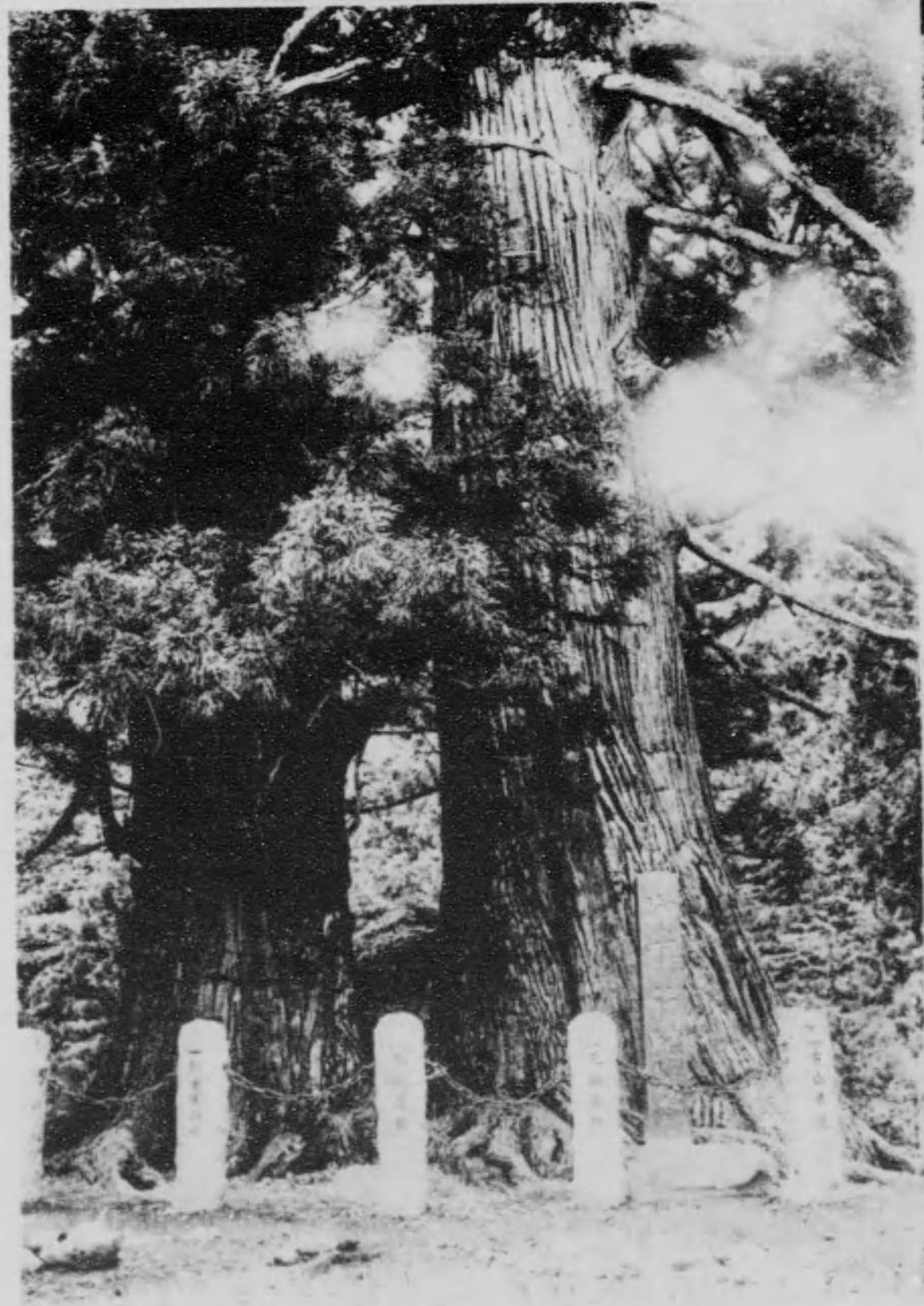
石掛腰市與須那



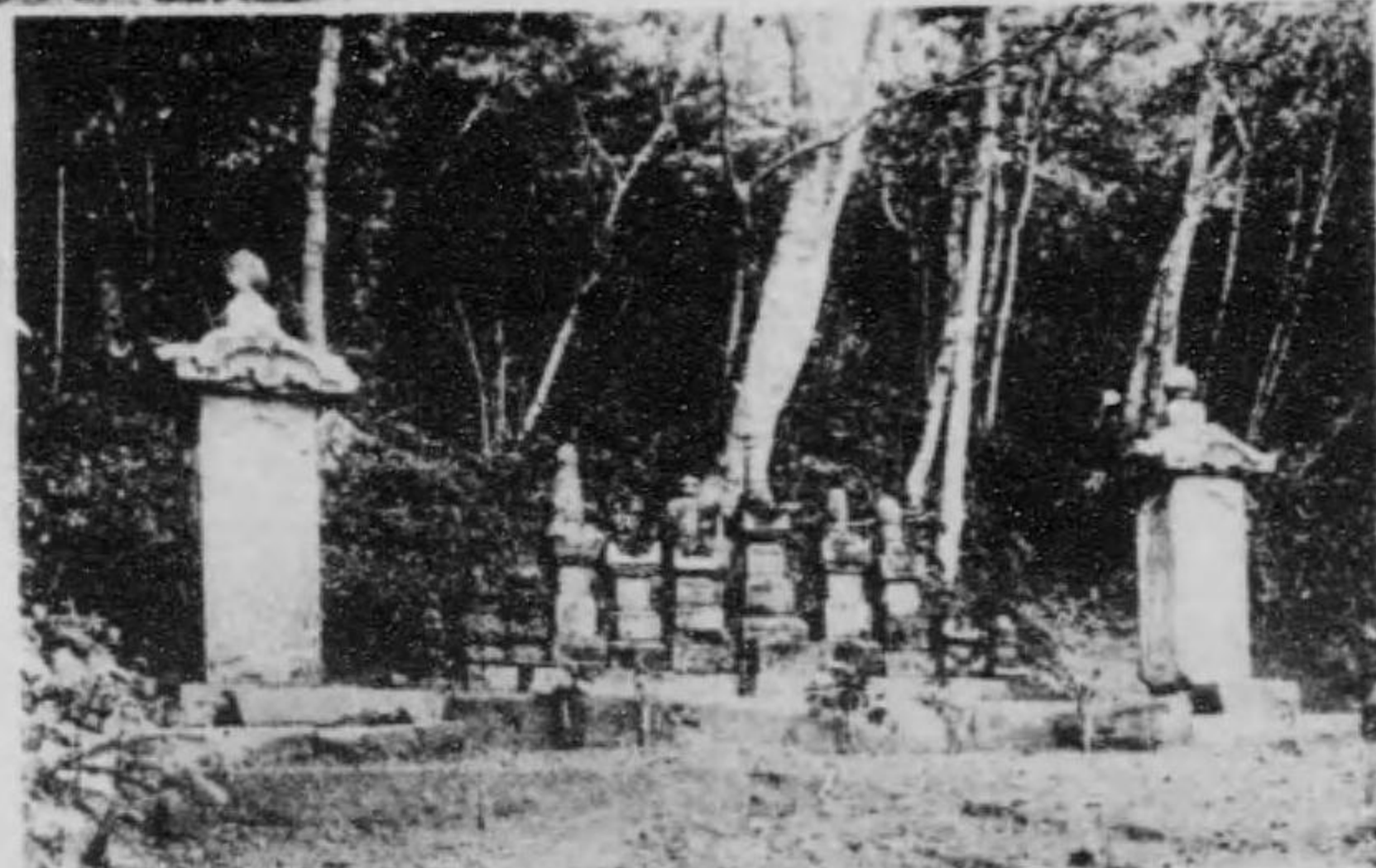
社神泉温須那



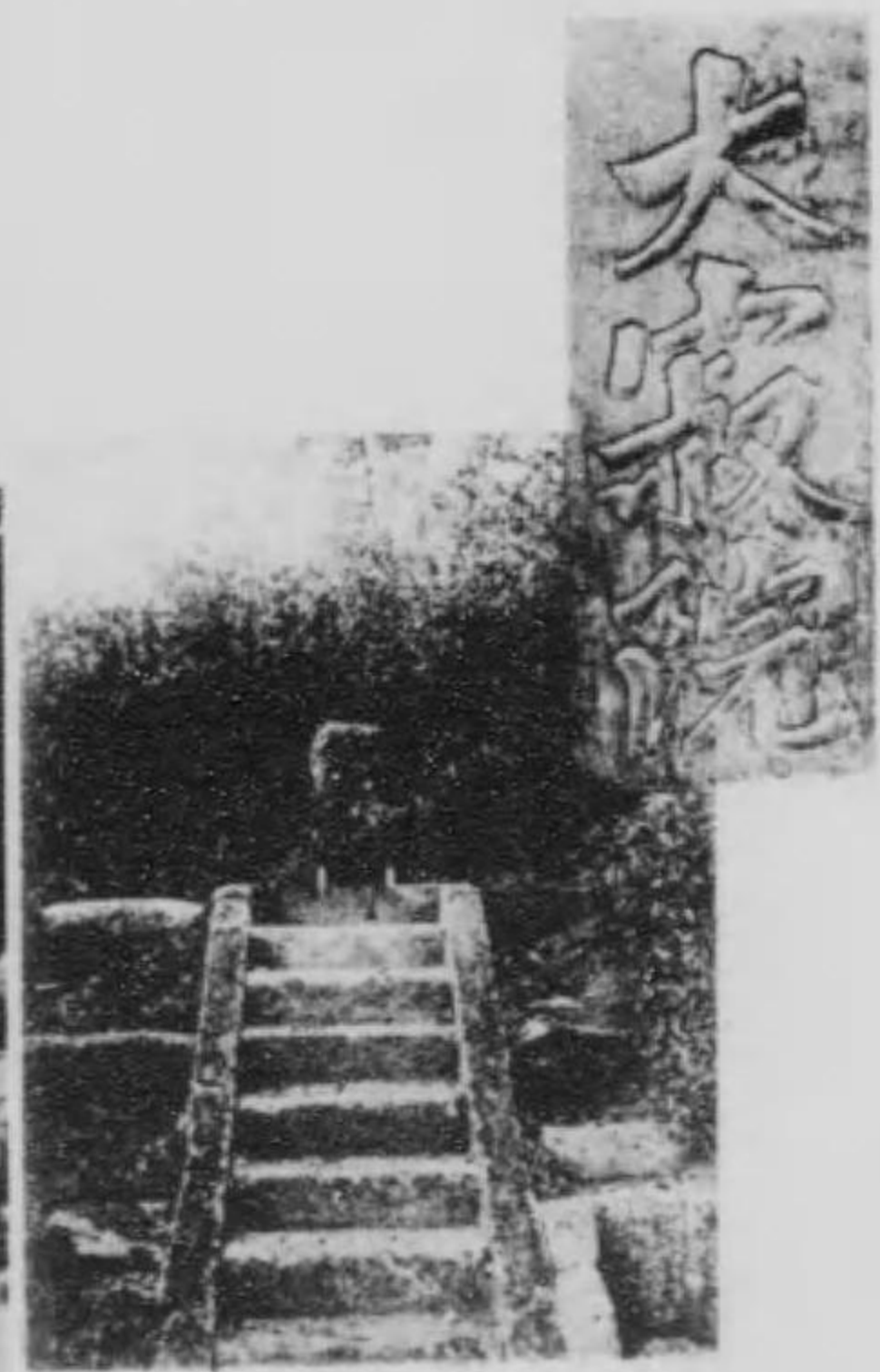
石生殺



杉遊の原鹽



岩つ七原鹽(下)
墓市與須那(中)



碑師碑翁源

亦到る處に多く舊蹟も少なからず、門前より箒川を渡り山路を登れば須卷温泉あり、喜十六山の半腹なり。
故紅葉山人の作中に「西那須野驛より直に西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野に入れば、天は濶く、地は退かに、唯平蕪の迷ひ、斷雲の飛ぶのみにて、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其所ぞと見えて行くほどに路は窮まらず」云々

千葉介常胤、上總介廣常、馳無狐下野國那須野、義明射殺之、爾後百年餘、狐靈爲石、世俗曰殺生石、觸其石則鳥獸人民皆死、後深草帝實治年中詔傳源翁、源翁到石傍、題偶舉植扶卑一下、石忽破碎、其夜一女子現、謝曰、妃得淨戒先天、言訖沒矣其偶なるものは「法々塵々端的底、本來面目未曾藏、現案公大難事、異類中行任度量」云々、石は今地中に埋没し

右衛門尉久直と見ゆ、是れ果して那須主従の墓なるや、茲に疑はしきは治太夫景貞の墓側面に天和二壬戌年、千右衛門尉久直の分は貞享元甲子天とある事是れなり、天和二年は五代將軍徳川綱吉時代にして今より僅かに二百三十餘年以前なれば、與一主従の墓と認む事疑ふべし又同郡佐久山町に與一墓及同人腰掛松なるものあり、記して識者の判断を俟つ。

白河古關址

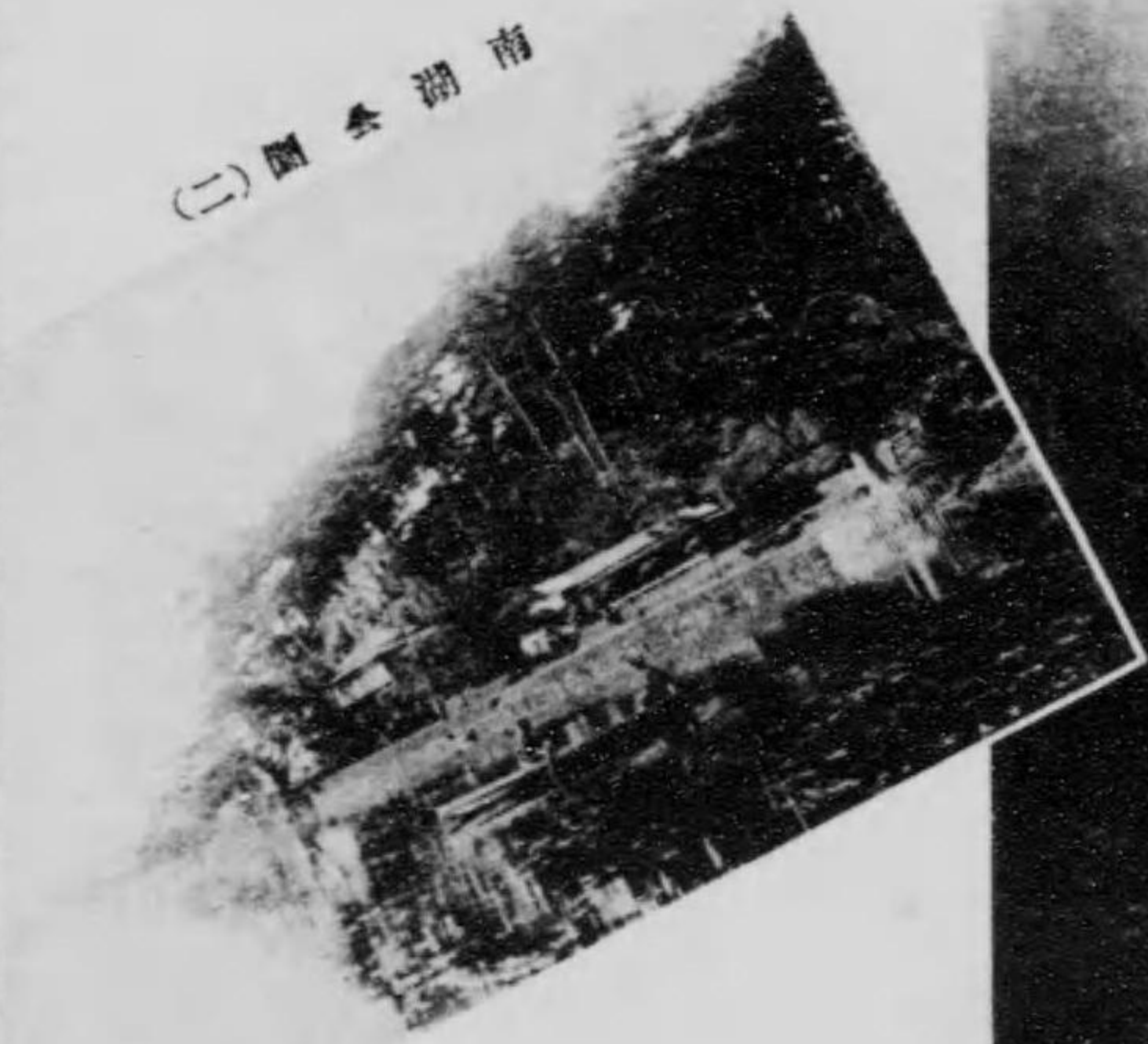


轉寢の森

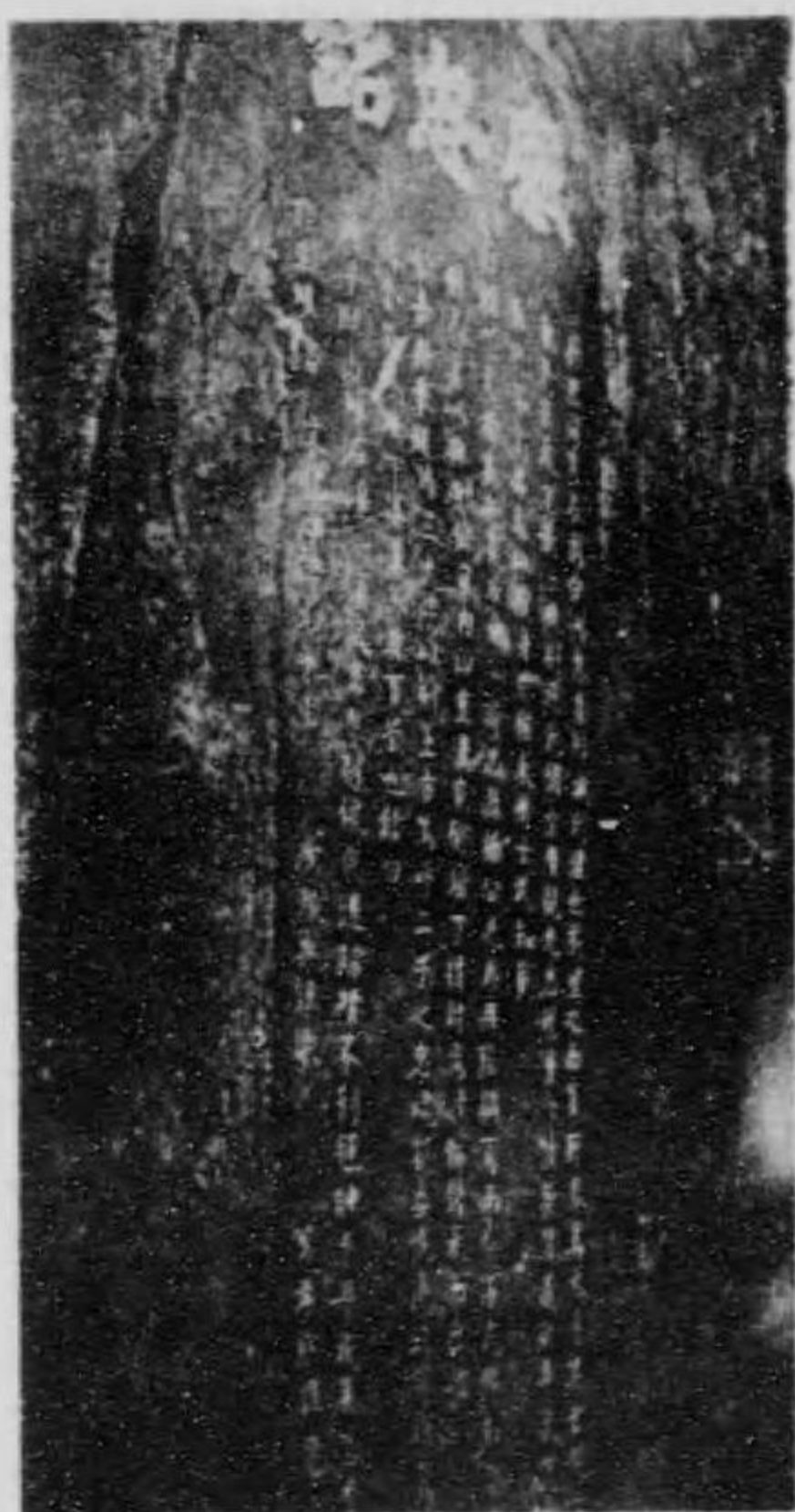


白河古關の戦場

南湖南公園



感忠碑



南湖南公園



●白河關址 (磐城)

都をば霞とくもに立ちしかど

秋風ぞ吹く白河の關

能因法師の此歌によりて喧傳せる白河の關は、白河驛より南二里餘古關村大字旗宿にあり。伊勢鈴鹿の關美濃不破の關と共に日本三關所の名甚だ高く、其創置は今より四百餘年前なるべしと言ふ。

地は實に往時の陸羽街道に當り、陸奥に入るの咽喉とも謂ふべし、蓋し宇都宮より板戸、鹿子畑、黒羽、裝澤等の小驛

都婆中の一なりと傳ふ、里俗之を一町佛と稱す。

●感忠銘 (磐城)

是れ大沼村大字搦山に在る巨碑なり、

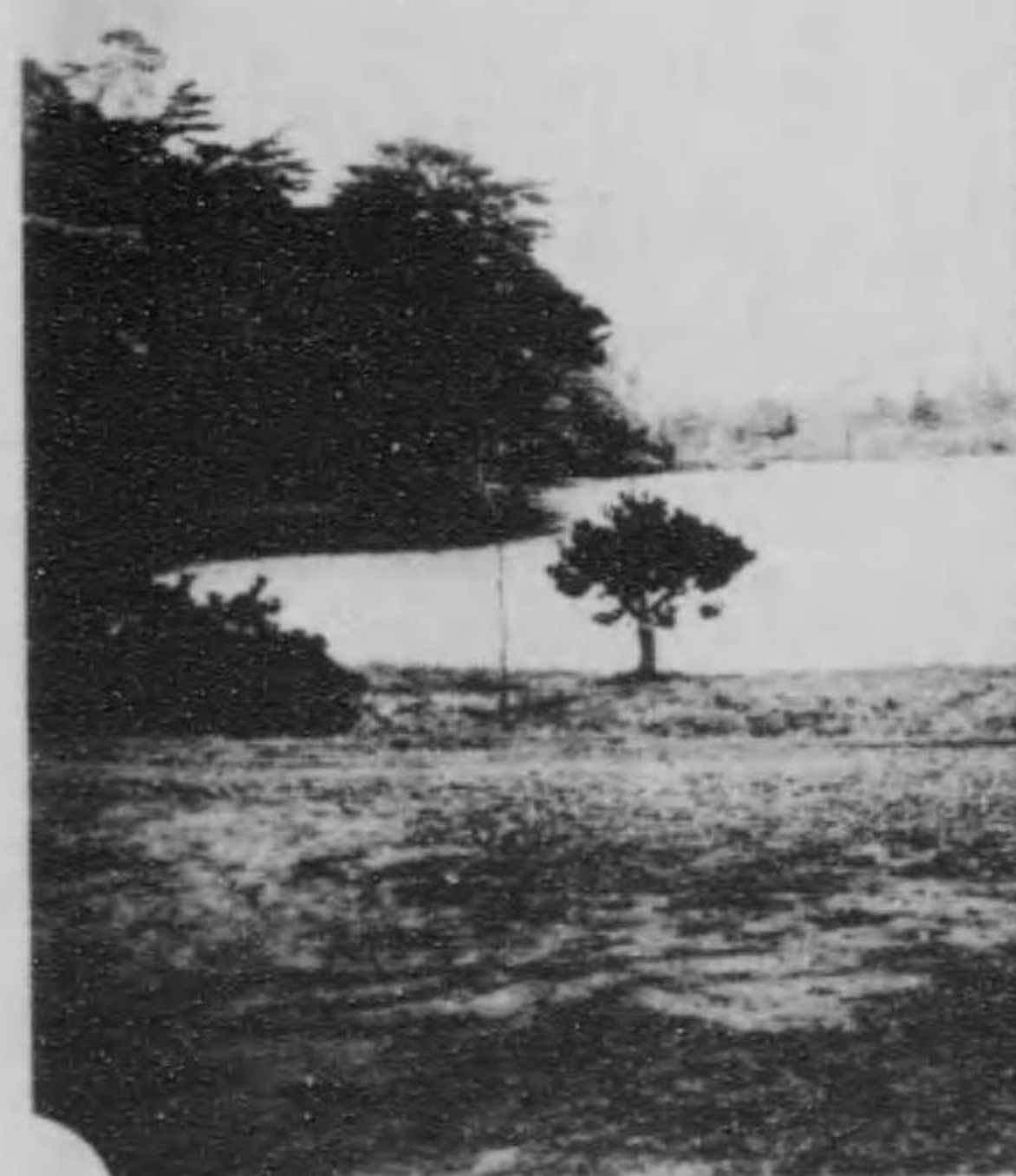
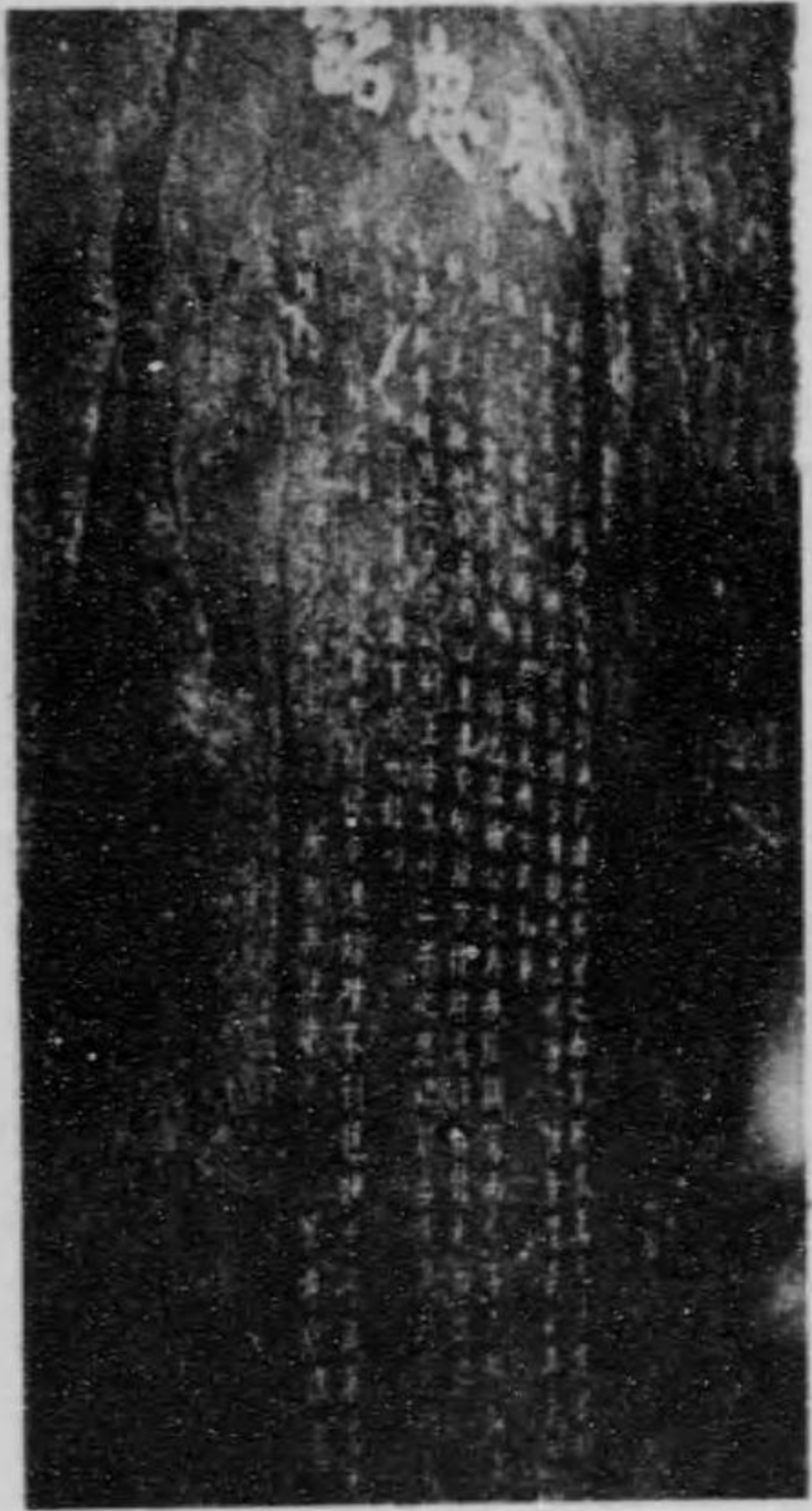
地は白河町の東一里餘、山は阿武隈川に沿ひ甚だ高からずと雖も、巖石岬々として聳え、老樹鬱々之を點綴す、此地結城宗廣同親光の舊城址にして、元弘年中宗

廣は源顯家に從ひ、義良親王を奉じて西上し終に病を得て逝けり、親土は顯家顯信と共に暫らく此城に據らせられしと傳

春は櫻雲、山を封じ、秋は錦繡、枝に満ち、影を激艶たる波中に投じて、風景極めて賞すべし、若し夫れ明月湖心に湧くの時、舟に棹して半夜の清遊を試むれば、金波碎け銀波走り、爽快言ふべからず。

此圖に十六景十六勝の目あり、曰く共樂亭、明鏡山、萬花岸、濯錦岡、鳴秋原、玉花泉、松濤里、問月嶺、逗月浦、兼霞湖、玉女島、使君堤、鹿鳴峰、曉月浦、五往村、一字松の十六景、關の湖、鏡山、真萩ヶ浦、錦岡、松蟲の原、常磐清水、松風の里、月待山、月見浦、下根島、御影島、千

幾堤、小鹿山、石明崎、八聲村、千代の松



(一) 山

● 白河關址 (磐城)

都をば霞と、もに立ちしかど

秋風ぞ吹く白河の關

能因法師の此歌によりて喧傳せる白河の關は、白河驛より南二里餘古關村大字旗宿にあり。伊勢鈴鹿の關美濃不破の關と共に日本三關所の名甚だ高く、其創置は今より四百餘年前なるべしと言ふ。

地は實に往時の陸羽街道に當り、陸奥に入るの咽喉とも謂ふべし、蓋し宇都宮より板戸、鹿子畑、黒羽、裝澤等の小驛を過ぎて此關門に至れるものにして、後世の奥羽街道に對して此路を關街道と稱せりと、思ふに交通不便の昔時にありては、陸奥は實に遼遠の地、僻陬の域にして、京人一たび此關を踰ゆれば、恰も漢人胡に入るの思ありしならん。

而して旗宿の地たる關山高く峻嶮として聳え、其頂上に一古寺あり、地高く一路其間を通じて岐路の出づべきなく、寔に要害の地點なり、又白河と稱する一溪流あり、源を旗宿の南方里餘の處に發し、流れて古關址の下を過ぐ、白河の名は是より起ると傳ふ、河畔に九重楓あり、古歌に白河關の紅葉を詠めるは之れなるべし、近年此景を採り帛紗に正葉摺と爲して白河土産とせり、又路傍に村社白神社あり、即ち關守の内館址とす、關址は素と久しく湮滅して其所在を知らざりしが寛政年間白河樂翁地理に考へ誌書を参照して初めて其地が關址に當れるを確め、碑を建て以て之が標とせり、今ま白河神社の前にあるもの即ち是れなり、而して關門起廢の年代に關しては異説ありて未だ之を詳かにせざるも、要するに官設の關門にあらずして、此國の國守視る所ありて私に設けたるもの、如し、又關址を距る數十歩の所に古碑あり、是れ藤原清衡中尊寺草創の時一町毎に建設せし石卒

都中の一なりと傳ふ、里俗之を一町佛と稱す。

● 感忠銘 (磐城)

是れ大沼村大字搦山に在る巨碑なり、地は白河町の東一里餘、山は阿武隈川に沿ひ甚だ高からずと雖も、巖石峻々として聳え、老樹鬱々之を點綴す、此地結城宗廣同親光の舊城址にして、元弘年中宗廣は源顯家に從ひ、義良親王を奉じて西上し終に病を得て逝けり、親土は顯家顯信と共に暫らく此城に據らせられしと傳ふ、後、山上の斷崖の高き一丈八尺幅九尺の間を削りて感忠銘を刻す、題額は松平定信文は廣瀨典の撰にして左の如し。

鬱然深秀 在我白河東者結城氏城也 我望之而有所感焉 元弘建武間 士氣衰 天下擾々視利避難 獨宗廣 親光忠烈凛々 憤發唱義欲率天下而與之 不幸弗克以殞身 然猶東州士民 知戴南朝之天者實亦其力也 一時忠烈補公之外無能稱焉 而今我民 鮮知其爲州人 奚以興乎餘風 內山 重濃家於墟下 捐財爲予勒銘 表而出之 公嘉此舉 題賜三大字 以刻上方 嗚呼二子之忠魂 數世後得此 偉標焉 其心含笑於地下 吾輩亦與有榮也 銘曰 峭乎此山 維石峻峻 溪風蕭然 劍佩夜還 踪跡不刊 輝映千年 民莫自棄 國能生賢。

● 南湖公園 (磐城)

園は白河市街の東南半里、小鹿山腰にあり、南湖の水は東に下り社川に入る、即ち常陸久慈川の源なり、湖池周圍二十町、文化年中松平定信此地を開墾し、一は士人遊覽の場所たらしむべく、一は灌田の爲めに修造せるもの、今や南湖公園として著る、湖心に玉女島あり、辨財天を祀る、山に沿ひ湖に臨み「共樂亭」あり、

春は櫻雲、山を封じ、秋は錦繡、枝に滿ち、影を激艶たる波中に投じて、風景極めて賞すべし、若し夫れ明月湖心に湧くの時、舟に棹して半夜の清遊を試むれば、金波碎け銀波走り、爽快言ふべからず。

此園に十六景十六勝の目あり、曰く共樂亭、明鏡山、萬花岸、濯錦岡、鳴秋原、玉花泉、松濤里、問月嶺、逗月浦、兼龜洲、玉女島、使君堤、鹿鳴峰、曉月浦、五往村、一字松の十六景、關の湖、鏡山、眞萩ヶ浦、錦岡、松蟲の原、常磐清水、松風の里、月待山、月見浦、下根島、御影島、千歳堤、小鹿山、有明崎、八聲村、千代の松原の十六勝是れなり、景には悉く詩を賦し、勝には亦各々和歌を題し、石に刻して之を湖畔に建つ、又湖の南岸に「南湖開鑿碑」あり。

近衛 基前

影うつる山もみどりの波ははれて 見渡しひろき關の湖

● 轉寐の森 (磐城)

散る花をたゞ一時の夢と見て 風におどろく轉寐の森

是れ道與准后の回國雜記に「白河を立ちて矢つぎと言へる處へ赴き侍りける道に轉寐の森と言ひて最も木深き林侍べり漸う花のさき過ぎけるを見て」と前書して記せる歌なるも、其矢つぎと稱する地詳かならず、唯だ白河の西數里釜子村なる阿武隈川の傍に一森林あり、是れ源義家の假寐せし「轉寐の森」なりと傳ふ。

● 戊辰役古戰場 (磐城)

白河口と稱せるものは、北は勢至堂口より若松城に通じ、東は三春、二本松、福島、南は棚倉、平に通ず、其本道に白坂あり右方に旗宿、左方に黒川口の險ありて戊辰の役、東軍此に據れり、最も激戰を極めたるは即ち此方面一帯の地なり。

●都々古別神社 (磐城)

東白川郡八槻村字大宮に鎮座す。古來陸奥國一之宮として其名高く、今は國幣中社に列し、味相高彦根命及日本武尊を合祀す、社域東西二百間南北百間餘、宮川の清流其背後を流れ、兩岸は絶壁削るが如く水聲輕踏たり、其西に神路山あり老樹鬱々景致幽雅、宮川の千鳥、神路山の螢は殊に名あり、社地の中央に本社拜殿、其左右に神饌所、齋火殿、大炊所、祓殿、神輿殿、神樂殿、寶庫等壇を連ね、正面にあるを随神門とす。

當社は別に棚倉町大字伊野上に鎮座し是又國幣中社たり、神寶中に櫻町天皇の勅宣、聖德太子寄進の銅佛、源義家の進獻せる太刀等あり、又日本武尊の鏡、源賴義父子進獻の太刀二口は棚倉社に藏す、當社の祭典は毎年十一月一日を以て執行す

●勿來關址 (磐城)

關址の所在地を窪田村字九面と稱す、勿來驛の西南に當る、此處も亦往昔の關門たり、白河の關は能因法師の歌によりて喧傳せられ、此關は源義家の「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻哉」の名吟によりて其名最も高し。

關址と傳ふる山上に此名吟を刻せる古碑あり、老松相茂りて古碑を蔭す、此處より眺望すれば、西北の兩面は連山波濤の如く、東南の一方は碧波渺漫として弓形の一大灣、遙かに小名濱に連り、松川磯長汀十里の景亦見棄て難きものあり、古關址の下を名古曾坂と言ふ、往時より幾多の櫻樹ありしが、近世全く枯稿し、今は唯だ若木の花の淋しく春を飾るのみ、舊蹟保存の上より言へば遺憾此上なし、山下に碑の摺文を賣る家あり、又古への櫻の化石せしと言ふものをも商ふ、之を聞く關址は昔の奥州街道に當り、當時は浪

打際に接し居たりと、亦地質學者の説に由れば「常磐の東海岸は漸次隆起して陸地となれるものなり」と、二説を合考するも此處を以て關址と定むるは尤も信憑すべき説たるに似たり。

源師賢

東路は名古曾の關もあるものをいかでか春の越えて來つらん
惜めどもとまりもあへず行く春は
名古曾の山の關もとやめず
小八條御息所

紀貫之

立寄らば陰ふむばかり近けれど
誰か勿來の關をすえけん
西行法師
九面や浪打寄せて道もなし
ここを名古曾の關といふらむ
地名の九面は(ココツラ)と讀む。

●松川浦の十二景 (磐城)

小松島の稱ある松川浦は、相馬郡中村の東に當る淺灣にして、宇多川之に歸す、江海の形狀十字を成し、亦飛鳥に似たり、其羽翼の如きもの南北に伸び、頭首の如きもの海門に當りて東に向ふ、尾に似たるもの西南に延き以て宇多川に連續す、兩翼の如きもの、長さ約四十町、頭尾に似たる處一里餘、江中に岩礁星散し、其沙濱岸涯、高下出入して頗る勝色を呈す、此長浦の十二景として喧傳せらるるものは松川浦の總稱を始めとし、水莖山あれば飛鳥の姿あり、松沼の濱、離れ崎之に亞ぎ川添森、文字島、紅葉岡、沖ヶ島、梅川、鶴巢野、長洲の磯等あり、松島の景は富山に在りと言ふが如く、此浦の全景は收めて鶴之尾岬に在りと言ふを得べし、岬は浦の門頭に當り白浪玉を飛ばし、松風響きを送り、奇巖獨り突兀として聳ゆ、中村町より舟すれば二弱里にして到る、清波島影沙白く松青き處を歩し、行くこと數百

歩の所に一華表あり、岩石を鑿りて階を造る數十段、奇松鬱蒼として階段を蔽ひ、綠なす洞門悉々聲あり、登れば岬の西腹に堂あり。

堂廊に踞坐して一望すれば恰も大庭園の滿眸に横はるが如し、右には遠く連山の青黛を眺め左には近く太平洋の白波を見る、眼前には幾多の小嶼星散恭布して、帆影を吐き漁舟を呑む、更に岬頂に遠すれば、南方一面の滄海水天實に劈裂たり而して鹿島崎を衝く激浪は花を飛ばすの觀あり、眼を轉じて東方を顧れば金華山松島の島影翠雲の如く連々綿々として見ゆ、浦上の朝風暮煙、春花秋紅光景皆な悉く佳絶ならざるはなし、寔に磐城國中第一の勝景なるのみならず、松島と相對して以て東海の一大奇勝と稱するも可なり先人の此浦十二景を詠める歌の中より數首を掲ぐ。

松川浦 圖從一位

春やなほたくひもなみの曙に
かすむみどりの松川の浦
水莖山 久我大納言
うつし繪もおよはむものか
櫻さく水莖山の春の面影
飛鳥姿 清水谷中納言
寄る船もとめてみなどの名をや知る
あすは飛鳥のかはる浮寐に
文字島 白川神祇伯
冬さむき水にも寫す文字島や
おくれし秋の雁のひとつら
松沼濱 庭田中納言
船よせて涼しき波に月をなほ
まつぬま濱の松の下風
紅葉岡 飛鳥井三位
名をしるくいくしは染めて
色や濃き紅葉の岡の秋の梢は
鶴巢野 白川二位
住み馴れて己が名におよ鶴巢野に
千世ふる雛の姿えをも見む

勿來關址



都々古別神社

勿來關址



郡々別神社

形の一大海、遙かに小名濱に連り、松川磯
 長汀十里の景亦見棄て難きものあり、古
 關址の下を名古曾坂と言ふ、往時より幾
 多の櫻樹ありしが、近世全く枯稿し、今は
 唯だ若木の花の淋しく春を飾るのみ、舊
 蹟保存の上より言へば遺憾此上なし、山
 下に碑の摺文を賣る家あり、又古への櫻
 の化石せしと言ふものをも商ふ、之を聞
 く關址は昔の奥州街道に當り、當時は浪
 飛鳥の湊あり、松沼の濱、離れ崎之に亞ぎ
 川添森、文字島、紅葉岡、沖ヶ島、梅川、鶴
 巢野、長洲の磯等あり、松島の景は富山に
 在りと言ふが如く、此浦の全景は收めて
 鶴之尾岬に在りと言ふを得べし、岬は浦
 の門頭に當り白浪玉を飛ばし、松風響き
 を送り、奇巖獨り突兀として聳ゆ、中村町
 より舟すれば二弱里にして到る、清波島
 影沙白く松青き處を歩し、行くこと數百

松沼濱 庭田中納言

船よせて涼しき波に月をなほ

まつぬま濱の松の下風

紅葉岡 飛鳥井三位

名をしるくいくしは染めて

色や濃き紅葉の岡の秋の梢は

鶴巢野 白川二位

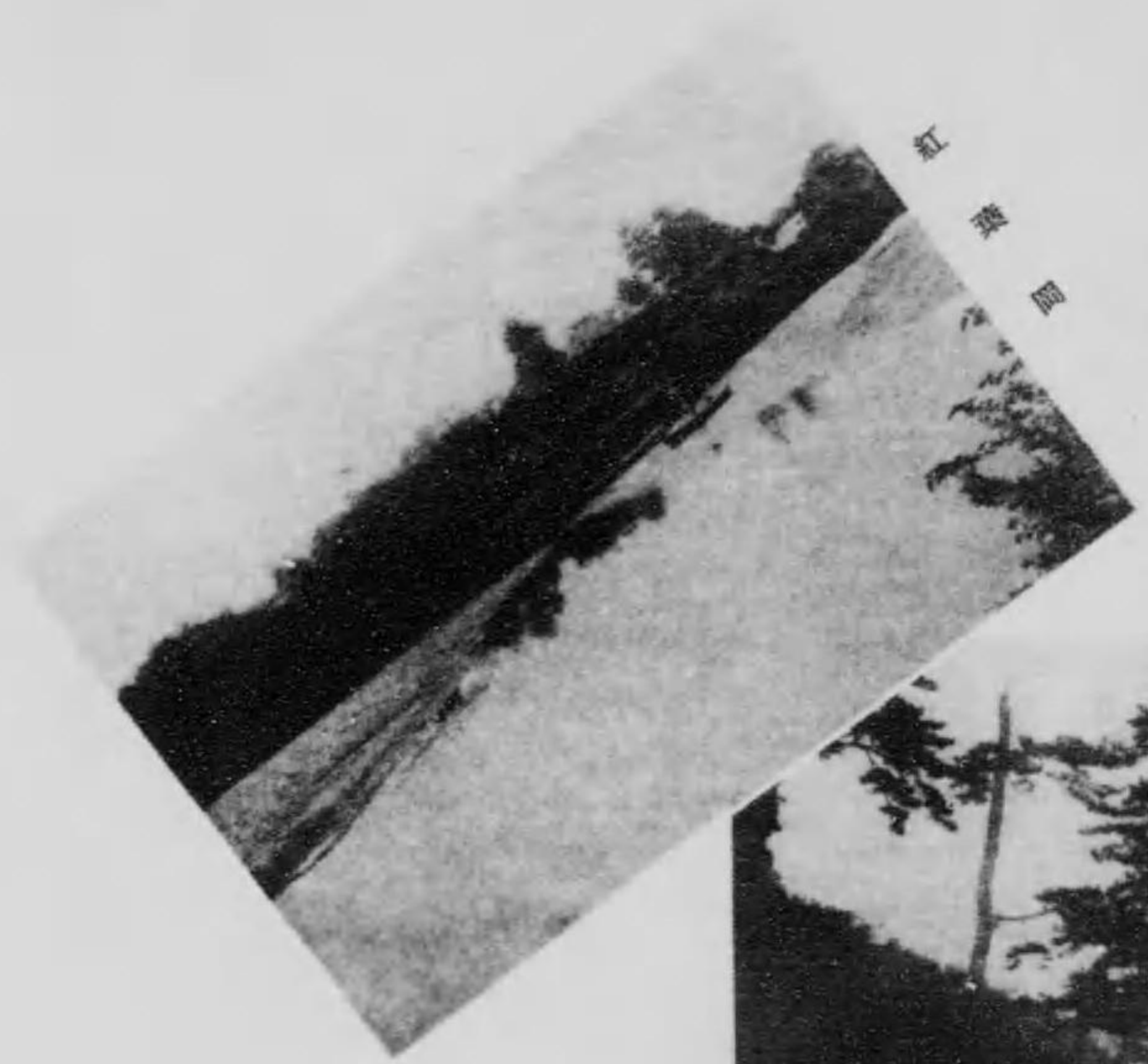
住み馴れて己が名におふ鶴巢野に

千世ふる雛の榮えをも見ひ

文宇島



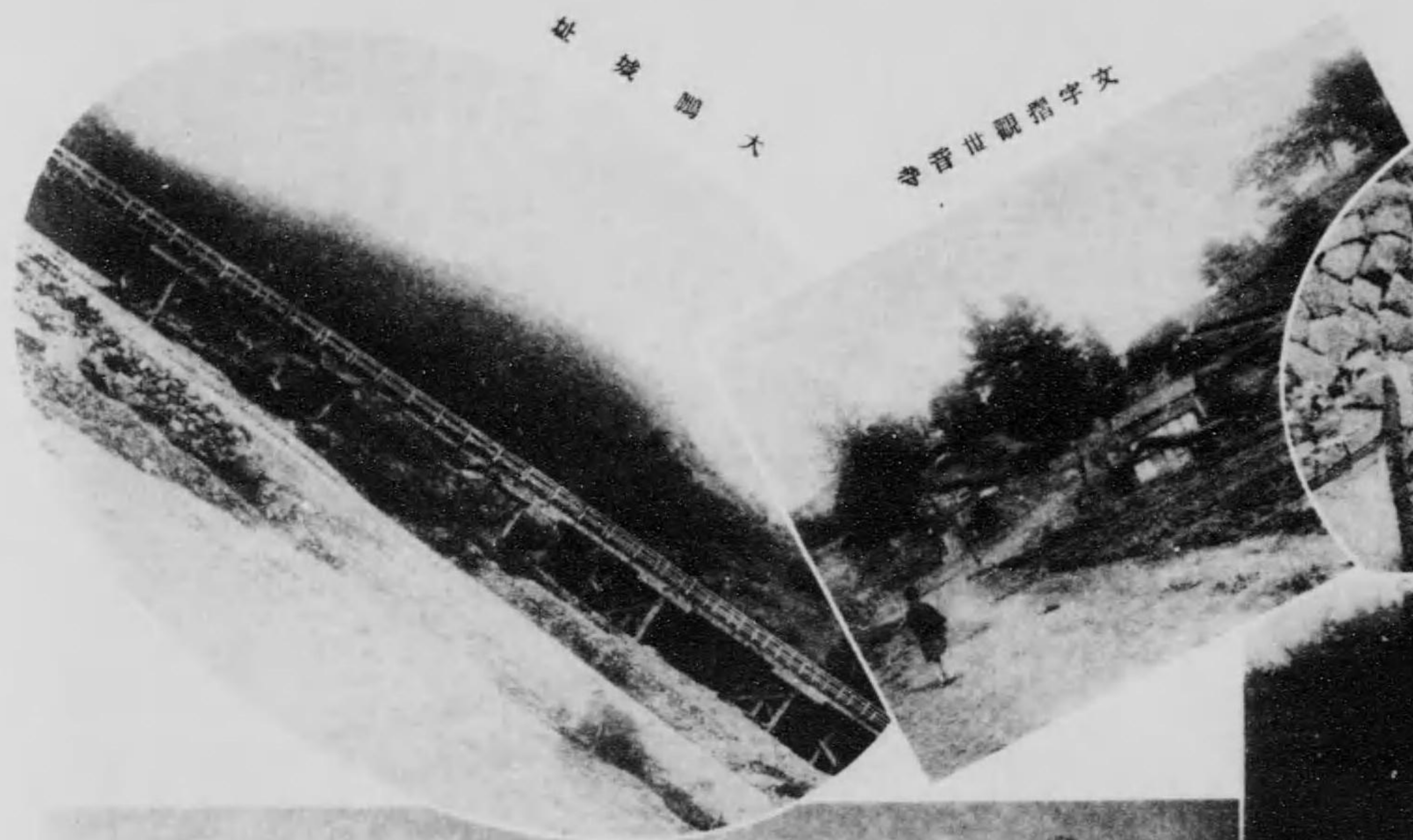
飛鳥港松川浦諸勝



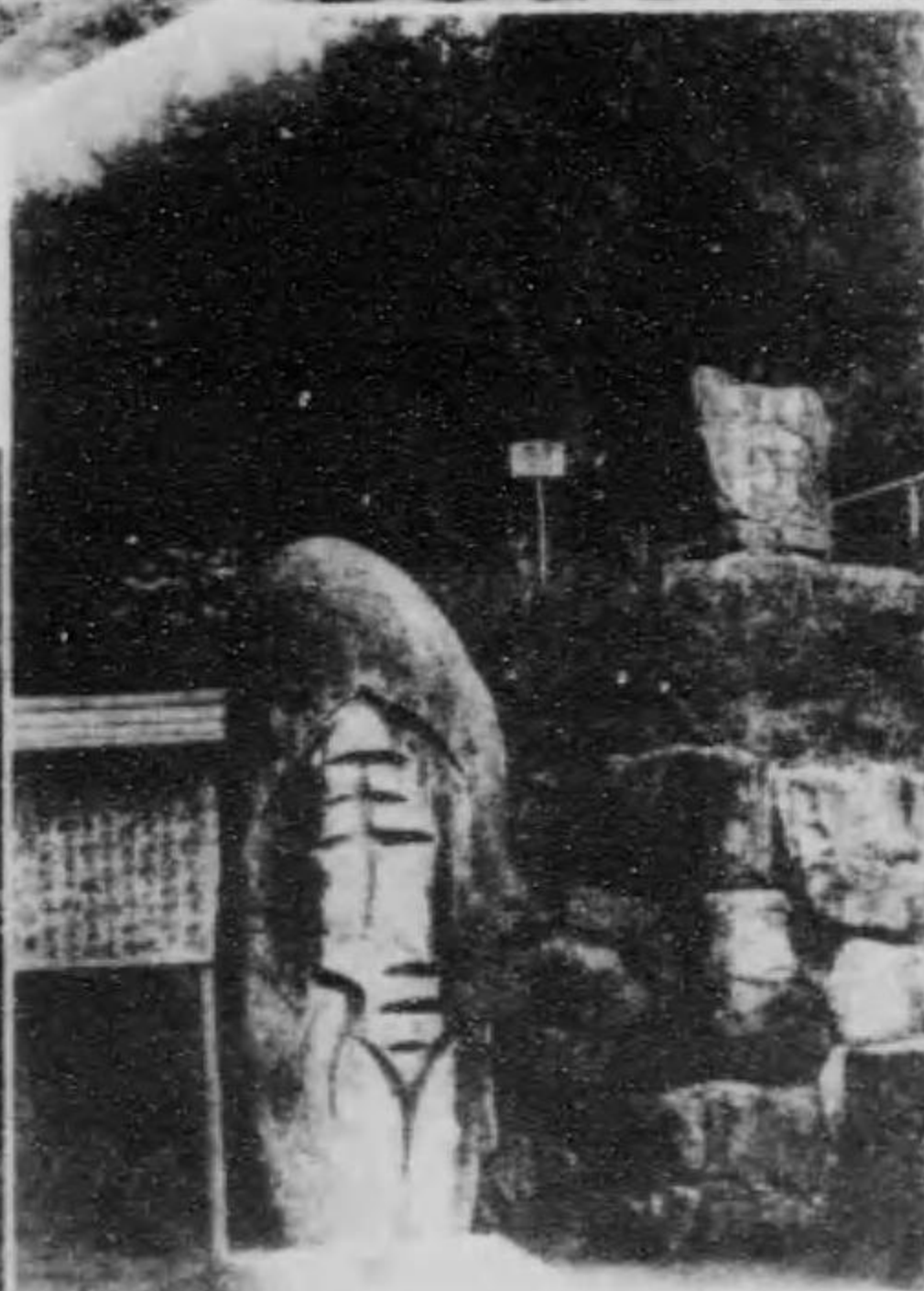
信夫文字摺石



文字摺觀世音寺



信夫公園招魂社



(中央)甲 碑



靈山

●信夫山公園と招魂社

(岩代)

古來其名高き信夫山は福島市の郊外にあり、山は平野田畝の間に隆起せる一丘陵にして、茂松森鬱、翠陰滴るが如し。

吾妻山の噴烟を望むを得べく、伏して阿武隈の清流と洲川の急湍を眺むべし、山

陸奥の信夫文字摺たれゆゑに

みだれそめにし我ならなくに

寂然 法師

みちのくの信夫文字摺忍びつゝ、

色には出しみだれもぞする

●文字摺觀世音寺 (岩代)

文字摺觀世音を安置する觀世音寺は、香澤山安洞院と號し、文祿四年の草創に

及桑折近傍を眺望し得べき地、境内に花

樹多く、山麓には被川及若松川の二流あり、又松平定信の特に建てたる哀悼碑は

靈山の麓字大石村にありと言ふ。

關元龍

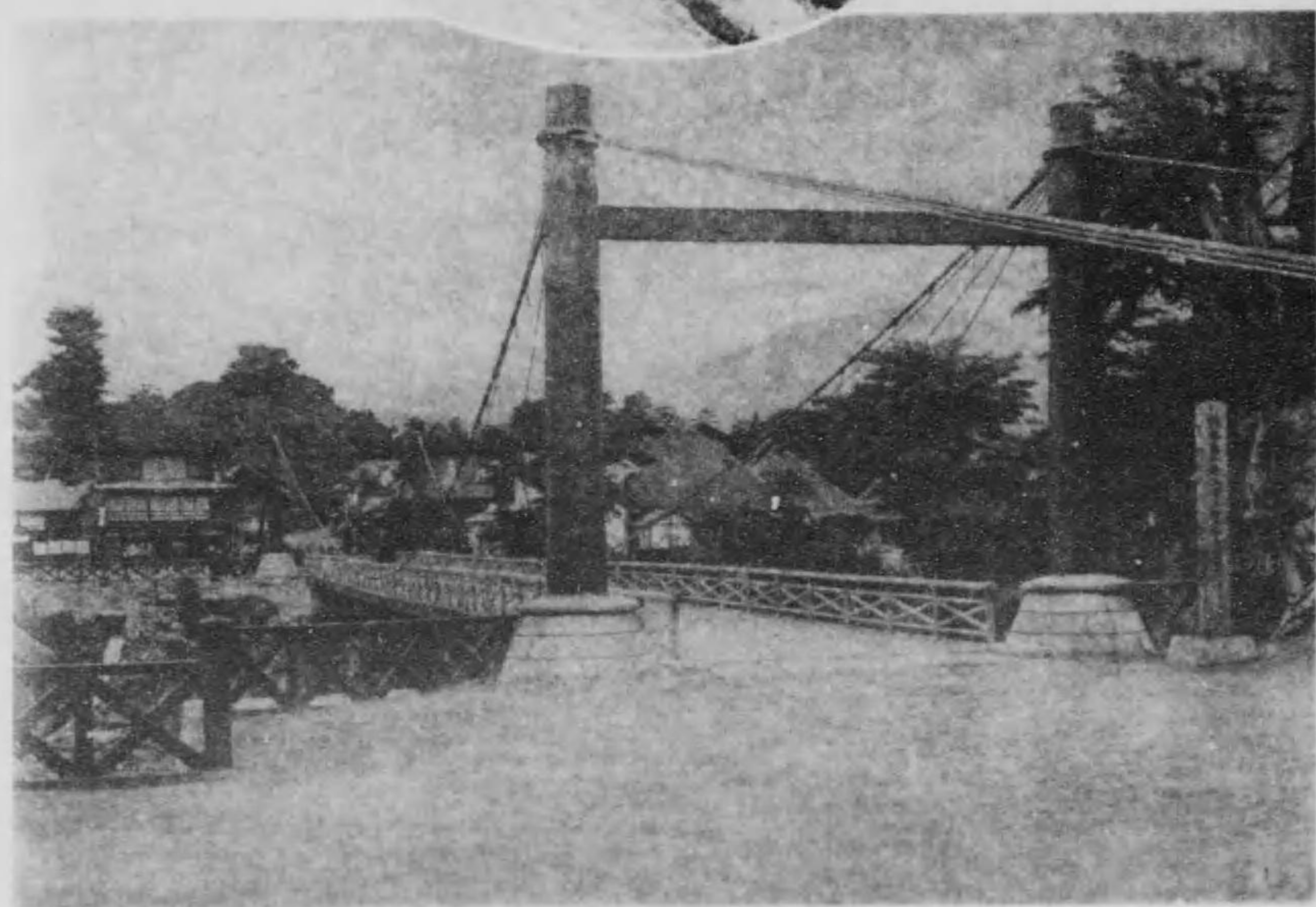
節彼靈山一盞分 蒼々雲樹夕陽暉

瀋鎮曾震英雄略 史蹟猶芳社稷臣

汗馬西征驅萬里 風幡東顧率三軍

中興已矣天哉憶 遺恨空飛安野塵

十綱橋





●信夫山公園と招魂社

(岩代)

古來其名高き信夫山は福島市の郊外にあり、山は平野田畝の間に隆起せる一丘陵にして、茂松森鬱、翠陰滴るが如し。山上に羽黒神社あり、展望佳絶、仰いで吾妻山の噴煙を望むを得べく、伏して阿武隈の清流と洲川の急湍を眺むべし、山の南腰は即ち信夫山公園なり、福島八景には信夫山秋月、洲川落雁、小富士暮雪、福島晴嵐、信夫橋夕照、黒岩夜雨、文字摺晚鐘、阿武隈川歸帆あり、公園の北隅に縣社黒沼神社鎮座し、招魂社は神社と相並ぶ、西南に武徳殿建つ、社邊松あり櫻ありて自ら瀟洒の趣に富む。

順徳院
 都には花もちりあへすみちのくの
 信夫のやまは春風のころ
 なげやなけ信夫の山の呼び鳥
 つひにとまらぬ春ならずとも
 業平 朝臣
 信夫山のびてかよふ道もがな
 人のこころのおくも見るべく

●信夫文字摺石 (岩代)

福島市外岡山村字山口に文字摺観世音寺あり、文字石摺は此寺の境内にあるものにして、其石の長さ一丈一尺六寸、幅六尺九寸七分、地上に現はるゝは南方一尺七寸北方六尺二寸なり、繞すに石欄を以てす。

中古、此石に四季の花を載せ、其上にて布を摺り朝貢せし事あり、其花模様は纏れて印するより「もちすり石」と稱するに至れりと言ふ、後人布上に葱章を印し、「しのお摺」と稱し販賣せり、古來、春の青葉を以て其石面を摺れば相思の愛人の面影を見得べしと俗説す。

源 融

陸奥の信夫文字摺たれゆゑに

みだれそめにし我ならなくに

寂然 法師

みちのくの信夫文字摺忍びつゝ、

色には出しみだれもぞする

●文字摺観世音寺 (岩代)

文字摺観世音を安置する観世音寺は、香澤山安洞院と號し、文祿四年の草創に係る曹洞宗の古刹なり、境内に多寶塔、三十三観音堂、鐘樓、水月庵、龍堂等ありて、文字摺石と共に著る。

●甲剛碑 (岩代)

碑は観世音寺境内老櫻樹の下に建つ、甲剛の字義は北剛、金剛、又は北斗七星廿三夜塔等に類す、碑は即ち古への庚申塔ならんと言ふ、長さ七尺餘幅三尺弱弱面に唯だ篆字の甲剛二字を刻せるのみ。

●靈山 (岩代)

靈山は桑折町より東方三里餘の靈山村にあり、贈太政大臣北畠顯家の古城址にして、四方峻巖斷壁高き數千仞城礎今猶存す、相傳ふ、元弘年間顯家陸奥守に任ぜらるゝや後醍醐天皇の皇子義良親王を奉じて此山に據り以て賊を討す、親王初め國府に居り後此城に移る、既にして顯家西上戦死し、其弟顯信信濃之介に任じ白河に鎮す、興國四年足利尊氏の將畠山高國等此山の諸壘を陥ると言ふ。

絶頂の眺望甚だ廣濶にして、東は相馬一帯の海色より、北は陸前金華山の青螺を望み、西南には信夫伊達兩郡の山野を下瞰し、人をして佇立願望去るに忍びざらしむ、北畠親房父子四名を奉祀せる別格官幣靈山神社は城址と四里を隔てたる山上に鎮座す、即ち靈山支城址なり、明治十五年の創建に係り、本社、幣殿、拜殿の三棟あり、東は靈山、南西は半田嶺山

及桑折近傍を眺望し得べき地、境内に花樹多く、山麓には祓川及若松川の二流あり、又松平定信の特に建てたる哀悼碑は靈山の麓字大石村にありと言ふ。

關元龍

節彼靈山一盞分 蒼々雲樹夕陽暉
 藩鎮曾震英雄略 史蹟猶芳社稷臣
 汗馬西征驅萬里 風轡東顧率三軍
 中興已矣天哉憶 遺恨空飛安野塵

●北畠顯家筆蹟

掲ぐる所の筆蹟は、建武元年三月北畠顯家が、伊賀盛光に充てられたる京都三條東洞院筆役録をば、盛光申狀を上り、津輕合戦の功に因りて免除を請ひしにより、藏人中將に依りて、盛光の筆役免除の事を奏請せしものなり。(伊丹小西新右衛門氏所藏)

●鵬城址 (岩代)

城址は飯坂町の西北にあり、治承年間佐藤莊司の據る所にして今開いて浴客消暇の遊園とし、名けて大鵬公園と稱す、芭蕉の奥の細道に「信夫の里より月の輪の渡しを越えて、瀬上といふ宿に出づ、佐藤莊司が舊蹟は左の山際一里ばかり、飯坂の里鯖野と聞きて、尋ねく行くに、丸山といふに尋ねあたる、これ莊司が舊館なり、麓に大手の址など人の教ふるにまかせて、涙をおとし、又傍らの古寺に一家の碑を残す」云々とあり。

●十銅橋 (岩代)

是れ飯坂町より湯野村に通ずる摺上川に架せる橋なり、此橋柱脚を用ひず、銅網之を繋ぐ、其長さ三十八間人呼んで釣橋と稱し最も奇巧を極む、橋下の水流は奔湍箭の如く、奇巖快嶋其間に突起し衝激白玉を飛ばす、亦壯觀として賞するに足る。

●會津城址 (岩代)

會津城址は若松市の南端にありて湯川の情流に臨む、此城の別名を鶴城と稱す、

重徳元年華名直盛創めて城き當時黒川城と言へり、天正十八年蒲生氏郷封に就くや、大に改築する所あり名を若松城と改む、氏郷當年の威望甚だ熾んにして、會津

越後小川庄、仙道、長井を合せ壹百萬石を治す、文祿四年氏郷逝き其子秀行之を襲げりも、慶長三年家老蒲生郷安の獄起り豊太閤の讒に遭ひ其封を奪はれ、宇都宮に移る、上杉景勝之に代り、氏郷の舊封及

佐渡、大泉を合せ壹百貳十壹萬石を食む五年庚辰の役景勝四疆に兵を出し、徳川氏と雌雄を決せんと欲したるも、關ヶ原の報を得て屏息し、遂に降を乞ふ、蒲生秀行復封再び此城に入る、會津廿八萬石仙道三十二萬石都合六十萬石なりき、忠知の時に至り伊豫松山へ轉封せられ、加藤嘉明之に代る、後、保科正之山形より移れり、其位置東北、北陸の中央にありて頗る要害の地たり、明治元年松平容保此城中

にありて官軍に抗す、官軍兵を分ちて諸道より進み城に薄る、容保遂に城を輪して罪に伏す、是に於て民政取締所を置き明年若松藩を置き酒井忠實を封す、四年藩を廢して若松縣を置き、更に之を福島縣に併せたり、此歴史ある城址は今猶殘壘を存し、觀る者をして轉々往時の壯觀を偲ばしむるものあり、奥平謙輔此城を訪へる時の詩に曰く

深樹鳥鳴夜欲闌 荒城無所不凋殘
繁霜皎月天如水 原野寥寥白骨塵

此城を記せる序に當時の狀勢を附記せん。
將軍徳川慶喜大政奉還の事終り、萬機

聖斷を仰ぐに至り、薩長二藩専ら政權を執るや、舊幕の諸藩之を喜ばず、遂に伏見鳥羽の役となり、征東の命出らるに至る、

然れ共猶徳川の舊臣各地に出沒し、上野に彰義隊の亂あり、東北亦頗る平かならず、時に松平容保素より薩長と善からず慶喜と共に大阪を脱するに及び、直ちに其封地に歸りて、附近を掠取し勢威大に擧れり、仙臺米澤南部二本松等の諸藩亦之に雷同して薩長を征せんとす。

朝廷乃ち東山北陸の征東軍に命じて奥羽を征討せしむ、官軍激戦數次、遂に白河、棚倉、岩城、二本松、三春等の城を陥れ、進んで會津城に薄る、官軍來り會するもの多く勢威大に振ふ。

容保の兵を組織するや、軍神四將に象り、總兵を四に分ち、朱雀、玄武、青龍、白虎の四隊と爲し、其壯者と老者を問はず、亦幼者婦女と雖も皆兵たらしむ、故に三千の城兵五十門の砲を以て、三萬有餘の官軍と激戦し仆れて尙已まざらんとせり、戰の如何に激烈慘憺たりしかを窺ふを得べきなり。

●安達ヶ原 (岩代)

安達郡本宮の西北に安達太良山あり、信夫郡の吾妻山、耶麻郡の磐梯山と相並立して、鼎足の狀を成す、此山古書には安達嶺とせられ、又俗に二本松嶺、西山と稱さる、安達ヶ原は古書の所謂安達嶺の裾野を指せるものなるべし、裾野は方三里に亘る。

みちのくの信夫の鷹を手にすゑて
安達の原を行くは誰が子ぞ
おもひやるよその村雲しぐれつゝ
安達が原はもみぢしぬらん

是等の古歌によりても安達太良山の裾野を「安達ヶ原」と呼べることを知るべし木戸孝允曾て此野を過ぎ、原らしく見えざるより左の如く詠めり。

田にはりて今はあたちの原もなし
いつか那須野を名ばかりにせん

●白虎隊の墓 (岩代)

若松市の東二十町、飯盛山にあり、戊辰の役白虎隊の難に殉したる地にして、舊會津城を一時に收むべし、山腰に一碑建つ碑は瑞籬を以て圍繞せられ、櫻樹多く栽えらる、左右の石柱に「精忠貫日月」勅

節凌風霜」と鐫刻せり。
當時會津兵の精銳言暗に絶す、其急雨颯風の如き勢を以て屢々官軍を苦め、力盡きて終に降る、此山に殉したるものは朱雀青龍玄武の三隊と共に編成せられたる、十五より十七歳までの幼年義勇軍たりき、既に戦死せるものを除き殘存の十六名、此山に登り城外火起り城將に陥らんとするを嘆み、臣事畢れりと叫び、城に向つて最敬の禮を爲し、各々刺して死す、墓前に養するもの誰か暗涙を催ふさいるものあらんや。

●磐梯山 (岩代)

磐梯山は、大磐梯、小磐梯、櫛ヶ峰、赤壇の四峰に別る、明治廿一年七月十五日の噴火は猶世人の記憶に明かなり、海拔六千四百八十一尺、周圍十五里、頂上の石祠に古昔の磐梯神社を祀る。

登山するには猪苗代町よりするを順とす、唯だ行歩容易ならず、山の半腹までは疲憊を感ぜざるも、夫より路は漸次險しくなり、木を攀ち岩に縋らすんば登攀する能はず、絶頂に至れば爽氣肌を襲ひ、白雲脚下に飛び、登臨の快言ふす。

●一ツ家古蹟 (岩代)

安達原黒塚なるものは、二本松町の東二十町餘、阿武隈川の對岸、大平村にあり民家十數軒ある後方に巨巖を積み重ね、岩下に土窟の狀を爲すもの、是れ古へ鬼の棲める處なりと稱す、巖面に觀音及六字名號を刻む。



を傳はしむるものあり、奥平副輔此城を
訪へる時の詩に曰く

深樹鳥鳴夜欲闌 荒城無所不凋殘
繁霜皎月天如水 原野寥々白骨寒

此城を記せる序に當時の狀勢を附記せ
ん。

將軍徳川慶喜大政奉還の事終り、萬機
聖斷を仰ぐに至り、薩長二藩専ら政權を
執るや、舊幕の諸藩之を喜ばず、遂に伏
見鳥羽の役となり、征東の令出るに至る、

安達の原を行くは誰が子ぞ
おもひやるよその村雲しぐれつ、

安達が原はもみぢしぬらん

是等の古歌によりても安達太良山の裾
野を「安達ヶ原」と呼べることを知るべし

木戸孝允曾て此野を過ぎ、原らしく見え
ざるより左の如く詠めり。

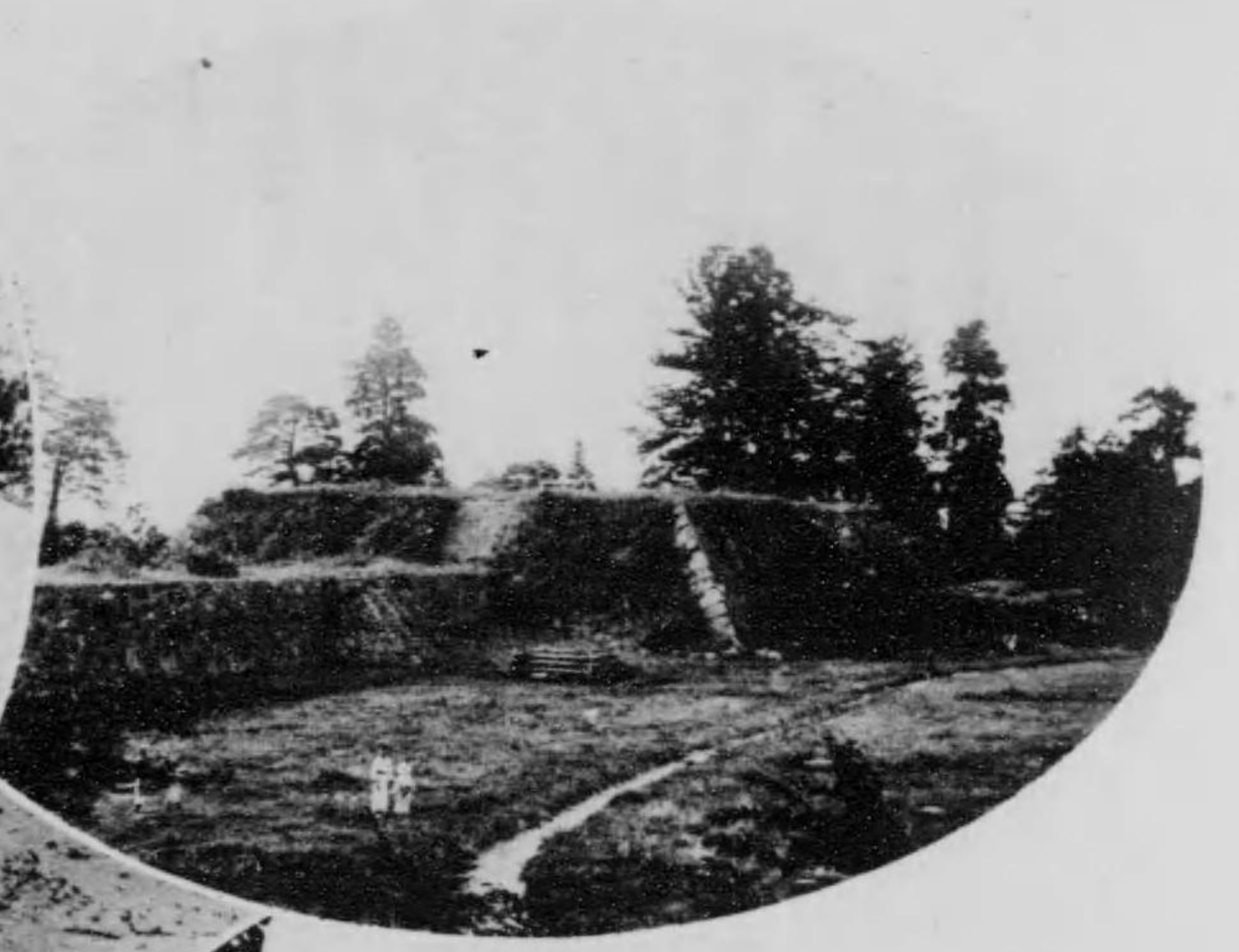
田にはりて今はあたちの原もなし
いつか那須野を名ばかりにせん

る能はず、絶頂に至れば爽氣肌を襲ひ、白
雲脚下に飛び、登臨の快言よす。

●一ツ家古蹟（岩代）

安達原黒塚なるものは、二本松町の東
二十町餘、阿武隈川の對岸、大平村にあり
民家十數軒ある後方に巨巖を積み重ね、
岩下に土窟の狀を爲すもの、是れ古へ鬼
の棲める處なりと稱す、巖面に觀音及六
字名號を刻じ。

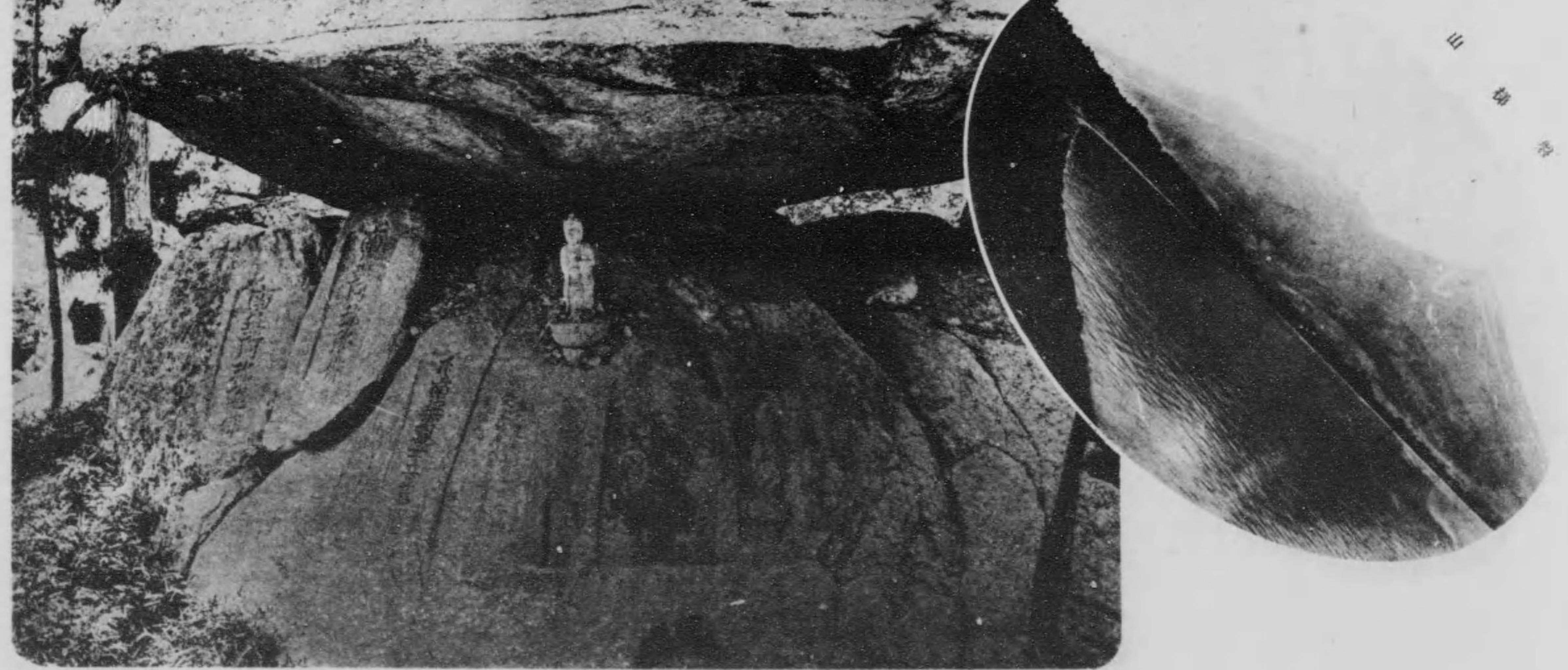
會津城址



安達ヶ原黒塚古蹟址



白虎隊墓



安達ヶ原一ツ家古蹟